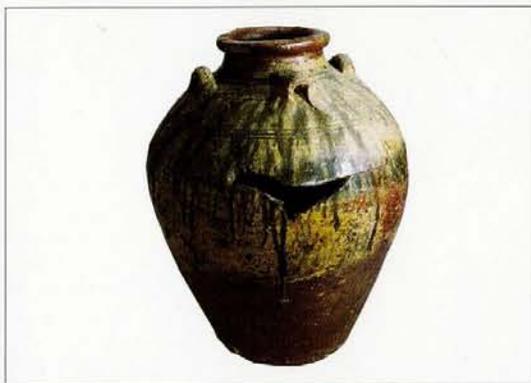


内^{うち}間^ま遺跡
内間^{イリ}カ^{バル}ジャーヤーガマ遺跡
内間^{イリ}西^{バル}原近世墓群Ⅲ

— 浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査 —

2004年3月

浦添市教育委員会



卷頭図版 1. 調査地遠景（南東から）
 2. 青磁鈔縁盤、青磁腰折皿
 3. 27号墓本墓蔵骨器
 4. 銘書（27号墓蔵骨器No.30）

5. 調査地遠景（北西から）
 6. タイ産黒褐釉陶器
 7. 27号墓出土瓶
 8. 銘書（27号墓蔵骨器No.27）

序 文

本報告書は、都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴って平成12年度から平成14年度に浦添市内間で実施した内間遺跡、内間カンジャーヤーガマ遺跡、内間西原近世墓群の緊急発掘調査の成果を収録したものです。

内間遺跡は昭和55年度に実施した文化財分布調査で確認されたグスク時代の遺跡で、今回の調査では17～19世紀の陶磁器等や土坑が検出されています。

内間カンジャーヤーガマ遺跡は、地域で鍛冶屋跡と伝承されている遺跡ですが調査の結果、中国産陶磁器の埋納遺構が確認されたことからグスク時代の祭祀遺跡と考えています。

内間西原近世墓群の発掘調査は平成4、5年度と平成10年度の調査に続いて今回で四度目を数えます。今回の調査では1基の墓から墓造営の竣工を記した銘書や建築儀礼に関わる獣骨の埋納遺構等が検出され貴重な基礎資料を得ることができました。

本報告書に収録された三遺跡の発掘調査成果によって、これまで文献上で垣間見えていた地域の歴史と死生観の一端を明らかにできたと考えています。

今後、この調査成果が多方面に活用されるとともに地域史研究の前進に寄与することを切に願います。

最後に、調査を実施するにあたり多大なるご指導とご協力を頂きました諸先生方及び関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成16年3月

浦添市教育委員会
教育長 大 盛 永 意

例 言

- 1 本報告書は浦添市内間に所在する内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群の発掘調査成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査は浦添市都市計画街路（勢理客線）改良事業に伴うもので、浦添市教育委員会が浦添市都市計画部から委託を受けて実施した。
- 3 本報告書に掲載した地図は浦添市都市計画課所収の500分の1図及び、沖縄県立博物館所蔵の琉球国惣絵図は各所の承認を得て複製し調整したものである。また、1944年撮影の空中写真は、浦添市文化課所収のものを複製し調整したものである。
- 4 本報告書は下記のメンバーで担当し、編集は安和が行った。
松川 章 第1章
比嘉 尚輝 第2章
渡久地政嗣 第3章1、第4章第1節、第5章
安和 吉則 第4章2・3節、第4章第2節、3節1・4、第5章
土肥直美・島袋利恵子・北條真子 第4章第3節2
玉木 順彦 第4章第3節3
神谷 厚昭 第4章第3節4
- 5 本報告書に掲載する遺物撮影と写真図版の編集作業は、安和吉則、宮城みさ子、澤岬永子、金城礼子、浦崎和彦のメンバーで行った。
- 6 内間西原近世墓群の23～25、27号墓の地形測量及び墓室の蔵骨器実測は株式会社中部日本鉱業研究所に委託した。
- 7 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては次の方々から調査協力及び指導助言を、内間区民の方々からは周辺環境や文化財についての聞き取り調査等に協力をいただいた。また、内間西原近世墓群27号の具志堅家之墓所有者の故具志堅古政氏、具志堅佳則氏には墓調査の際に多大な配慮を頂いた。記して感謝申し上げます。

調査協力	鍛 冶	古瀬清秀（広島大学大学院文学研究科教授 H13年度） 大澤正己（株式会社九州テクノリサーチ技術顧問 H13年度）
	陶 磁 器	手塚直樹（青山学院大学文学部教授 H13年度） 向井 互（金沢大学大学院社会環境学研究科博士課程 H14年度） 内間 靖（壺屋焼物博物館 H14年度） 仲宗根求（読谷村立歴史民俗資料館 H13年度） 宮城弘樹（今帰仁村教育委員会 H14年度）
	地質・石質	大城逸郎（沖縄県立教育センター H13年度） 神谷厚昭（沖縄県立真和志高等学校 H14年度）
	歴 史	外間政明（那覇市歴史資料室 H15年度）
	民 俗	玉木順彦（北谷町教育委員会 H14年度） 長間安彦（浦添市立図書館沖縄学研究室 H14年度）
	人 骨	土肥直美（琉球大学医学部助教授 H14・15年度）
	獣 骨	川島由次（琉球大学農学部教授 H13・14年度）

話 者 浦添市内間在

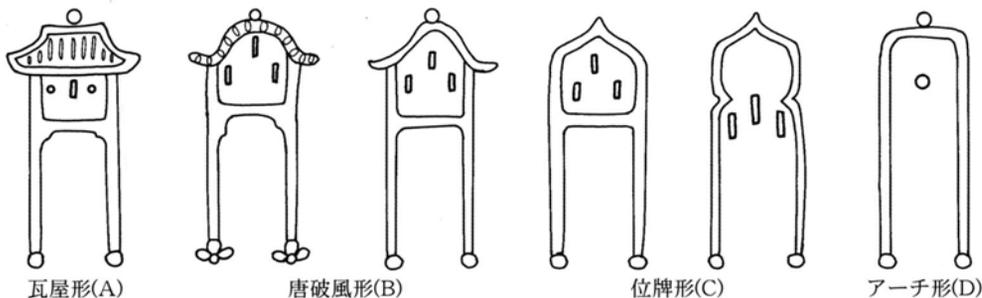
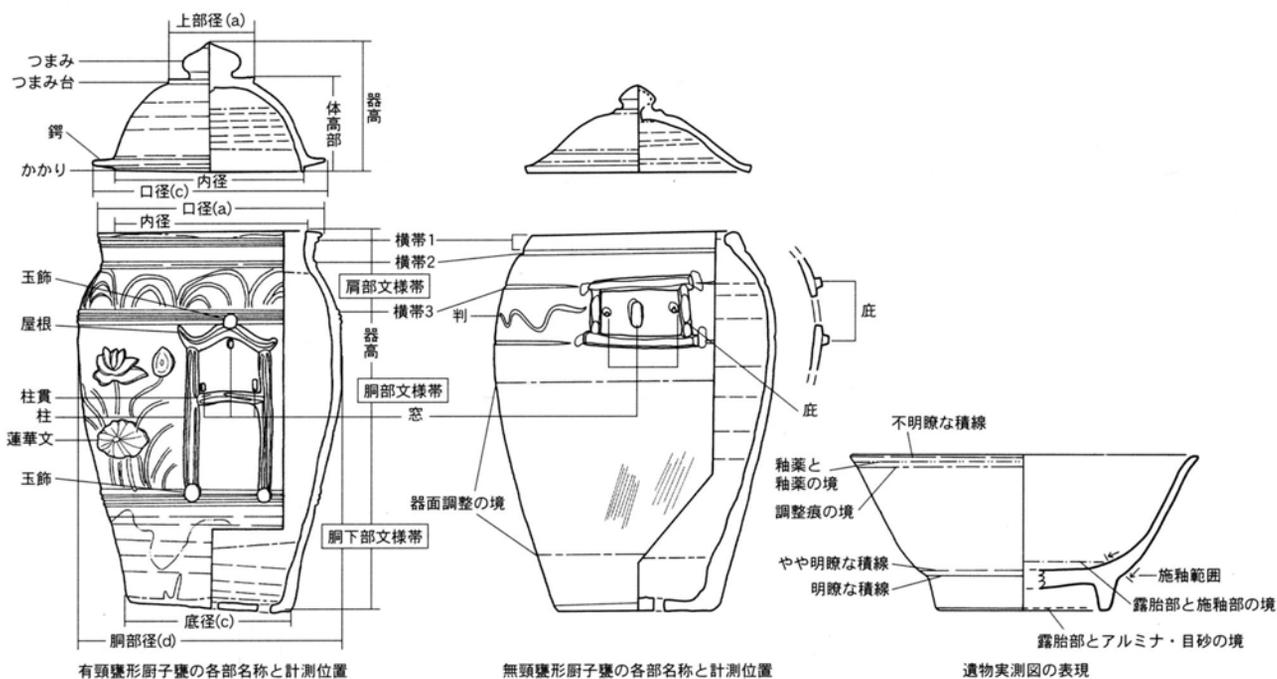
島袋良吉 (大正元年生) 当間トヨ (大正13年生) 山城清子 (昭和3年生)
知念正仁 (大正5年生) 儀保啓子 (大正8年生) 宮里 稔 (大正11年生)

8 遺物実測図の縮尺は、厨子甕や水甕等の大型製品を6分の1、陶磁器を2分の1または3分の1とした。なお、内間西原近世墓群出土遺物については座標及び単点を記録して取り上げたが、遺物台帳は紙面の都合上割愛した。

9 墓の各部名称のうち、墓口、香炉、汁ヒラシ、棚、袖石垣などの名称については『澤日墓造安葬年月日時』、『風水書』など近世文書の用語を使用した。

10 出土した蔵骨器の中で、有頸甕形厨子甕や家形厨子甕正面の銘書枠囲いの名称については、那覇市壺屋での呼称「^{ヤージョウ}屋門」を使用した。

以下で甕形厨子甕の各部名称と計測位置、遺物実測図の表現を示すこととするが、無頸甕形厨子甕の「庇」の名称は仮称である。



11 出土した資料は浦添市教育委員会文化部文化課で保管している。

目 次

序文（教育長あいさつ）

例言

内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	2
第2章	位置と環境	3
第3章	調査経過	7
第4章	調査成果	8
第1節	内間遺跡	
1.	調査の概要	9
第2節	内間カンジャーヤーガマ遺跡	
1.	調査の概要	27
第3節	内間西原近世墓群	
1.	調査の概要	37
21号墓		39
22号墓		47
23号墓		50
24号墓		54
25号墓		62
26号墓		68
27号墓		72
2.	出土人骨について	108
3.	内間西原近世墓群の民俗事例について	110
4.	内間西原近世墓群の地質及び石厨子の石質等について	112
第5章	まとめ	113
1.	内間遺跡	113
2.	内間カンジャーヤーガマ遺跡	114
3.	内間西原近世墓群	115
写真図版	発掘調査風景・出土遺物	135～186
報告書抄録		187

挿図目次

第1図	遺跡の位置	3	第35図	23号墓蔵骨器	52
第2図	琉球国惣絵図『浦添間切』	5	第36図	" 出土遺物	52
第3図	遺跡周辺の文化財	6	第37図	24号墓平断面図	54~55
第4図	調査地区割と遺構配置図	9	第38図	" 蔵骨器(1)	58
第5図	層序	10	第39図	" 蔵骨器(2)	59
第6図	土坑1 平断面図	11	第40図	" 出土遺物(1)	60
第7図	土坑2 平断面図	11	第41図	" 出土遺物(2)	61
第8図	土坑3 平断面図	11	第42図	25号墓平断面図	62~63
第9図	溝1 平断面図	12	第43図	" 蔵骨器・銭貨	66
第10図	土坑1 出土遺物実測図(1)	16	第44図	" 出土遺物	67
第11図	土坑1 出土遺物実測図(2)	17	第45図	26号墓平断面図	68~69
第12図	土坑1 出土遺物実測図(3)	18	第46図	" 蔵骨器	70
第13図	土坑1 出土遺物実測図(4)	19	第47図	27号墓平断面図	72~73
第14図	包含層出土遺物実測図(1)	23	第48図	" 蔵骨器(1)	86
第15図	包含層出土遺物実測図(2)	24	第49図	" 蔵骨器(2)	87
第16図	包含層出土遺物実測図(3)	25	第50図	" 蔵骨器(3)	88
第17図	包含層出土遺物実測図(4)	26	第51図	" 蔵骨器(4)	89
第18図	平成10年度試掘抗平断面図	27	第52図	" 蔵骨器(5)	90
第19図	カンジャーヤーガマ遺跡・按司御墓平面図	28	第53図	" 蔵骨器(6)	91
第20図	遺構平面図	29	第54図	" 蔵骨器(7)	92
第21図	東壁面土層図	30	第55図	" 蔵骨器(8)	93
第22図	中国産陶磁器埋納土層図	30	第56図	" 蔵骨器(9)	94
第23図	カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物(1)	34	第57図	" 蔵骨器(10)	95
第24図	カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物(2)	35	第58図	" 蔵骨器(11)	96
第25図	カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物(3)	36	第59図	" 出土遺物(1)	102
第26図	21号墓平断面図	39	第60図	" 出土遺物(2)	103
第27図	" 蔵骨器(1)	42	第61図	" 出土遺物(3)	104
第28図	" 蔵骨器(2)	43	第62図	" 出土遺物(4)	105
第29図	" 出土遺物	45	第63図	" 出土遺物(5)	106
第30図	" 出土遺物	46	第64図	" 出土遺物(6)	107
第31図	22号墓平断面図	47	第65図	21~27号墓横断面見通し図	115
第32図	" 蔵骨器	48	第66図	27号墓蔵骨器配置状況	123
第33図	" 出土遺物	49	第67図	調査した各墓の位置	127
第35図	23号墓平断面図	50~51	第68図	近世墓群発掘調査測量図	134

表目次

第1表	内間遺跡出土遺物一覧……………13	第35表	27号墓出土遺物(蓋,水注他)……100
第2表	土抗1出土遺物(1)……………14	第36表	” 出土遺物(煙管,簪他)……101
第3表	土抗1出土遺物(1)……………15	第37表	21号墓出土人骨観察一覧表……108
第4表	包含層出土遺物(輸入陶磁器1)……20	第38表	24号墓出土人骨観察一覧表……108
第5表	包含層出土遺物(輸入陶磁器2)……21	第39表	25号墓出土人骨観察一覧表……108
第6表	包含層出土遺物(沖縄産陶器1)……21	第40表	27号墓出土人骨観察一覧表……109
第7表	包含層出土遺物(沖縄産陶器2)……22	第41表	人骨と銘書の個体数比較表……125
第8表	包含層出土遺物(煙管)……………22	第42表	近世墓発掘調査集成……………126
第9表	包含層出土遺物(窯道具)……………22	第43表	蔵骨器編年表……………128~129
第10表	包含層出土遺物(円盤状製品)……22	第44表	近世墓群蔵骨器一覧……130~131
第11表	包含層出土遺物(錢貨)……………22	第45表	近世墓群出土遺物一覧……132~133
第12表	内間カンジャーヤマガ遺跡出土遺物一覧 ……32		
第13表	出土遺物観察一覧表……………33		
第14表	21号墓蔵骨器観察一覧表……40~41		
第15表	” 出土遺物観察一覧表……44		
第16表	22号墓蔵骨器観察一覧表……48~49		
第17表	” 出土遺物観察一覧表……48		
第18表	23号墓蔵骨器観察一覧表……52~53		
第19表	” 出土遺物観察一覧表……53		
第20表	24号墓蔵骨器観察一覧表……56~57		
第21表	” 出土遺物観察一覧表……60		
第22表	25号墓蔵骨器観察一覧表……64~65		
第23表	” 出土遺物観察一覧表……64		
第24表	” 出土遺物観察一覧表……65		
第25表	26号墓蔵骨器観察一覧表……70~71		
第26表	27号墓蔵骨器観察一覧表(1) ……74~75		
第27表	” 蔵骨器観察一覧表(2) ……76~77		
第28表	” 蔵骨器観察一覧表(3) ……78~79		
第29表	” 蔵骨器観察一覧表(4) ……80~81		
第30表	” 蔵骨器観察一覧表(5) ……82~83		
第31表	” 蔵骨器観察一覧表(6) ……84~85		
第32表	” 出土遺物(碗, 小碗, 茶碗) ……97		
第33表	” 出土遺物(茶碗, 蓋, 瓶) ……98		
第34表	” 出土遺物(瓶, 花生け) ……99		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

浦添市都市計画部都市計画課は、通学及び通勤の為に歩道幅員の確保と交通の利便及び効率的な土地利用を図るため内間地内街路3・4・24号線（現県道251号線）から街路3・5・3号線宮仲線までを結ぶ幹線道路の都市計画事業認可を平成3年6月3日付けで申請した。

その後、決定区域内の緑地及び市指定天然記念物「内間の大アカギ」の保全と計画道路の道路構造令適合を図った上で、平成5年10月27日付けで県知事あて変更申請した。

市都市計画課からは教育委員会教育部文化課あて平成4年5月29日付けで「工事に係る文化財の有無及び取扱いについて」（照会）、その後、平成5年8月17日付けで「都市計画変更に係る文化財の有無及び取扱いについて」の照会があった。

文化課は、平成5年10月26日付けで都市計画街路勢理客線の予定区域には①内間遺跡、②古墓、③鍛冶屋跡（カンジャーガマ）、④井泉（カー）などの文化財が所在すること、当該地域で土木工事等の実施に際しては文化財保護法57条の3が摘要されること等を回答した。

都市計画課と文化財の取扱いの協議とともに、街路予定区域の内間遺跡等埋蔵文化財の範囲確認発掘調査を実施した。その結果を踏まえて平成12年6月19日付けで協定書を締結し、同年6月から発掘調査を実施した。

第2節 調査体制

以下の体制の、調査を実施した。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	宮城 清	(平成12年度)
事業所管	教育部	部長	大盛 永意	(平成13年度～平成15年度)
			銘刈 紹夫	(平成12年度)
事業総括	文化部	課長	与座 盛一	(平成13～14年度)
	教育部文化課		安里 進	(平成15年度)
事業事務	教育部文化課	文化財係長	安里 進	(平成12年度～平成14年度)
	文化部文化課		下地 安広	(平成15年度)
調査員		文化財係主任	下地 安広	(平成12年度～平成13年度)
			松川 章	(平成14年度～平成15年度)
			村山 みき	(平成12年度～平成13年度)
			宮城 増美	(平成14年度～平成15年度)
調査協力		文化財係主任	渡久地 政嗣	(平成12年度、平成15年度)
			安和 吉則	(平成13年度～平成15年度)
調査協力		グスク整備係主任	佐伯 信之	
			仁王 浩司	(平成14年度～平成15年度)
			宮里 信勇	
			仁王 浩司	(平成11年度～平成13年度)
			仲宗根 久里子	(平成14年度～平成15年度)
嘱託職員		嘱託職員	北條 真子	(平成15年度)
			新里 まゆみ	(")

調査補助員

臨時職員

運 天 大 介 (平成13年度)
 比 嘉 尚 輝 (平成13年度繰越)
 宮 城 みさ子 (" 平成14年度)
 具 志 みどり (平成14年度)
 浦 崎 祐 子 (")
 金 城 礼 子 (平成15年度)
 國 吉 咲 子 (")
 澤 岬 永 子 (")

整理作業員

平成12年度
 平成13年度
 平成13年度繰越
 平成14年度
 平成15年度

島 袋 貴
 新 里 直 希
 内 田 博
 宮 平 敦 子
 小 原 陽 子

真 川 あゆみ 前 川 麻 里
 饒平名 大 輔 我那覇 育 子
 古波蔵 保 直 城 間 直 美
 浦 崎 和 彦

呉 屋 平 論

発掘作業員

浦添市シルバー人材センターから派遣

第2章 位置と環境

遺跡の位置 内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世群は沖縄県浦添市の大字内間小字大嶺原、小字西原に位置する。一帯には内間遺跡や拝所、井泉、カンジャーヤーガマ、西原古墓群等の文化財が把握されている(註1)。

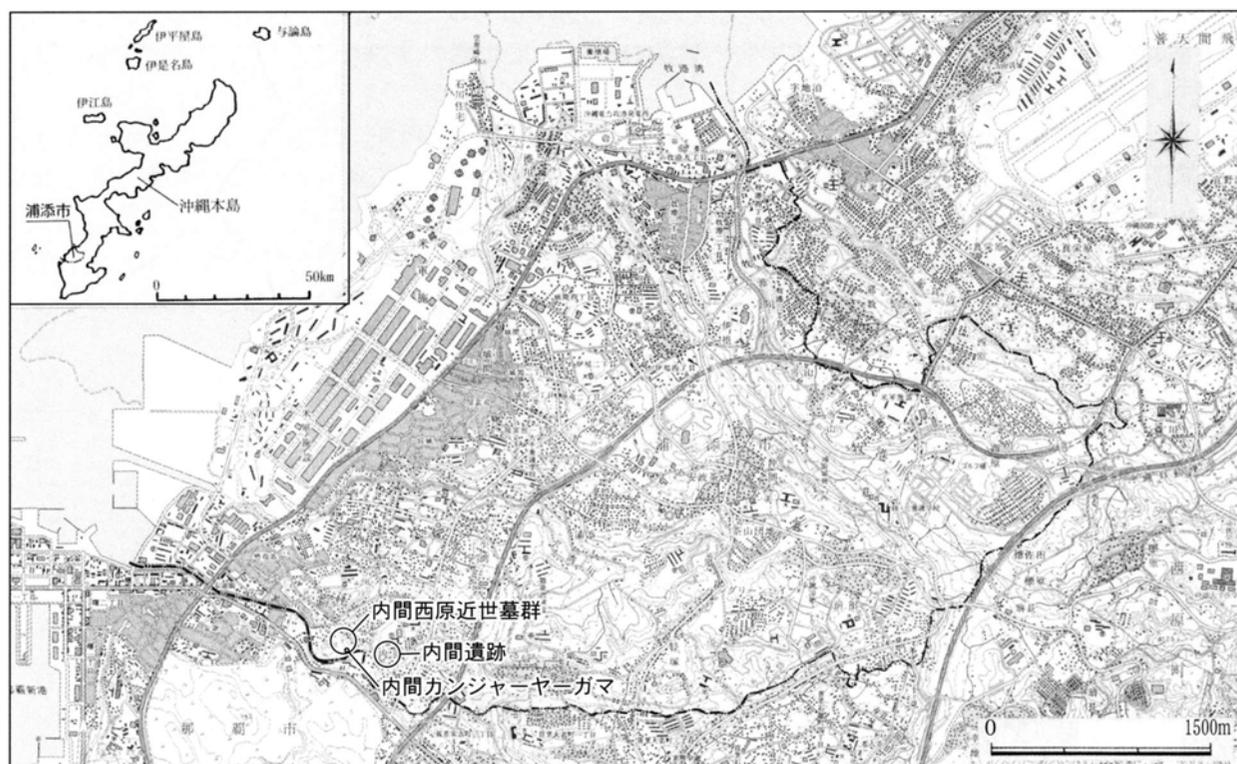
上記の遺跡が所在する浦添市は、沖縄本島の南側に位置し東中国海に面する西海岸沿いにおいて東に西原町、南に那覇市、北に宜野湾市が隣接している。市域は東西8.4km、南北4.6kmで、北を頂点として南西と南東に広がった扇状の形をしている。総面積約は18.94km²で、そのうち約15% (2.8km²) が軍用地 (牧港補給基地) となっている(註2)。人口は県下第3位の105,485人 (平成15年12月末日現在) を擁している(註3)。

また、本市は沖縄本島の南北を結ぶ主要交通路上に位置していることから西側の海浜部に国道58号線、中央部に県道330号線、東部に沖縄自動車道が開通している。

(註1)：浦添市教育委員会 平成2年3月『浦添市文化財悉皆調査報告書』

(註2)：建設省国土地理院『平成10年全国都道府県市区町村面積調』

(註3)：浦添市役所平成14年度版『統計うらそえ』



第1図 内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群の位置

S=1/500

歴史的環境

内間

調査した三遺跡が所在する内間は、市の南西部に位置しており、南側に西流する安謝川を境にして那覇市安謝に接している。現在、内間には4つの小字（大嶺原^{ウツンミバル}、後原^{クシバル}、東原^{アガリバル}、西原^{イリバル}）があるが、1957年公布の土地調整法によって「前原^{スエ}」・「クモト原^{クシ}」の原名は東原に統合されている。

かつては那覇市安謝を前安謝、内間を後安謝と称していたといわれ、両村は一つの村だったと考えられている。近世琉球期に作成された文献資料等によると「内間」は1713年編纂の『琉球国由来記』(註4)ではじめて登場する。安謝は『絵図郷村帳』(1649年)で「あじや」が確認できることから内間より古い村と考えられる。しかし、19世紀初頭の文献資料等や第2図の『琉球国惣絵図』(註5)をみると、内間と安謝がかなり混同されて使用されていたことがわかる。

内間遺跡

1979年の下水道敷設工事の際に発見された遺跡でグスク時代の遺物包含層が確認されている。本遺跡が所在する小字大嶺原一帯には内間の殿や根屋、井泉等が拝所として残っていることから、この一帯がグスク時代の内間の中心地と考えられている(註6)。

内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群

内間の人々の墓所は西端に位置する西原に所在している。現在の西原は大半が住宅地となっているが、戦前まで安謝川沿いに畑地と原野が広がり「サチバルマーチャー」と呼ばれる小丘はカヤ地帯で松林となっていた(註7)。この小丘は琉球石灰岩を基盤とした独立丘で平面形が北を頂点とした三角形をなし、標高は最高部で15m程である。今回調査した近世墓は主として5～10mの斜面地に造られている。1992・93年には公園施設設備及び街路工事のため北及び西側斜面に分布する15基の墓調査が行われ、1998年は消防出張所建設のため小丘北側の北西及び東斜面に点在する4基の墓調査を実施している。

この小丘の東側には前述のとおり大嶺原と呼ばれる丘陵地帯が所在しており、その丘陵の西端、小字西原に接する地域にも墓が点在し、内間を統治した按司の墓と伝承される按司御墓とその昔鍛冶が行われていたと伝わるカンジャーヤーガマ（鍛冶洞）が所在している(註8)。

今回の調査では、都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴い、前述したサチバルマーチャーの丘陵東側に位置する近世墓7基、カンジャーヤーガマ遺跡、内間遺跡が調査の対象となった。

註4：安謝森・安謝之大ヒヤノ殿が内間村の拝所として記されている

註5：18世紀頃に作成されたと考えられる間切集成図

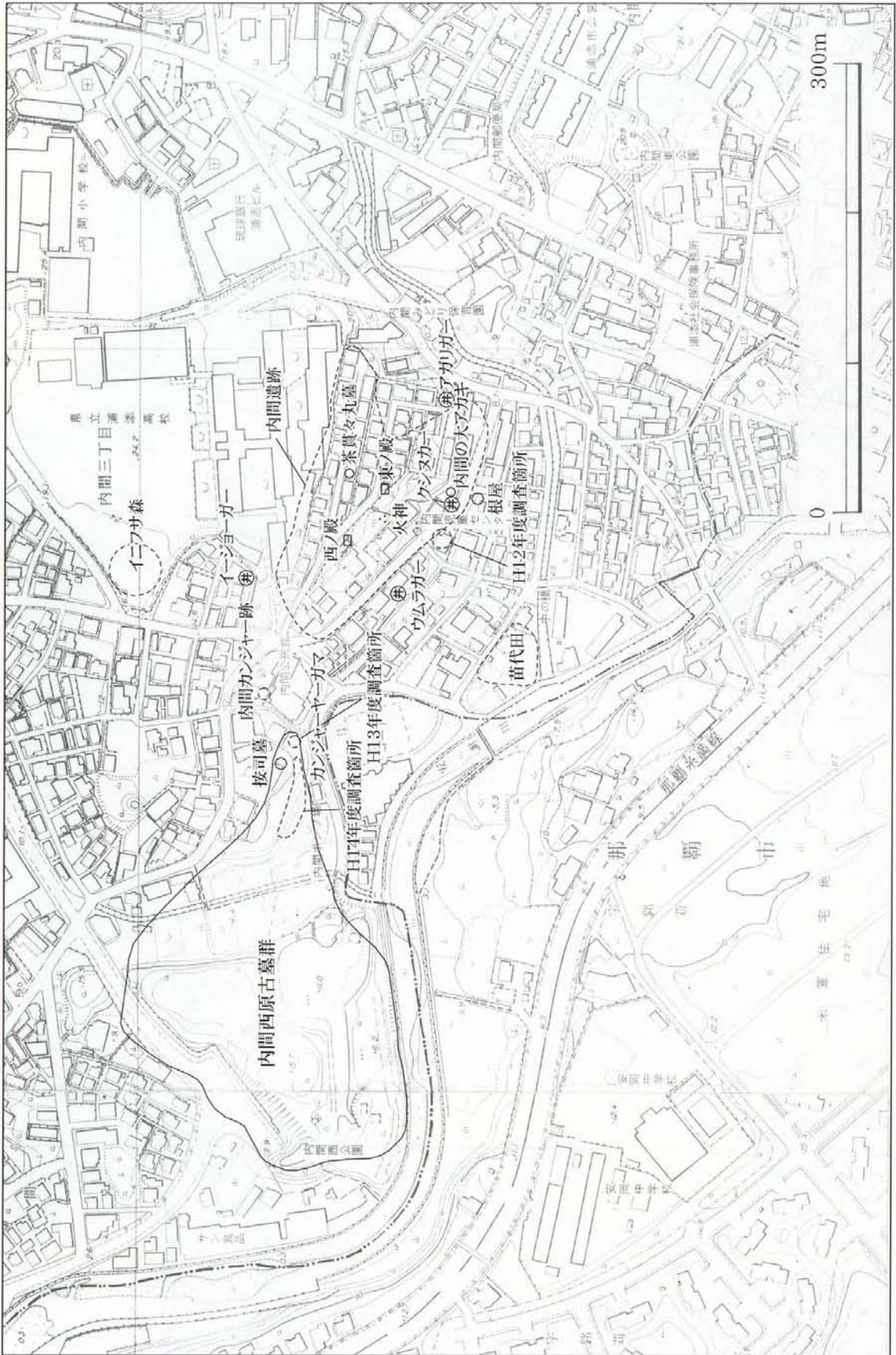
註6：浦添市教育委員会 1988年『浦添の地名』

註7：内間字誌編集委員会 昭和56年12月3日『内間字誌』

註8：6と同じ



第2図 琉球国惣絵図『浦添間切』 沖縄県立博物館所蔵



第3図 内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群と周辺の文化財

第3章 調査経過

平成12年度

調査経過 平成12年6月20日付、市都市計画課と市教育委員会との間で発掘調査の実施に係る委託契約を締結（浦教文第54号）し、同年7月3日から9月29日の期間で内間遺跡の発掘調査を実施した。

7月3日、現地調査を着手し、仮囲い柵などの安全対策を経て、表土の機械掘削作業を開始した。次いで区画（グリッド）を設定し、7月25日より遺物包含層の人力掘削作業へ移行、第2～4層の掘削及び遺構検出作業を順次実施する。第4層上面における検出作業の結果、溝状遺構、土坑等が検出され、それらの調査を行う。8月21日より実測作業を開始、第5層地山上面での遺構検出作業を行い、9月29日埋戻作業の完了をもって全調査を完了、市都市計画課へ現場を引き渡した（浦教文第88号 平成12年10月2日付）。

調査方法 発掘調査は表土を重機によって掘削除去した後は、すべて人力による掘削を行い、地山である橙褐色粘質土層（方言名：マージ）まで調査を行った。

調査地の区割り（第4図）は道路線形に沿って4m×4mを単位とする区画（グリッド）を設定している。道路平行線に片仮名、直交線に算用数字の各線名を与えた。これにより両線の交点に位置する各区画名は北東隅の交点名を用いて、ハ-30などの呼称で表される。

遺物の取り上げについては基本的にこの4m四方の区画毎に行っており遺物ラベルには出土した遺構名や層位名、出土年月日の他、区画名が記入される。但し、区画割り以前に採集された遺物については区画名を記さず、表採資料とした。取り上げ後は、日付、区画（グリッド）名、層名、遺物の種類、文様その他を記載した台帳を作成し遺物番号を付した。

遺構は平面形の確認を行った後に、長軸で半裁し、土層等の観察記録を作成した。その後は残りを掘り下げ、全体形状を確認した。遺構実測図については平面図及び断面図を1/20スケールの手書き実測にて作成した。また遺構面の撮影は、高所作業車を用いて全景を撮影し、個々の遺構、遺物については適時撮影をおこなった。

平成13年度

調査経過 平成13年7月3日から同年12月10日の期間で内間カンジャーヤーガマ遺跡の発掘調査を実施した。

まず、遺跡周辺の低草木の除去作業と清掃作業に着手した。次に調査区内に1m×1mのグリッドを設定した。グリッドは洞開口部を二分するかたちで基準軸線を設けてこれに直行するラインを設定した。また、調査区内の戦後の二次堆積土をバックホウで除去するとともに平成10年度実施の試掘坑を検出した。（第18図〈P27〉）

調査の結果は、洞開口部の西側直下付近で中国産陶磁器の埋納遺構が確認された。この中国産陶磁器は石粉を充填する造成途中に埋納されており、石粉の範囲の縁端部では拳大程の石灰岩礫（＝

川石)が敷きつめられる石敷遺構が確認された。

しかし、岩盤まで発掘したが調査区内で鍛冶に関連する遺構や遺物は全く確認することができなかった。

このほか、洞開口部直下で戦時中に構築された石列や戦争遺物、碗・皿等の雑器の多量出土に加え、洞奥を北西側に約18m掘削しており、戦時中に避難壕として使用していたことが確認された。

遺物は、基本的にはグリット毎に取り上げたが洞内に避難時に持ち込まれた戦争関係遺物は表採資料とした。

平成14年度(平成13年度繰越)

調査経過 平成14年4月7日から同年8月31日の期間で、内間西原近世墓群(7基)の発掘調査を実施した。同近世墓群の調査は平成4、5年度と10年度に続いて3度目を数えることから、過去の墓調査番号に後続させ、調査区内の近世墓7基に東側から西側に順に21から27の番号を付し、伐採と発掘による墓の検出作業を実施した。

伐採後の清掃が完了したのち各墓の割付を行った。割付は墓口を二等分するかたちで縦軸を設け、これと直行するように墓庭・墓室で横軸を設定した。

調査方法 発掘は、まず墓庭の二次堆積土を除去し、使用されていた当時の面を検出する作業が主となった。また、墓庭出土の遺物については造成・整地面の把握や祭祀儀礼等の痕跡を見いだすことを目的に可能な限り出土位置を記録して取り上げた。

21～24号墓は横並びで立地する掘込墓で、墓庭間の境界では袖石垣や庭囲い石垣等が検出された。4基とも墓面上部に岩盤削り出し成形の方形の張り出しが意匠されており、平葺墓に改築された墓(=23号墓)もみられる。墓庭の二次堆積土はやや厚く近現代の遺物と混在して近世の壺屋製陶器などが採取された。また、場所によっては墓の造成面まで砲弾等による攪乱も確認された。

25・26号墓も墓庭間に袖垣を有する並列墓である。25号墓は掘込墓だが、26号墓は岩盤切石積みで墓室や屋根を構築する平葺墓であった。墓庭の二次堆積土が薄いため墓の検出は比較的容易であったが、26号墓庭では手榴弾や多量の葉莢が出土したほか、墓面に被弾した痕跡が確認された。

27号墓は墓面上部の眉形態から亀甲墓と判断されたが、ヤジョーマーイは未構築であった。墓庭は石灰岩の岩盤を利用した右袖と、礫土で盛土した左袖で囲われている。右袖には10基の厨子甕を安置する袖墓が構築されていた。同墓は墓庭隅に厨子甕や副葬品の廃棄が確認されており、その取り上げ作業に時間を要した。

調査は、一部ではあるが21～24号墓の造営状況や先後関係を掴む目的の断ち割りを実施した。その結果、墓面の構築で粉砕された石灰岩小礫が墓庭の整地に使用されたこと(21・24号)、平葺墓へ改築した際の二次造成等(23号)を掴むことができた。他の近世墓については調査期限の都合上、予定していた造成状況等の調査は断念し、現場を引き渡すこととなった。

内^{うち} 間^ま 遺 跡

第4章 調査成果

第1節 内間遺跡

1. 調査の概要

(1) 層序 (第5図 PL2)

基本層序 確認された層序は概ね以下のような堆積を示していた。

第1層：現代の盛土層で石灰岩礫やコンクリート片などが多数混入する。機械掘削により、除去対象となった層である。複数層に細分でき、下位より盛土行為を繰り返し行い、隣接する市道33号線に面した平場を形成している。

第2層：「砲弾穴」と推定されるV字状の窪みに充填された埋土を指す。淡褐色土、灰白色土、橙褐色土の土塊や石灰岩礫がモザイク状に堆積している。ほぼ調査区中央部に位置する。

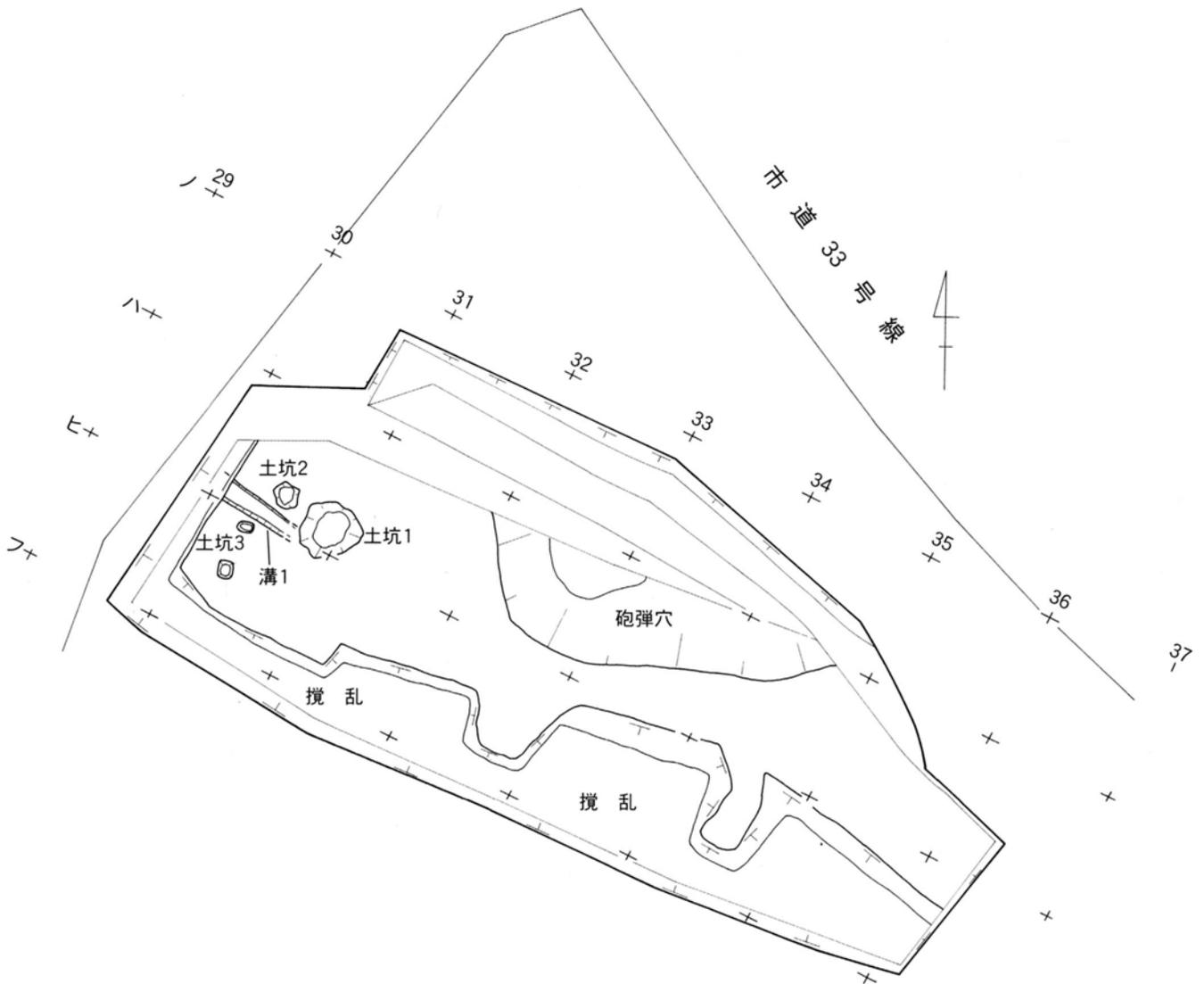
第3層：淡褐色土層。調査区のほぼ全域に分布し、複数層に細分できる。西側へは4層の一部を覆い、東側へは地山直上に堆積する。

第4層：灰白色土層。複数層に細分できる。調査区西半部の窪み地形部に分布域がある。1～2cm大の泥岩粒を多く含み、上位ほど軟質で下位では地山の橙褐色土が混ざる。

第5層：橙褐色土層。方言名：マージ。地山である。

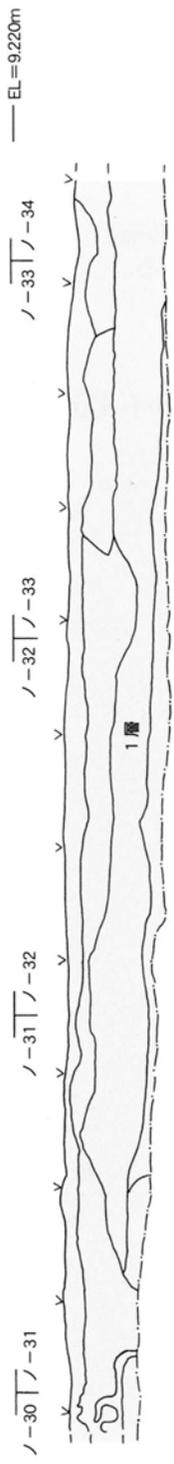
(2) 遺構 (第4図 PL2)

主な遺構としては土坑3基・溝状遺構1、砲弾穴1基が検出されている。遺構埋土から出土する遺物から全て近世後半～近代の遺構と考えられる。

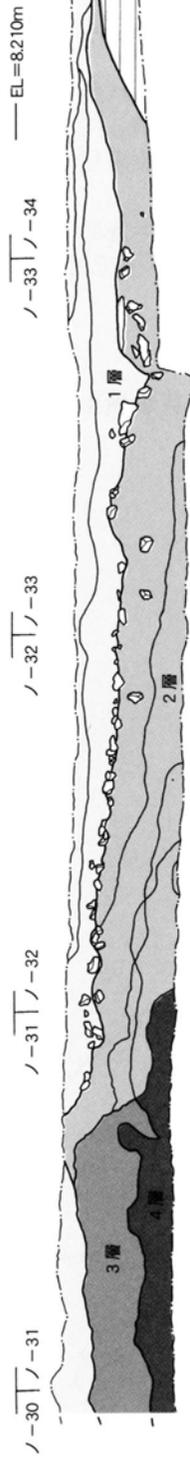


第4図 調査地区割と遺構配置図

0 S=1/200 5m



北壁 (第1段)



北壁 (第2段)



北壁 (第3段)



第5図 層序

土坑1 (第6図 PL.2) ハ・ヒ-30・31グリッド
第4層から検出された不定円形の土坑である。直径約
1.8~1.6m、深さは検出面より約80cm程を測る。土
坑内には10~20cm大の石灰岩礫が充填され、その礫
表面には黒色の付着物が認められる。礫間には赤瓦、
沖縄産陶器を主体とする比較的大型の破片が投棄され
る。礫間の堆積土は淡褐色の粘質土に基盤層の橙褐色
土、灰褐色土などを交えるものである。

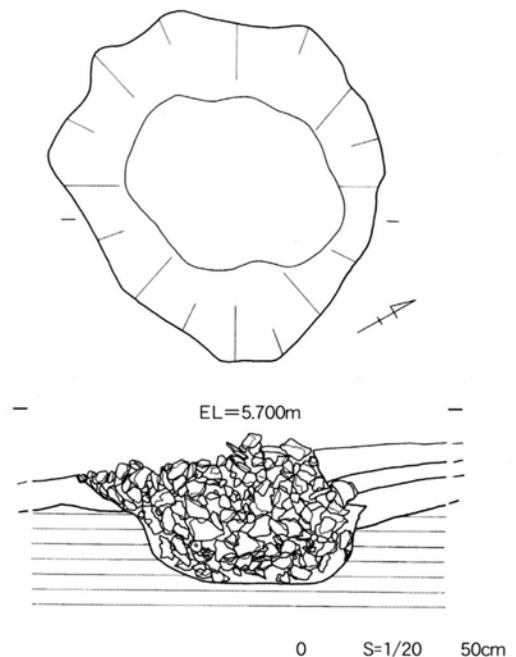
出土遺物 (第10~13図 PL.4~7 第1表) 遺構内
から合計663片の遺物が出土した。内訳は沖縄産陶器片、
赤瓦片を主体として少量の白磁、青花、骨片、貝殻片
などである。その他に板硝子片4点が出土しているこ
とから、近代(明治)以降のものと考えられる。

土坑2 (第7図 PL.2) ハ-30グリッド第4層から
検出された不定形の土坑である。直径約0.8~0.6m、
深さは検出面から最大約12cm程を測る。断面形状は
浅皿状を呈し、底面はやや傾斜の有るものである。
埋土は暗褐色の粘質土に焼土粒、炭化物粒などが混ざ
る。

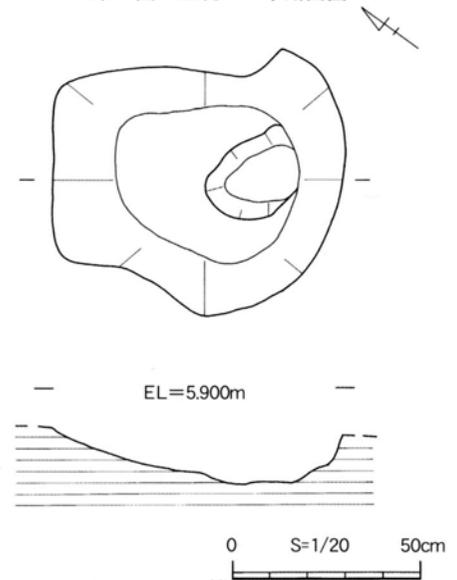
出土遺物 沖縄産施釉陶器1。

土坑3 (第8図 PL.3) ヒ-30グリッド第4層から
検出された長楕円形を呈する土坑である。長径約0.52m、
短径約27~20cm、深さは検出面より約7cm程を測る。
断面形状は浅皿状を呈し、底面は平坦である。埋土は
暗褐色の粘質土である。

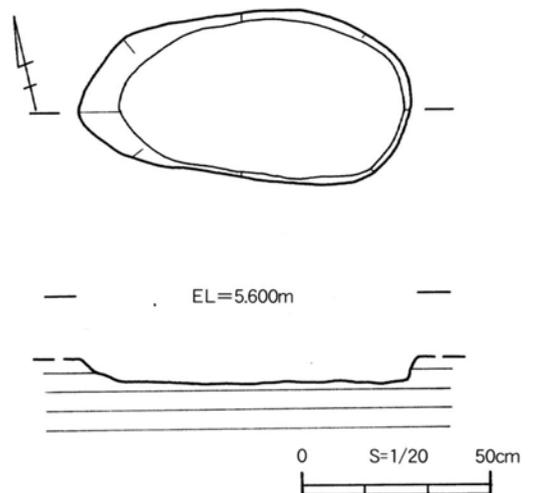
出土遺物 沖縄産施釉陶器1。



第6図 土坑1 平断面図



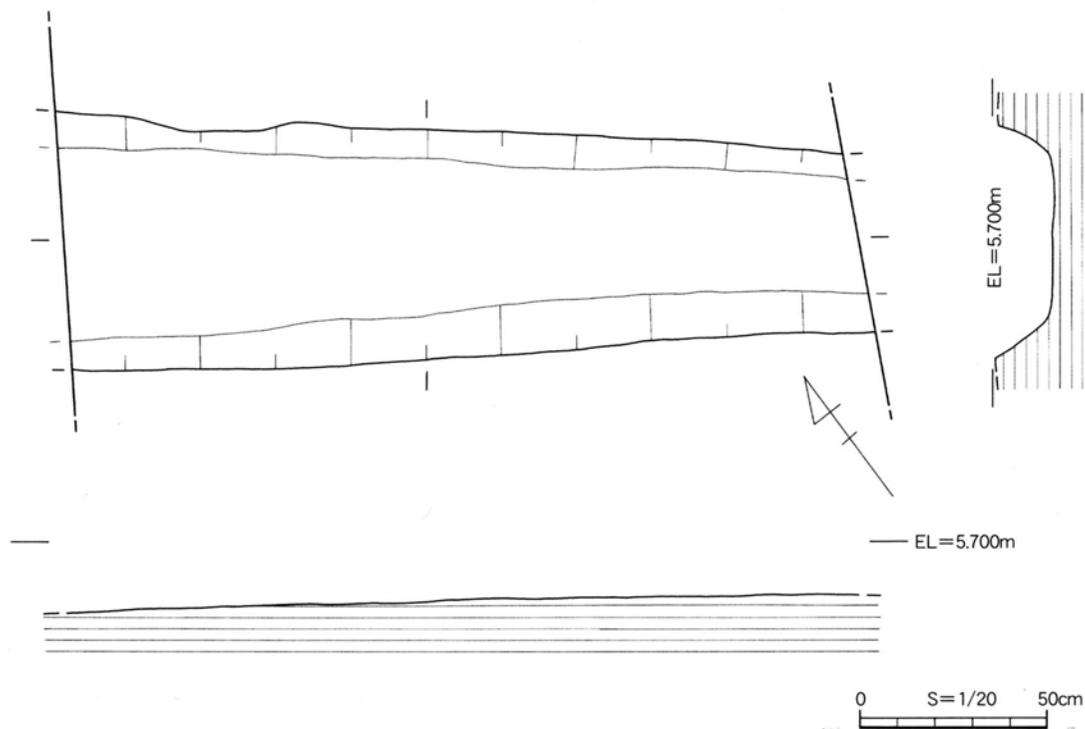
第7図 土坑2 平断面図



第8図 土坑3 平断面図

溝1 (第9図 PL.3) ハー30グリッドの第4層から検出された。軸線は磁北から西方へ55° 振れる。東側部分は攪乱により消滅しており、西側部分は更に調査区外へ延びていると思われる。埋土は概ね2枚に分けられ、上層では暗褐色度に焼土粒や炭化粒を交える。下層では暗褐色土に黄灰色土ブロックが混ざる。溝は検出面で幅約68~47cm、深さは検出面より約22cm前後を測る。断面形状は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

出土遺物 沖縄産陶器 (施釉2、無釉12) を主体とし、その他に青磁盤1、中国産褐釉4、骨片5、貝片3が出土している。



第9図 溝1 平断面図

(3)出土遺物

遺構出土の遺物以外に包含層や攪乱層から計3,800点余の遺物が出土している。しかし、ほとんどが細片であり、全体形が復元できる資料は僅かであった。そのため、ある程度形状の窺える資料や特徴的な資料について図示した。その他の大部分の遺物は第1表に種類別の集計表としてまとめた。陶磁器については沖縄産陶器と輸入陶磁器が有り、量的には沖縄産陶器（2,039点）が前出土陶器（2,534点）に対する割合で約八割（80.4%）を占める。以下、第1表に出土遺物一覧表を示し、次いで主要な遺物について、遺構と遺物包含層とに分けて、それぞれに観察一覧表および実測図を示す。

第1表 出土遺物一覧

種類 出土地	土	白	青	青	赤	三	褐	夕	高	類	拓	沖	沖	沖	沖	近	円	炭	青	鉄	瓦	瓦	瓦	窯	焼	鉄	木	戦	不	脊	貝	自然	ガ	現	合					
	器	磁	磁	花	繪	彩	釉	産	麗	須	器	器	無	施	瓦	代	盤	製	鋼	煙	管	((道	土	片	遺	明	依	依	依	物	代	計						
一括	23	10	15	27	1	2	2	16		1	1	3	104	162	67	88	119	11	3	1	1	2	1	89	2	8	21	1	2	22	32	22	14	12	107	995				
1層																																								
ハ-30			1	1																					1										1	4				
ハ-31	1			2								1	5	11	3	3							2					1							1	36				
ハ-32							2					8	9	3	5	2	1			1					1	6			1				8	4		1	51			
ハ-33	1			1	1		1	1				10	8	2	6	1	1															6	4			44				
ハ-34			1				1					4	1	4									1	1							2	1	1		1	20				
ハ-35				1								5	1	1	3																1	2			1	15				
ヒ-30							2					2	3		3			1								1					3					1	16			
ヒ-31	1	1	1	1								5	7	5	5	1							4		1							4			7	43				
ヒ-32												1	2	2	1	3									3	7			3		2	2	1	9	36					
ヒ-33															2																	2			2	6				
攪乱	1	4	1	4		1	2					18	15	2	4	13						1	6								1	1	1	1	3	79				
小計	27	15	19	37	2	2	4	24		1	1	4	162	219	89	120	139	13	3	2	1	3	2	2	103	1	2	16	36								1,345			
2層																																								
一括																																				1				
ハ-30	3	2	1	6			3					19	41	13	4	6									3					7	18		3	1		130				
ハ-31	2	2										11	9	7	6	1								1							1	3				43				
ハ-32	20	10	21	21	1		12	1				5	100	180	69	37	49	4	9	1		24		11	24	2		30	32	2	35	15	21		736					
ハ-33	22	8	26	33	1	4	1	10	1	1		5	69	119	60	36	41	6	1	8		1	2	12	4	19	11	1	3	23	54	2	62	10	12	668				
ハ-34	15	2	9	8	1		3					4	28	56	32	6	8						5		24	11		16	11		14			1	255					
不明																		1	37	1						3									42					
小計	62	24	57	68	3	4	1	28	2	1		14	227	406	181	89	105	10	2	54	1	2	1	2	41	4	58	49	1	5	76	116	4	117	26	34	1,875			
3層																																								
ハ-29																																				3				
ハ-30	7	14	10	21			9					7	79	88	35	20	8	9	1				1	3		2			27	36		16			10	403				
ハ-31	1	1	1	7			3					26	26	9	4	1	2									1	1		9	11						105				
ヒ-30	1																																			3	10			
ヒ-36																																					1			
小計	9	15	11	28			12					7	107	117	44	25	9	11	1				1	5		3	1		36	51		16				13	522			
4層																																								
ハ-30				2			1					11	9	4	1	3										1										40				
ハ-31				1								2	6	2	1																					4	18			
ハ-32																																					1			
ヒ-30				1																						2	1										20			
ヒ-31				1								1	1		1											2											3	31		
ヒ-32				2								1																									2	6		
小計				7			1					2	13	24	9	6	3								1	6		5	1		8	10		11		9	116			
土坑1																																								
一括																																					5			
ヒ-30		1										1	6																								18			
ハ-30				4								26	30	11	8	4	1																				4	629		
ハ-31												4	5																								11			
小計		1		4								31	44	11	10	4	1																				4	663		
土坑2																																					1			
土坑3																																					1			
溝1			1				1	3				10	2	1	1																					23				
合計	98	55	88	144	5	6	5	66	5	1	1	27	550	814	335	251	257	38	5	57	2	5	5	4	682	5	2	74	93	2	7	2	2	155	242	30	191	40	194	4,546

第2表 土坑1出土遺物観察一覧(1)

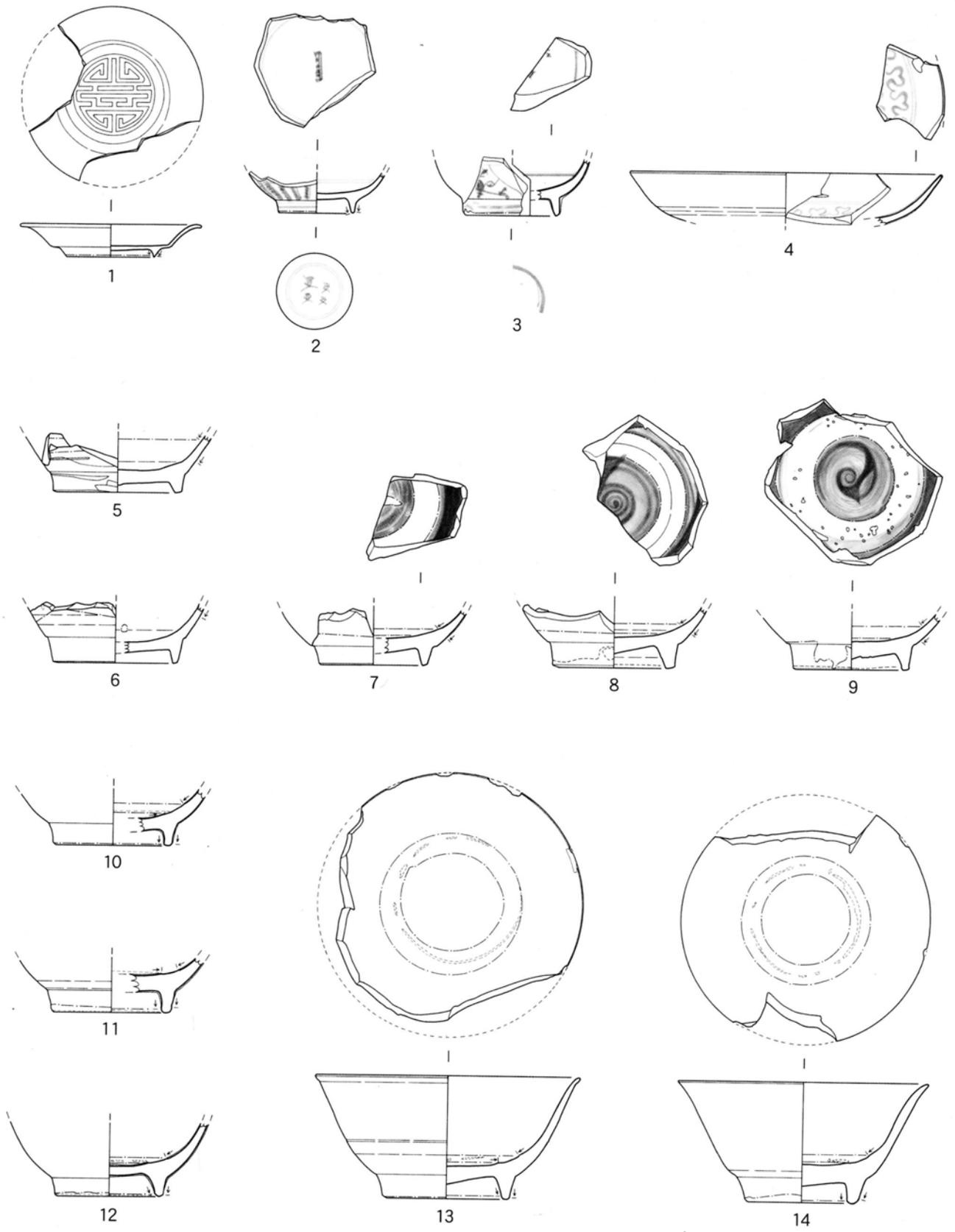
(単位: cm)

挿図番号 図版番号	番号	種別	器形	部位	口径 器高 底径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第10図 PL.4	1	白磁	外反皿	口縁部 ~底部	9.9 1.8 4.8	灰白色 微粒子	内外面施釉 疊付露胎	淡白色	全体に 細かく有 り	「寿」内底に 団寿字のスタ ンプ	外反の強い腰折皿。
"	2	青花	碗(小碗)	底部	— — 4.2	灰白色 微粒子	内外面施釉 疊付露胎	青白色	無	外面及び内 底に梵字文	疊付は削り釉削ぎされる。釉中に気泡多数有り。
"	3	青花	碗(小碗)	底部	— — 5.2	灰白色 微粒子	内外面施釉 疊付露胎	青白色	無	外面に唐草 文	疊付は削り釉削ぎされる。釉中に気泡多数有り。
"	4	青花	直口口縁 皿	口縁部	17.0 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉 疊付露胎	青白色	外面腰 部に粗く 有り	内底に流水 帯文	腰部に丸味を持つ。呉須はやや濃い。
"	5	沖縄産 施釉陶 器	碗	底部	— — 7.0	灰色 細粒子	フィガキー手法 内外面胴部まで施 釉	灰釉	有	無	高台脇から口縁部に 向かい斜めに直線的 に立ち上がる。内底 に重ね焼きの痕。素 地に白色細粒子含む。
"	6	"	碗	底部	— — 6.8	淡橙色 細粒子	フィガキー手法 内外面胴部まで施 釉	灰釉	無	無	
"	7	"	碗	底部	— — 6.0	黄白色 細粒子	内外面腰部まで施 釉	褐釉	有	内底に鉄絵で 丸文	
"	8	"	碗	底部	— — 6.6	黄白色 細粒子	内外面腰部まで施 釉	褐釉	有	内底に鉄絵で 丸文	疊付に白土付着。
"	9	"	碗	底部	— — 6.3	淡灰色 細粒子	内面腰部まで施 釉	褐釉	無	内底に鉄絵で 丸文	内底に砂粒、疊付に 白土付着。
"	10	"	碗	底部	— — 6.6	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。
"	11	"	碗	底部	— — 6.4	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。
"	12	"	碗	底部	— — 5.8	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。
"	13	"	外反口縁 碗	口縁部 ~底部	14.4 6.7 6.8	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	口縁は微弱に外反し 腰部にやや丸味を持 つ。内底と疊付に重 ね焼きの白土付着。 ピンホール有り。
"	14	"	外反口縁 碗	口縁部 ~底部	13.6 6.6 6.0	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	口縁は微弱に外反し 腰部にやや丸味を持 つ。内底と疊付に重 ね焼きの白土付着。 ピンホール有り。
第11図 PL.3	1	"	碗	底部	— — 6.8	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。 ピンホール有り。
"	2	"	碗	口縁部 ~底部	— 6.2 6.3	乳白色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	碗の二次転用品。口 縁の一部分と底部を 残し打ち欠く
"	3	"	直口口縁 小碗	口縁部 ~底部	7.6 3.8 3.4	淡灰色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。
"	4	"	直口口縁 小碗	口縁部 ~底部	8.0 4.0 3.8	淡灰色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	内底と疊付に重ね 焼きの白土と目砂付 着。外面に轆轤痕
"	5	"	直口口縁 小碗	口縁部 ~底部	8.4 3.7 4.0	淡灰色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	釉中に気泡有り。内 底と疊付に重ね焼き の白土付着。
"	6	"	直口口縁 小碗	口縁部 ~底部	8.0 3.8 3.6	淡灰色 細粒子	内外面施釉 見込み蛇の目釉 削ぎ疊付露胎	白化粧 透明釉	有	無	素地に黒色粒子混入 。内底と疊付に重ね 焼きの白土付着。
"	7	"	皿又は蓋	底部	— — 7.4	淡灰色 細粒子	内面腰部以下露 胎 外面無釉		無	無	
"	8	"	鉢	口縁部	29.0 — —	淡灰色 細粒子	内外面施釉 外面黒釉内面白 化粧の掛け分け	黒釉 白化粧 透明釉	有	無	口縁部端を逆「L」 字状に折り曲げる。 伏せて焼成。

第3表 土坑1出土遺物観察一覧(2)

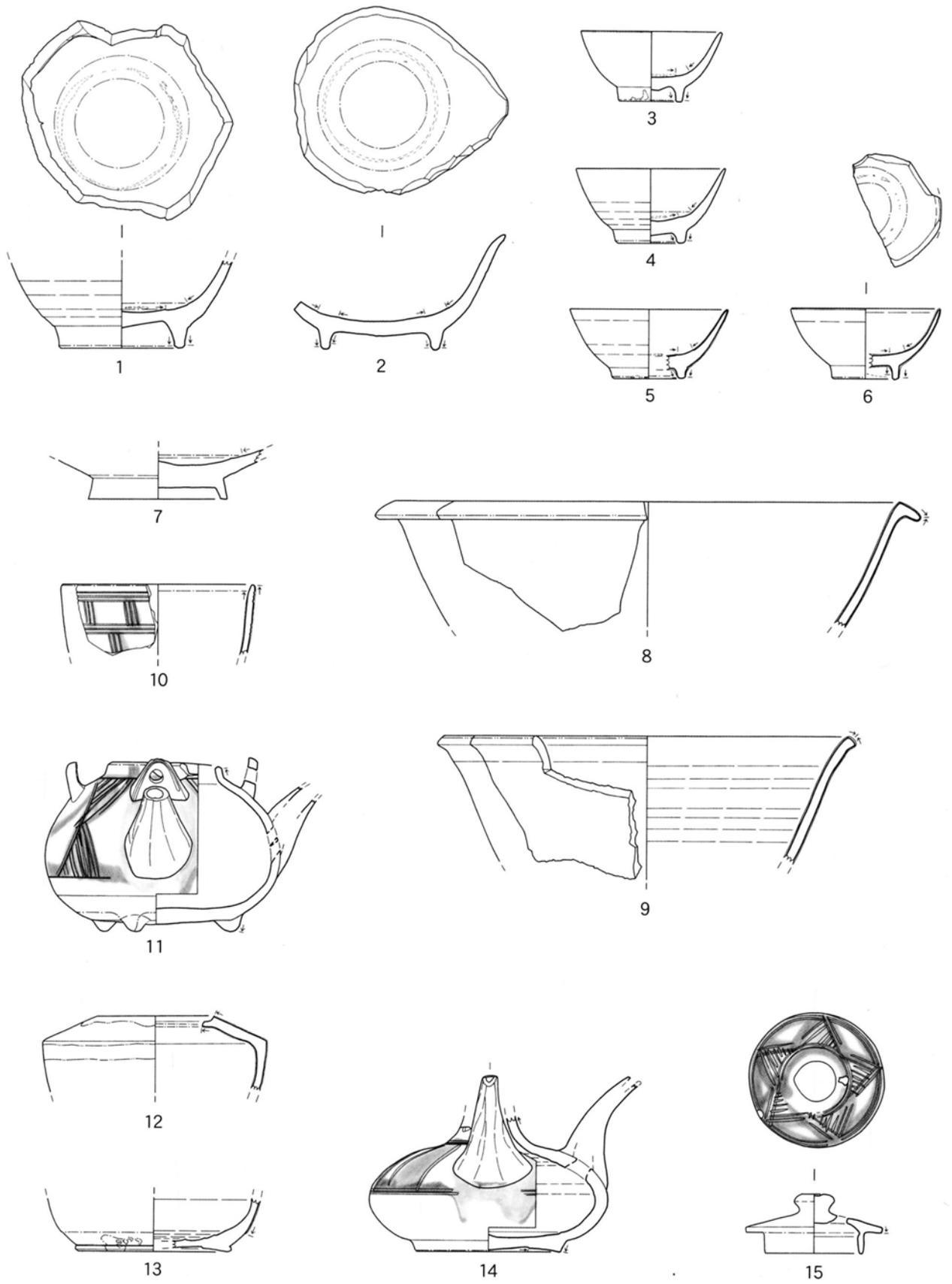
(単位: cm)

挿図番号 図版番号	番号	種別	器形	部位	口径 器高 底径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	備考
第11図 PL.5	9	沖繩産 施釉陶 器	鉢	口縁部	22.2 — —	乳白色 細粒子	内外面施釉 外面黒釉内面白 化粧の掛け分け	黒釉 白化粧 透明釉	有	無	口縁部を僅かに外反させる。
"	10	"	蓋物(身)	口縁部	10.2 — —	淡灰色 細粒子	内外面施釉後蓋 受け部は釉削ぎし 無釉	飴釉 灰釉	有	線彫り 格子文	白化粧後に3本一組の圈線を蓋受け近くと胴部に廻し、 2本一組の縦位沈線を施す。
"	11	"	急須	口縁部 ~底部	6.1 9.3 —	乳白色 細粒子 淡灰白色 微粒子	内面無釉 外面三足の付け根 まで施釉後口縁部 は釉削ぎ	呉須 飴釉 緑釉	有	線彫り圈線 斜沈線 縦沈線	球形で下膨れの体部に三足を貼り付ける。 2種類の陶土を使用。胴部と三足には乳白色の土、注口 と把手を掛ける耳には淡灰白色の良質の土を使用。 乳白色の土には白化粧後透明釉を施釉。淡灰白色の土 には透明釉のみ施釉。
"	12	"	急須又は 酒注	口縁部	6.2 — —	乳白色 細粒子	内外面施釉	白化粧 透明釉 鉄釉	有	釉で帯状に文 様	肩が「く」の字状に張り、落とし蓋の蓋受けが有る。 口縁と肩部分に透明釉を帯状に二度掛けアクセントと する。
"	13	"	酒注	底部	— — 8.3	淡灰色 微粒子	内面無釉 外面腰部まで施釉	黒釉	有	無	カラカラの底部。高台は低く蛇の目状。底部から丸く膨ら んで立ち上がる。厚く施釉する。
"	14	"	酒注	底部	— — 7.7	乳褐色 細粒子 淡灰白色 微粒子	内面無釉 外面白化粧後透 明釉施釉 畳付、透明釉のみ 釉削ぎ	呉須 飴釉 緑釉	有	線彫り 肩4本圈線 縦線	楕円形状のカラカラ。高台は低く蛇の目状。胴部には乳 褐色の土、注ぎ口には淡灰白色の土を使用。
"	15	"	蓋		— — —	乳白色 細粒子	内外面に白化粧 後透明釉を外面の 張り出し部分まで 施釉	呉須 飴釉	有	線彫り星文様 圈線 斜線	被せ蓋
第12図 PL.6	1	"	壺	口縁部 ~胴部	11.6 — —	淡灰色 細粒子	内外面施釉 口唇部釉削ぎ	黒釉	有	線彫り 圈線1本	広口の四耳壺。肩に圈線を廻した後、縦耳を貼付け穿 孔。口唇部に白土付着。轆轤痕明瞭。
"	2	"	壺	底部	— — 11.4	乳褐色 やや粗粒 子	内外面施釉 畳付露胎	飴釉	無	無	四耳壺の底部と思われる。素地に気泡混入。焼成不良。
"	3	沖繩産 無釉陶 器	鉢	底部	— — 10.0	灰色 細粒子				無	素地に白色微粒子混入。篋削り成形。
"	4	"	搦鉢	底部	— — 11.4	明橙色 細粒子					素地に黒色粒子混入。櫛目は密。何本単位かは不明。 底部篋削り後、撫で成形。
"	5	"	鉢	口縁部	— — —	茶褐色 細粒子					口縁部をほぼ水平に成形し両端が張り出す。口縁直下 に2本沈線と凸帯、丸文の貼付。素地に白色微粒子混 入。
"	6	"	水鉢	口縁部	23.0 — —	茶褐色 細粒子					口縁直下に 7条の波状 沈線文。
"	7	"	甕	口縁部	41.8 — —	明橙色 細粒子					口縁直下に 7条の波状 沈線文。 他の器に重ね入れて焼成。
"	8	"	甕	胴部	— — —	明橙色 細粒子					頸部に凸線 と波状沈線、 丸文の貼付。 頸径約26センチの甕。
"	9	二次 製品	円盤状 製品	胴部		暗灰褐色	内外面施釉	褐釉	有	無	素材-沖繩産施釉陶器 長径5.6cm 短径4.4cm 最大厚0.8cm 重量42g 剥離方向-内から外 煤付着
第13図 PL.7	1	赤瓦	丸瓦		— — —	橙褐色					ほぼ完形。凸面両端部に横位の強い撫で調整。凹面 には布目痕。最大長32cm 最大幅17cm 厚1.5cm
"	2	"	平瓦		— — —	橙褐色					ほぼ完形。凸面両端部に横位の撫で調整。凹面 には布目痕と横位の紐圧痕。最大長24.3cm 最大幅 18cm 厚1.4cm
"	3	"	平瓦			橙褐色					凸面に人物(男性?)を線刻。内面に布目痕と指 圧痕。厚1.5cm



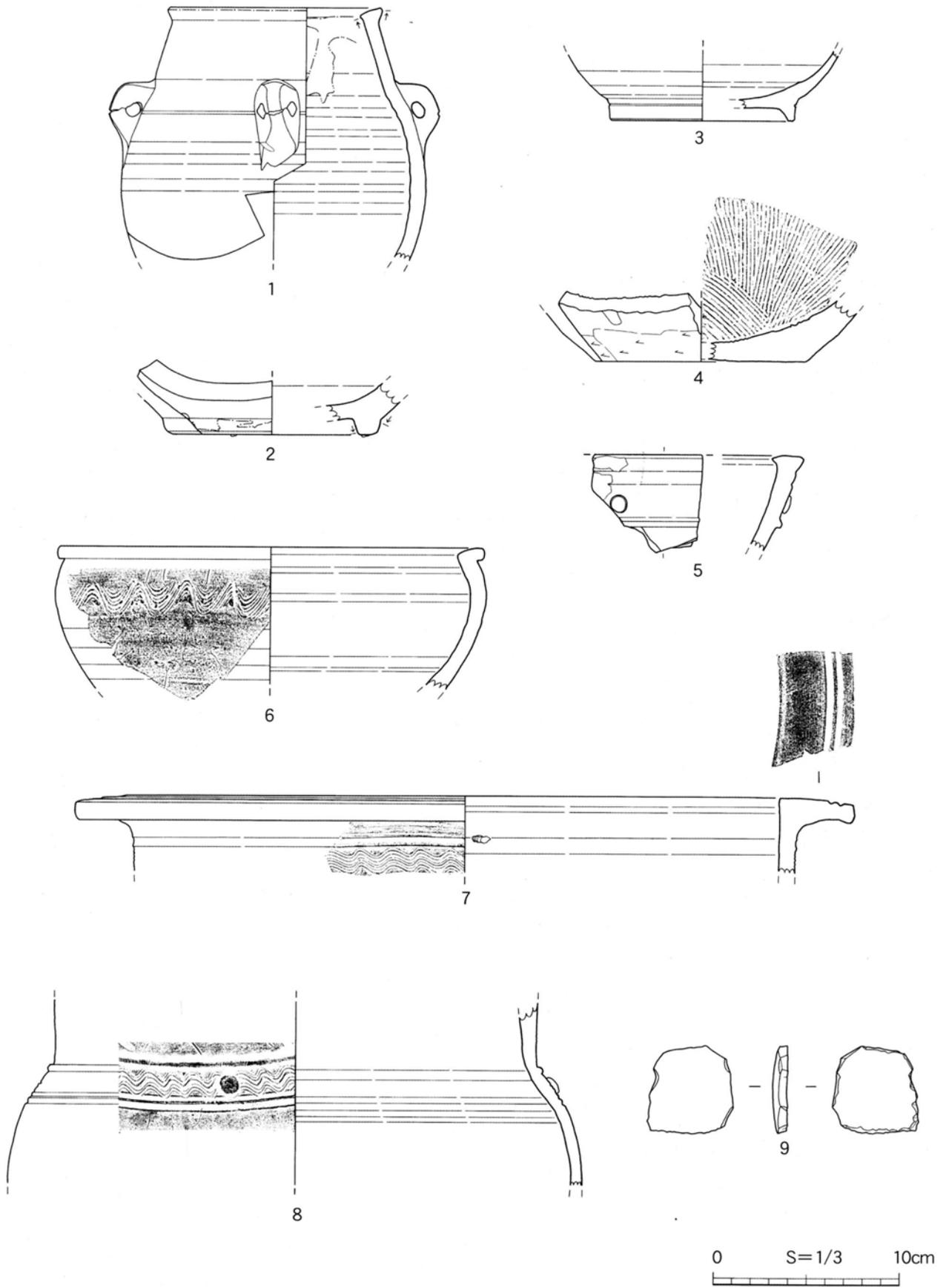
0 S=1/3 10cm

第10图 (PL.4) 土坑 1 出土遺物実測図 (1)

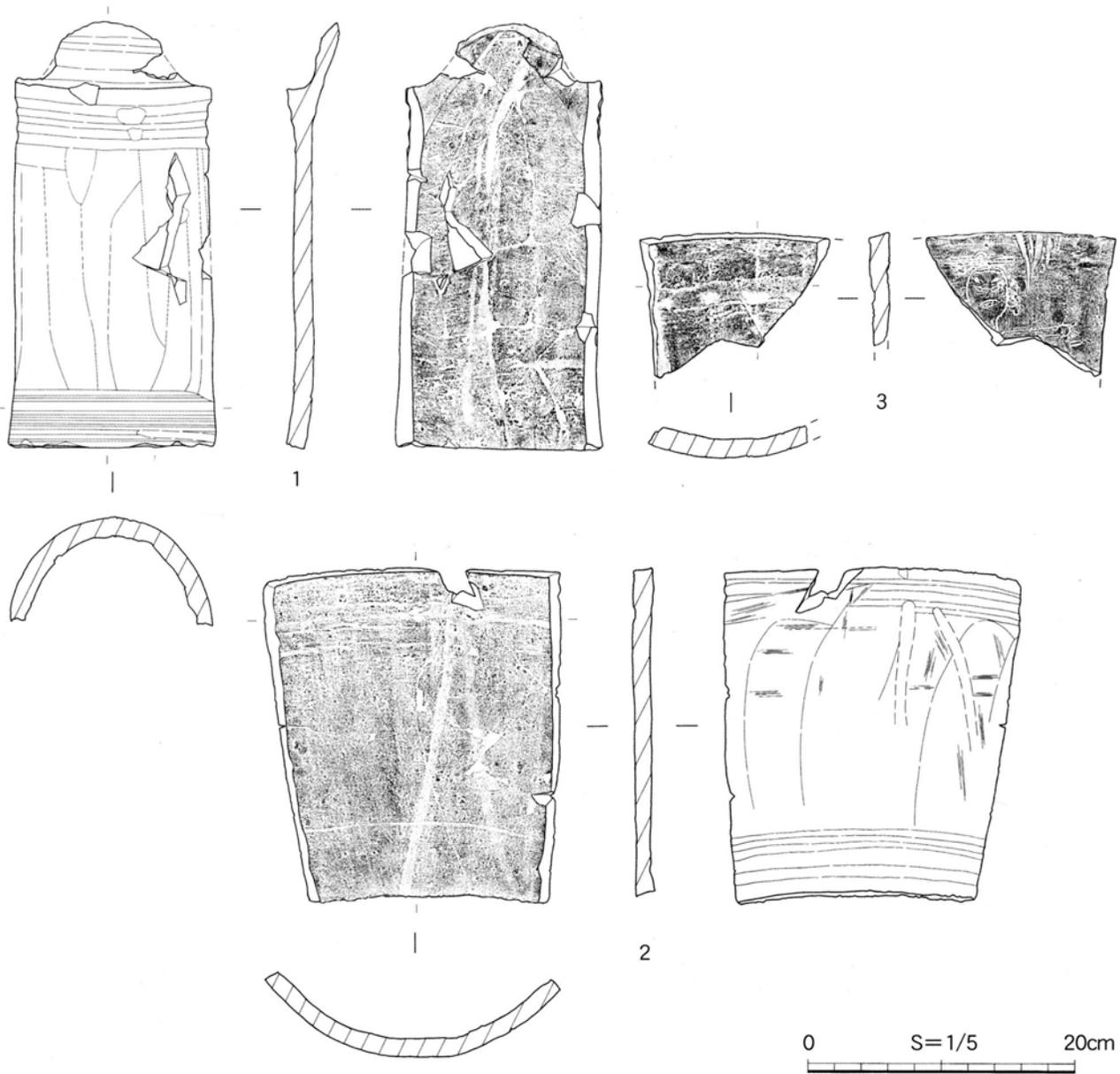


0 S=1/3 10cm

第11图 (PL.5) 土坑 1 出土遗物实测图(2)



第12図 (PL.6) 土坑 1 出土遺物実測図(3)



第13図 (PL.7) 土坑 1 出土遺物実測図(4)

第4表 包含層出土遺物観察一覧表（輸入陶磁器1）

（単位：cm）

挿図番号 図版番号	種別	番号	器形	部位	口径 器高 底径	素地	- 施釉	釉色	貫入	文様	出土地点	備考
第14図 PL.8	青磁	1	無銘蓮弁 文碗	口縁部	12.6 — —	灰白色 微粒子	内外面厚く施釉	淡緑色	無	口縁部外面に 圏線1本と蓮弁 文	ハ-32 2層	片切彫りによる幅広の蓮弁文。
"	"	2	外反口縁 碗	口縁部	13.0 — —	淡灰色 細粒子	内外面施釉	淡緑色	有	口唇部に圏線1 本	ハ-32 2層	口縁部肥厚。
"	"	3	雷文帯碗	口縁部	15.2 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	暗緑色	無	外面雷文と刻 花文 内面刻花文	ハ-33 2層	口唇部に丸味を持った直口口縁 碗 篋描きで文様施す。釉中に 細かい気泡有り。
"	"	4	雷文帯碗	口縁部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	淡緑色	無	外面雷文 内面?	ハ-34 2層	直口口縁碗。篋で崩れて省略化 された雷文を描く。
"	"	5	雷文帯碗	口縁部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	暗緑色	粗く有	外面雷文	攪乱	直口口縁碗。片切彫りの雷文。
"	"	6	線刻細蓮 弁文碗	口縁部	— — —	淡灰色 細粒子	薄く内外面施釉	暗緑色	細かく 有	外面蓮弁文	ハ-33 2層	直口口縁碗。弁先を波状文で描 く。蓮弁と弁先は一致しない。
"	"	7	外反皿	口縁部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	暗緑色	無	内面刻花文	ハ-33 2層	篋描きで文様を施す。
"	白磁	8	壺	口縁部	7.2 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉後口 唇部は釉剥ぎし露 胎	淡灰色	無	無	ハ-32 2層	素地に黒色粒子混入。
"	青花	9	外反口縁 碗	口縁部	12.4 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	青白色	無	外面口唇部に 圏線と寿字 内面口唇部に 圏線	1層一括	呉須はやや鮮明。 内面胴部に圏線らしき文様有り。
"	"	10	碗	底部	— — 7.6	灰白色 微粒子	内外面施釉 畳付露胎	淡灰白 色	無	外面唐草文と 腰部に蓮弁文 高台に圏線 内底に圏線2本 と文様	ハ-30 3層	呉須はやや黒ずむ。
"	"	11	直口口縁 碗	口縁～ 底部	11.8 5.7 5.2	白色 微粒子	内外面施釉 畳付露胎	青白色	無	外面口唇部に2 本、高台に3本 圏線 胴部に 抽象的文様 外底に圏線2本 と款識 内面口縁部と 内底に圏線 内底に文様	ハ-30 3層・4層	呉須は鮮明。
"	"	12	碗	底部	— — 5.1	白色 微粒子	内外面施釉 畳付外底、一部無 釉	青白色	無	外面に崩れた 芭蕉文と高台 に圏線1本 内面圏線2本と 文様	ハ-32 2層	呉須はやや鮮明。
"	"	13	直口口縁 小碗	口縁～ 底部	7.9 4.3 3.8	灰白色 微粒子	内面施釉 高台外 面途中まで施釉 外底露胎	淡灰白 色	無	外面スタンプ文 内面無文	1層一括	兜巾高台 呉須はやや鮮明。
"	"	14	皿	底部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉 畳付露胎	青白色	粗く有	外面に唐草文 内面に圏線と 雷文	ハ-33 2層	高台は細く低い。 呉須はやや淡い。
"	"	15	皿又は小 碗	底部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	青白色	無	外面仙芝祝寿 文 高台内に 圏線と款識 内底に花卉	ハ-31 3層	呉須は黒ずむ。
"	"	16	直口口縁 小杯	口縁～ 底部	4.4 2.6 2.0	灰白色 微粒子	内面施釉 高台外 面途中まで施釉 外底露胎	青白色	無	外面口縁部と 高台に圏線1本 胴部に松文 (?) 内面口縁部と 内底に圏線 内底に「花」文 字	ハ-32 2層	高台脇から丸味をもって立ち上 がる。呉須はやや鮮明。
"	"	17	播鉢	胴部	— — —	淡灰白色 細粒子	外面施釉 内面部分的に流し 掛け		無	外面に波(?) 文様	ハ-35 1層	櫛目をまんべんなく施す。素地に 「ス」あり。呉須は鮮明。ダミ技法 により絵付けする。

第5表 包含層出土遺物観察一覧表（輸入陶磁器2）

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	種別	番号	器形	部位	口径 器高 底径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	出土地点	備考
第15図 PL.9	瑠璃釉	1	碗	口縁部	9.4 — —	灰青白色 微粒子	内外面施釉	内/淡 青白色 外/藍 濁色	無	無	ハ-33 2層	口縁部は微弱に外反。
"	赤絵	2	—	胴部	— — —	淡灰色 細粒子	内外面施釉		無	有	ハ-33 2層	
"	赤絵	3	—	胴部	— — —	灰白色 微粒子	内外面施釉		無	有	ハ-34 2層	
"	高麗青 磁?	4	—	底部	— 6.2 —	灰褐色 細粒子	内外面施釉	灰緑色	有	外面圏線2本 内面?	ハ-33 2層	高麗青磁台子?
"	三彩	5	—	—	— — —	灰白色 微粒子	白化粧後、緑釉、 黄釉を施釉。内面 は無釉。	淡黄色	有		攪乱	
"	三彩	6	鳥型水注	頭部	— — —	淡黄白色 細粒子	白化粧後、頭部に 緑釉、吻上部に黄 釉。内面は無釉。	淡緑色 淡黄色	無		ハ-33 2層	目の下、嘴に指圧痕。
"	産地 不明	7	蓋	—	14.0 — —	白色 細粒子	内外面施釉		有	外面上部に陰 刻線4本	ハ-31 1層	
"	本土産 磁器	8	直口口縁 碗	口縁部	12.0 — —	灰白色 微粒子	内外面施釉	淡青白 色	無		ハ-33 2層	コンニャク判。呉須の発色は淡 い。
"	本土産 磁器	9	碗	底部	— — —	淡灰白色 細粒子	内外面施釉	淡青白 色	無	見込みに荒磯 文	ハ-30 3層	見込みに焼成時の付着物有り。
"	本土産 磁器	10	瓶	胴部	— — —	淡灰白色 微粒子	外面施釉	淡青白 色	無	胴部に草花文	1層一括	呉須の発色はやや暗い。
"	本土産 磁器	11	瓶	底部	— 6.4 —	白色 微粒子	内外面施釉 畳付露胎	淡青白 色	無	胴部に網目文 高台外見に圏 線1本	攪乱一 括	高台内面に砂付着。

第6表 包含層出土遺物観察一覧表（沖縄産陶器1）

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	種別	番号	器形	部位	口径 器高 底径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	出土地点	備考
第15図 PL.10	沖縄産 施釉陶 器	12	碗	底部	— 7.4 —	淡灰白色 微粒子	内外面胴部まで施 釉	灰緑色	無	無	1層一括	
"	"	13	碗	底部	— 7.0 —	淡灰白色 微粒子	内外面胴部まで施 釉	灰緑色	無	無	1層一括	
"	"	14	褐釉小皿	口縁~ 底部	10.0 3.2 4.1	淡黄白色 細粒子	内面:蛇目釉剥ぎ 外面:口縁部~胴 部	茶褐色 (飴釉)	無	無	ハ-32 2層	見込に重ね焼きの際の白土が付 着。
"	"	15	褐釉碗	底部	— 5.4 —	淡茶色 細粒子	畳付を除き総釉	内面:濃 緑色 外面:淡 藍色	無	無	攪乱	畳付け部分に目砂が付着。
"	"	16	褐釉碗	底部	— 6.9 —	暗黄褐色 細粒子	内面~高台外面ま で施釉	暗褐色	無	無	ハ-30 3層	
"	"	17	灰釉小碗	口縁~ 底部	8.8 4.2 3.9	淡黄白色 細粒子	内面:白化粧 外面:灰釉	内面:乳 白色 外面:緑 褐色	有	無	ハ-ヒ~32 2層	釉はガラス質でピンホールが見ら れる。畳付に白土が薄く付着。
"	"	18	白化粧鉢	口縁~ 底部	21.9 — —	淡黄白色 細粒子	内外面施釉	乳白色	有	呉須と飴釉によ る花卉文	ヒ-30 4層	

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	種別	番号	器形	部位	口径 器高 底径	素地	施釉	釉色	貫入	文様	出土地点	備考
第15図 図版10	沖縄産 施釉陶器	19	褐釉蓋	ほぼ完成	— — —	淡灰白色 細粒子	甲部のみ施釉。	暗褐色	無	無	ハ- 30 3層	直径:張り出し部分=10.6cm 掛かり部分=8.5cm
"	"	20	蓋		— — —	淡灰色 粗粒子	甲部のみ施釉。	暗黄褐色	無	無	ハ- 32 2層	直径:張り出し部分=6.2cm 掛かり部分=4.6cm
"	"	21	鍋	口縁部	19.8 — —	淡灰色 細粒子	外面:口唇部まで 施釉 内面:斑に掛かる	茶褐色	無	無	ハ- 31 3層	
"	"	22	アンビン	口縁~ 底部	11.7 15.2 11.2	淡灰色 淡茶色 細粒子	口唇部、内底中心 部、高台外面、畳 付を除き施釉。	黒褐色	無	無	ハ- 31 3層	内底部に目砂が付着。
"	"	23	不明	口縁~ 底部	2.8 2.85 3.4	暗褐色 細粒子	白化粧後、薰灰釉 を施釉。	青灰色	無	無	ハ- 32 2層	
"	沖縄産 陶質土器	24	火炉	口縁~ 胴部	15.4 — —	橙褐色 微粒子					ハ- 30 3層 4層	内面に轆轤痕が残る。

第7表 包含層出土遺物観察一覧表(沖縄産陶器2)

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	種別	番号	器形	部位	口径 器高 底径	色調	素地	焼成	文様	出土地点	備考
第16図 図版11	沖縄産 無釉陶器	1	火入	口縁~ 底部	10.6 6.3 5.0	全体に茶 褐色	石英を僅かに含む。 細粒子	良好	無	1層一括	内面に轆轤痕、外面は撫で成形。 器表面は気泡痕が顕著。
"	"	2	播鉢	口縁部	— — —	茶褐色	細粒子	良好	無	ハ- 32 1層一括	口縁部のくびれ部は突帯に整形される。
"	"	3	播鉢	口縁部	34.7 — —	茶褐色	細粒子	良好	無	ハ- 33 2層	口縁部のくびれ部は稜線で終わる。
"	"	4	播鉢	口縁~ 胴部	32.4 — —	茶褐色	白色粒子を含む。 細粒子	良好	無	ハ- 32 2層	内外共に轆轤痕が明瞭。櫛目は16本を単位とする。
"	"	5	播鉢	胴部	— — —	灰白色	石灰岩細粒を僅か に含む。細粒子	良好	無	ハ- 33 2層	瓦質陶器。櫛目は8本を単位とする。
"	沖縄産 陶質土器	9	二次製品	底部	— — —	橙褐色	砂粒が混ざる。	良好	無	1層一括	土瓶の底部を加工。外面に煤が付着。

第8表 包含層出土遺物観察一覧表(煙管)

(単位: cm: g)

挿図番号 図版番号	番号	材質	部位	形態	全長	火皿		現重量	素地	出土地点	備考
						内径 外径	羅字接続部 内径 外径				
第16図 PL11	6	沖縄産 施釉陶	雁首	ハイブ型 (八角)	4.7	1.3 2.2	— —	13.28	茶褐色 細粒子	ハ-33 2層	羅字接続部分約1/2破損

第9表 包含層出土遺物観察一覧表(窯道具)

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	番号	器種	法 量			素地	色調	出土地点	備考
			口径	器高	底径				
第16図 PL11	7	トチン	4.8	4.9	6.5	粗粒子	暗茶褐色	1層一括	底面に糸切痕が残る。全体的に白土がみられる。上面の外縁三ヶ所に抉りを入れる。
"	8	ハマ	7.0	2.0	—	橙色、白色、赤 色粒子及び砂岩 混入。瓦質。	陶褐色	1層一括	餅型を呈し、表面は撫で仕上げ。縁部は削り、粗く撫でる。片面は糸切痕が残る。

第10表 包含層出土遺物観察一覧表(円盤状製品)

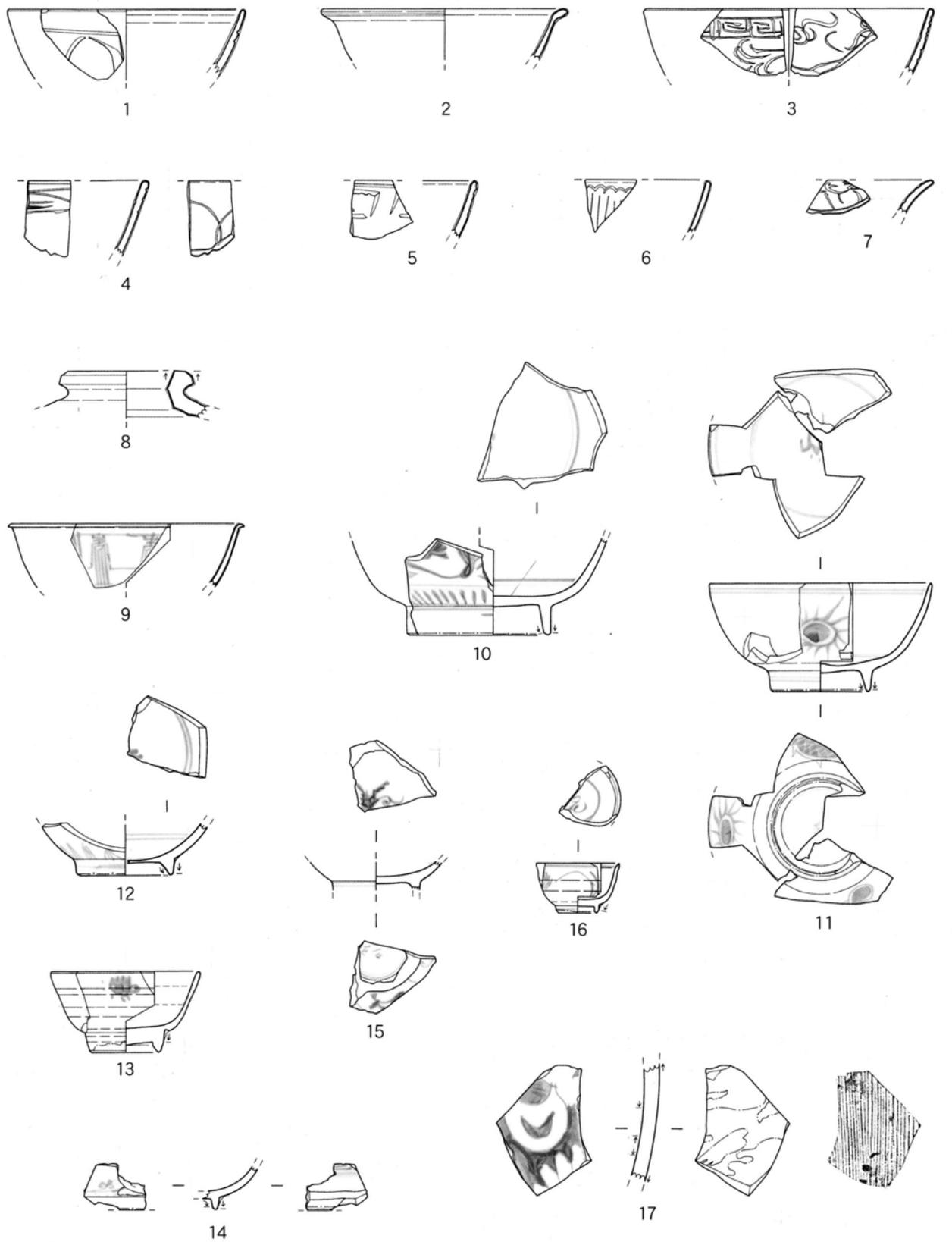
(単位: cm: g)

挿図番号 図版番号	番号	素 材	使用部位	法 量				出土地点	備考
				長径	短径	最大厚	重量		
第17図 PL12	1	沖縄産施釉	胴下部	1.8	1.6	0.8	2.30	1層一括	透明釉。
"	2	沖縄産無釉	胴部	5.4	5.1	1.0	49	ハ-30 3層	
"	3	沖縄産無釉	胴部	6.0	5.1	1.6	60	ハ-30 3層	
"	4	沖縄産施釉	底部	9.1	8.8	2.9	133	ハ-29 3層	灰釉。
"	5	黒釉陶器	底部	4.5	4.3	1.2	25	ハ-30 3層	高台内外面に目砂が付着。
"	6	沖縄産施釉	底部	4.6	4.3	1.6	26.87	ハ-31 3層	
"	7	褐釉陶器	底部	5.8	5.3	1.2	30	ハ-32 2層	
"	8	沖縄産無釉	胴部	6.6	5.6	1.5	65	ハ-30 4層	播鉢転用

第11表 包含層出土遺物観察一覧表(銭貨)

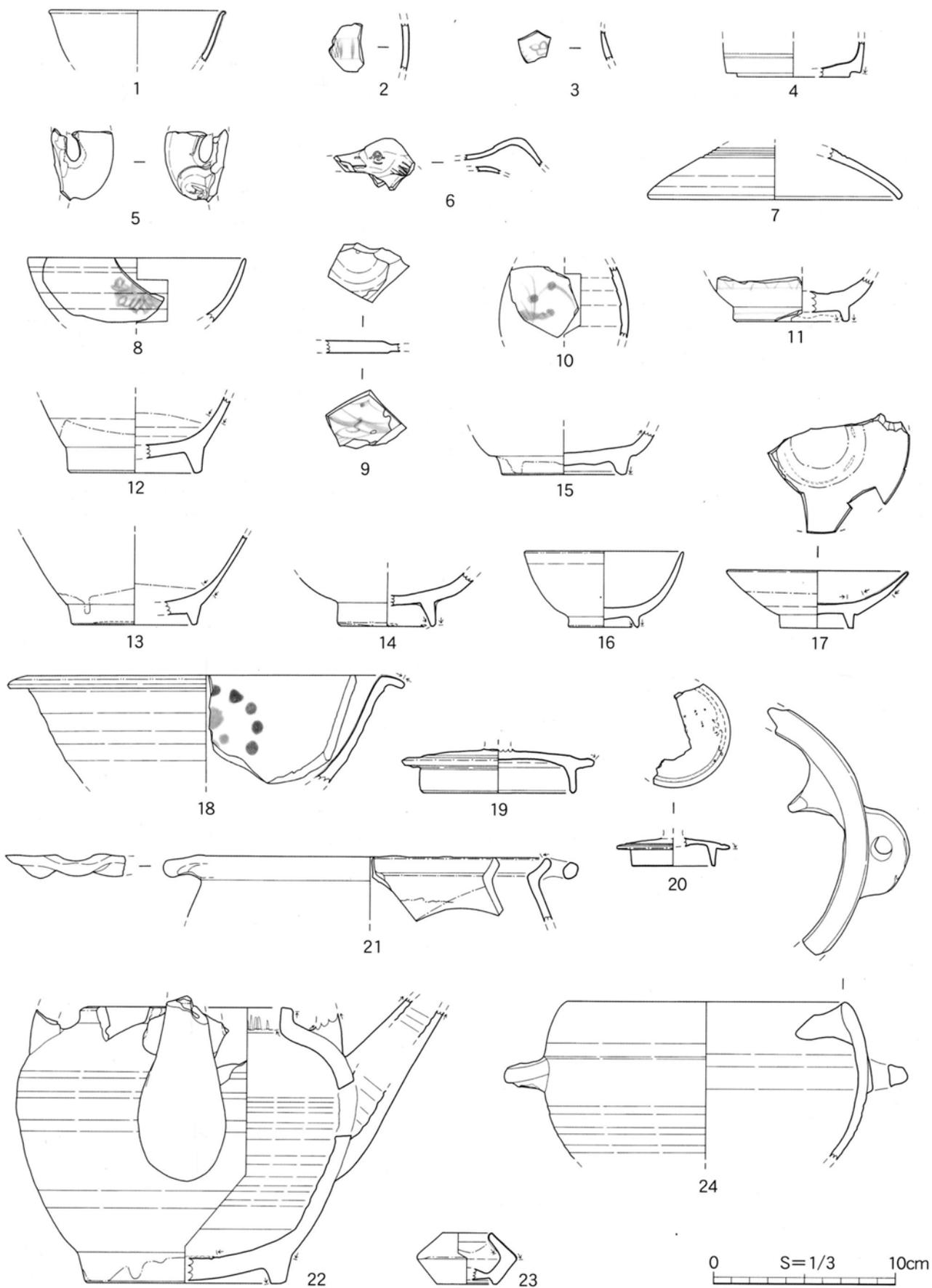
(単位: mm: g)

挿図番号 図版番号	番号	銭貨名	時代	初鋳年	書体	法 量				背文	残存率	出土地点	備考
						外径	穿径	厚さ	重量				
第17図 PL12	9	寛永通寶	江戸	1668年	楷書	23.13~22.98	6.63~6.67	0.94	1.83	無	完形	ハ-32 1層	
"	10	寛永通寶	江戸	1668年	楷書	24.43~24.47	6.36~6.28	1.26	2.88	無	完形	ハ-30 2層	
"	11	寛口口寶	江戸	1668年	楷書	—	—	1.17	1.43	無	1/2	ハ-34 2層	

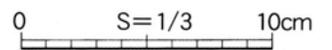
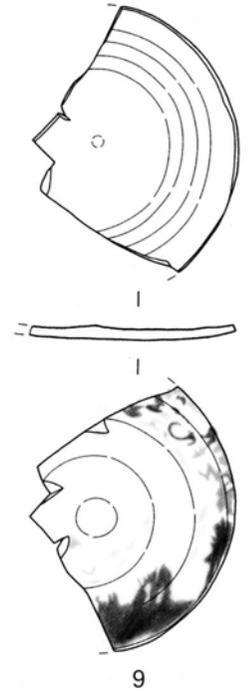
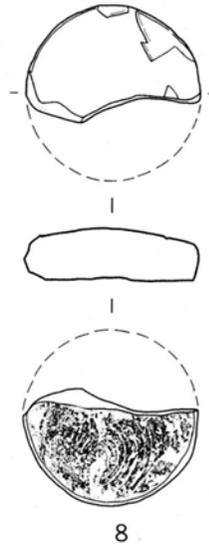
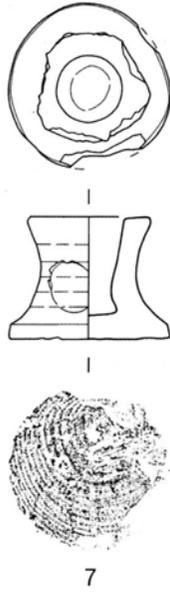
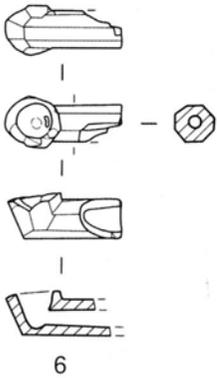
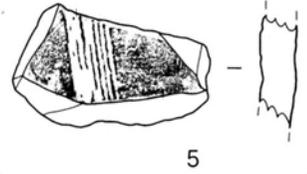
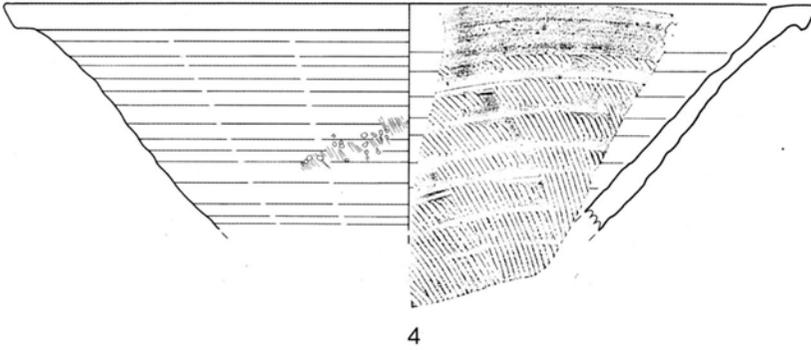
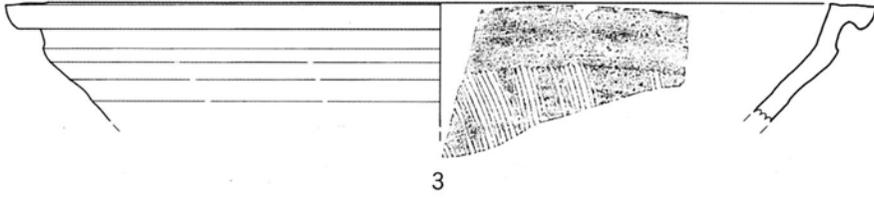
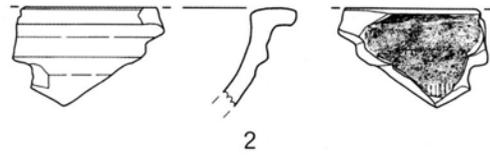
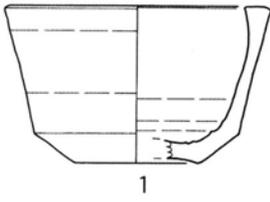


0 S=1/3 10cm

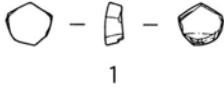
第14图 (PL.8) 包含層出土遺物実測図(1)



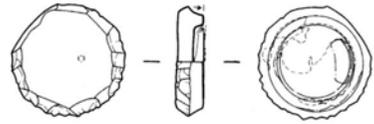
第15图 (PL.9·10) 包含層出土遺物実測图 (2)



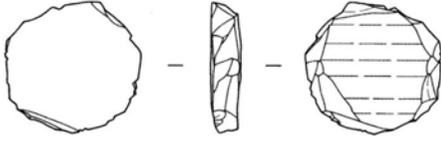
第16図 (PL.11) 包含層出土遺物実測図 (3)



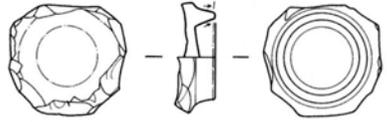
1



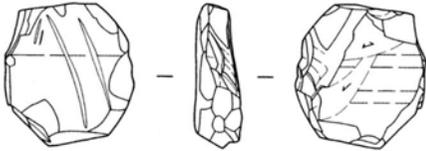
5



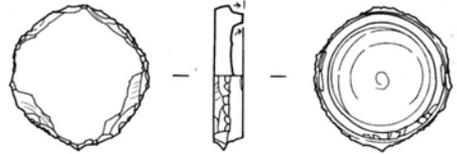
2



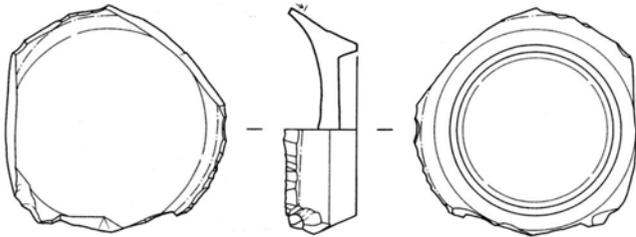
6



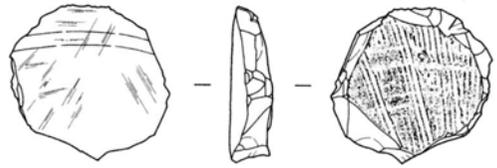
3



7



4

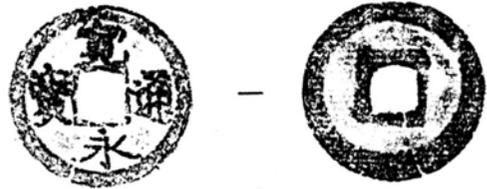


8

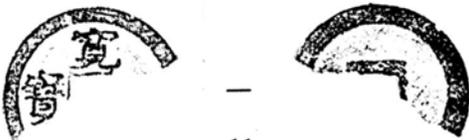
0 S=1/3 10cm



9



10



11

0 S=1/1 3cm

第17図 (PL.12) 包含層出土遺物実測図 (4)

内間カンジャーヤーガマ遺跡

第2節 内間カンジャーヤーガマ遺跡

1. 調査の概要

(1) 層序 (第18・21図) 及び遺構 (第20図)

第2章で先述したように戦前の写真や地図等による調査区一帯は現在のような住宅地ではなく、安謝川に接している。遺構が確認された第4層を形成する石灰岩粉碎礫土の整地面標高は2.5mと低い。

層序と遺構は以下のとおりである。

第1層：盛土層。プラスチック等の現代遺物を含む。近年の道路建設に伴う造成層と考えられる。

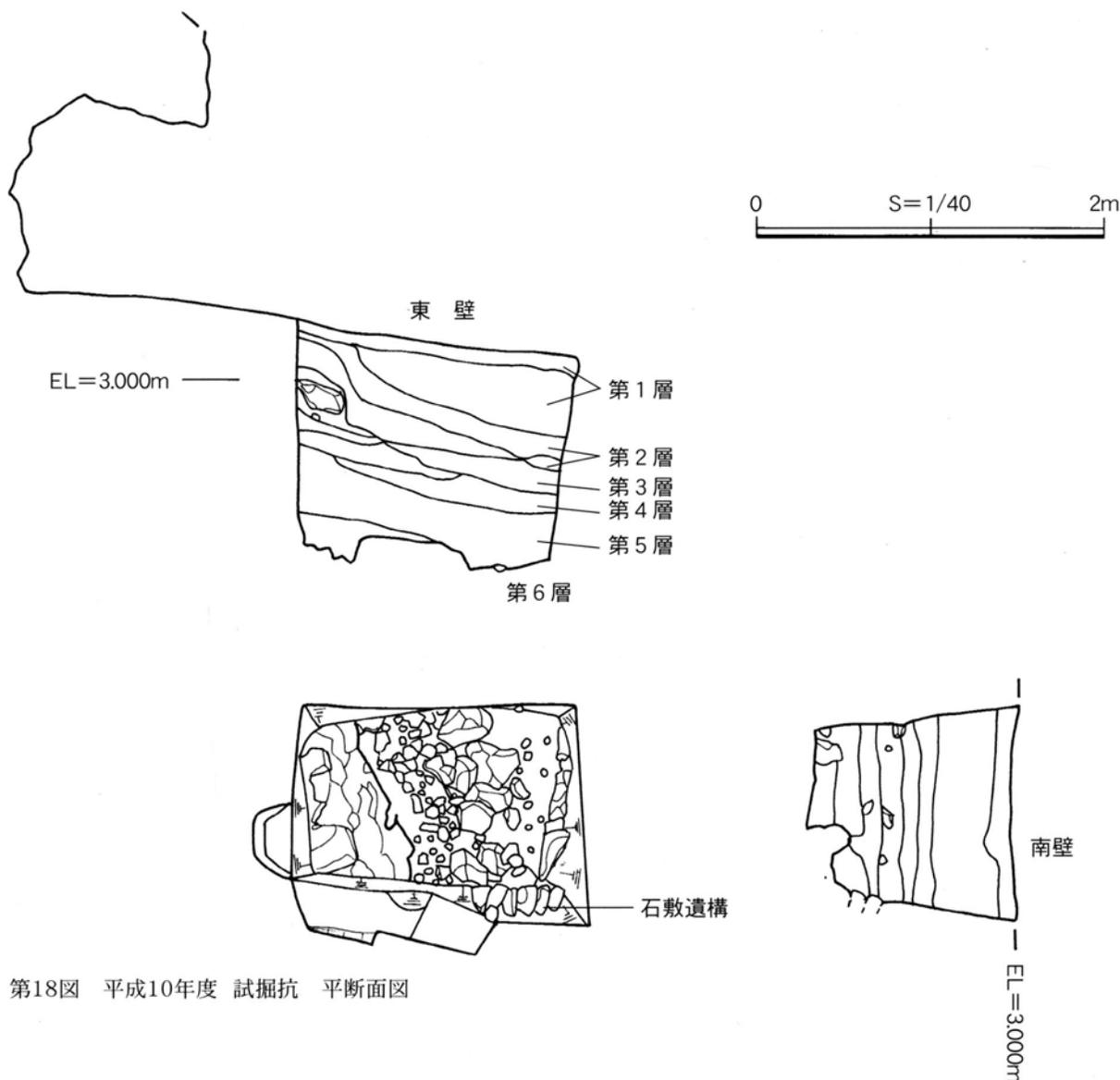
第2層：黒褐色土層。粘質。壺屋や本土産の陶磁器、ガラス片等が出土。近代～沖縄戦頃。同層直上で、戦時中に構築された石列や避難時の生活跡と思われる焼土面が出土したほか、洞穴の奥を約18m北東方向に掘削して避難壕として利用していたことも確認された。

第3層：黄白色混礫土層・石敷き層。礫土はほぼ水平に整地されており、整地面の南端部から丸石を緩斜させて敷く石敷き (第20図) を検出した。遺物は石製香炉破片のみで、石敷きに二次使用されていた。

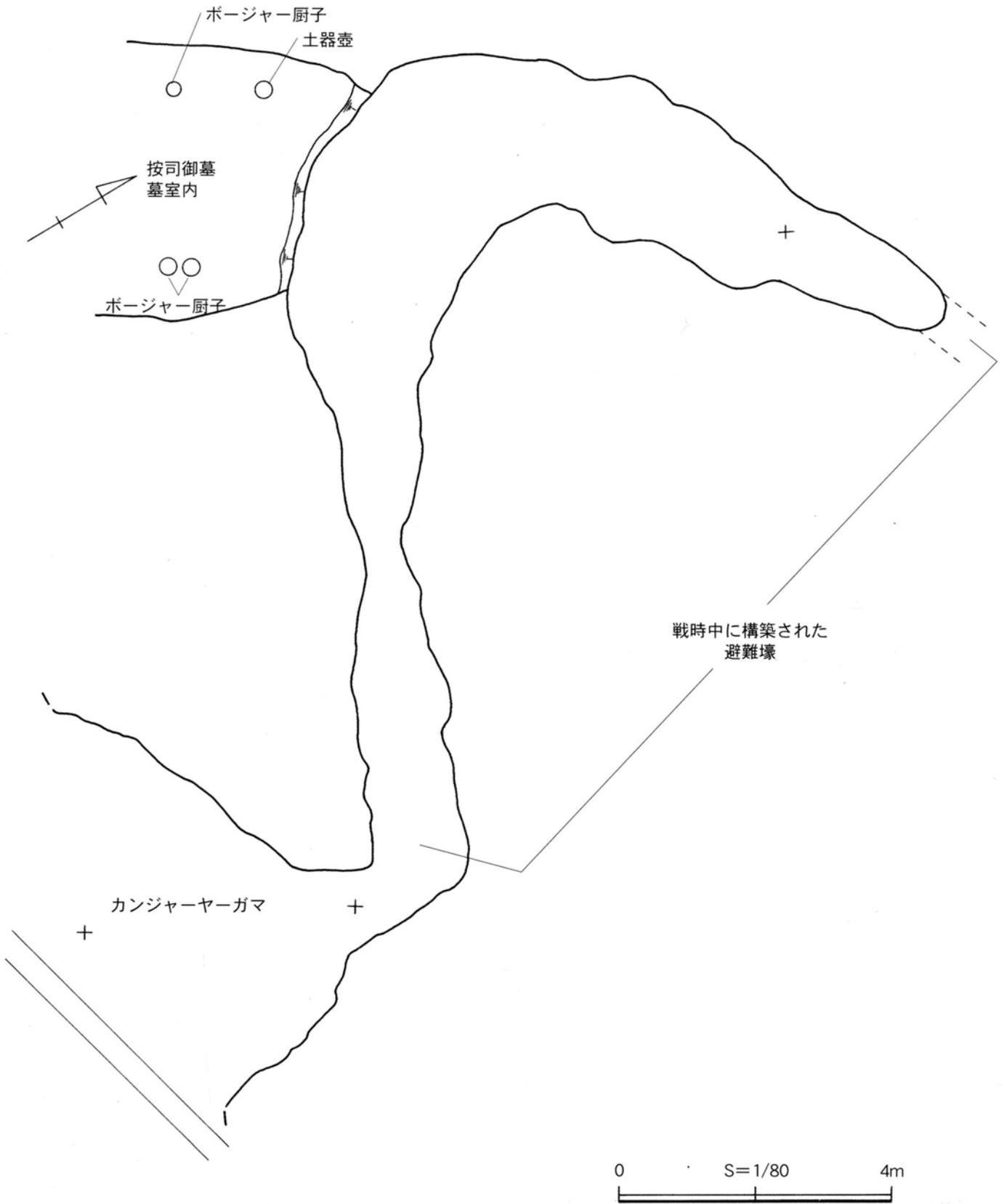
第4層：黄白色混礫土層。緻密な石灰岩粉碎礫。青磁皿・盤が埋納される (第24図)。

第5層：灰黄褐色混礫土層。無遺物層、石灰岩岩盤を砕いた小中礫で占められる。遺物は未確認。

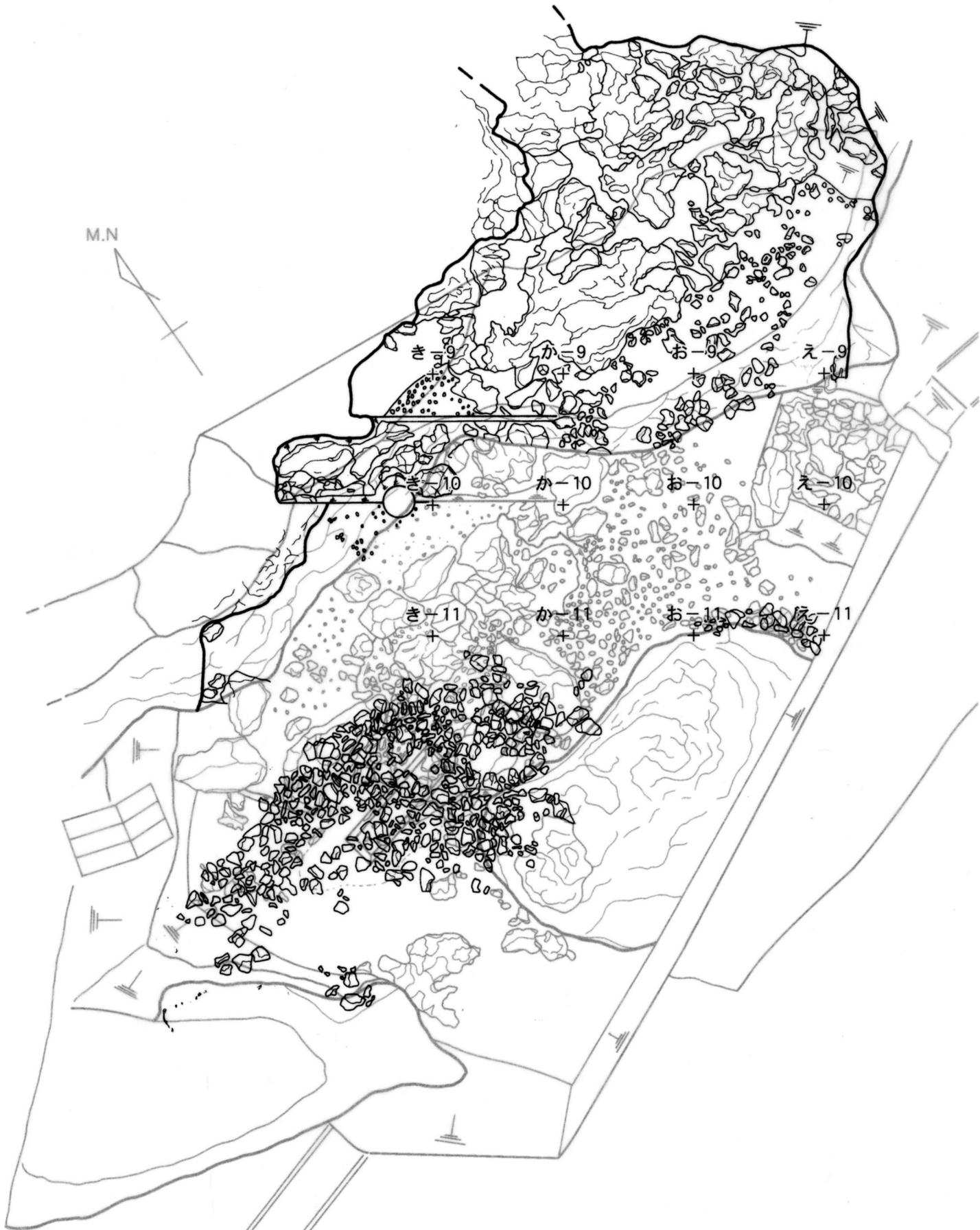
第6層：石灰岩岩盤。部分的に灰色シルト層が露頭。岩盤間に板状切石を二枚敷く。遺物は未確認。



第18図 平成10年度 試掘坑 平断面図



第19図 内間カンジャーヤーガマ遺跡・按司御墓 平面略測図

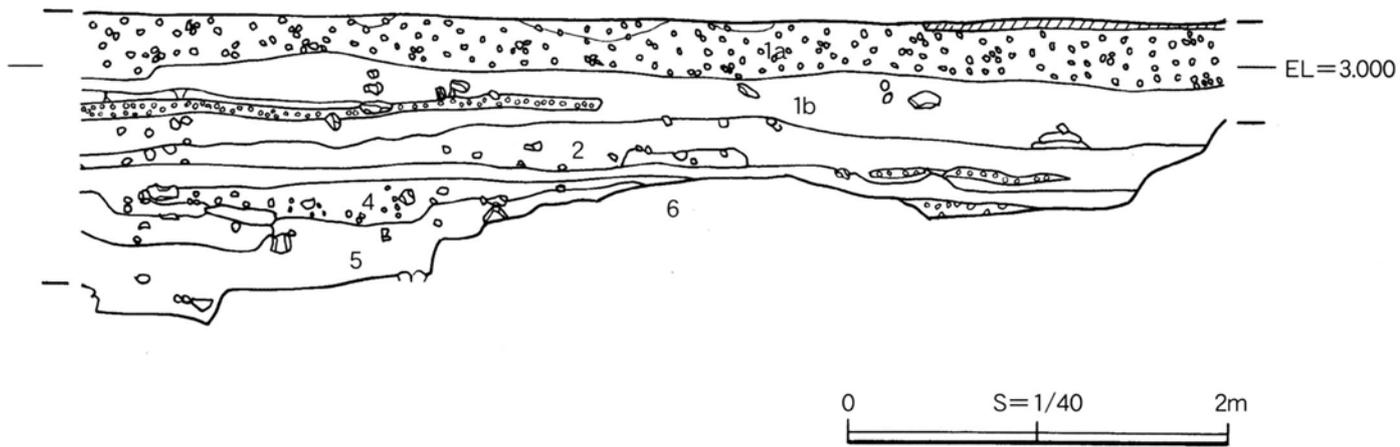


S=1/40

第20図 内間カンジャーヤーガマ遺構全体平面図



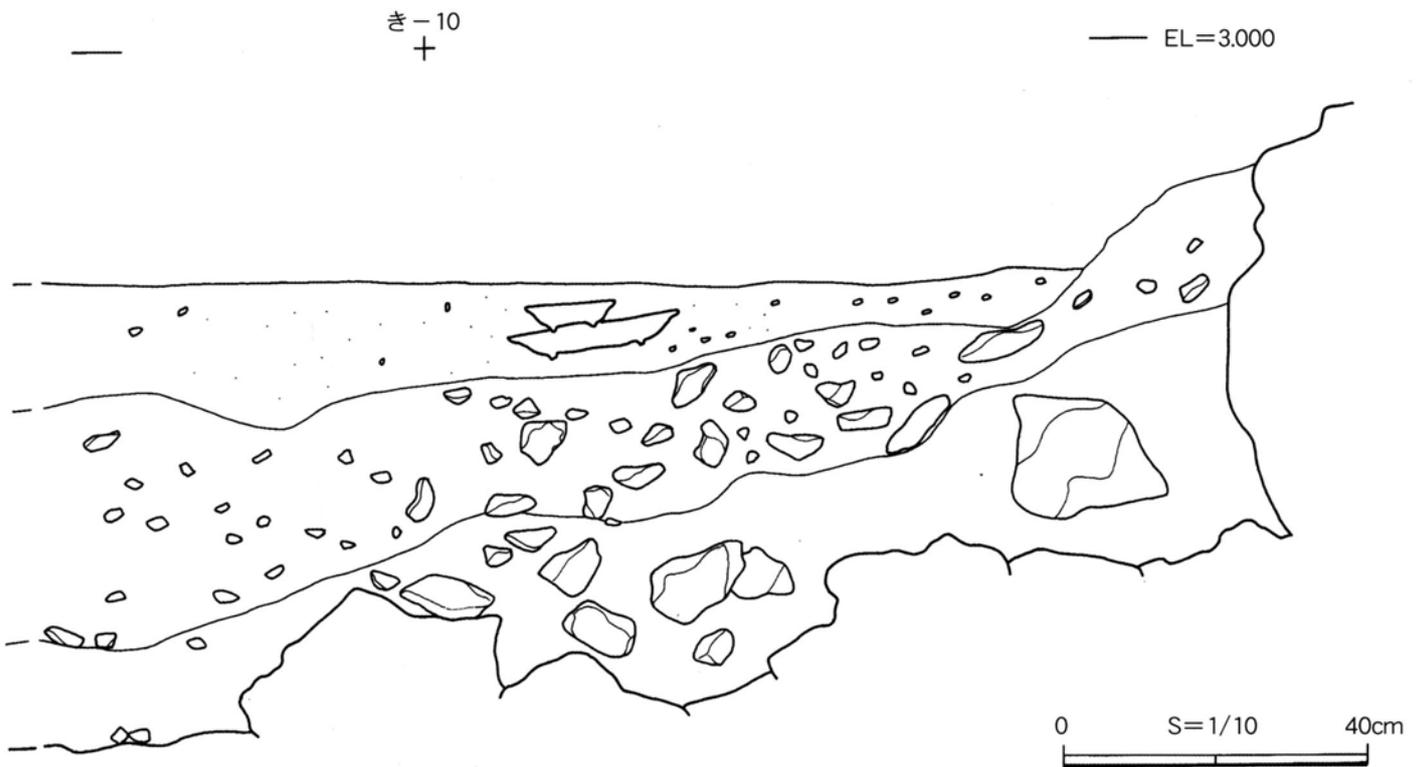
S=1/40



第21図 東壁（道路側）土層図

(2) 陶磁器埋納状況及び層序（第23図）

第3層の出土遺物は石敷き遺構の一部に使用されていた石製香炉のみであった。石敷きはやや傾斜して敷かれており、上位端部からは厚さが20cm程の水平堆積する混礫土層で形成される。この礫土層を面的に掘り下げていくと、き-10～き-11区で青磁腰折皿が出土した。慎重に口縁部の輪郭を検出したところ完形品と判断できたことから埋納されたものと考えられた。土坑の検出を試みたが、掘り方は見つからなかった。陶磁器を取り上げるため、面的に掘り下げたところ青磁皿の下から青磁盤の口縁部が検出された。しかし、青磁皿同様その掘り方が見つからないことから、平場を造成する途中で、一枚ずつ置いて埋納しているものと考えられた。この青磁出土層は緻密な石灰岩粉碎礫土であったが、下層に行くに従って礫が大きく、且つ、粗くなることから平坦な場所を掘って埋めたのではなく、造成の途中過程で埋納されたものと判断された。



第22図 陶磁器埋納状況及び土層図

(3) 鍛冶関連遺物・遺構について

同遺跡の調査手法は第3章で先述したとおり1m四方のグリッドを設定して遺物の取り上げと遺構精査を行った。第3層からグリッド毎に礫土の洗浄を行った結果、磁石に反応する微粒鉱物（砂鉄？）が確認された。微粒鉱物は下位層にいくにつれて量的に多く採取された。この微粒鉱物と牧港貝塚（註1）及び後兼久原遺跡（註2）出土砂鉄を顕微鏡観察で比較すると当遺跡の微粒鉱物は形や大きさや不揃いで石英や赤色粒子等を含んでいるのに対し、後者の砂鉄は色や大きさ、形状が殆ど均一であった。大澤正己氏（九州テクノリサーチ技術顧問）の分析によると、当遺跡出土の微粒鉱物は粒子が小さすぎるうえ量的に少ないことから製鉄の原料としての可能性は低いとの報告を受けた。

また、第6層の岩盤縁部では部分的に赤色を帯びる箇所が確認された。大城逸郎氏（沖縄県立教育センター）によると、岩盤縁部の赤色化は一帯がかつて酸化還元的な条件下（水が溜まりやすい環境）に起因しており、先の微粒鉱物も含めて自然作用によるものと判断された。

同遺跡では、鉄滓の表採資料があったといわれているがその資料は未見である。さらに発掘調査でも鍛冶関連の遺構・遺物は確認できなかった。しかし、遺跡名称（＝伝承地）の由来や洞穴という立地（註3）を考慮すると、可能性の域をでないが当場所で短期間に移動する鍛冶屋が存在していたことが推察される。

註1：沖縄県教育委員会 1985『牧港貝塚・真久原遺跡－県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書－』

註2：北谷町教育委員会 平成9年『後兼久原遺跡展』

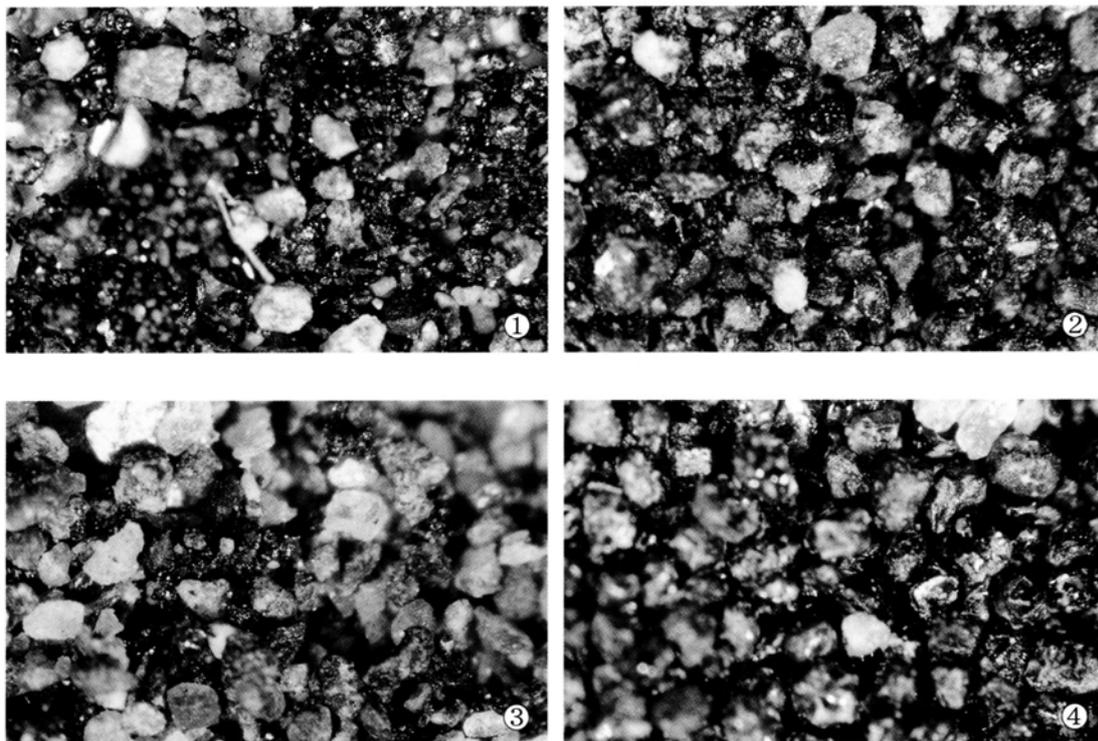


写真 ①内間カンジャーヤーガマ遺跡出土微粒鉱物 ②牧港貝塚出土砂鉄（資料提供：沖縄県立埋蔵文化財センター）
③仲間稲マタ原近世墓群採取第三紀砂岩（ニービ） ④後兼久原遺跡出土砂鉄（資料提供：北谷町教育委員会）

第12表 内間カンジャーガマ遺跡出土遺物集計一覧表
施釉陶器

碗	口	131 (小碗9)
	胴	126 (小碗1)
	底	44 (小碗4)
	完形(口~底)	10 (完形2、小碗・完形2)
皿	口	4
	胴	4
	口~胴	1
	完形(口~底)	3
水注	口	6
	胴	13
	底	2
		3 (注ぎ口3)
酒注	口	1
	胴	5
	底	2
	頸~注ぎ口	1
鉢	口	16
	胴	7
	底	11
	口~胴	3 (ワンブー)
壺	口	4
	胴	6
	底	4
	完形(口~底)	3 (油壺1)
	口~胴	2
蓋	完形(撮み~鏝)	1 (油壺)
搦鉢	底	2
火炉	口	2
	胴	3
	底	1
		5 (把手5)
按瓶	口	3
	胴	5
	底	1
瓶	肩~底	2
	胴	2
	底	
	完形(口~底)	
器種不明		31 (口4、胴15、底4、蓋6、その他2)
個体数		103

無釉陶器

甕	口	7
	胴	13
	口~胴	2
	胴~底	1
鉢	口	15
	胴	6
	口~胴	3
水鉢	完形(口~底)	1
壺	口	8
	胴	25
	口~胴	5
	胴~底	2
	口~底	1
水注		1 (注ぎ口)
器種不明		41 (胴25、底16)
個体数		59

褐釉陶器

器種不明		2 (胴2)
個体数		2

青磁

皿	完形(口~底)	2 (鏝縁盤1、腰折皿1)
個体数		2

磁器

碗	口	98 (砥部焼39)
	胴	154 (砥部焼13)
	底	39 (砥部焼9)
	完形(口~底)	93 (小碗46、砥部焼10)
急須		7 (耳部分2、注ぎ口5)
	口	5
	胴	8
	底	5
	完形(口~底)	7 (完形1)
猪口	口~胴	1
	口	18
	胴	1
	底	6
皿	完形(口~底)	3
	口	16 (砥部焼3)
	胴	2 (砥部焼2)
	底	16
蓋	完形(口~底)	41 (砥部焼1)
	口	
蓋	完形(撮み~鏝)	6 (茶碗・完形4、急須・完形1)
	胴~鏝	1 (急須)
瓶	完形(口~底)	2
灰皿	完形(口~底)	2
器種不明		7 (口5、胴1、完形1)
個体数		160

染付

碗	口	3
	完形(口~底)	1
皿	口	3
	胴	2
	底	1
	完形(口~底)	2
個体数		5

陶質土器

火炉	口	3
	胴	2
	底	3
	完形(口~底)	1
土鍋	口	2
	胴	2
	底	1
土瓶	口	1
	胴	1
水鉢	口	8
	胴	4
	底	2
蓋	口	5 (土鍋4)
	胴	4 (土鍋6)
個体数		8

陶製品

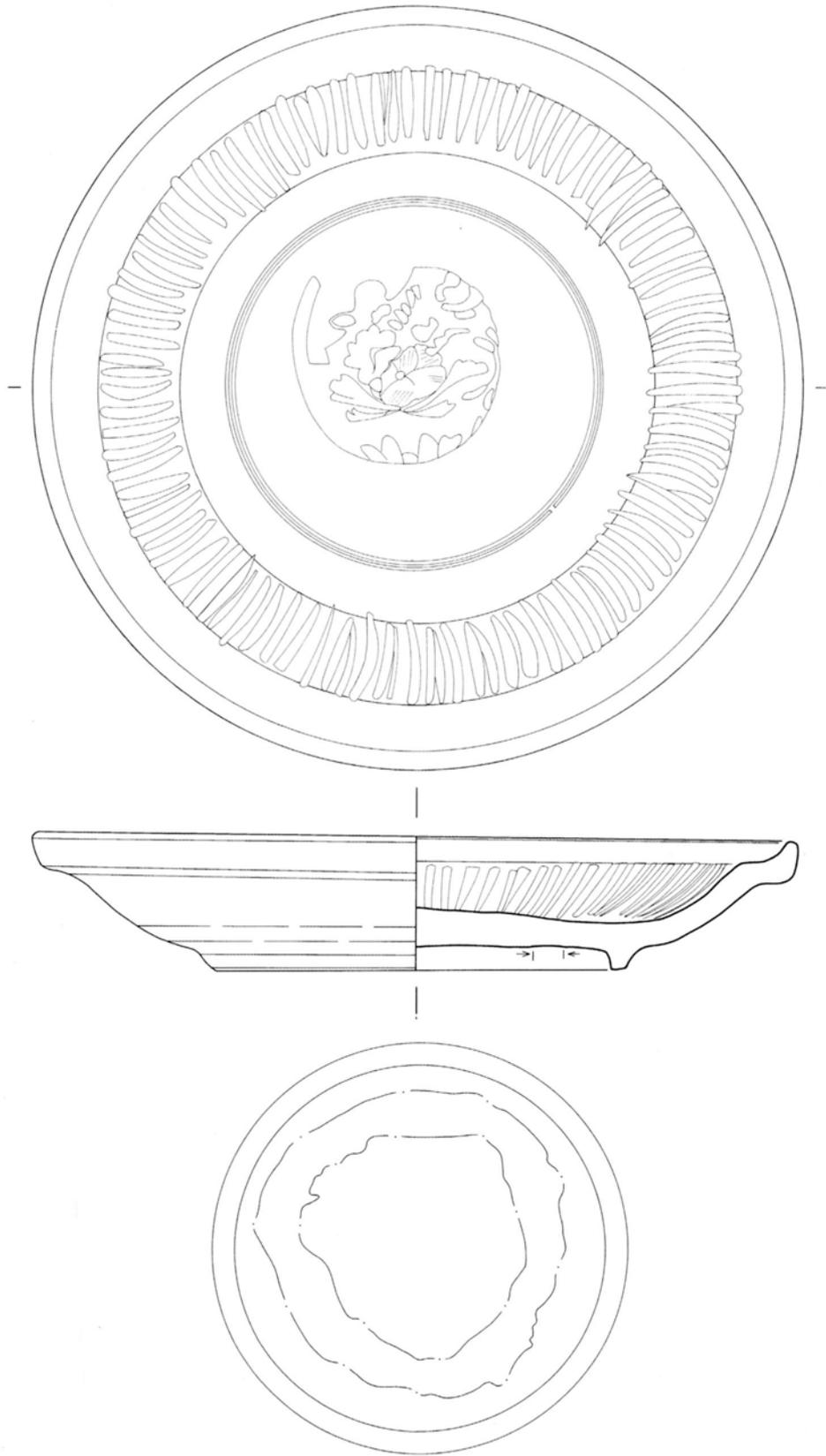
搦鉢	口	1
器種不明		16 (胴7、底8)
個体数		9

石製品

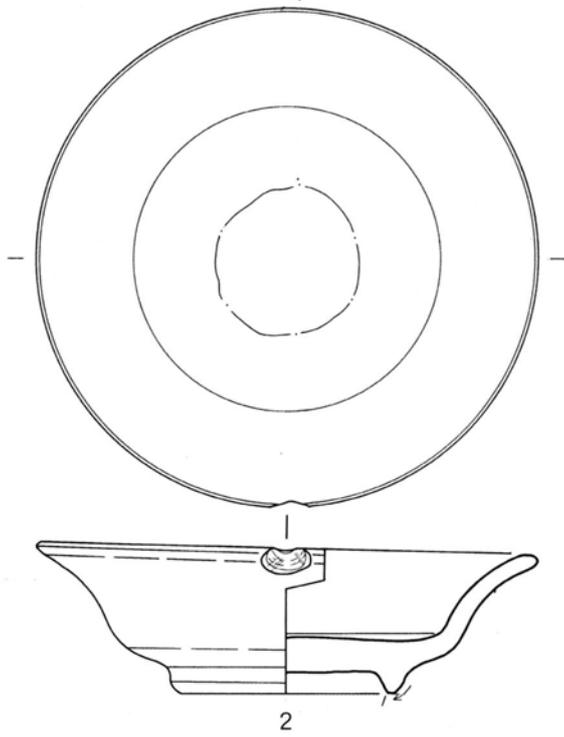
香炉	底	1 (石灰岩)
硯	完形(口~底)	11 (完形)
個体数		2

第13表 出土遺物観察一覧表

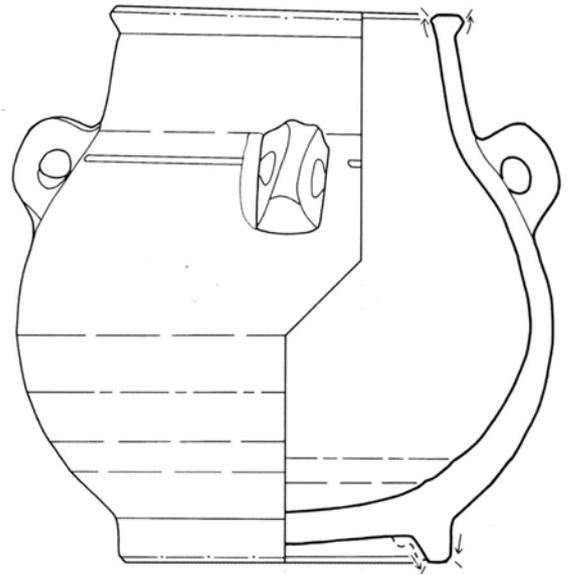
挿図番号 図版番号	器種 (産地)	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 ／材質、 形状	釉薬及び 化粧土/ 重量	特徴	出土場所	整理番号
第23図1 PL.15-1	青磁盤 (中国産)	22.8 4.15 12.3	灰白色	緑青色	青磁鈔緑盤の完形資料。外面畳付釉剥ぎ、高台内露胎。内面陰刻蓮弁。見込牡丹印文。陰刻蓮弁は1本櫛篋で幅狭。削りは時計回り。	き-10) き-11	D-エ-1
第24図2 " 2	青磁皿 (中国産)	13.2 4.0 5.5			青磁腰折皿(外面) 畳付の部分に釉剥ぎあり (内面) 幅広の陰刻蓮弁。口縁部を「く」の字状に外反させ、端部を上方に引き上げる。見込みに牡丹印文。陰刻蓮弁は鉋で1本ずつ削り、釉施する。(削りは時計回り)	き-10) き-11	D-エ-2
" 3 " 3	壺	9.3 14.7 8.7	赤褐色	褐色(褐釉)	(外面) 胴部が丸く頸部で締まり、口縁部を張り出す。縦耳四。方言で「アンダガミ」。肩部、凹線1。 底部、篋削り。胴下部、篋削り。口縁～胴上部、回転横ナデ? (内面) 水挽き痕に釉が掛かり濃淡の横縞が見られる。総釉掛け後、口縁と畳付けを釉剥ぎ。口縁部は、全体に白土が付着。高台内側に、一部砂目が付着。	-	A-コ-二
" 4 " 4	水鉢	21.2 14.2 14.6	明赤色 赤橙色系 の微粒子	無し	轆轤成形後、口縁部回転横ナデ。 胴部、横帯1、その直下に波状沈線。胴下部～底部、篋削り。 底部、篋削り。	-	B-オ-2
第25図5 " 5	香炉	- - 13.6	サンゴ石	無し	サンゴ石製の香炉。 底部、脚付3(内1個欠損)。	か-13	N-キ-1



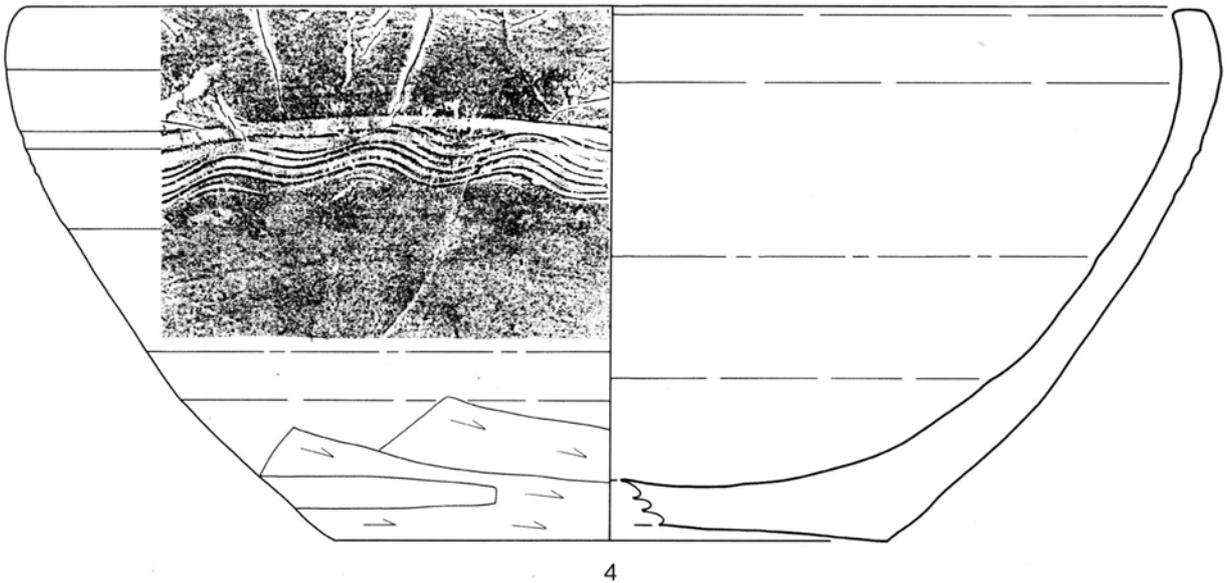
第23図 (PL.15) カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物 (1)
青磁盤 (1)



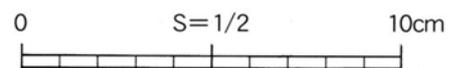
2



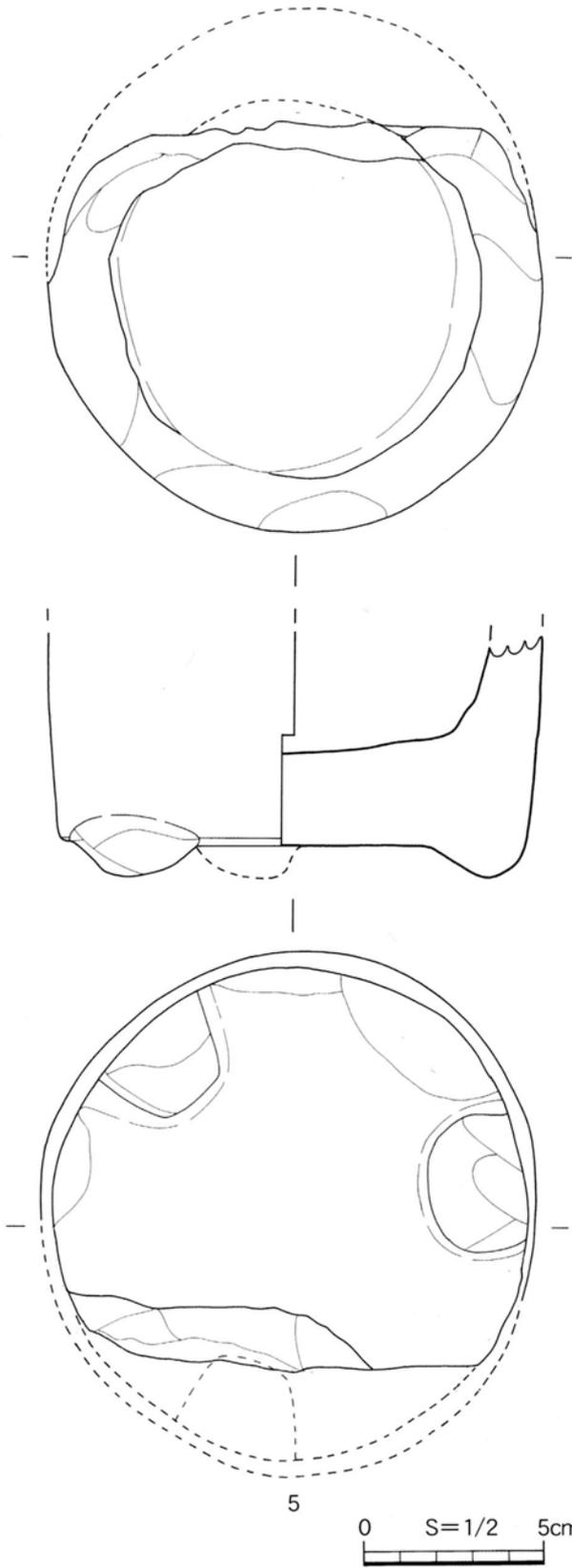
3



4



第24図 (PL.15) カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物 (2)
青磁皿 (2) ・壺 (3) ・鉢 (4)



第25図 (PL.15) サング石製香炉 (5) ・カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物 (3)

内間西原近世墓群

第3節 内間西原近世墓群

1. 調査の概要

内間西原近世墓群は、サチバルマーチャーと呼ばれる独立した小丘と、この小丘から東側へ約80mの石灰岩に分布しており、平成4・5、10年度に次ぐ四度目の発掘調査となる。

これまでの調査で、サチバルマーチャー一帯の墓が沖縄戦時に避難壕として利用されていたことがわかっている。今回の調査でも、21～23号、25号の4基の墓で、墓室の改築（＝避難壕）が確認された。

2. 調査の成果

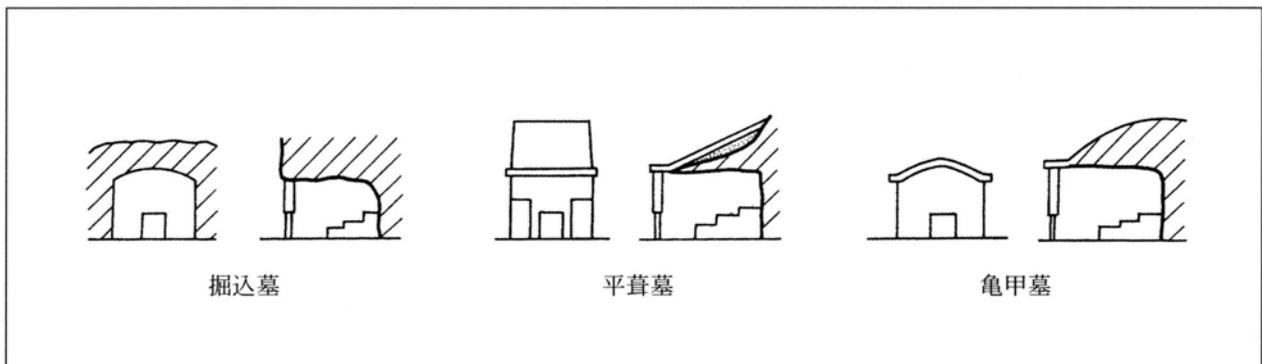
墓形態

調査した墓は7基で、6基の墓が琉球石灰岩の岩盤に横穴を掘って墓室を構築する横穴式の墓で、26号のみ、墓室の壁面や天井の構築に岩盤と石積みを併用して造る縦穴式の墓であった。後者の墓は石灰岩のない場所での造営に起因している。墓の形態分類からすると、掘込墓（4基）、平葺墓（2基）、亀甲墓（1基）の3種類が確認できた。

I：掘込墓（21号・22号・24号・25号）屋根や墓面の意匠が殆どみられない

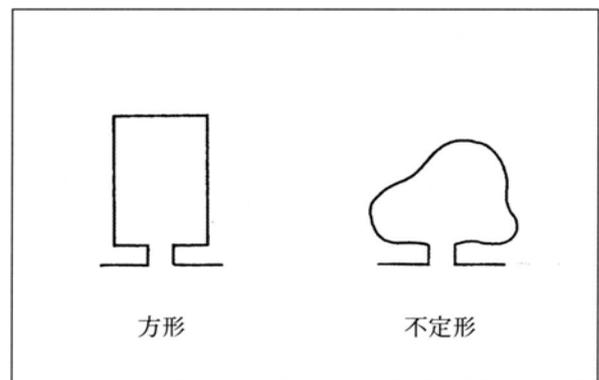
II：平葺墓（23号・26号）傾斜する方形屋根、サンミデー、庭囲いの袖石垣を構築

III：亀甲墓（27号）墓面上部に扁平の眉を構築

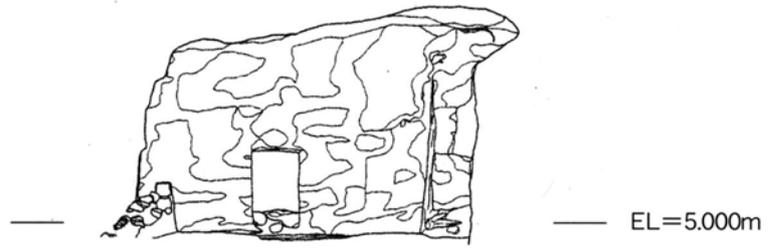


墓室形態・構造

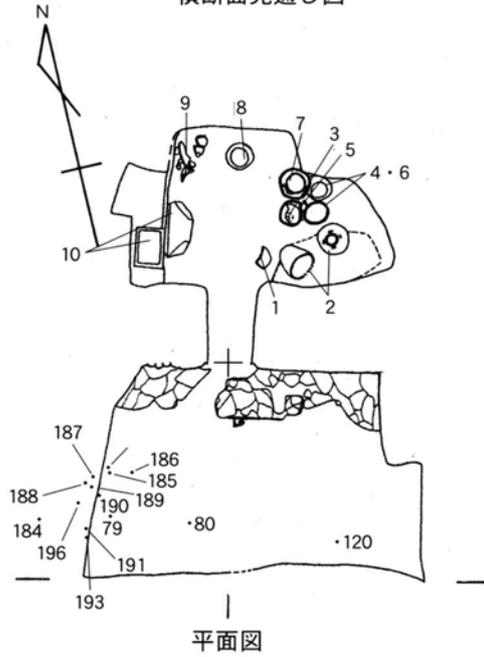
それぞれの墓の主要部となる墓室の形態・構造に注目してみると、平面観は方形と不定形に分けられる。不定形は2基（21号、27号袖）あるが、21号は避難壕へ改築されたことに起因しており、本来の平面観は方形であったことが考えられる。次に、棚の形態をみると、正面棚で「階段状」と「出窓状」に大別され、その構築方法も、岩盤を成形するものと、岩盤・石積みを併用するもの、コンクリートブロック製が確認された。



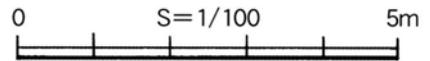
左縦断面図



横断面見通し図



平面図



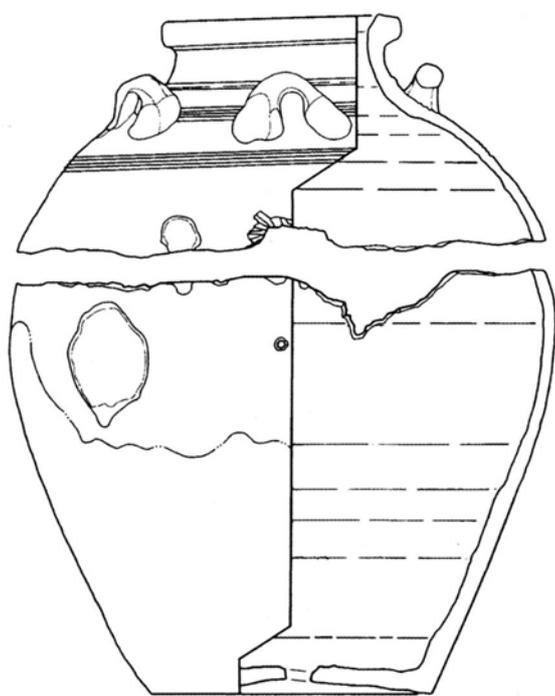
立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		庭の構 築方法	サンデー の有無	墓室		棚数 正面 左右	特徴
		構築 方法	奥行 幅 高さ			平面 形態	奥行 幅 高さ		
琉球 石灰岩	掘込 墓	基盤を 掘り込 む	106 60 80	断面L形に基 盤を削平し、 礫、赤土で整 地	無	不定 形	210 340 180	— 1 —	墓室：厨子龕7基を安置。焼骨を伴う転 用蔵骨器（タイ産褐釉壺）あり。残 存の棚は岩盤成形の出窓状で、22号 墓室と繋がる。調査中の天井崩落に より横断面省略。 墓庭：墓口前の岩盤際に寛永通宝（1枚） の埋納。副葬品の廃棄。砲弾穴あり。

第26図 (PL.16) 21号墓 平断面図

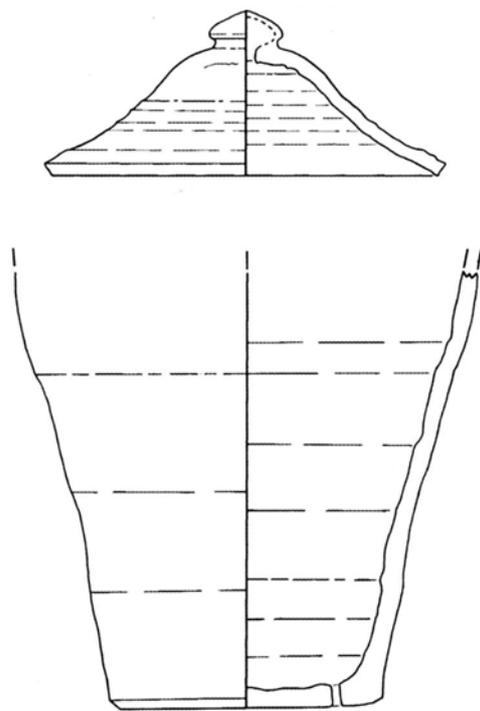
第14表 蔵骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
21-1	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	—	10.4	32.8	—		(つまみ) 上部破損のため不明。 (外面) 水挽き。 (内面) 水挽き後、下半部回転横ナデ。 (釉薬) なし。
21-2	転用蔵骨器 (陶製四耳壺：蓋)	19.0	18.6	42.1	—		(産地) メナム・ノイ窯 (タイ産)。 (部位) 口縁部～胴部。 (素地) 灰褐色細粒子で白色・黒色鉱物を含む。
	転用蔵骨器 (陶製四耳壺：身)	42.1	33.1	22.7	43.1		(部位) 胴部～底部。胴部左右に球状の重ね焼き痕あり。底面穿孔1穴。 (外面) 斜め方向の静止籠削り。横方向の回転籠削り。 (内面) 水挽き。ナデ調整
21-3	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	6.0	12.9	31.4	—		(つまみ) 宝珠形。 (外面) 上面は撮み調整の回転横ナデ。体部は水挽き後、上半部回転籠削り。下半部は回転籠削り後、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、回転横ナデ。 (釉薬) なし
	陶製甕形厨子甕 (ポージャー?：身)	—	—	22.3	—		(部位) 胴部～底部。 (外面) 籠削り後横ナデ。高台、静止籠削り。 (内面) 水挽き。高台脇、回転籠削り。底面円孔6
21-5	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	9.7	10.6	30.6	—		(つまみ) 饅頭形。 (外面) 上部、撮み調整の静止ナデ。撮み台1段、凹線1条。体部、水挽き後上半部回転籠削り。沈線の花文あり。 (内面) 水挽き後、天井部を残して回転横ナデ。 (釉薬) なし
21-4,6	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	26.4	44.7	21.3	34.0		(底) 上凸部1.0cm。方窓1。柱に指痕。 (特徴) 口縁玉縁。横帯2～4凹線。底面円孔8。肩部に窯印あり。 (外面) 口縁～高台脇近く、回転横ナデ。高台脇、回転籠削り。
21-7	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	6.5	9.4	25.6	—		(つまみ) なし。 (外面) 頂部無調整。体部、水挽き後上半部回転籠削り。下半部、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、回転横ナデ。 (釉薬) なし
	陶製有頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	38.4	62.2	24.8	40.0		(底) 上凸部0.6cm。方窓1。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。庇右側に窯印あり。底面円孔5。無頸 (ポージャー) 型から有頸 (マンガン) 型への移行タイプ。 (外面) 口縁～胴部、回転横ナデ。胴下部水挽き後回転横ナデ。高台脇斜め方向の静止籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。胴部、水挽き、胴下部～底面、回転籠削り。
21-8	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	27.0	47.8	21.7	33.4		(底) 上凸部0.9cm。窓3 [円・方・円]。 (特徴) 口縁玉縁。横帯2凹線3。横帯3・4凹線1。庇右上部に窯印あり。底面円孔1。
21-9	転用蔵骨器 (陶製鉢：身)	27.6	27.1	26.0	32.6		(特徴) 口縁玉縁。底面円孔4、高台脇円孔8。 (素地) 暗茶褐色の細粒子。白色粒含む。 (外面) 口縁～胴下部、回転横ナデ。高台脇、回転籠削り。
21-10	石製家形厨子 (蓋)	31.0 × 6.8	27.4	68.0 × 51.7	—		(屋根) 入母屋形。 (材質) 石灰岩製。
	石製家形厨子 (身)	56.0 × 37.3	51.4	55.0 × 36.8	56.0		(材質) 石灰岩製。 (特徴) 四脚。口縁部の削り調整痕明瞭。 (外面) 正面方形区画2。中央に方窓1。 (内面) 口縁～胴上部、丁寧成形。下半部、粗成形。

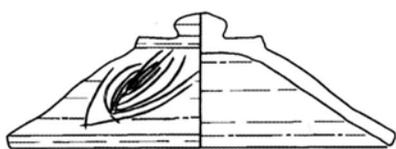
銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
			5	男 1 不明 4	小児 2 幼児 1 成人 1
			5	男 1 女 1 不明 2	幼児 1 成人 2
			1		成人 1
			4	男 1 女 1 不明 1	成人 1 幼児 1
			3	男 1 女 1 不明 1	成人 1



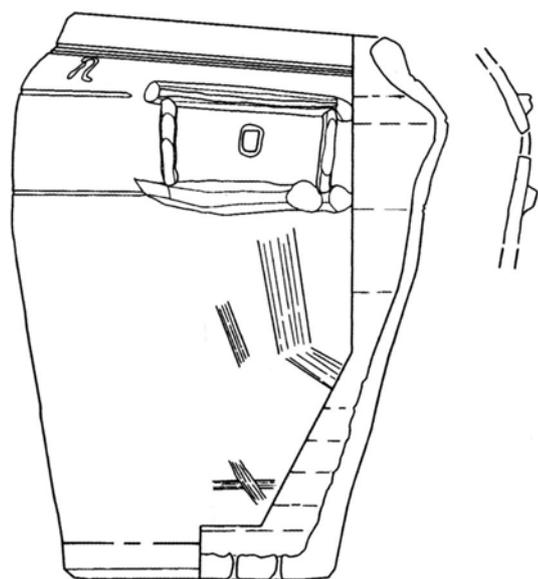
21-2



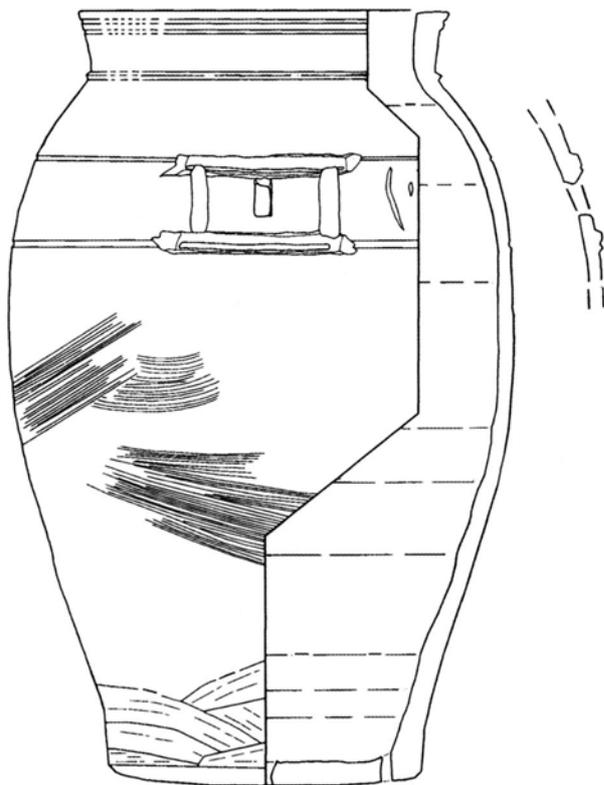
21-3



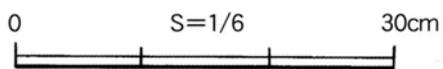
21-5



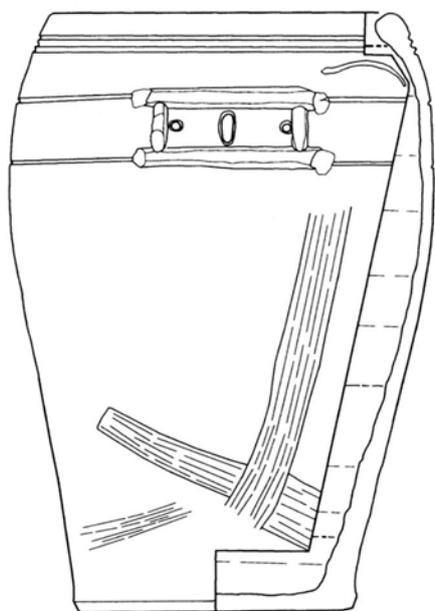
21-4-6



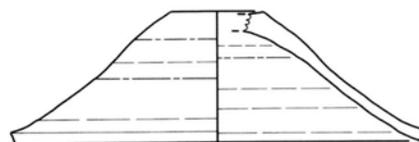
21-7



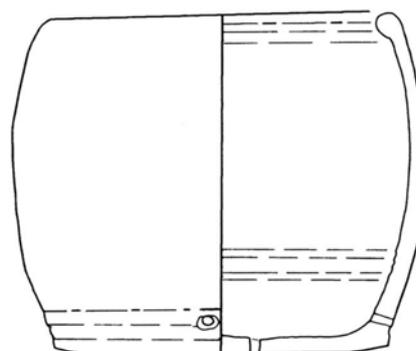
第27图 (PL.17·18) 21号墓 藏骨器 (1)



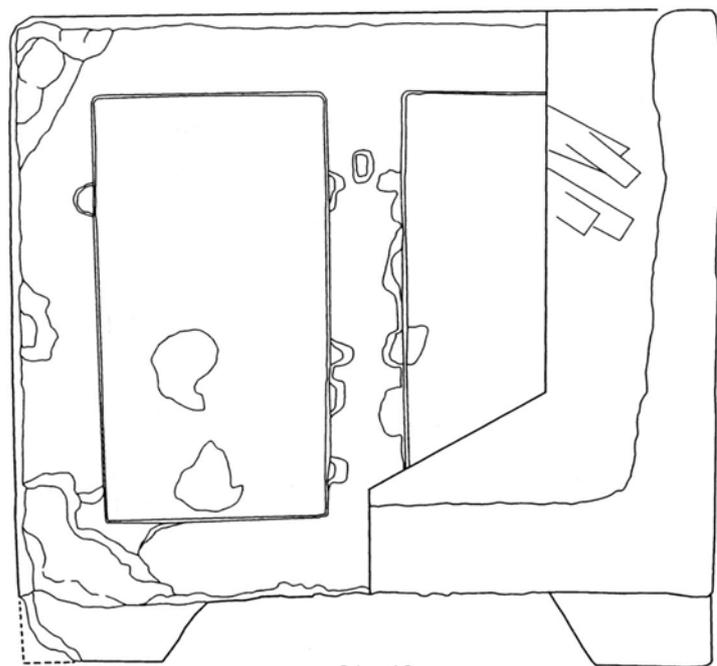
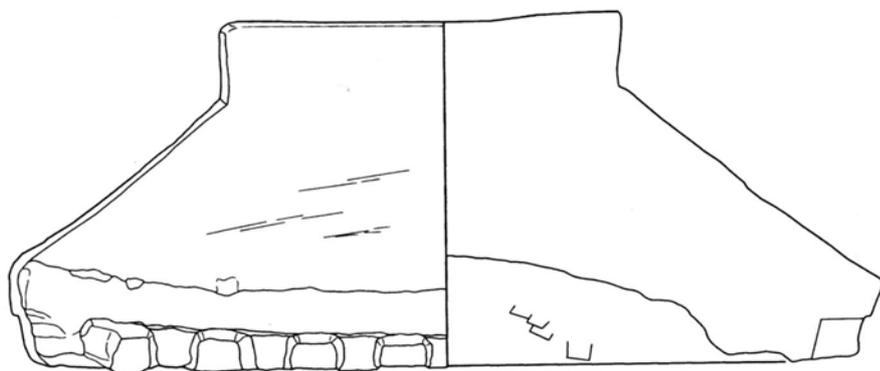
21-8



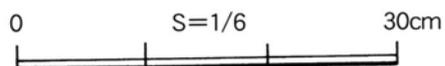
21-1



21-9



21-10

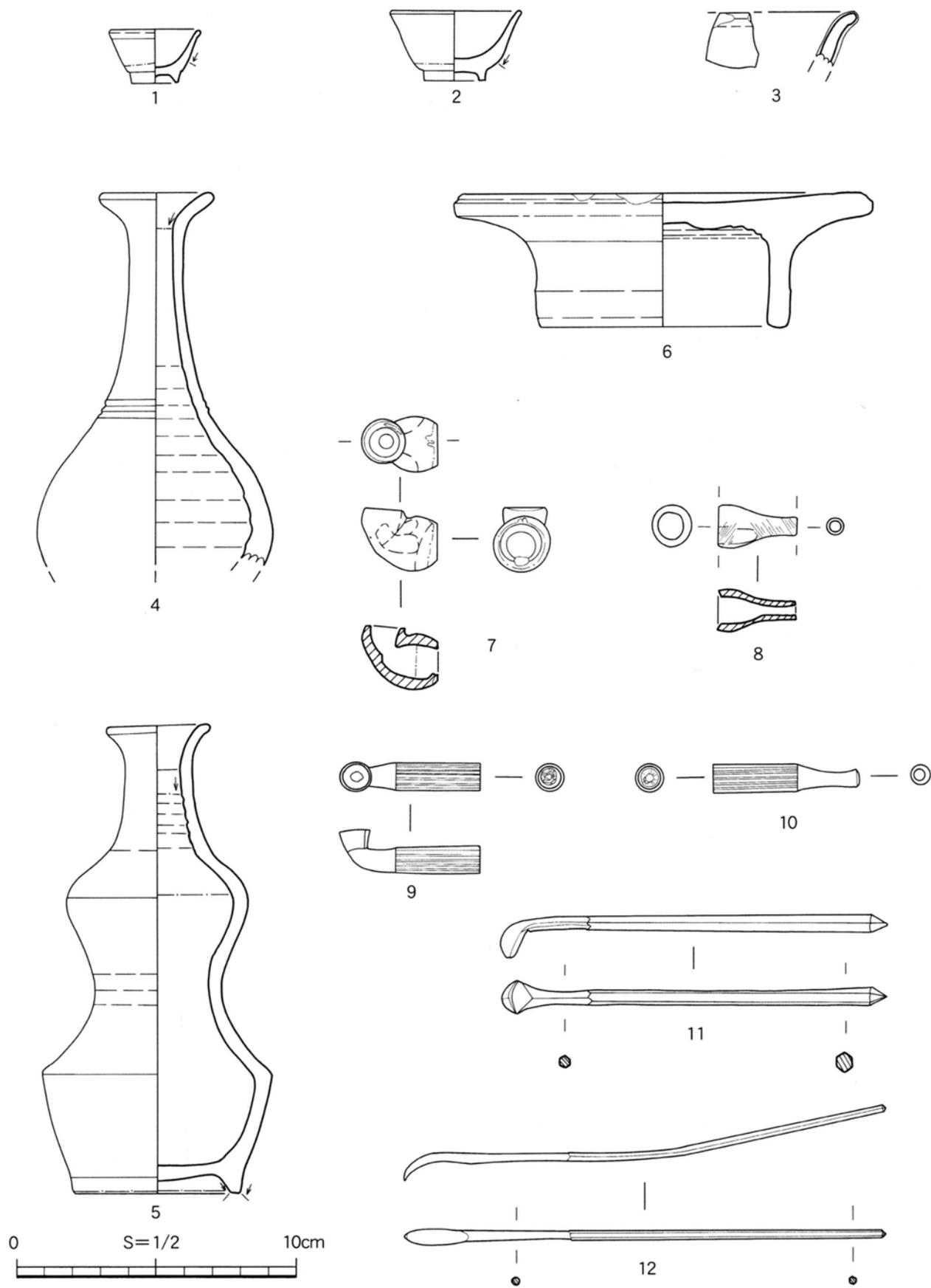


第28图 (PL.18) 21号墓 藏骨器 (2)

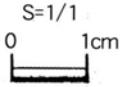
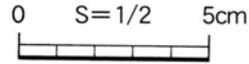
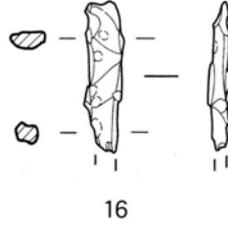
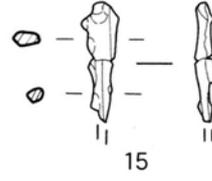
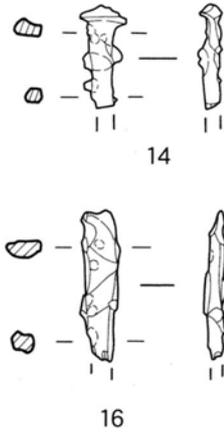
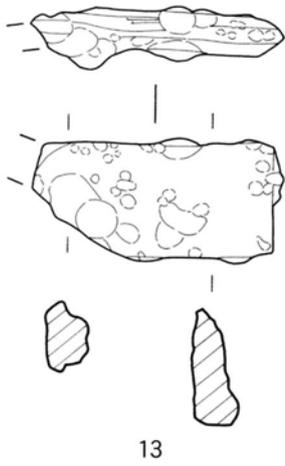
第15表 21号墓出土遺物観察一覧表

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎土の 色調/材質、 形状	釉薬及び 化粧土/ 重量	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
第29図1 PL.19の1 185	猪口	3.3 1.9 1.7	微粒子	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶器。焼成が非常に良好で磁器に近い質感を持つ。貫入なし。	-1.455 -1.513 4.600	A-ター-2
" 2 " 2 74	猪口	4.7 2.5 2.2	微粒子	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶器。全体的に細かい貫入がみられる。	-2.066 -1.522 4.738	A-ター-1
" 3 " 3 199(5)	碗 (中国産)	- - -	微粒子 灰白色	透明釉	青磁外反碗。器面の発色は淡緑色。貫入なし。	不明	D-イー-1
" 4 " 4 184、 199(3)	瓶	4.0 - -	微粒子	褐釉	沖縄産施釉陶器。長頸で胴の張りが大きく、口縁部は上端でラッパ状に開く。	-2.067 -2.471 4.493	A-ニ-7
" 5 " 5 182	瓶	3.6 16.9 6.0	微粒子 にぶい橙	褐釉	沖縄産施釉陶器。長頸で胴の張りが大きく、口縁部は上端でラッパ状に開く。	-1.403 -1.521 4.621~ 4.682	A-ニ-6
" 6 " 6 80、120、 199(2)	蓋	15.0 4.8 9.0	微粒子 明橙色	-	沖縄産施釉陶器。上面を篋状工具で成形。皿を伏せた器形で見込みに轆轤痕が残る。	-2.111 -0.474 4.692	B-コ-1
" 7 " 7 186-②	煙管 (雁首)	長さ 2.7 火皿径 1.5	微粒子	釉色は淡 黄茶色 8.3g	沖縄産施釉陶製。ナデ成形?。全体に丸みを帯び首部が太い。羅字接合部際まで施釉。	-1.498 -1.234 4.509	A-ネ-1
" 8 " 8 186-①	煙管 (吸口)	長さ 2.8 吸口径 0.6 羅字径 1.4	微粒子 灰白色	白化粧 3.1g	沖縄産施釉陶製。篋状工具で成形後、指ナデ、粗成形。羅字接合部で膨らみをもち、吸口へ窄まる。		A-ネ-2
" 9 " 9 187-①	煙管 (雁首)	長さ 5.0 火皿径 1.1	銅製	11.9g	羅字接合部から首部にかけて、全体に直線的な刻彫りが施される。	-1.508 -1.754 4.560	M-ウ-1 0
" 10 " 10 187-②	煙管 (吸口)	長さ 5.3 吸口径 1.1 羅字径 0.7	銅製	10.0g	羅字接合部から吸口にかけて、全体に直線的な刻彫りが施される。遺物No.187-①とセット		M-ウ-1
" 11 " 11 189	簪	長さ 13.8	銀またはジェラル ミン製 匙形	20g	首~竿部断面は六角形。女性用。	-1.681 -1.794 4.524	M-イー-1
" 12 " 12 191	簪	長さ 17.2	銅製 耳搔き形	6.56g	竿部断面は六角形。男性用の副簪	-1.700 -1.819 4.511	M-イー-4
第30図 13 " 13 188	刀子	長さ 6.6 厚さ 1 幅 3.3	鉄製	重さ 47g	全体に、錆が付着。	-1.607 -1.829 4.531	T-ア-1
" 14 " 14 193	釘	長さ 2.8	鉄製	重さ 1.22g	全体に、錆が付着。 頭部?	-1.798 -1.847 4.521	T-イー-3
" 15 " 15 196	釘	長さ 3.2	鉄製	重さ 1.1g	錆膨れが著しい。	-1.846 -1.915 4.512	T-イー-2
" 16 " 16 190	釘	長さ 4	鉄製	重さ 1.6g	全体に、錆が付着。	-1.646 -1.780 4.525	T-イー-1
" 16 " 17 160	銭貨	長さ 4	銅製	重さ 1.6g	寛永通宝	-0.671 -0.109 4.736	-

21号墓 出土遺物観察表

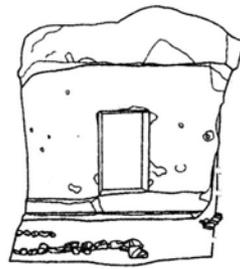


第29图 (PL.19) 21号墓 出土遺物(1)



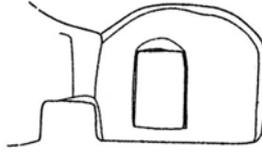
第30図 (PL.19) 21号墓 出土遺物(2)

EL=5.000m



横断面見通し図

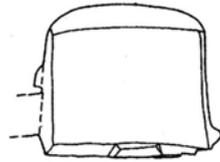
EL=5.000m



墓室横断面見通し図(裏口側)

EL=5.000m

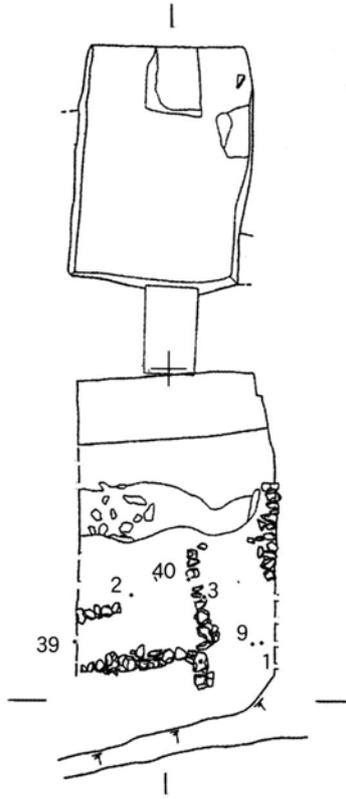
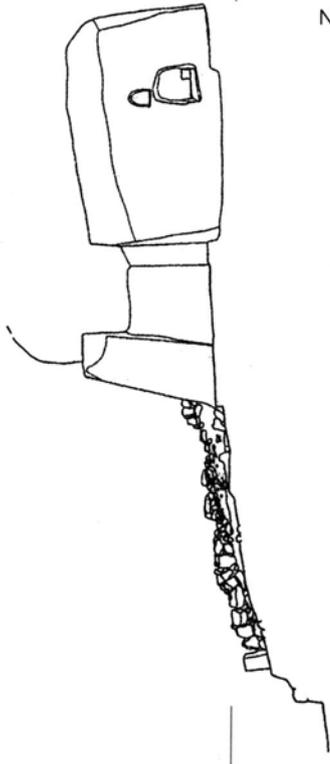
EL=5.000m



墓室横断面見通し図

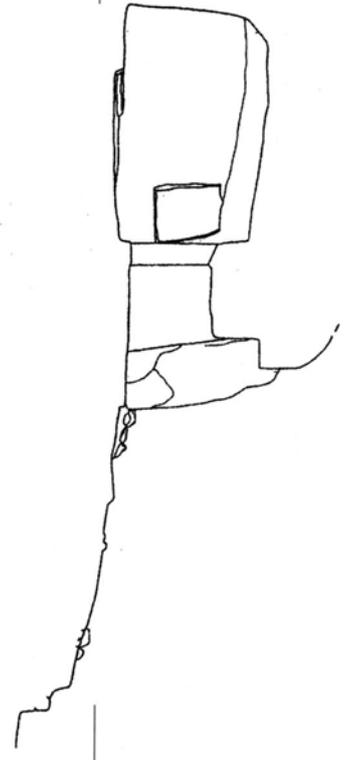
EL=5.000m

左縦断面見通し図



平面図

右縦断面見通し図



0 S=1/100 5m

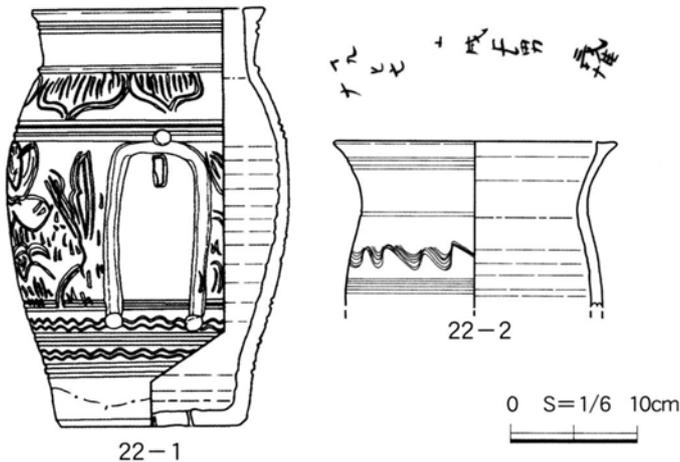
立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		庭の構 築方法	サンミデー の有無	墓室		棚数 正面 左右	特徴
		構築 方法	奥行 幅 高さ			平面 形態	奥行 幅 高さ		
琉球 石灰岩	掘込 墓	岩盤を 掘り込 む	110 68 110	断面L形に岩 盤を削平し、 整地	有	方形	310 220 200	- - -	墓室：厨子裏1基安置。右壁は21号墓室、 左壁は23号墓室へと繋がる。左壁に蝸 燭台を設ける。墓口に対して内部の規 模や形状が左右不対称。 墓庭：サンミデー前に石列(墓道?)。

第31図 (PL.20) 22号墓 平面図

第16表 蔵骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
22-1 (76)	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	18.6	33.0	14.4	22.4	IV D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓1。 (特徴) 横帯1凹線2。横帯2突帯。横帯3凹線3。横帯4凹線2。体部文様全て沈線。肩部葉文。胴部蓮華文。胴下部波文。底面円孔6。 (外面) 高台脇、無釉・回転横ナデ・篋削り。 (内面) 口縁部～高台内、水挽き痕。
22-2 (36)	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	22.4	-	-	-	-	(屋門) 欠損につき不明。 (特徴) 口縁～肩部破片資料。残在率(1/3)。横帯1・2凹線。肩部沈線文・波文。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。内頸部、「銘書」あり。

22号墓蔵骨器観察表

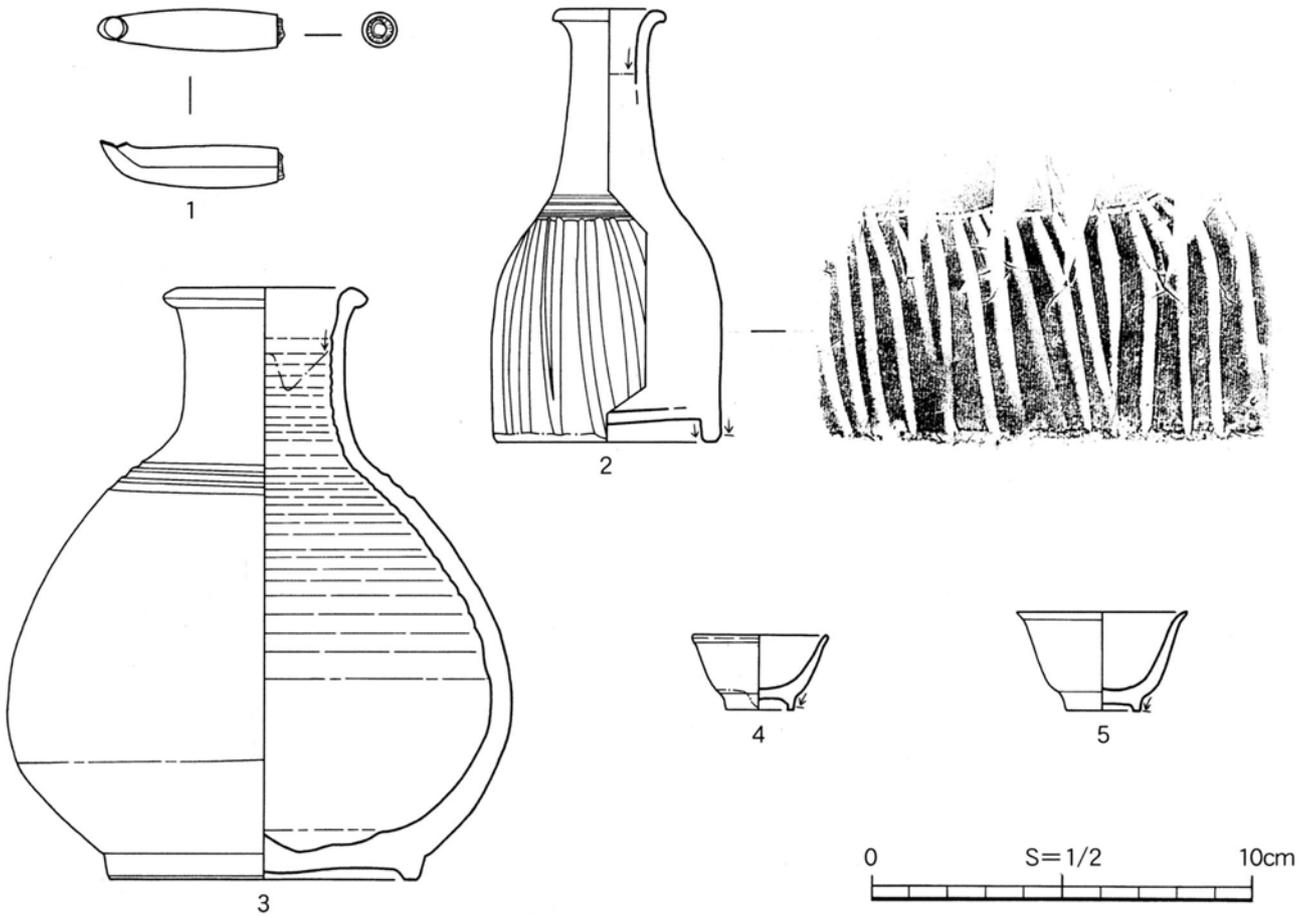


第32図 (PL.21) 22号墓 蔵骨器

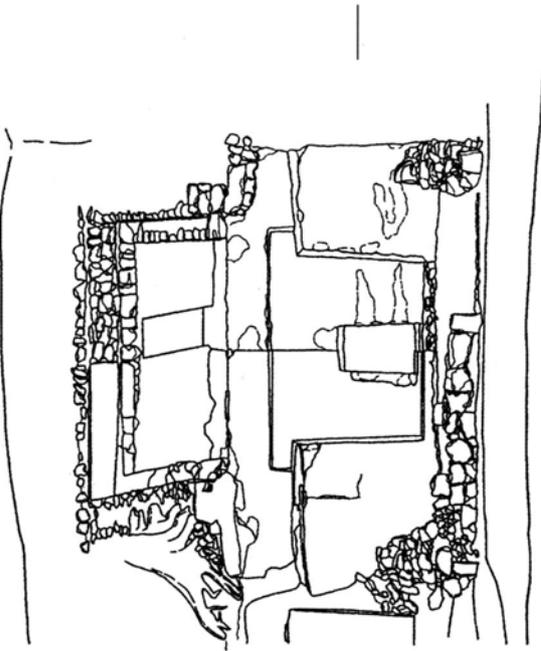
第17表 出土遺物観察一覧表

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎土 の色調	釉薬及び化粧土	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
第33図1 PL.21-1 39	煙管 (雁首)	4.7 — —	銅製	10.8	羅字一部残存。 火皿一部欠損。	-3.534 -1.276 4.698	M-U-9
" 2 " 2 2	瓶	2.8 11.4 5.9	微粒子 灰白色	褐釉または 飴釉	沖縄産施釉陶器。頸部と肩部の境に横位の線彫りと、それにやや直行する縦位の線彫りが施される。口縁部は外反しラッパ状に開く。外面は全体的に細かい貫入。	-2.990 -0.480 4.726	A-N-8
" 3 " 3 1、40	瓶	5.4 15.6 8.1	微粒子	泥釉?	沖縄産施釉陶器。口縁部がわずかに外反し、肩部に三条の凹線が廻る。低温焼成でアカムヌーに近い。	-3.550 1.340 4.485	W-U-1
" 4 " 4 3	猪口	3.6 2.0 1.8	微粒子	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶器。内面に粗い貫入がみられる。	-2.970 -0.520 4.778	A-T-4
" 5 " 5 9	猪口	4.5 2.6 2.0	微粒子	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶器。 貫入なし。	-3.590 -1.200 4.940	A-T-3

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
(内頸部) + ↑ T九 [····] □□□□ [····] ナ 死亡				男	



第33図 (PL.21) 22号墓 出土遺物



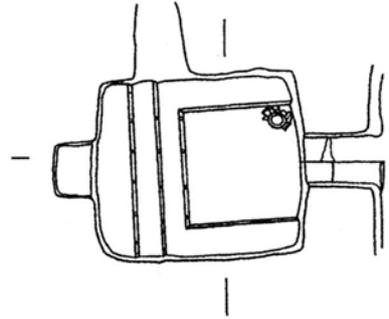
EL=6.200m

横断面見通し図

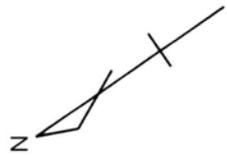


EL=6.200m

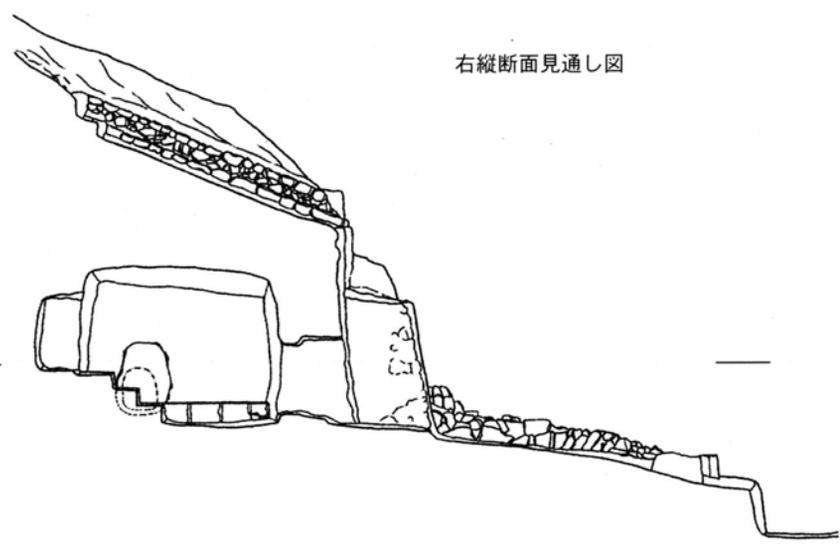
墓室横断面見通し図



墓室平面図



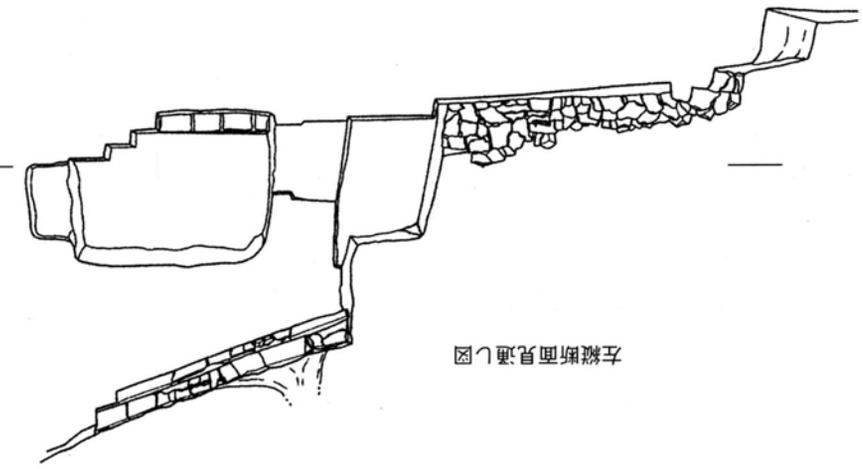
EL=6.200m



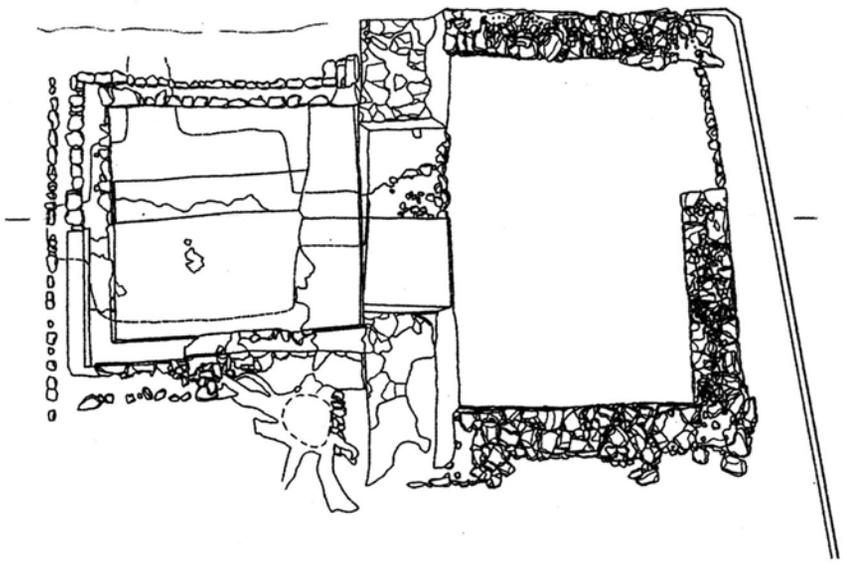
右縦断面見通し図



EL=6.200m



左縦断面見通し図



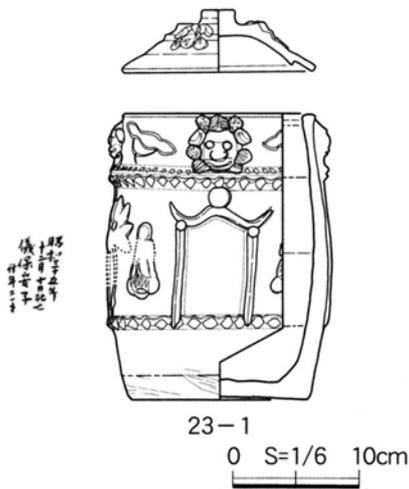
平面図

立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		庭の構 築方法	サ ン ジ ー の 有 無	墓室		特徴
		構 築 方 法	奥 行 幅 高 さ			平 面 形 態	奥 行 幅 高 さ	
琉球 石灰岩	平 葺 墓	岩盤を掘り込む	110	断面L形に岩盤 を削平し、礫土 で整地	無	方形	320	墓室：厨子裏1基を安置。柵はコンクリートブロック積み。右壁は22号墓へ繋がる。 墓庭：左右袖石垣を有する。左袖石垣は直角に折れて、右袖石垣の間に縁石による墓庭 入口を構築。外観の改築に伴う墓庭造成あり。
			65				190	
			106				210	

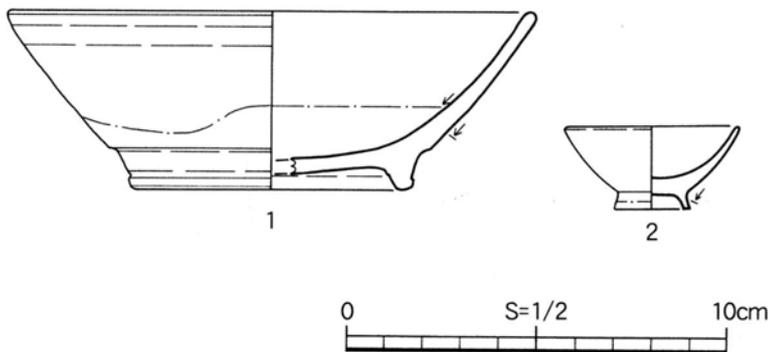
第34図(PL21) 23号墓 平断面図

第18表 23号墓蔵骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
33-1 (62)	現代甕形厨子甕 (身)	15.3	22.7	13.8	15.3	VI B	(屋門) 唐破風形、貼付。窓孔なし。 (特徴) 横帯1凹線。横帯2・4突帯。横帯2、つまみ上げ波状文。上部四方に獅子頭貼付。屋門左右に貼付蓮華文+法師立像。 (外面) 胴下部、篋削り。 (内面) 口縁~頸部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部、篋削り。 (釉薬) 油性塗料使用。



第35図 23号墓 蔵骨器



第36図 23号墓 出土遺物

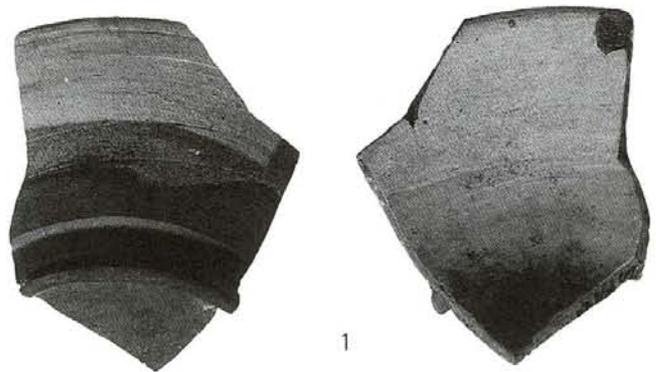
銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
(屋門) 昭和三十五年 十二月十日死亡 儀保安子 行年二一才	1960	?	1	女	21歳

第19表 23号墓出土遺物観察一覧

挿図番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎土 の色調	釉薬及び 化粧土	特徴	出土地点 (m) X (縦) Y (横) Z (標高)
第36図1 27	碗	13.8 4.7 7.4	微粒子 暗茶褐色	灰釉	沖縄産施釉陶器。内面に煤の付着。 削り出し高台。	-3.795 -2.662 5.225
第36図2 59	猪口 (本土産)	4.6 2.2 2.0	微粒子	透明釉 白化粧	磁器。貫入なし。	墓庭表採



23-1



1

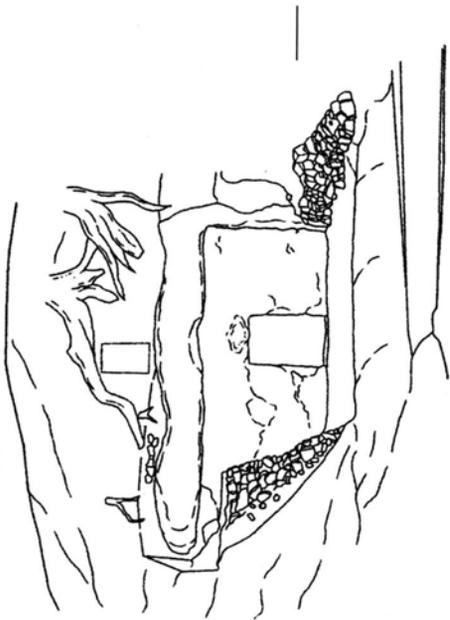


2

23号墓蔵骨器 (第35図)

23号墓出土遺物 (第36図)

EL=6.000m

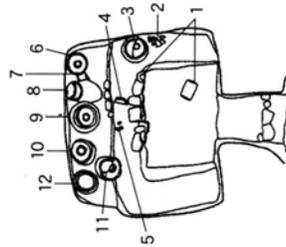


横断面見通し図

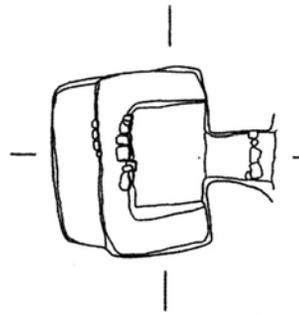
EL=6.000m



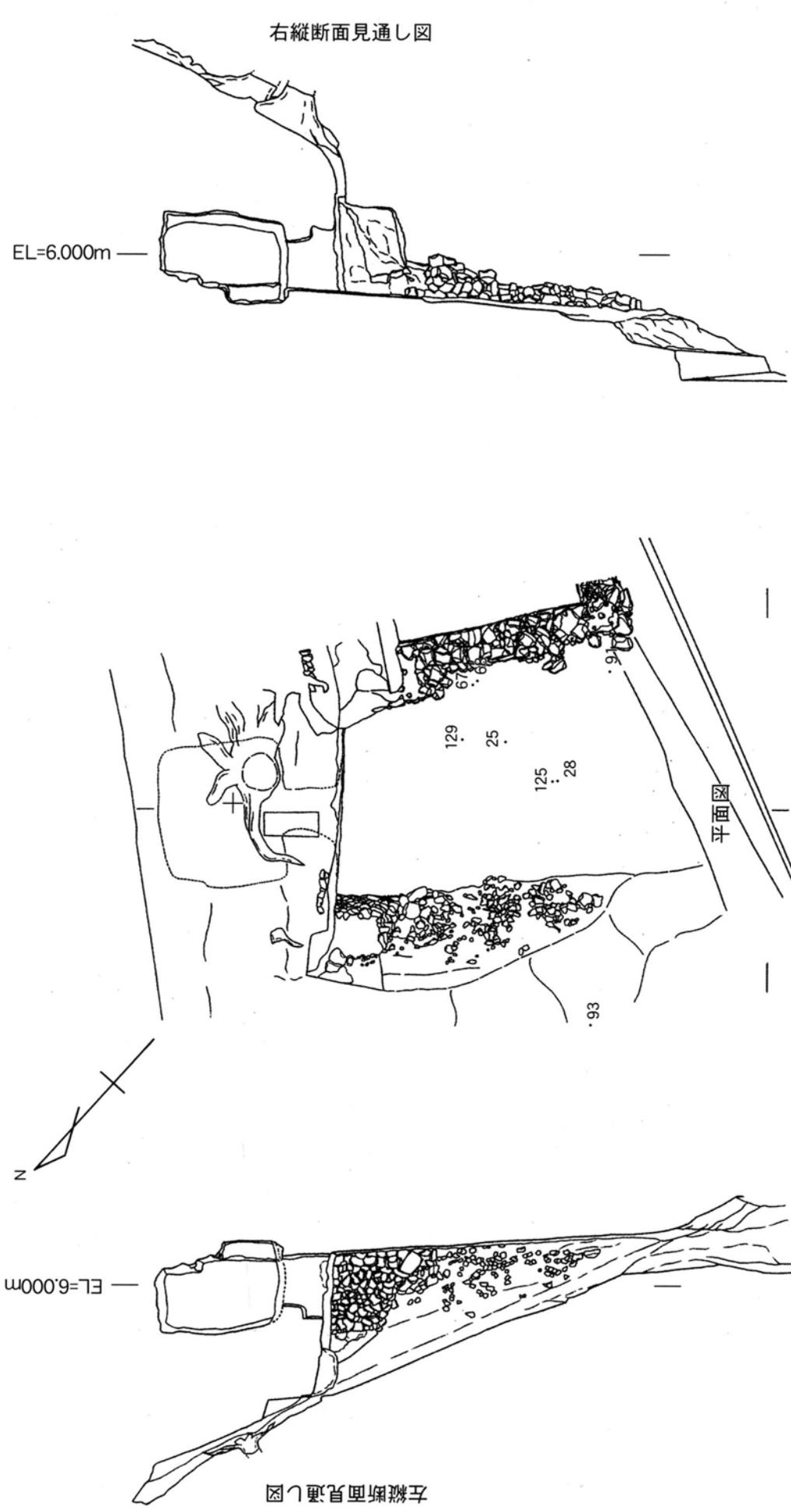
墓室横断面見通し図



墓室内厨子裏配置図



墓室平面図



5m
0 S=1/100

UIK24

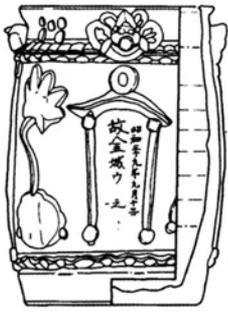
立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		底の構 築方法	サミツ の有無	墓室		特徴
		構築 方法	奥行 幅 高さ			平面 形態	奥行 幅 高さ	
琉球 石灰岩	掘込 墓	岩盤を掘り込む	90	204	無	無	2	墓室：厨子裏9基を安置。岩盤成形の階段状棚。 墓庭：左袖石垣は石積みで傾斜地を利用して構築。右袖石垣は23号墓と共有。
			65	205			1	
			105	150			1	

第37図 (PL.23) 24号墓 平面図

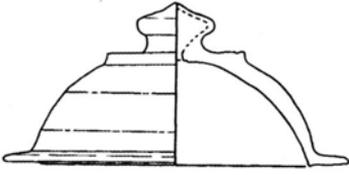
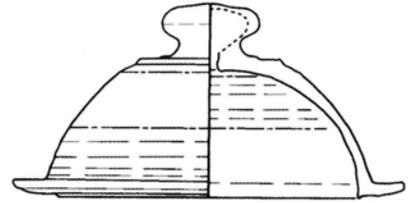
第20表 24号墓藏骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
24-1	現代甕形厨子甕 (蓋)	10.3	16.5	29.5	-		(つまみ) 扁平形。つまみ台2段。 (外面) 上半部、回転篋削り。下半部、ナデ。 (内面) 縁部、回転ナデ。かかり、篋削り。 (釉薬) つまみ～甕上面に油性塗料。
	現代甕形厨子甕 (身)	15.6	11.8	14.0	16.4	VI B	(屋門) 唐破風形玉飾付、貼付。柱上下部に玉飾あり。窓孔なし。 (特徴) 横帯1凹線。横帯2・4突帯。横帯2、つまみ上げ波状文。上部に四方に獅子頭貼付。屋門左右に貼付蓮華文+法師立像。底面穿孔なし。 (外面) 胴下部、回転篋削り・静止篋削り。
24-2	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.8	12.7	27.3	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。台上凹線1。 (外面) 体部上半、回転篋削り後ナデ？。 (内面) 全体的にナデ消し。 (釉薬) つまみ～甕上面にマンガン釉。
24-3	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.3	16.5	29.5	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。台上凹線1。 (外面) 上半部、回転篋削り、下半部、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 全体的に水挽き。 (釉薬) つまみ～甕上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.8	55.6	20.8	33.6	VI D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 1・2・4凹、2突帯。肩部沈線山形文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線波文2条。底面円孔13。 (外面) 胴下部、回転篋削り後回転横ナデ。高台静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ・水挽き。胴下部、回転篋削り。
24-6	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	11.1	15.3	30.5	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。台上凹線1。 (外面) 体部、回転篋削り。 (内面) 全面、水挽き。 (釉薬) つまみ～甕上部、マンガン釉。
	転用蔵骨器 (陶製壺)	11.4	45.6	18.4	31.4		(特徴) 肩部横帯凹線4。胴部横帯凹線1。 (外面) 胴部、削り後ナデ。胴下部、水挽き後回転横ナデ。高台静止篋削り。無釉。
24-8	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	30.3	15.0	30.3	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。 (外面) 水挽き後、上部回転篋削り。 (内面) 水挽き。体部、回転篋削り後横ナデ。 (釉薬) つまみ～甕上面、マンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	27.7	51.2	20.0	30.2	V D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。円窓3。 (特徴) 1・2・4凹、3突帯。肩部沈線網目文。胴部沈線葉文。胴下部沈線波文2条。底面円孔15。 (外面) 胴下部、篋削り後斜め方向の静止ナデ。高台、回転篋削り。
24-9	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.0	15.8	29.2	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。台上凹線1。 (外面) 水挽き後、上部回転篋削り。 (内面) 体部、水挽き・回転横ナデ。 (釉薬) つまみ～甕上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	32.3	66.5	24.4	42.0	IV B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文6・波文3条。底面穿孔12。銘書面に窠印？。 (外面) 胴下部、回転篋削り。高台、静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。高台脇～底面、回転篋削り。
24-10	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	28.4	54.7	21.8	35.6	III B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1凹線。横帯2・3・4突帯。肩部・胴下部沈線波文。胴部貼付蓮華文。底面円孔10。 (外面) 胴下部、回転篋削り。高台、静止篋削り。 (内面) 口縁～頸部、ナデ。胴部、水挽き痕。底面、回転篋削り。
24-11	陶製罏形厨子甕 (マンガン：蓋)	31.5	15.0	31.5	-		(つまみ) 宝珠形。撮み台2段。 (外面) 体部上半、回転篋削り。下半、回転横ナデ。 (内面) 天井部、回転篋削り。体部、水挽き。口縁部、回転横ナデ。 (釉薬) つまみ～甕上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	27.8	54.0	21.4	30.0	V D	(屋門) アーチ形玉(花)飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。肩部沈線山形文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文10・波文2条、円孔3。底部3脚付。底面円孔18。 (外面) 胴下部、回転横ナデ・回転篋削り・斜め方向の静止ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面)
24-12	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	28.4	53.5	21.8	34.2	III B	(屋門) 唐破風形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1～4突帯。肩部沈線波文2条。胴部貼付蓮華文。胴下部沈線波文。底面円孔12。 (外面) 口縁部、回転横ナデ。胴下部、回転篋削り。高台静止篋削り。 (内面) 肩部～底部、水挽き。

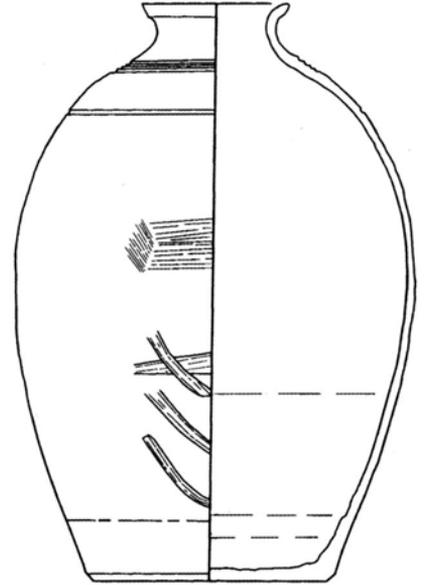
銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
昭和三十九年九月十三日・・・←欠損 故 金城ウト之・・・←欠損 ・・・・十八・・・←欠損 ↑ 欠損					
明治三十七年旧ノ四月二十九日洗骨 上村〔渠〕ノ嘉手苺筑登之名登華		1904			
光緒十九年一一月五日 洗骨嘉手苺築登之妻かま 明治三十七年旧四月二十九日洗骨 上村〔渠〕ノ嘉手苺築登之		1893 1904	1 1	女	
光緒三年丁丑十二月六日 死亡同五年己卯閏三月二十八日洗骨嫡子 加那嘉手苺 歳四十八 妻子なし 筑	1877	1879	1	男	48
道光十五年乙未四月十二日洗骨具志堅筑登之親雲上阿んしたり 道光拾五乙未四月十二日具志堅筑登之 親雲上阿んしたり洗骨		1835	1		
④ 光緒十三年丁亥七月四日任王嘉手苺妻洗骨同日かま嘉手苺築登之女 ⑤ うし洗骨済 同治十一年壬申七月七日仁王嘉手苺洗骨光緒十三年丁亥七月四日		1887 1872			



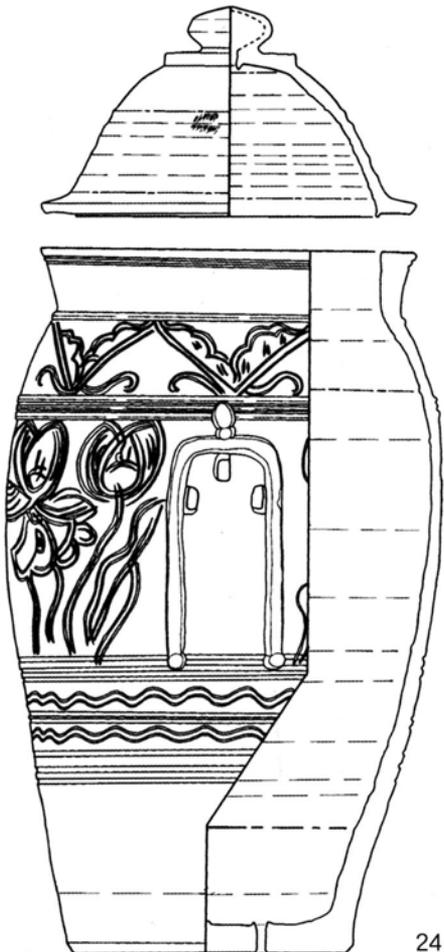
24-1



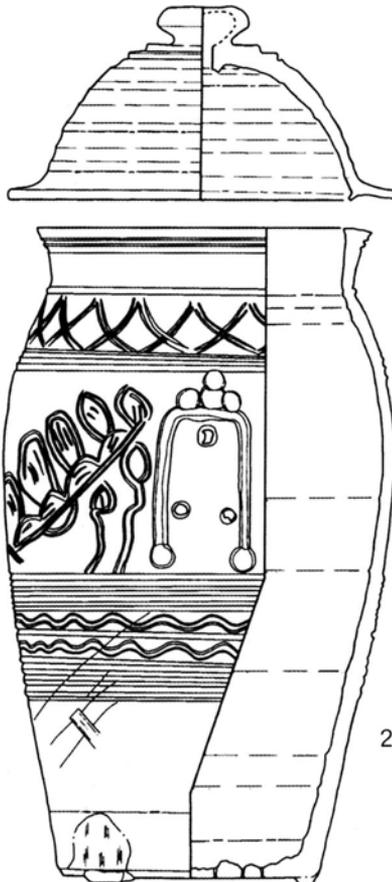
24-2



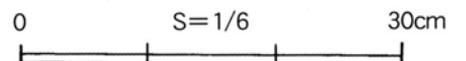
24-6



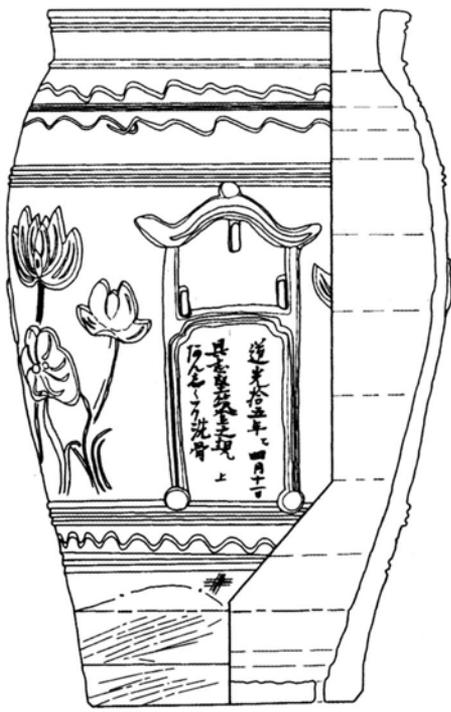
24-3



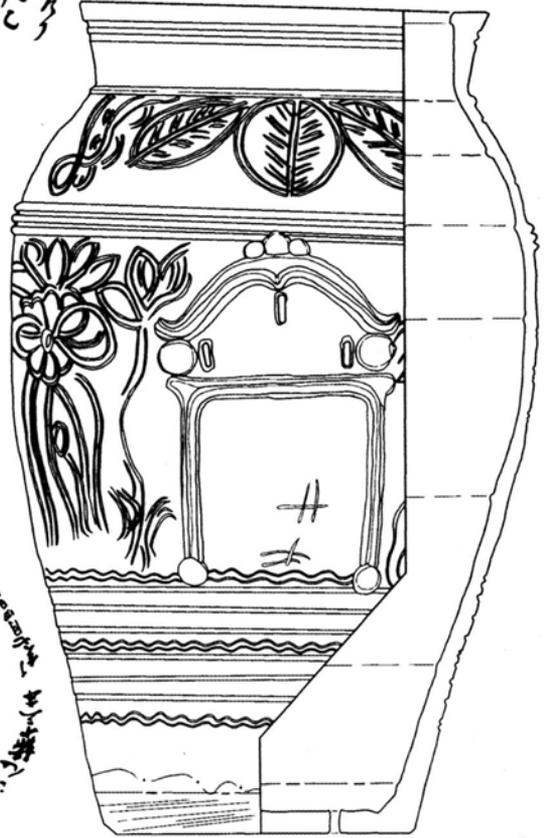
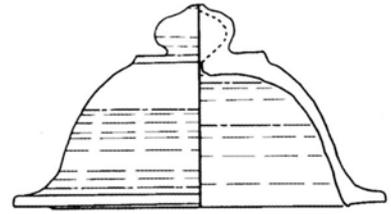
24-8



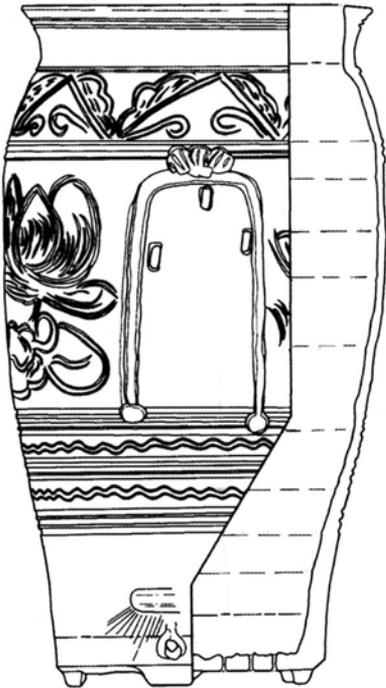
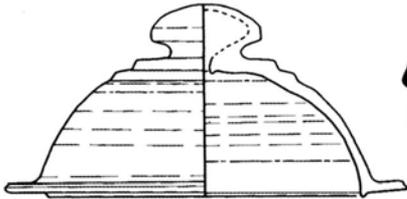
第38图 (PL.23·24) 24号墓藏骨器(1)



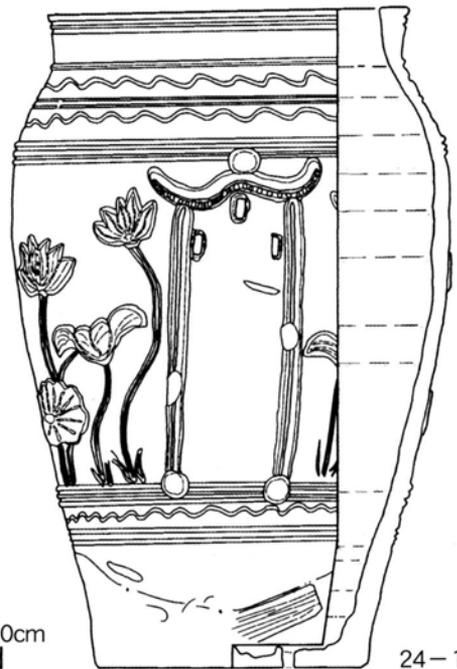
24-10



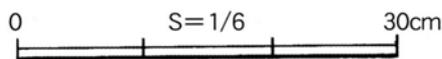
24-9



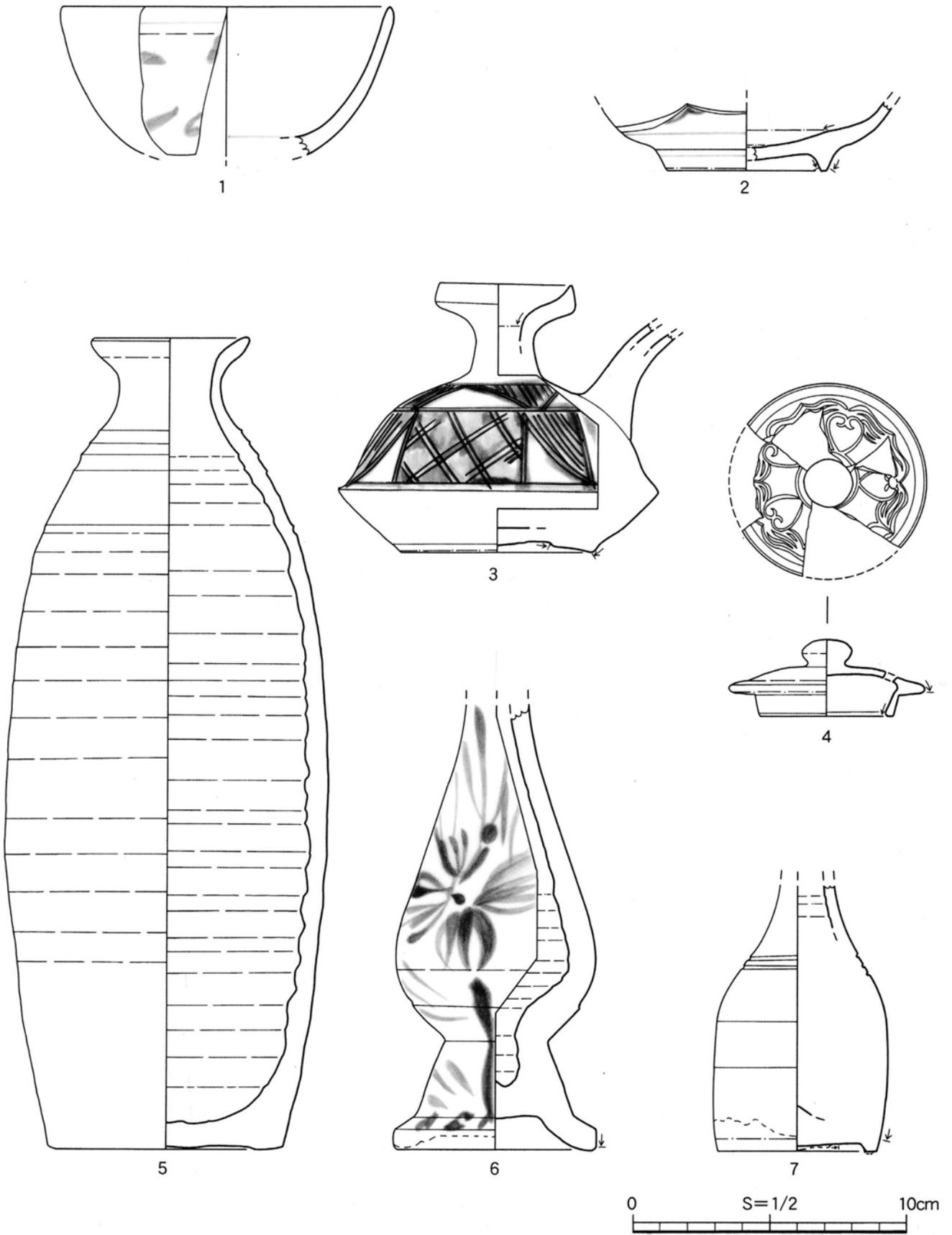
24-11



24-12



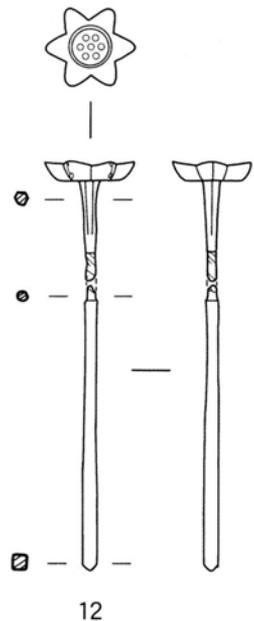
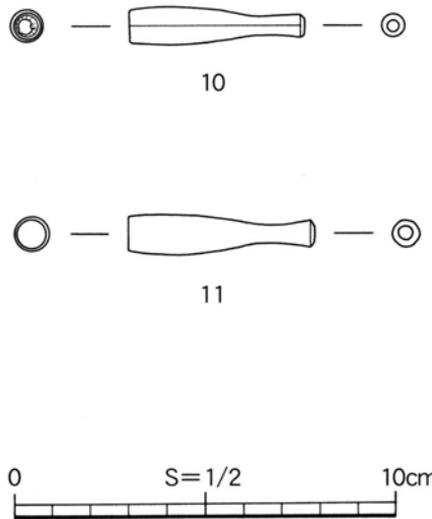
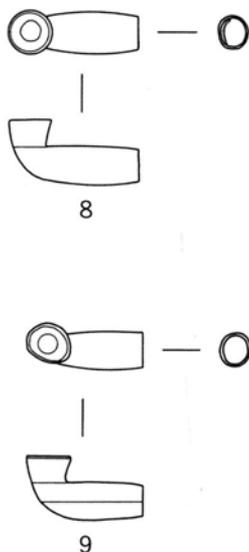
第39图 (PL.24·25) 24号墓藏骨器(2)



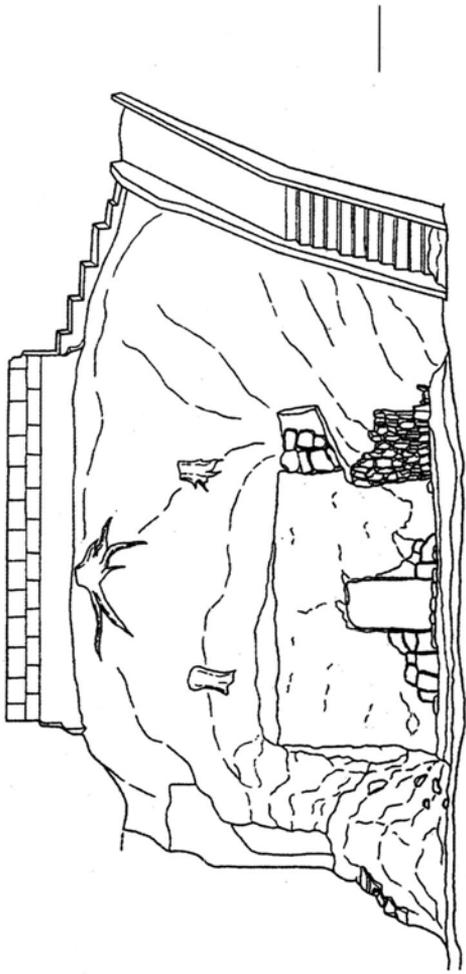
第40图 (PL.26) 24号墓出土遗物(1)

第21表 24号墓出土遺物観察一覧表

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎土の 色調/材質、 形状	釉薬及び化粧 土/重量	特徴	出土地点(m) X(縦) Y(横) Z(標高)	整理番号
第40図1 PL.26-1 140(1)	碗 (中国産)	12.0 — —	微粒子 白色	透明釉 呉須	染付碗の口縁~胴部資料。 呉須で文様と圏線を描く。	—	F-イ-1
" 2 " 2 93	皿 (本土産)	— — 7.8	微粒子 白色	透明釉 呉須	染付皿の底部資料。見込みを蛇の目軸剥 ぎ。畳付露胎。	-6.060 -3.743 4.207	F-エ-1
" 3 " 3 28,125	酒注	4.9 9.9 7.2	微粒子 橙白色	透明釉 飴釉 呉須 白化粧	沖縄産施釉陶。胴部線彫りで平行凹線2 本と直行凹線で区画。網目状線彫りや葉 文を施す。	-5.420 -0.380 5.184	A-ス-2
" 4 " 4 68	蓋	直径2.8 器高2.8	微粒子 黄白色	緑釉? 透明釉	沖縄産施釉陶?。つまみ下に線彫りの圏 線1条。外面に線彫りラマ式蓮弁。細かい 貫入。	-4.160 2.040 5.165	A-シ-8
" 5 " 5 91	瓶	5.8 29.9 8.6	微粒子 明茶褐色	—	沖縄産無釉陶。ラッパ状外反口縁。平 底底部。肩部に3条の沈線が廻る。内面 に明瞭な轆轤痕	-6.339 -2.227 4.242	B-ツ-1
" 6 " 6 67(5)、 129(4)	瓶	— — 7.4	細粒子 灰赤色	透明釉 呉須 白化粧	沖縄産施釉陶。「ピンシー」と称される酒 器。口唇欠損。胴部に呉須で撫子文。総 釉掛け後、畳付を掻き取る。	-4.095 -2.098 5.155	A-ニ-11
" 7 " 7 140(2)	瓶	— — 4.8	微粒子 淡黄褐色	褐釉	沖縄産施釉陶。口縁部欠損。頸・肩部 境に2条の線彫りを廻らす。墓庭造成層 より出土。	—	A-ニ-9
第41図8 " 8 138(24)	煙管 (雁首)	長さ3.4 火皿径1.1	銅製	5.5g	火皿は円形。	表採	M-ウ-3
" 9 " 9 138(25)	煙管 (雁首)	長さ3.0 火皿径1.1	銅製	5.6g	火皿下に継ぎ目あり。	表採	M-ウ-11
" 10 " 10 138(19)	煙管 (吸口)	長さ4.6 吸口径0.3 羅字径0.9	銅製	5.4g	吸口内に竹製羅字が一部残存。	表採	M-ウ-7
" 11 " 11 25	煙管 (吸口)	長さ4.9 吸口径0.7 羅字径0.9	銅製	6.4g	羅字接合部から吸口部にかけて内側に カーブして窄まる。	-4.600 1.000 5.225	M-ウ-2
" 12 " 12 138(20)	簪	—	銅製 花笠形	11.5g	頭部花卉六枚、中央魚子7孔。竿部断面 六角形。男性用本簪。	表採	M-イ-3



第41図 (PL.26) 24号墓出土遺物(2)



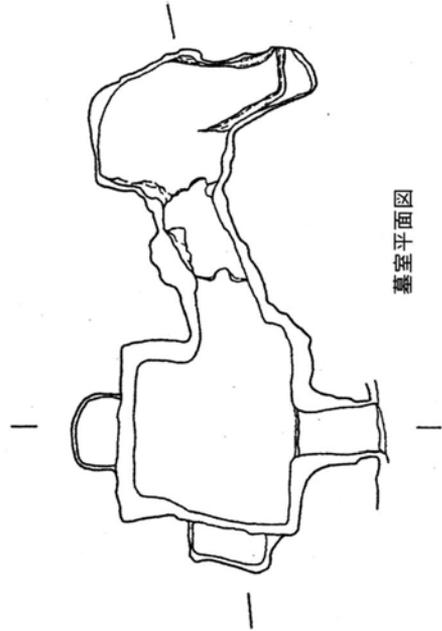
EL=5.300m

横断面見通し図

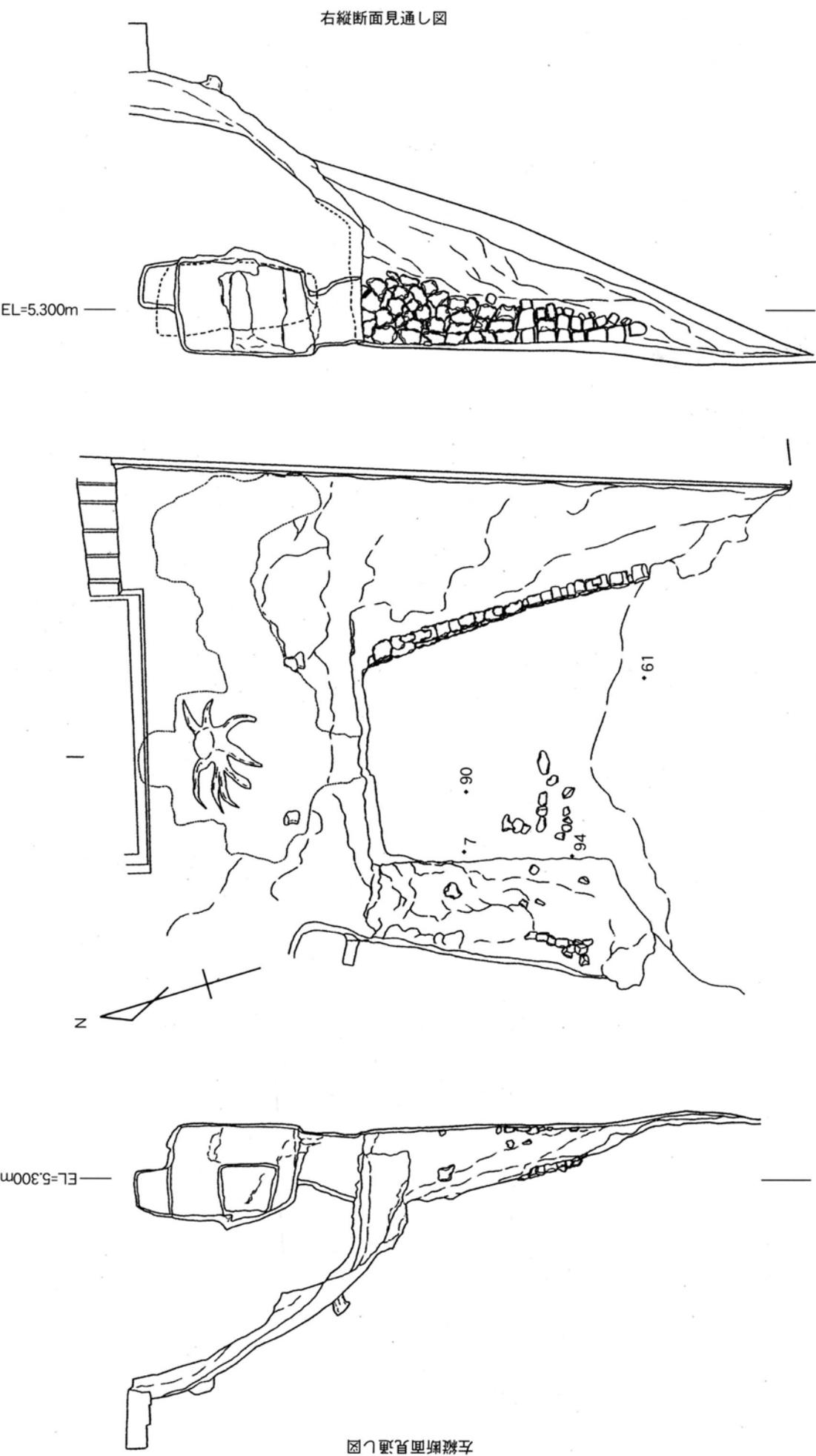


EL=5.300m

墓室横断面見通し図



墓室平面図



平面图

UJK25

立地場所 の基礎	外観 形式	墓口		庭の構 築方法	サニデー の有無	墓室		特徴
		構築 方法	奥行 幅 高さ			平面 形態	奥行 幅 高さ	
琉球 石灰岩	掘 込 墓	岩盤を掘り込み、 石積み併用	110 65 100	断面L形に岩盤 を削平し、礫土 で整地	無	方形	204 205 150	墓室：厨子裏2基を安置。棚は岩盤成形の出窓状。右棚を奥へ掘り込んで避難壕を構築。 避難時に持ち込まれた甕や油壺、皿等が出土。 墓庭：右袖は石積みで傾斜地を利用して構築。石積みはやや雑な切石積みと、丁寧に成 形した切石積みの二種類がある。左袖は盛土で構築し、26号墓と共有する。

第42図 (PL.27) 25号墓 平断面図

第22表 25号墓蔵骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
25-1	陶製笠形厨子甕 (ボージャー：蓋)	31.7	11.7	31.7	-		(つまみ) 饅頭形。回転横ナデ。 (外面) 体部上半、回転篋削り。下半、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 体部、回転横ナデ。縁部、水挽き。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ボージャー：身)	23.5	47.7	19.2	34.2		(底) 上凸部1.0cm。窓3〔円・方・円〕。 (特徴) 横帯2～4凹線。底面円孔3。 (外面) 口縁～底部、回転横ナデ後縦方向の静止ナデ・静止篋削り。 (内面) 口縁～胴部、回転横ナデ。胴部～底面、水挽き・回転篋削り。
25-2	陶製笠形厨子甕 (ボージャー：蓋)	9.0	13.5	30.0	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ部分、回転横ナデ。 (外面) 体部上半、回転篋削り。下半、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 水挽き。縁部、回転横ナデ。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ボージャー：身)	28.0	54.6	22.7	42.0		(底) 上凸部1.5cm。方窓3。 (特徴) 横帯1～3凹線。底上部窠印あり。底面円孔8。 (外面) 胴下部、回転篋削り後回転横ナデ。高台、静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部～底面、回転篋削り。(釉薬)なし。

第23表 25号墓出土遺物観察一覧表

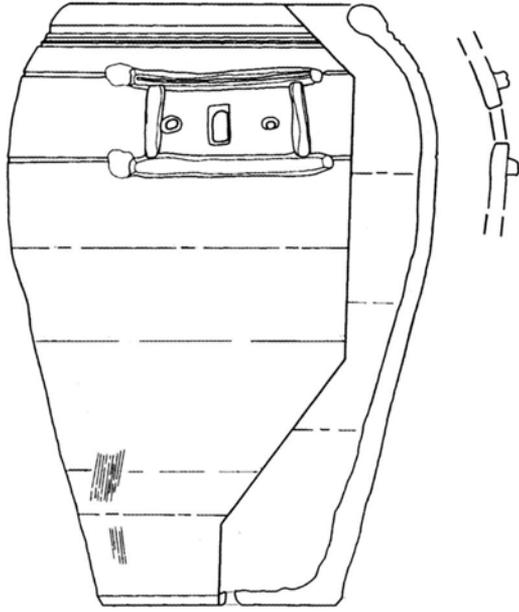
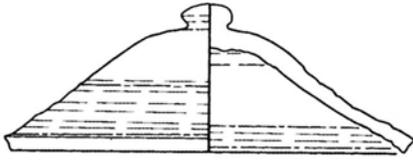
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径	素地、胎土の 色調/材質、 形状	釉薬及び化 粧土/重量	特徴	出土地点(m) X(縦) Y(横) Z(標高)	整理番号
第44図1 PL.29-1 100(3)	碗	— 6.6	微粒子 黄白色	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶。見込蛇の目釉剥ぎ。畳付露胎。貫入なし。	墓庭表採	A-イ-5
" 2 " 2 94	碗	— 6.2	微粒子 黄白色	外：黒釉? 内：透明 釉、白化 粧、呉須	沖縄産施釉陶。見込蛇の目釉剥ぎ。畳付露胎。粗い貫入。内面に呉須の微粒が点在。	-4.160 2.040 5.165	A-イ-3
" 3 " 3 61	碗	— 6.9	細粒子 黄白色	透明釉 白化粧	沖縄産施釉陶。見込に重ね焼き痕。畳付露胎。細かい貫入。	-5.028 1.221 4.450	A-イ-6
" 4 " 4 100(16)	碗	— 6.1	微粒子 黄白色	透明釉 呉須	沖縄産施釉陶。見込蛇の目釉剥ぎ。畳付露胎。貫入なし。	墓庭表採	A-イ-7
" 5 " 5 7	簪	長さ11.5	銅製 花笠形	15.5g	頭部花卉六枚。竿部断面は四角形。男性用本簪。	-1.845 -1.843 4.502	M-イ-2
" 6 " 6 103	壺	12.0 41.0 18.4	赤褐色 微粒子	-	沖縄産無釉陶。肩部が張り頸～口縁部が朝顔状に外反。玉縁肥厚口縁で口唇端部が尖る。肩上部凹線5。肩下部凹線1。口縁～胴部、回転横ナデ。胴下部、静止ナデ。底部、回転篋削り。	墓室内 (戦中に右棚を奥へ掘り込んで、避難壕を構築)	B-キ-2
" 7 " 7 102	壺	16.1 36.3 17.8	赤褐色 微粒子	-	沖縄産無釉陶。胴部最大径はやや上部に位置し頸部がほぼ垂直に立ち上がる。折縁口縁。口縁部凹線2。頸部凹線1。肩部凹線2。内面水挽き。		B-キ-1
" 8 " 8 101	油壺	13.5 29.9 14.9	赤褐色 微粒子	外：褐釉 内：褐釉	沖縄産施釉陶。外面は轆轤成形後、回転横ナデ。肩部凹線2。縦耳4。口縁と畳付は露台で重ね焼き痕?白土が薄く残る。内面は頸～胴下部水挽き。		A-コ-1
" 9 " 9 101(2)	水鉢	31.0 11.5 14.0	微粒子 暗茶褐色	-	沖縄産無釉陶。外面に1mm程の気泡が多い。見込円形露胎。	-6.339 -2.227 4.242	B-オ-1

銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	被葬者		
			人数	性別	年齢
明治卅八年旧己十一月廿四日 御聞之時 記名 ■ (無) 二付記 又吉氏		1875			
			1	不明	成人
明治卅八年旧己十一月廿四日 御聞之時 記名 ■ (無) 二付記 又吉氏		1875			
			3	男 1 女 1 不明 1	成人 2 小児 1

第24表 25号墓出土遺物観察一覧表

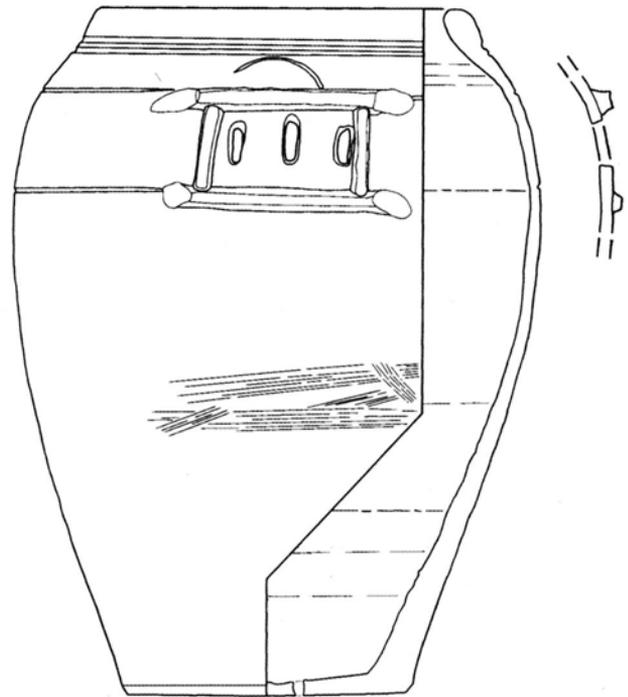
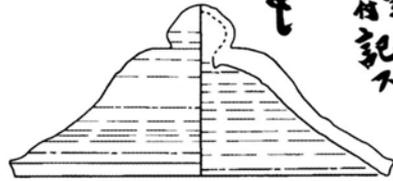
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径	素地、胎土 の色調/材 質、形状	釉薬及び 化粧土/ 重量	特徴	出土地点(m)		整理番号
						X (縦)	Y (横)	
第43図1 PL.28-1 112	錢貨	外径 2.2 孔径 0.6 厚さ 1.5	銅製	2.4g	寛永通宝	ボージャー 厨子内より 出土		-
" 2 " 2 113	錢貨	外径 2.4 孔径 0.6 厚さ 0.1	銅製	2.2g	寛永通宝	ボージャー 厨子内より 出土		-
" 3 " 3 .90	錢貨	外径 2.4 孔径 0.6 厚さ 0.1	銅製	2.0g	寛永通宝	-1.850 -0.783 4.300		-

明治六年四月廿一日
 月廿四日
 宛名 美濃
 記
 大正

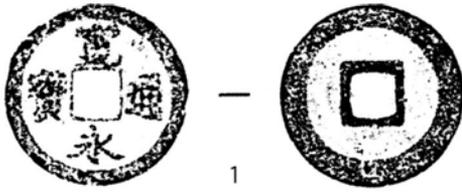


25-1

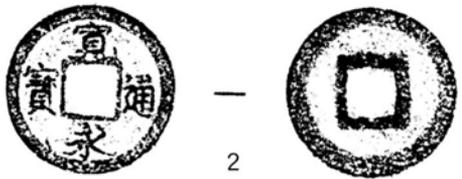
明治六年四月廿一日
 月廿四日
 宛名 美濃
 記
 大正



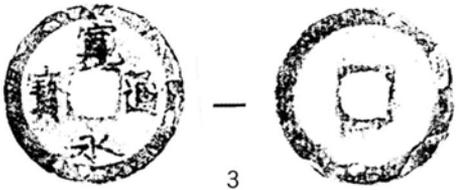
25-2



1

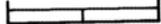


2



3

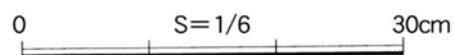
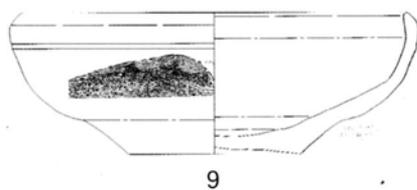
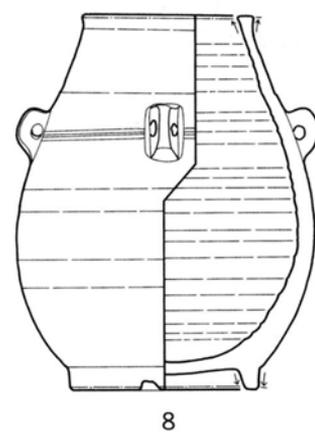
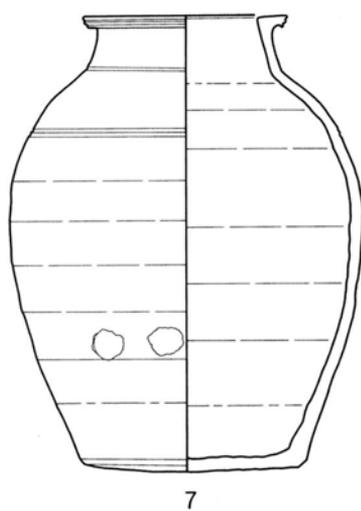
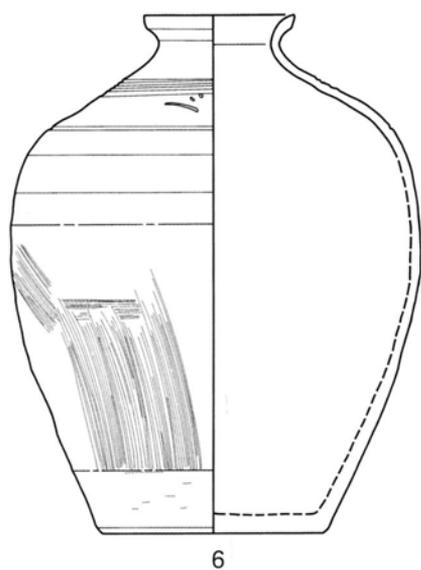
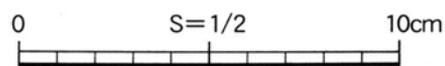
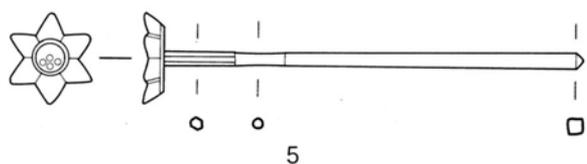
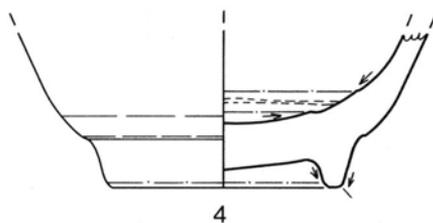
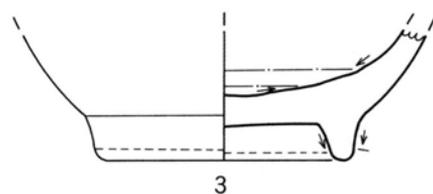
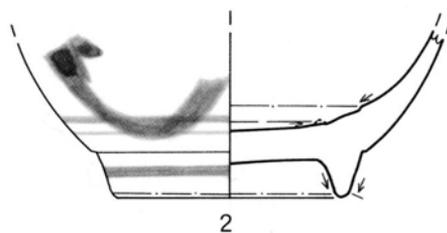
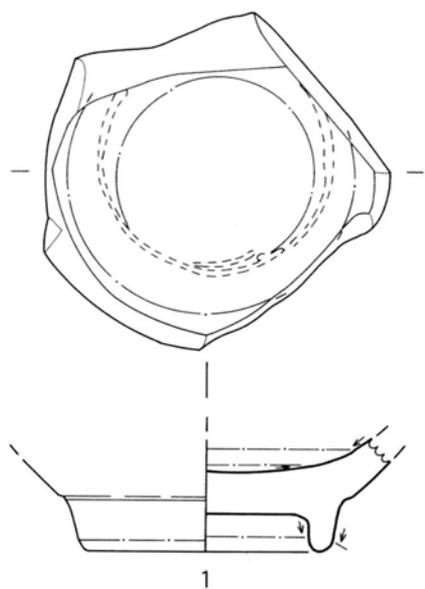
0 S=1/1 2cm



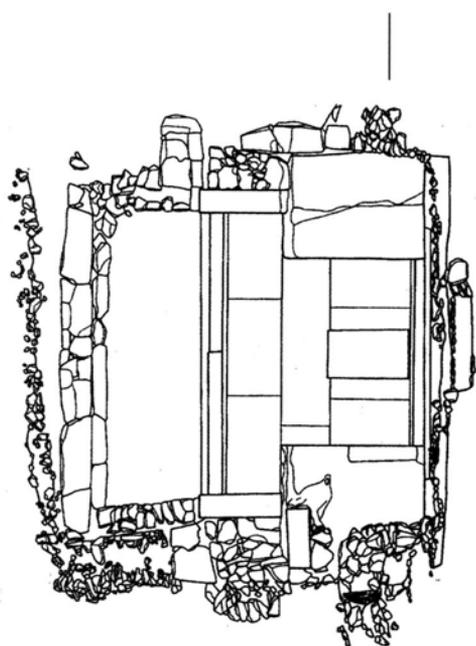
0 S=1/6 30cm



第43図 (PL.28) 25号墓藏骨器・出土遺物

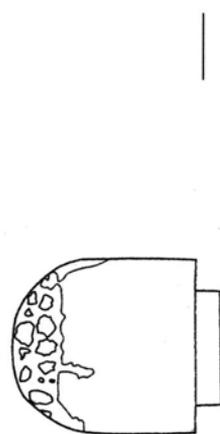


第44图 (PL.29) 25号墓出土遺物



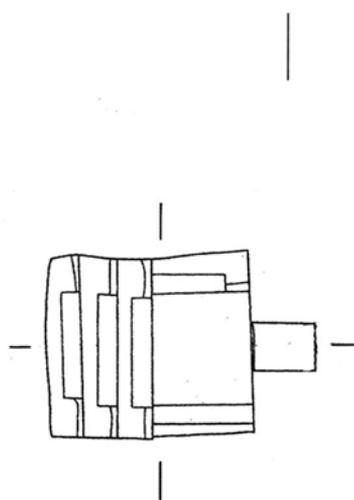
EL=5.000m

横断面見通し図



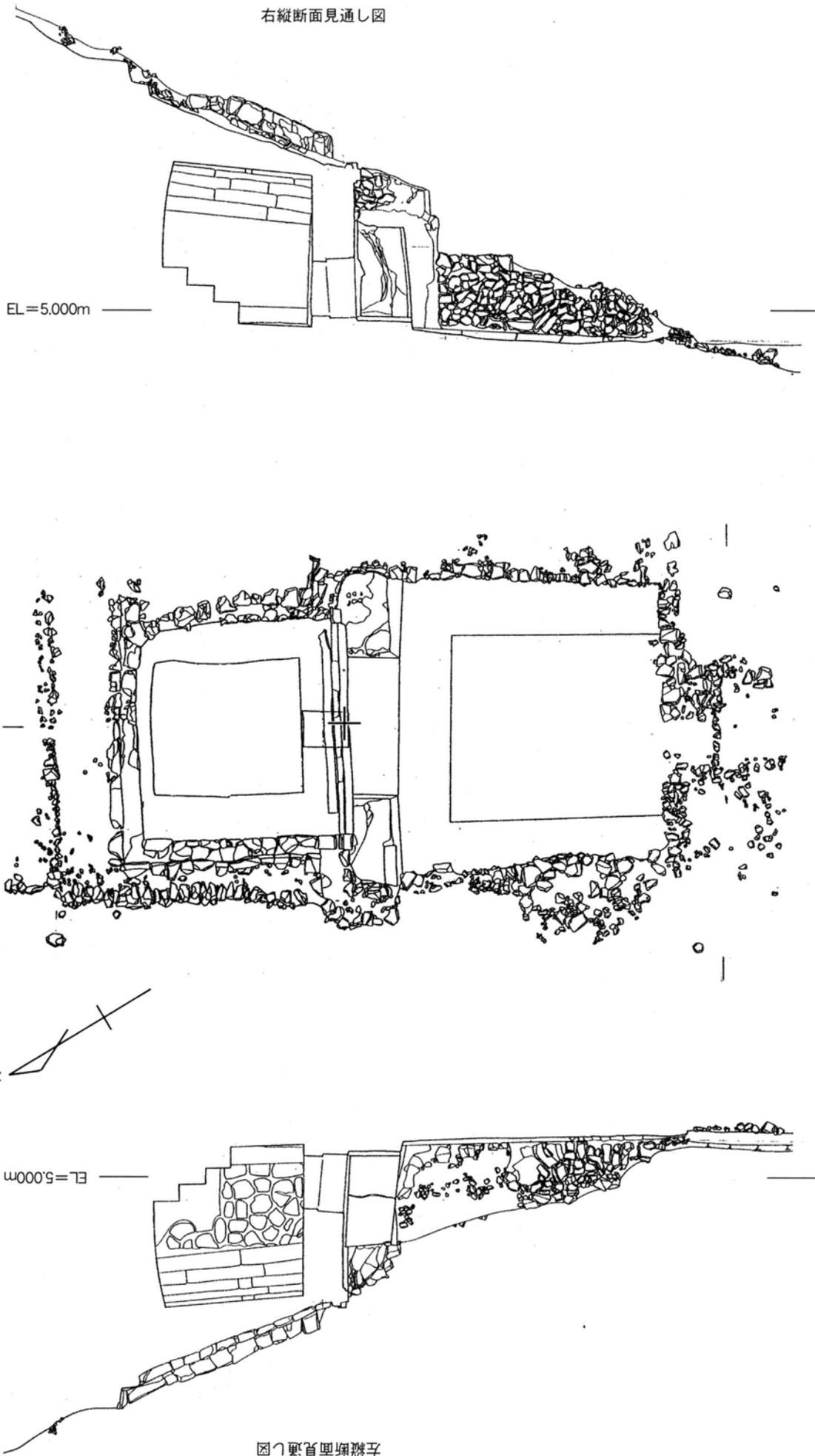
EL=5.000m

墓室内横断面見通し図



EL=5.000m

墓室平面図



右縦断面見通し図

左縦断面見通し図

平面図

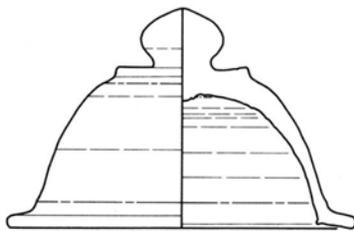
UIK26

立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		墓室 平面 形態	サシミ の有無	庭の構 築方法	柵数		特徴
		構築 方法	奥行 幅 高さ				正面 左 右		
琉球石灰岩 及びマーシ	平 葺 墓	石積み	80	方形	有	岩盤を部分的に 削平、礫土で整 地	3	1	墓室：柵は段状の切石組。右壁は途中まで石灰岩の岩盤を利用し、天井部は切石組のアーチ形。左壁は、途中まで雑な相方積みで、天井部は切石組。 墓庭：右袖石垣は盛土に石積み。左袖は傾斜地を利用した雑な石積みを廻らす。両袖及びサシミミデ一前にセメント敷きの区画。床面直上より葉菜等の戦中遺物が多量出土。
			65						
			110						

第45図 (PL.30) 26号墓 平断面図

第25表 26号墓蔵骨器観察一覧表

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
26-1	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.3	17.4	28.0	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。段上凹線1。回転篋削り。 (外面) 水挽き後、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、口縁部回転横ナデ。 (釉葉) 撮み～罎にマンガン釉。
26-2	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	4.8	5.4	17.6	-		(つまみ) なし。頂部、回転篋削り。 (外面) 体部、水挽き後下部回転篋削り。罎、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、下部回転横ナデ。 (釉葉) 頂部～罎にマンガン釉。
26-3	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	-	-	31.2	-		(つまみ) 上部破損。 (外面) 体部、水挽き後回転篋削り。下部～罎、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、回転横ナデ。



26-1

マンガン



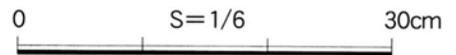
26-3

蔵骨器



26-2

地物
14824
7/10/10
備録
1945年6月22



第46図 26号墓蔵骨器蓋 (1~3)

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
小□□□雲上					
洗骨 一九四八年 十一月二十日 儀保宜秀1才 1945年6月23日…〔死〕去	1945				
…□洗骨					



26-2



26-1



26-3

26号墓蔵骨器 (第46図)



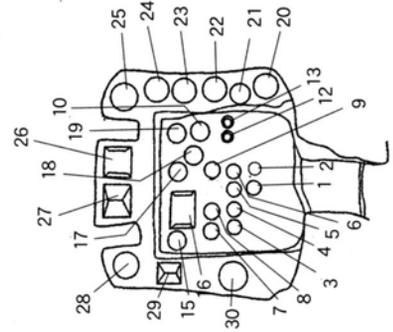
EL=5.000m

横断面見通し図

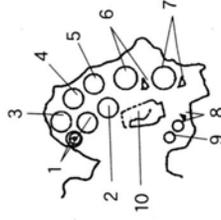


EL=5.000m

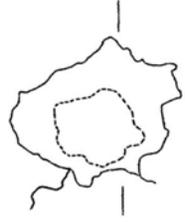
墓室横断面見通し図



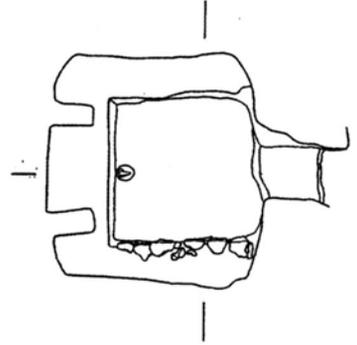
墓室内厨子龕配置図



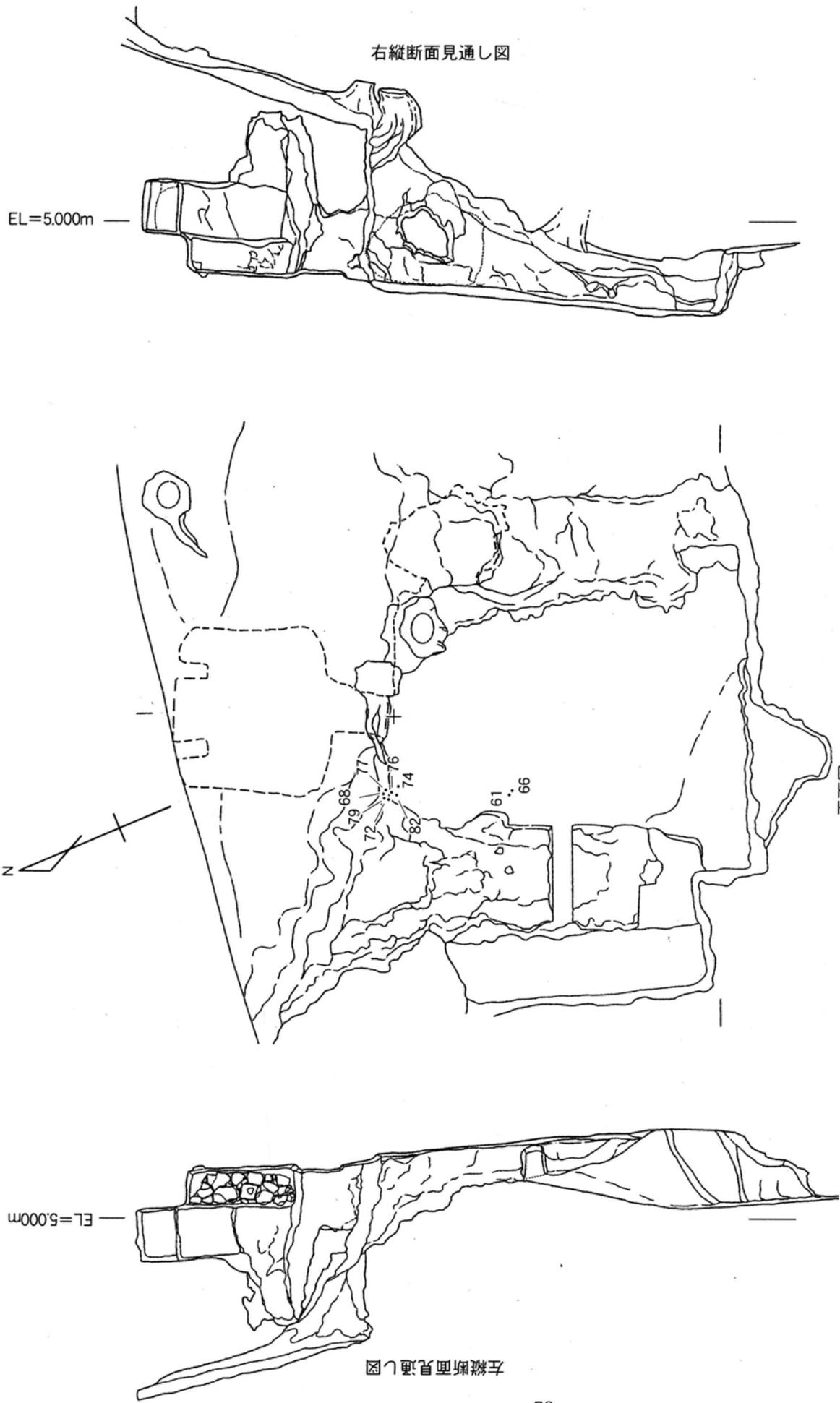
袖墓室内厨子龕配置図



袖墓平面図



墓室平面図



UJK27

立地場所 の基盤	外観 形式	墓口		庭の構 築方法	サニデー の有無	墓室		特徴	
		構築 方法	奥行 幅 高さ			平面 形態	奥行 幅 高さ		正面 左右
琉球石灰岩	亀 甲 墓	岩盤を掘り込む	80	断面L形に岩盤 を削平し、礫土 で整地	無	方形	285	1	墓室：厨子龕22基を安置。棚は岩盤を削り出して仕切を構築する。左棚は岩盤と切石積みの併用。天井部に崩落跡や亀裂が走る。正面棚直下に獣骨埋納。 墓庭：右袖は岩盤を利用し、左袖は盛土で構築。右袖に墓室が設けられ、厨子龕10基を安置する。北西角に厨子龕や副葬品を廃棄。
			72				300	1	
			91				170	1	

第47図 (PL.32・33) 27号墓 平面断面図

第26表 27号墓蔵骨器観察一覧表(1)

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-7	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	8.0	8.9	17.2	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。静止ナデ。 (外面) 体部、回転籠削り。鐳、静止ナデ。 (内面) 上部、水挽き。下部、回転横ナデ。縁部、静止ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	23.0	36.6	14.0	22.6	VE	(屋門) アーチ形、沈線。円窓3。 (特徴) 横帯1～4凹線。肩部沈線茎文。胴部沈線葉文。胴下部沈線波文。 (外面) 胴下部～高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁部～胴下部、水挽き。底面、回転籠削り。
27-8	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	6.8	9.8	22.0	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。回転籠削り。 (外面) 体部、回転籠削り。鐳、回転横ナデ。 (内面) 上部、水挽き。下部～鐳、回転横ナデ。 (釉薬) つまみ～鐳にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	18.8	29.3	11.4	18.2	VE	(屋門) 唐破風形、沈線。円窓3。 (特徴) 横帯1～4凹線。肩部沈線山形文。胴下部沈線波文。底面円孔9。 (外面) 口縁～胴下部、回転横ナデ・回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。胴部～底面、水挽き。
27-9	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.7	11.7	29.3	-	-	(つまみ) 饅頭形。つまみ台2段。頂部に孔有。回転横ナデ。 (外面) 体上部、回転籠削り。下部～鐳、回転横ナデ。 (内面) 全体的に回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	27.7	62.4	20.7	29.4	VID	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。円窓2。 (特徴) 横帯1～4凹線。肩部沈線波文。胴下部沈線文4・波文2条。屋門周円孔2。底面穿孔22。 (外面) 屋門縁周、指ナデ。高台、静止籠削り。 (内面) 口縁～胴上部、回転横ナデ。胴部～底面、水挽き。
27-10	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	9.8	15.7	28.1	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。静止ナデ。 (外面) 体上部、回転横ナデ・回転籠削り。下部、水挽き後回転籠削り。鐳、回転横ナデ。 (内面) 全体的に回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
27-10	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.2	55.1	20.8	33.2	IVD	(屋門) アーチ形玉(花)飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔9。 (外面) 胴部、回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～肩部、回転籠削り。肩～胴下部、水挽き。底面回転籠削り。
27-12	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	14.7	12.7	30.7	-	-	(つまみ) 饅頭形(頂部扁平)。つまみ台2段。回転横ナデ。 (外面) 体部、水挽き後上半回転籠削り。鐳、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、上半回転ナデ。縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
27-13	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	11.8	13.2	29.3	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。回転籠削り。 (外面) 体部、水挽き後上半回転籠削り。下半部、回転横ナデ。 (内面) 全体的に回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
27-15	陶製鐳形厨子甕 (マンガン：蓋)	14.2	16.2	31.8	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。段上凹線2。回転横ナデ。 (外面) 水挽き後、上部回転籠削り、下部～鐳、回転横ナデ。 (内面) 水挽き後、上部回転横ナデ。口縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐳にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	32.2	63.4	24.1	40.2	IVB	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓2。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文1条。底面円窓6。 (外面) 胴下部、回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～胴上部、回転横ナデ。胴部、水挽き。底面、回転籠削り後回転横ナデ。
27-16	陶製家形厨子甕 (上焼：蓋)	44.2	26.0	51.4 × 36.0	-	-	(屋根) 入母屋形。2層形瓦屋根。大棟に鯪1対。 (特徴) 中央下棟に龍、上層下棟に獅子頭。各層軒に垂木あり。屋門内方窓2、左右面1。 (釉薬) 飴釉、緑釉。
	陶製家形厨子甕 (上焼：身)	48.5 × 34.5	43.6	40.0 × 28.0	45.6	-	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓1。 (特徴) 屋門左右に蓮華文+法師像。左右側面にも蓮華文+法師像貼付。底面円孔15。 (外面) 口唇部、ナデ。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～胴上部、静止籠削り後静止ナデ。

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
具志堅順理二女コセイ 大正五年 旧三月貳拾貳日洗骨		1916			
(縁) 戊年 順政洗骨大正十二年二月十五日		1923			
昭和九年旧拾戌月卅日洗骨 具志堅順理		1934			
			5	男 1 女 1	成人 2 若年 1 小児 1 幼児 1
六世志堅古要室 孫亀千代					
			2	女 1	成人 1 幼児 1
吉宗二男 〇〇 具志堅筑登之 古條 具志堅筑登之小 十月十八日					
			2	男 1 女 1	成人 2
(縁) 三男七世具志堅古好 光緒二十拾年酉十二月六日〇〇〇〇〇死 〇〇〇〇筑登之		1898			
			1	男 1	成人 1

第27表 27号墓蔵骨器観察一覧表(2)

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-17	陶製軒付鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	27.2	15.1	29.1	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。 (外面) 型板の獅子頭貼付4。玉飾。牡丹貼付。底は、沈線で瓦を表現。 (内面) 回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔。マンガン釉。
	陶製有頸軒付厨子甕 (マンガン：身)	28.4	57.0	18.2	32.4	特殊形	(屋門) 特殊形〔花文+龍柱+法師像〕、貼付。小円窓2。屋門上部小円孔1。 (特徴) 横帯1突帯。横帯2龍頭付屋根突帯。横帯4凹凸突帯。肩部龍上半身・獅子頭4・花(牡丹?)文・青海波文貼付。胴部蓮華文+法師像・縦葉文貼付・後面線彫り。胴下部沈線山形文・凹凸突帯文1条。底面円孔10。 (外面) 胴下部、回転ナデ・回転篋削り。静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き後縦
27-18	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	5.1	11.3	25.7	-	-	(つまみ) 饅頭形。つまみ台1段。 (外面) 体上部、回転篋削り。下部、回転横ナデ。 (内面) 天井部、回転横ナデ。体部、水挽き。縁部、横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	26.7	49.5	18.8	30.0	IV D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。窓孔1〔未完通〕。 (特徴) 横帯1突帯。横帯2～4凹線。肩部沈線莖文。胴部沈線葉文。胴下部沈線文2・波文1条。底面円孔16。 (外面) 胴下部、回転横ナデ・回転篋削り。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部～底面、回転篋削り。
27-19	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	13.1	12.5	26.7	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。静止ナデ。 (外面) 体上部、回転篋削り。下部～鐔、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	25.2	50.8	19.3	30.6	V D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・2突帯。横帯3・4凹線。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文、波文2条。底面円孔9。 (外面) 胴下部、回転横ナデ・斜め方向の静止ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁部・胴下部、回転横ナデ。胴部、水挽き。
27-20	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	9.7	16.3	28.4	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。静止凹線1。回転横ナデ。 (外面) 体上部、回転篋削り。下部～鐔、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 全面、水挽き。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.8	49.7	21.0	35.0	IV D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1～3突帯。横帯4凹線。肩部沈線幾何文+山形文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔12。 (外面) 胴下部、回転横ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部～底面、回転篋削り。
27-21	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.3	16.5	27.7	-	-	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。 (外面) 体上部、回転篋削り。下部、水挽き。鐔、ナデ。 (内面) 上部、水挽き。体部～鐔、回転篋削り後ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
27-22	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	11.0	16.9	31.9	-	-	(つまみ) 饅頭形。つまみ台1段。段上凹線1。 (外面) 水挽き後上半回転篋削り。鐔、回転横ナデ。窯記号あり。 (内面) 上部、回転篋削り。体部、水挽き。口縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	31.5	64.1	23.9	40.8	IV B	(屋門) 唐破風形玉(花)飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線蓮華文2段。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔5。 (外面) 胴下部、篋削り後回転横ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部～底面、回転篋削り。

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
戊年 順徳洗骨大正十二年二月十五日		1923			
チン氏具志堅松妻カメ 呂氏仲程通泰三女カメ			1	女 1	成人 1
(縁) 八世古長明治卅七年甲辰十壹月九日死去 (内) 字順道全四拾老年戊申拾壹月廿壹日洗骨	1904	1908			
(胴内部) 八世古長明治四拾一年戊申拾壹 月女一日洗骨	1904	1908		男 1	成人 1
六世 咸豐八年戊午九月十七日嫡子古要老人入 (1858) 具志堅筑登之洗骨		1858			
			1	男 1	成人 1
十三歳ナリ 具志堅古猷二女真蠶同人三女真牛六歳○ 古長女マナ ビ					
□□ 具志堅 男子具志堅					
			1	男 1	成人 1

第28表 27号墓蔵骨器観察一覧表(3)

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-23	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	3.5	12.2	30.5		—	(つまみ) 宝珠形。回転横ナデ。 (外面) 水挽き後、体上部回転篋削り。 (内面) 水挽き後、縁部回転横ナデ。 (釉薬) なし。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	26.2	46.7	22.5	35.2	—	(底) 上凸部0.5cm。円窓3。 (特徴) 横帯2～4凹線。底右部に窯印あり。体部円孔8。 (外面) 口縁～胴部に回転横ナデ。胴下部、回転篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。胴下部、回転篋削り。
27-24	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	5.7	10.5	26.9	—	—	(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。回転横ナデ。 (外面) 回転篋削り。 (内面) 水挽き後、縁部回転横ナデ。 (釉薬) なし。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	25.3	46.4	20.5	34.4	—	(底) 上凸部1.1cm。窓3〔円・方・円〕。 (特徴) 横帯2～4凹線。底左部に窯印。底面円孔1。 (外面) 胴部、回転横ナデ後不定方向ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 肩～胴下部、水挽き。
27-25	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	9.5	8.9	29.2	—	—	(つまみ) なし。 (外面) 上部、無調整。体部、水挽き後上半部回転篋削り、一部で静止篋削り。 (内面) 全面、水挽き。 (釉薬) なし。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	29.7	49.3	21.6	37.0	—	(底) 上凸部1.0cm。窓3〔円・楕円・円〕。 (特徴) 横帯2～4凹線。口縁部沈線鋸歯文。底面円孔5。 (外面) 口縁～底部、回転横ナデ後斜め方向静止ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ・胴部、水挽き。底部、回転篋削り。
27-26	陶製家形厨子甕 (マンガン：蓋)	56.1 × 39.0	30.0	52.6 × 36.0	—	—	(屋根) 入母屋形。屋根は瓦で、大棟に鯀1対。 (外面) 各層軒に垂木造形。上層軒下に円窓4、上層及び軒下左右面に円窓3。 (内面) 静止篋削り。 (釉薬) マンガン釉。
	陶製家形厨子甕 (マンガン：身)	48.4 × 32.5	36.0	43.0 × 25.5	48.6	Ⅲ C	(屋門) 位牌形〔柱下部は連結〕、貼付。方窓1。 (特徴) 屋門左右に蓮華文+法師像、玉飾、貼付。屋門下部に沈線花文?。四脚付。底面円孔39。 (外面) 胴下部、横ナデ・静止篋削り。 (内面) 胴部、静止横ナデ、斜め方向の静止ナデ、横方向の静止篋削り。
27-27	石製家形厨子 (蓋)	33.8 × 6.4	21.9	57.4 × 46.0	—	—	(屋根) 入母屋形。 (材質) サンゴ石製。 (外面) 正面左右軒部に削り出して垂木を造形。 (内面) ノミ痕明瞭。
	石製家形厨子 (身)	49.6 × 39.8	51.6	47.4 × 39.5	29.6	—	(特徴) 正面上部に方窓3(未貫通)。四脚付。正面所々に鑿痕あり。 (材質) サンゴ石製 (内面) 斜め上方向からの鑿痕が、明瞭に残る粗い成形(鑿の幅は異なる)。
27-28	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	12.8	18.6	32.0	—	—	(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。各段上凹線1。 (外面) 体上部、回転篋削り後回転ナデ。下部、水挽き。 (内面) 回転篋削り後、回転ナデ。縁部、回転ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	有頸甕形厨子甕 (マンガン：軸)	33.0	62.5	24.4	41.0	Ⅳ B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱間付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線蔓草文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔6。 (外面) 胴下部、回転篋削り。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。肩部～底面、水挽き。

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
権氏具志堅親雲上古弘妹かめ骨 同人嫡子具志堅筑登之			3	男 1 女 1	成人 2 幼児 1
具志堅筑登之親雲上□□ 松具志堅にや女子 かめ 古弘女子な遍 兩人			2	女 1	成人 1 幼児 1
古弘具志堅筑登之女子真いぬ乾隆三拾四年己丑八月□□□洗□仕□ 戊十二月十六日洗骨 —— □□真三良 男子 嫡子具志堅筑登之 古宗三男心当ニテ候		1769			
道光二十一年辛丑 十一月二十三日洗骨 権氏 具志堅筑登之親雲上 古喜 同年洗骨 同人 妻 具志堅 親雲上次男 同年洗骨 樽金 具志堅筑登之女子 同年洗骨 真加戸			4		
(身正面) 権氏古喜 具志堅 親雲上 個人古喜 妻			4	男 1	成人 1 小児 1 不明 2
此墓地拾貳間四方 時之地頭平良親方 賜之仍而村所之頭々百姓 召寄其挨拶仕乾隆 拾三年戊辰八月廿一日 先祖之骨安置之也 具志堅にや母			4	男 1 女 1	成人 2 小児 1 幼児 1
咸豐八年戊午九月十七日古備夫婦入光緒六年辰七月廿七日洗骨妻真鶴 五男具志堅筑登之親雲上洗骨			2	男 1 女 1	成人 2

第29表 27号墓蔵骨器観察一覧表(4)

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-29	陶製家形厨子甕 (アカムヌー：蓋)	31.8	15.1	48.6	-		(屋根) 入母屋形。屋根は瓦で、大棟の両端に鯨一對。 (外面) 正面左右軒に方形垂木を造形。 (内面) 静止篋削り。 (釉薬) なし。
	陶製家形厨子甕 (アカムヌー：身)	46.4 × 35.6	36.0	44.0 × 34.2	49.4		(屋門) 瓦屋形、柱下部に玉飾付、貼付〔柱下部は連結〕。屋根内方窓3。 (特徴) 屋門左右蓮華文+蓮上に法師像。左右側面蓮華文+蓮上に法師像、縁部蔓草文(漆喰書?、白化粧?)。底面円孔5。 (外面) 底面、静止篋削り?。 (内面) 口縁部、静止ナデ。胴部、水挽き。胴下部、静止篋削り後横ナデ。
27-30	陶製笠形厨子甕 (ポージャー：蓋)	9.2	8.6	29.0	-		(つまみ) なし。 (外面) 上面、無調整。体部、水挽き後上半部回転篋削り。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) なし。
	陶製無頸甕形厨子甕 (ポージャー：身)	28.4	49.7	24.0	34.0		(底) 上凸部0.5cm。窓3〔円・方・円〕。 (特徴) 横帯2~4凹線。底左部に窠印あり。底面円孔6。 (外面) 胴部、静止ナデ。胴下部、回転篋削り。底面、静止篋削り。 (内面) 口縁~肩部、回転横ナデ。胴部、静止ナデ。胴下部、回転篋削り後回転横ナデ。
27-31	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	25.2	14.9	29.6	-		(つまみ) 宝珠形。つまみ台2段。 (外面) 体部、回転篋削り。罎、回転横ナデ。 (内面) 上部、水挽き。下部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み~罎縁にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.8	57.0	19.4	33.1		(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3 (特徴) 横帯1~4凹線。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文?。胴下部沈線門・波文2条。底面円孔9。 (外面) 底部、篋削り。 (内面) 口縁部、回転横ナデ。頸部~底部、水挽き痕。
27-33	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.4	55.8	19.8	28.7		(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。円窓2。 (特徴) 横帯1~4凹線。肩部沈線波文・蔓草?文、墨書窠印?あり。胴部蔓草?文。胴下部沈線文・波文3条、円孔2。底面円孔9。 (外面) 底部、篋削り。 (内面) 口縁部、回転横ナデ。頸~底部、水挽き。
27-34	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	27.4	-	-	33.0		(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底部欠損。 (内面) 口縁~頸部、回転横ナデ。肩~底部近く、水挽き。
27-袖1	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.0	14.7	28.0	-		(つまみ) 宝珠形? (頂部破損)。つまみ台1段。段上凹線2。 (外面) 体部~罎、回転横ナデ。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み~罎にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	28.4	52.0	18.4	30.8	V D	(屋門) アーチ形玉(葉文)飾付、貼付。方窓3。屋門内に玉飾貼付5。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。肩部沈線葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文、波文2条。底面円孔14。 (外面) 胴下部、回転篋削り後斜め方向静止ナデ。高台脇、静止篋削り。 (内面) 口縁~胴上部、回転横ナデ。胴下部、水挽き。
27-袖2	陶製罎形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.8	12.7	27.0	-		(つまみ) 饅頭形。つまみ台2段。各段上凹線1。回転篋削り後回転横ナデ。 (外面) 水挽き後、上半部回転篋削り。罎、回転篋削り。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み~罎にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	26.8	50.3	18.8	30.6	V D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。円窓3。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。頸部窠印?。肩部「米」字状沈線文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底部三脚付。底面円孔7。 (外面) 胴下部、静止ナデ・回転篋削り。高台脇、回転篋削り。 (内面) 口縁部、回転ナデ。頸~胴下部、水挽き・回転篋削り・静止ナデ。

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
大山親雲上室					
-----			1	女 1	成人 1
嘉慶拾貳年卯八月廿七日田多馬場下ノ墓右此墓江移置候処銘書無之二付何かしと知不申候然共多田ノ墓ハ外人ハ入不申權氏計安置ニ付此墓江引越置ニ付以後何かしと知申候ハバ銘書入候事					
-----			1	女 1	成人 1

七世具志堅古起明治四十三年戊辰二月十二日死去大正四年乙卯旧十月十八日洗骨	1910	1915			
(胴) 七世具志堅古起明治四十三年戊辰二月十二日死去大正四年乙卯 1 日十月十日十八日洗骨	1910	1915	1	男 1	成人 1
明治四十一年申十月廿五日洗骨次男古・・・ンツ・・・		1908		男 1	
(胴縁裏) 二男古光女子マンツ			1	女 1	成人 1

第30表 27号墓蔵骨器観察一覧表(5)

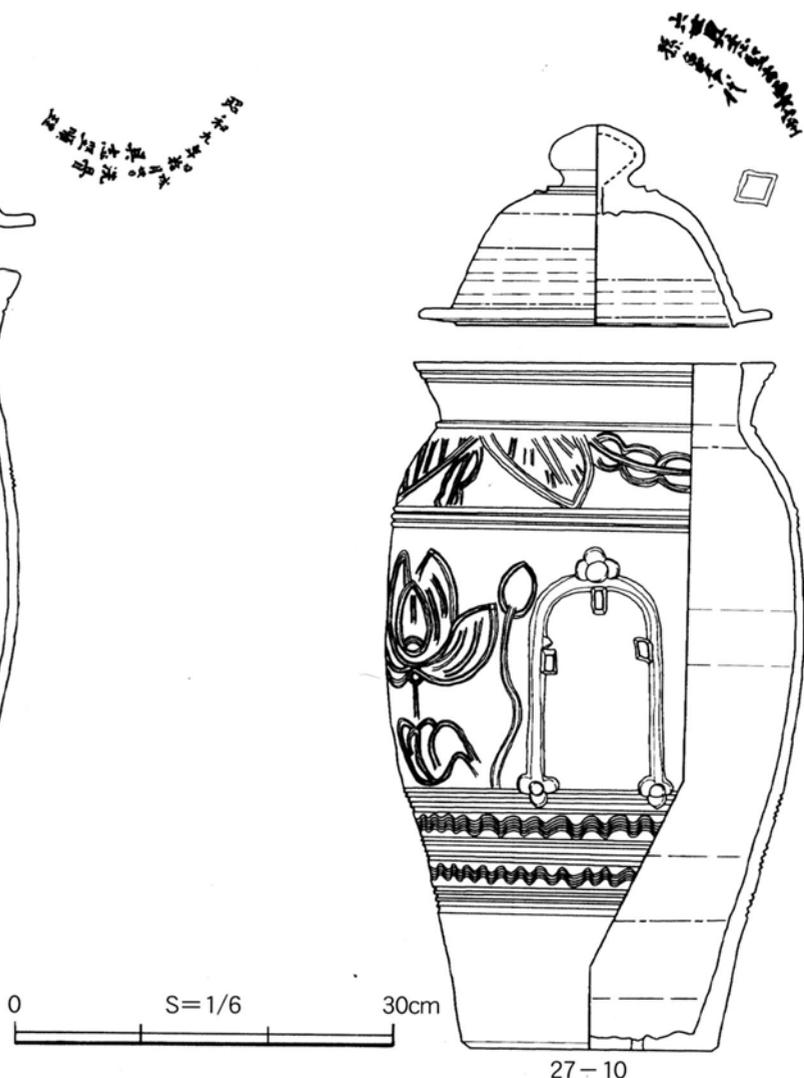
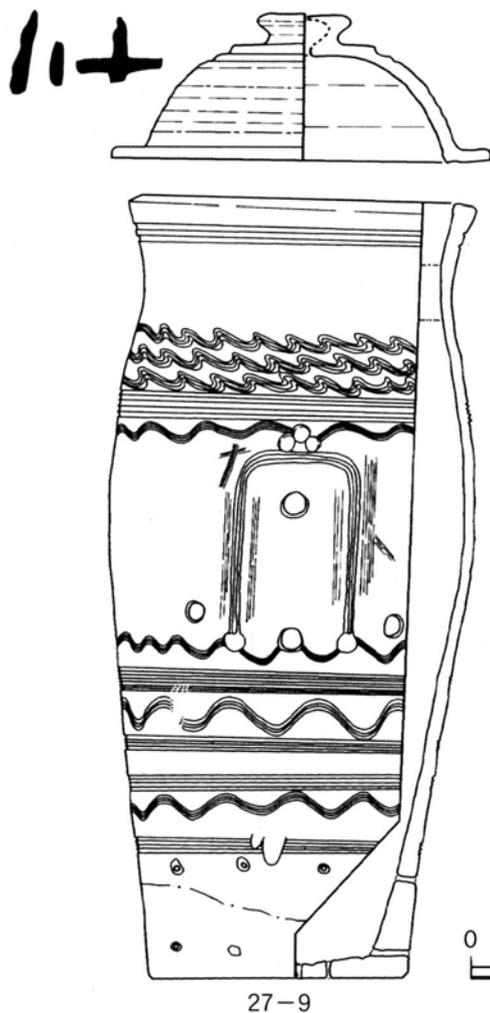
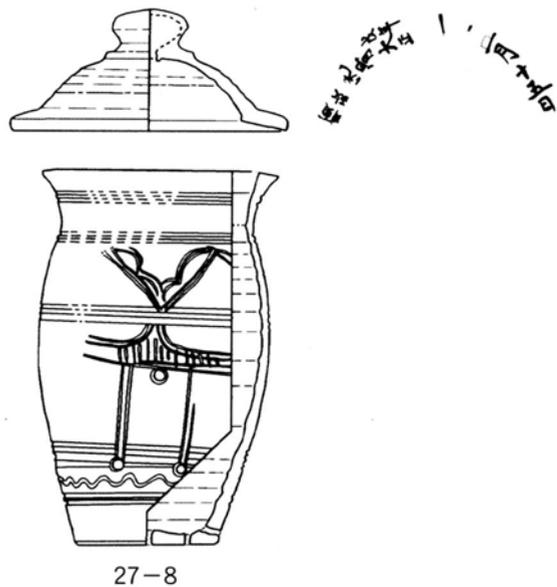
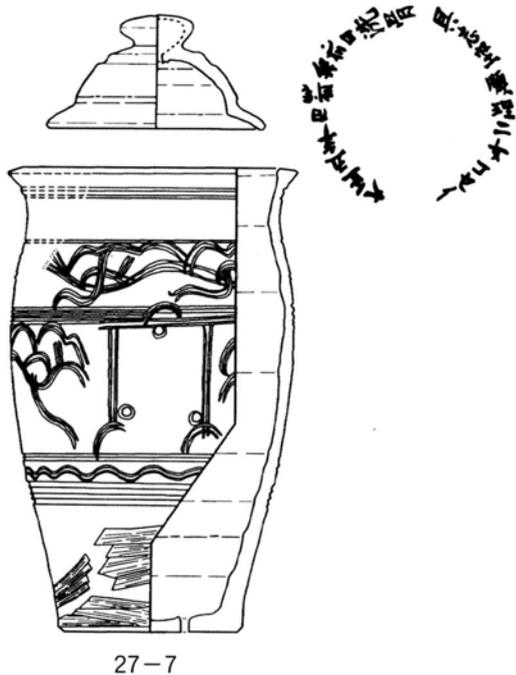
蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-袖3	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.0	14.1	26.9	—		(つまみ) 饅頭形。つまみ台1段。段上凹線1。回転横ナデ。 (外面) 体上部、回転籠削り。下部～鐔、回転横ナデ。 (内面) 水挽き。縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	28.4	53.0	20.8	35.4	IV B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。肩部沈線蓮葉文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文1条。底面円孔10。 (外面) 胴下部、回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。胴部、水挽き・回転籠削り。
27-袖4	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	11.6	15.0	28.2	—		(つまみ) 饅頭形。つまみ台2段。頂部孔あり。静止ナデ。 (外面) 水挽き後、体上部、静止ナデ。下部、水挽き。鐔部、静止ナデ。 (内面) 上部、静止ナデ。体部、水挽き。縁部、回転籠削り。 (釉薬) 撮み～鐔にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	26.0	51.6	20.0	31.6	IV D、B	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1・4凹線。横帯2・3突帯。肩部沈線芭蕉文・波文・草?文。胴部沈線蓮華文。胴下部沈線文・波文1条。底面円孔5。 (外面) 胴下部、回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転籠削り。胴下部、水挽き。
27-袖5	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	8.7	14.5	27.7	—		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。段上凹線1。回転横ナデ。 (外面) 体部、水挽き後回転籠削り。 (内面) 上部、水挽き。下部～縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	25.4	43.6	20.4	30.8	III B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓2。 (特徴) 横帯1凹線。横帯2～4突帯。肩部沈線波文。胴部貼付蓮華文+蓮上法師像。胴下部沈線文・波文1条。底面円孔6。 (外面) 胴下部、回転籠削り。高台脇、静止籠削り。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き後ナデ消し。胴部、回転籠削り後ナデ消し。
27-袖6	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.7	15.9	27.5	—		(つまみ) 宝珠形。つまみ台1段。段上凹線1。回転籠削り後回転横ナデ。 (外面) 体上部、回転籠削り。鐔、回転横ナデ。 (内面) 上部、回転横ナデ。体部、水挽き。縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	28.6	56.2	44.0	37.0	III B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1～4突帯。肩部沈線文2・波文3条。胴部貼付蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔6。 (外面) 胴下部、回転籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。胴部、水挽き
27-袖7	陶製鐔形厨子甕 (マンガン：蓋)	10.1	14.8	28.0	—		(つまみ) 宝珠形。撮み台1段。段上凹線2。 (外面) 体上部、回転籠削り。下部、水挽き後回転横ナデ。 (内面) 上部、水挽き。縁部、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鐔上面にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	30.5	60.2	23.5	38.6	III B	(屋門) 唐破風形玉飾付、柱貫、貼付。方窓3。 (特徴) 横帯1～4突帯。肩部沈線花文・莖文。胴部貼付蓮華文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔5。 (外面) 口縁～胴部、回転横ナデ後静止籠削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。肩部～体部、水挽き。

銘書	死去年 (西曆)	洗骨年 (西曆)	被葬者		
			人数	性別	年齢
咸□拾□年□ 庚酉十一月□□日 かめ □□□□ 同治拾二年 二月十二日 洗骨 具志堅 筑登之親雲上 □□ 光緒三年 具志堅親雲上 妻洗骨					
			2	男 1 不明 1	成人 2
道光二十 三年癸卯 七月七日洗 骨三男 具志堅□□□ 古髓		1843		男	
			1	不明 1	成人 1
道光二十 三年癸卯 七月七日洗 次男 骨具志堅古 光筑登之妻 次男具志堅 筑登之親雲上 古光一古條一 嫡子真蒲戸 同治四年乙丑 十一月十一日洗骨		1843		男	
			2	不明 1	成人 1 幼児 1

第31表 27号墓蔵骨器観察一覧表(6)

蔵骨器 No.	型式 (名称又は仮称)	上部径 (a)	器高 (b)	下部径 (c)	胴部径 (d)	型式	器面調整・装飾・その他
27-袖8	陶製鏝形厨子甕 (マンガン：蓋)	7.0	8.0	17.7	—		(つまみ) 饅頭形。撮み台1段。回転横ナデ。 (外面) 体上部、回転篋削り。下部～鏝、回転横ナデ。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鏝にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	16.8	26.2	13.7	19.0	VI B	(屋門) 唐破風形、沈線。屋門周円窓4。屋根内、屋門上内に縦沈線あり。 (特徴) 横帯1～4凹線。肩部沈線葉文。胴部沈線葉文。胴下部沈線文・波文1条。底面円孔9。 (外面) 胴下部、回転横ナデ。 (内面) 口縁～肩部、回転横ナデ。胴部、水挽き。底部、回転篋削り。
27-袖9	転用蔵骨器 (陶製壺底部：蓋)	12.6	5.4	7.6			(つまみ) なし。 (外面) 体部、部分的に回転篋削り。 (内面) 全面、水挽き後、回転横ナデ。 (釉薬) なし。 (特徴) 壺の底部を蓋に転用
	転用蔵骨器 (陶製壺：身)	—	36.8	15.2	23.0		(特徴) 横帯1・3凹線。横帯2突帯。肩部横帯3上に穿孔瘤状突起1。底部円孔1。無釉。 (外面) 肩～胴部、回転横ナデ後部分的に篋削り・斜め方向の静止ナデ。底部、静止篋削り。 (内面) 口縁～頸部、回転横ナデ。肩部～底面、水挽き。
27-袖10	陶製鏝形厨子甕 (マンガン：蓋)	11.2	12.4	27.2			(つまみ) 饅頭形。撮み台2段。回転横ナデ。 (外面) 水挽き後、体上部回転篋削り。鏝、回転横ナデ。 (内面) 全面、回転横ナデ。 (釉薬) 撮み～鏝にマンガン釉。
	陶製有頸甕形厨子甕 (マンガン：身)	29.4	47.2	18.5	31.2	V D	(屋門) アーチ形玉飾付、貼付。円窓3。 (特徴) 横帯1・3・4凹線。横帯2突帯。肩部沈線葉文・蔓文。胴部蓮葉文。胴下部沈線文・波文2条。底面円孔8。 (外面) 胴下部、回転横ナデ。底部近くを回転篋削り・静止篋削り。 (内面) 口縁～頸部、ナデ。肩部～胴下部、水挽き。底面、回転篋削り。

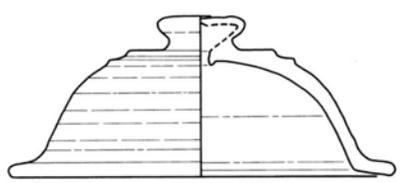
銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	被葬者		
			人数	性別	年齢
明治四十一年申十月廿五日洗骨三男古信三男思次良		1908		男	
			1	不明	未成人 1
明治四十一年申十月廿〇〇〇〇〇〇宜次男〇古興				男	
(胴) 古宜次男〇〇 ※(胴) 銘書の前に“▽”が1つ書か れている			1	男 1	成人 1



0 S=1/6 30cm

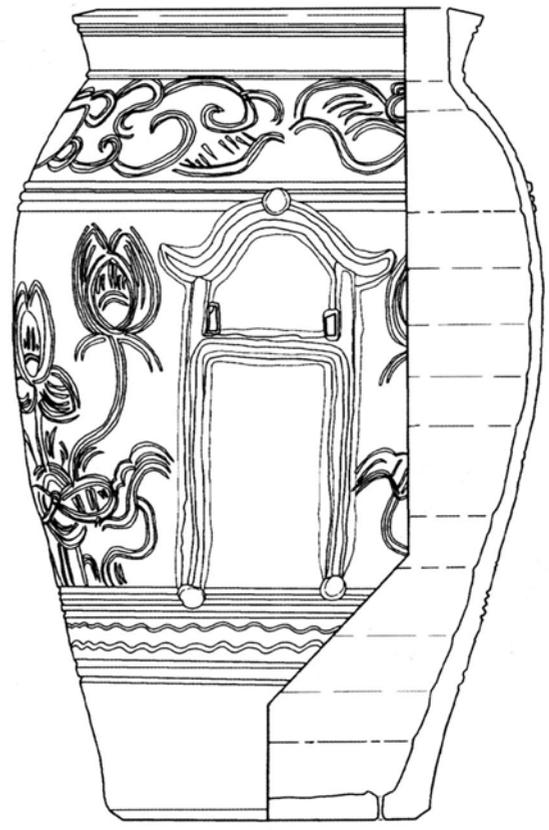
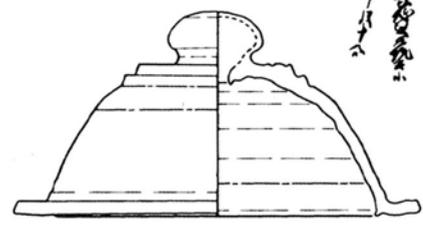
第48图 (PL.33) 27号墓藏骨器 (1)

古志堅
順精
丁未年
十月十六日

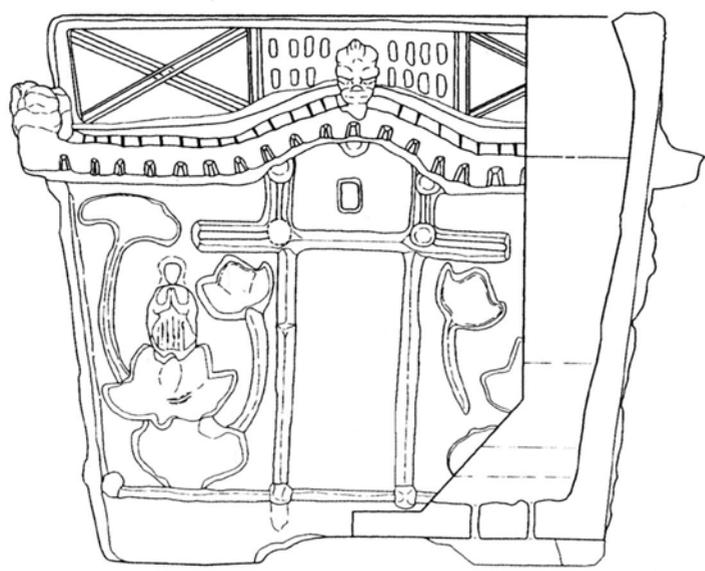
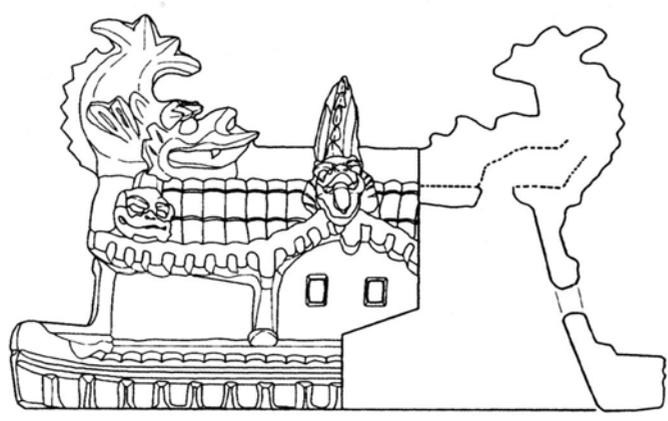


古志堅
順精
丁未年
十月十六日

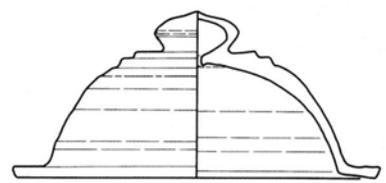
27-12



27-15

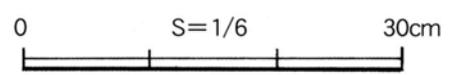


27-16

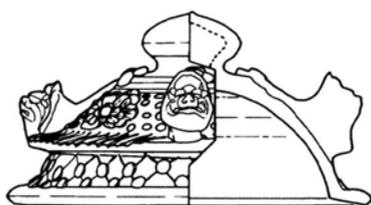


古志堅
順精

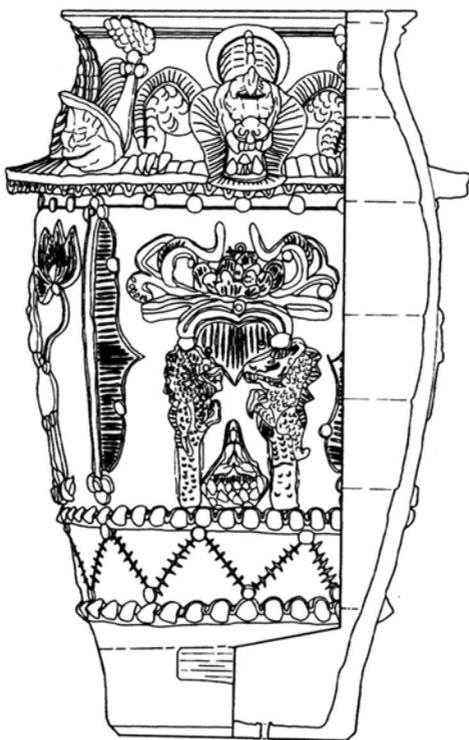
27-13



第49图 (PL.34) 27号墓藏骨器 (2)



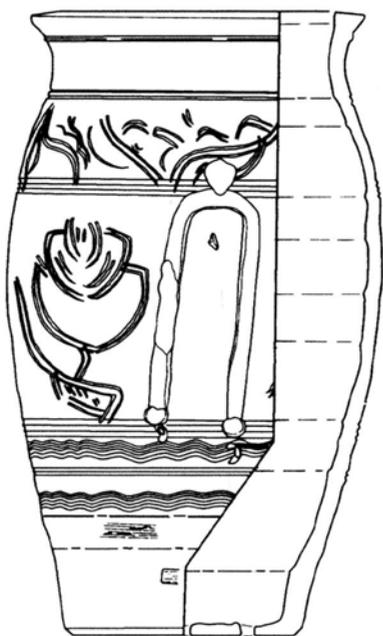
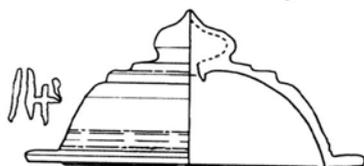
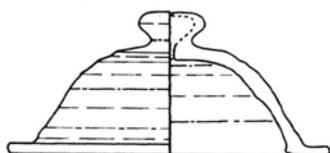
明治廿七年甲辰十月九日
 世古長 洗日



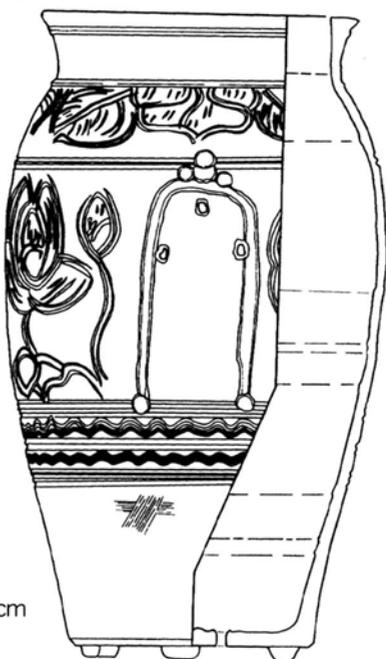
27-17

明治廿七年甲辰十月九日
 世古長 洗日

明治廿七年甲辰十月九日
 世古長 洗日



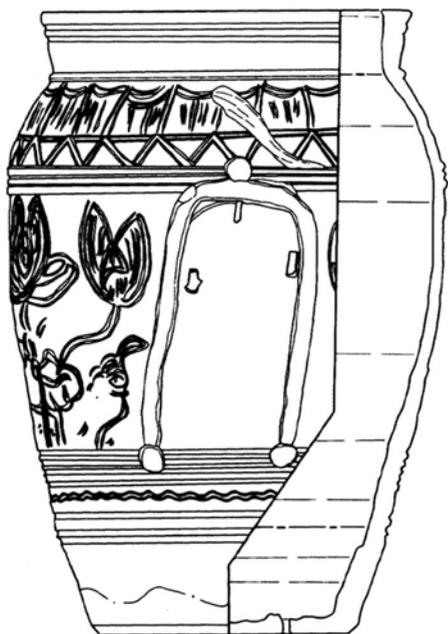
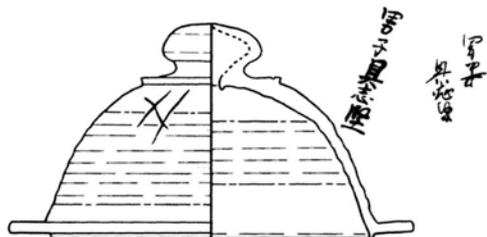
27-18



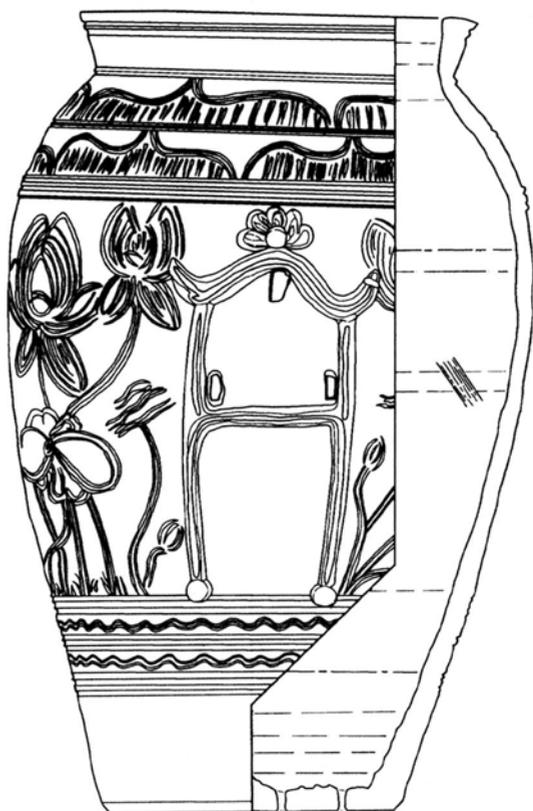
27-19

0 S=1/6 30cm

第50图 (PL.35) 27号墓藏骨器(3)

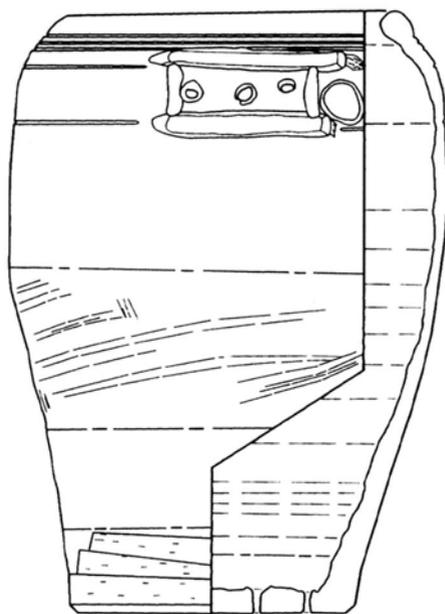
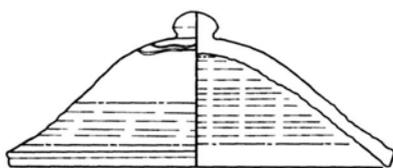


27-20

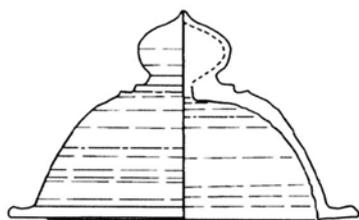


27-22

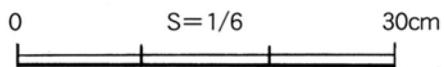
Handwritten Chinese characters in a curved arrangement, likely a collector's or researcher's note.



27-23

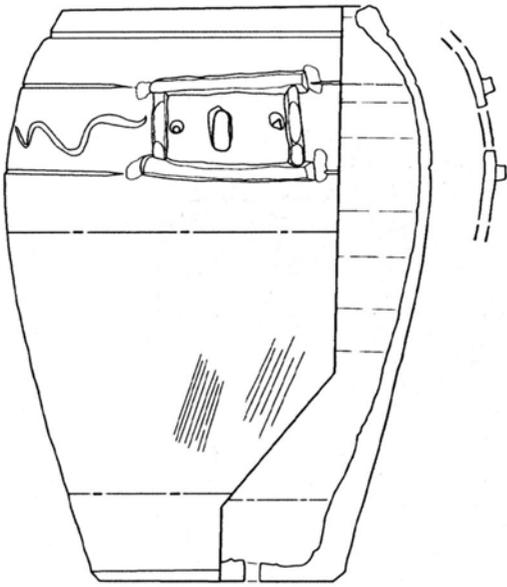
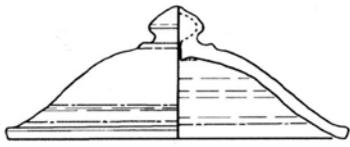


27-21

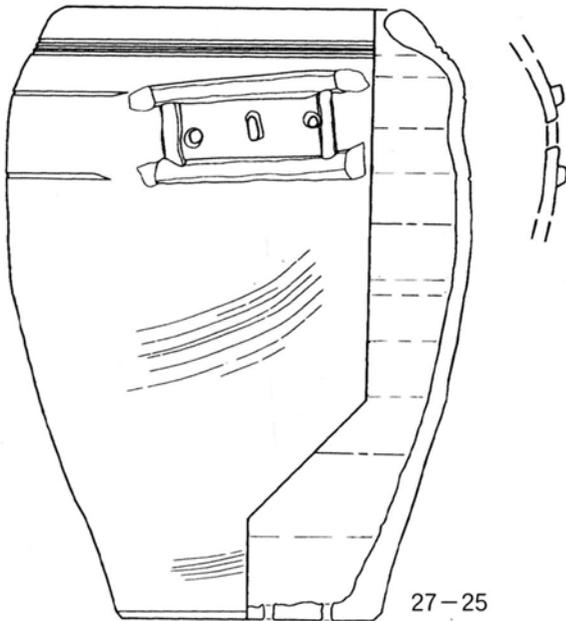
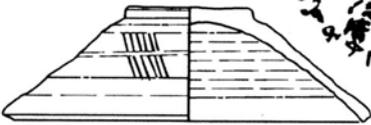


第51图 (PL.36·37) 27号墓藏骨器(4)

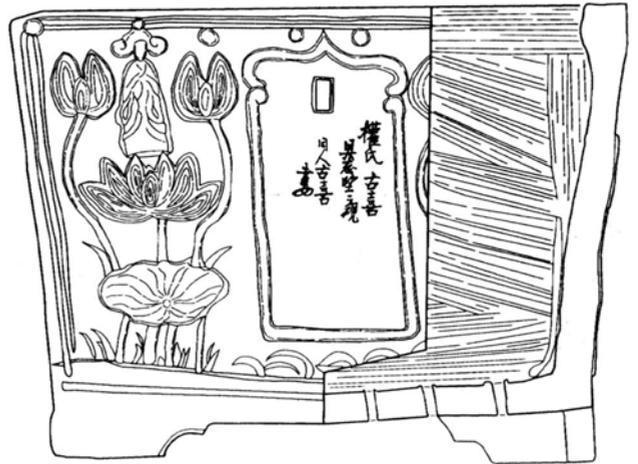
権氏古吉
墓藏骨器
一ノ



27-24



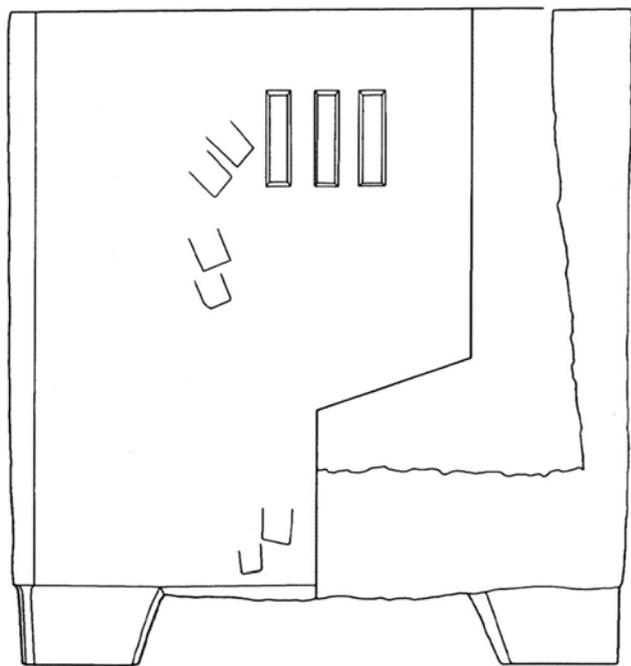
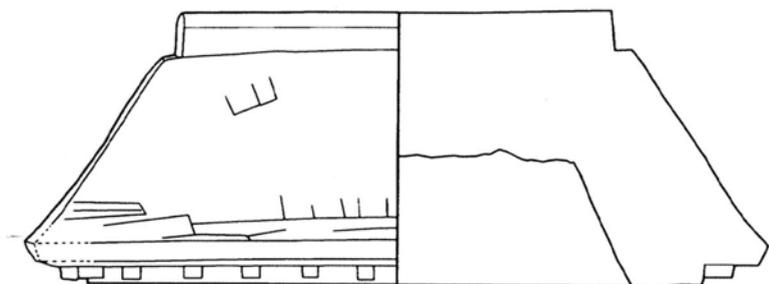
27-25



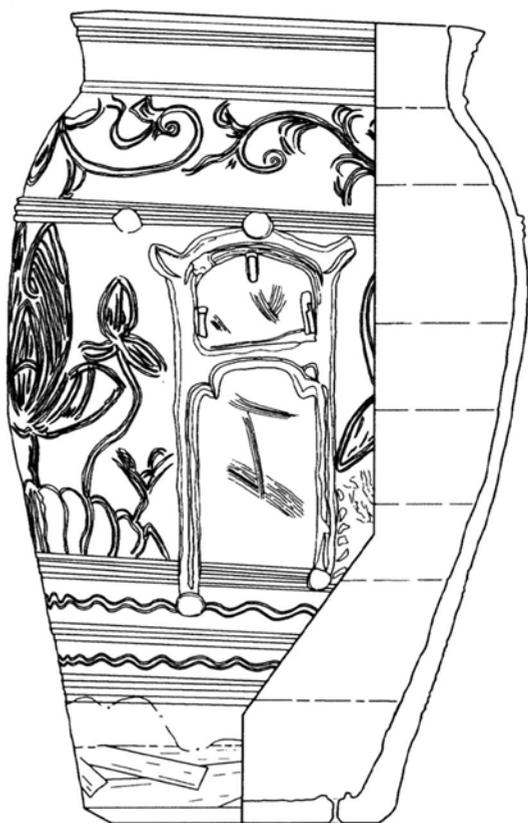
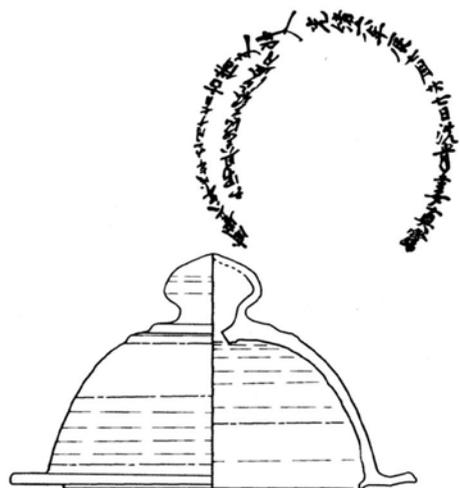
27-26

0 S=1/6 30cm

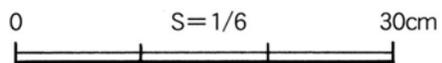
第52図 (PL.37・38) 27号墓藏骨器(5)



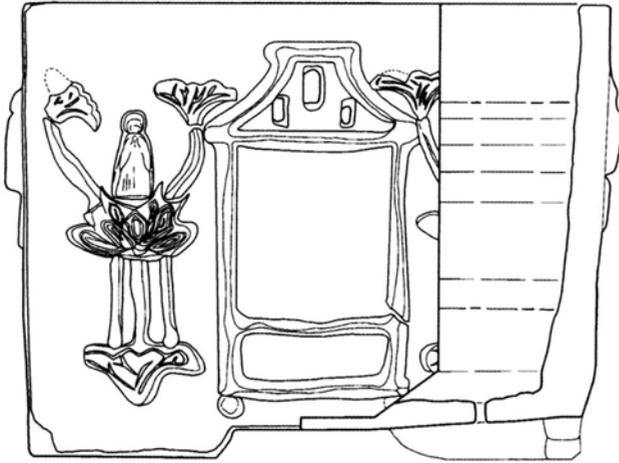
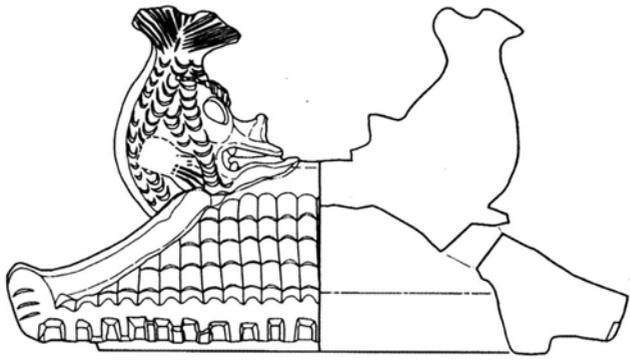
27-27



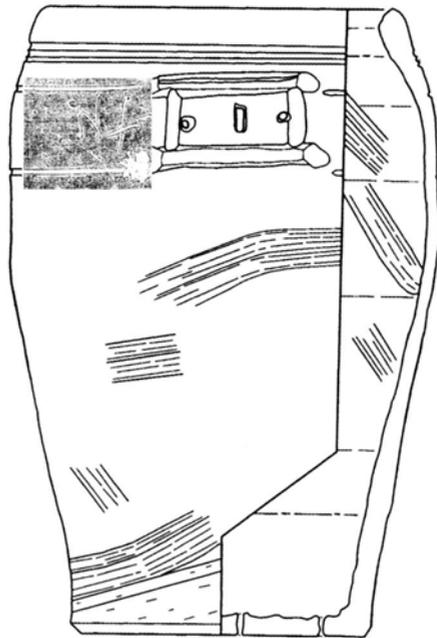
27-28



第53图 (PL.39) 27号墓藏骨器 (6)



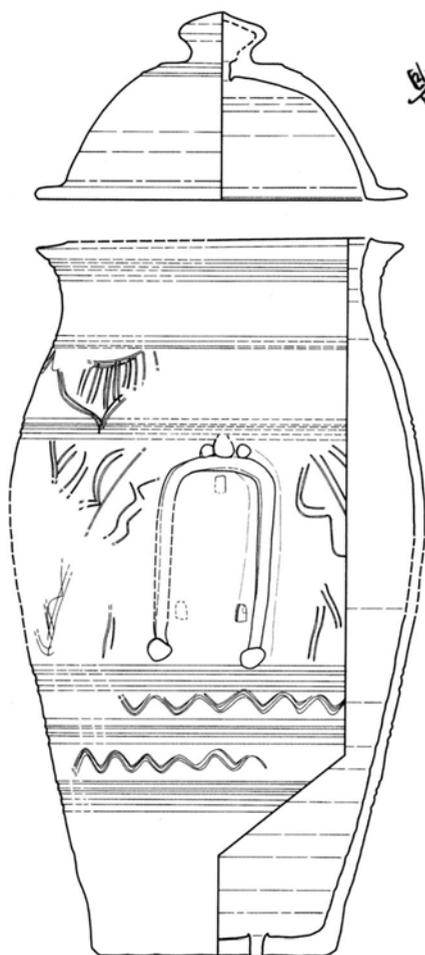
27-29



27-30

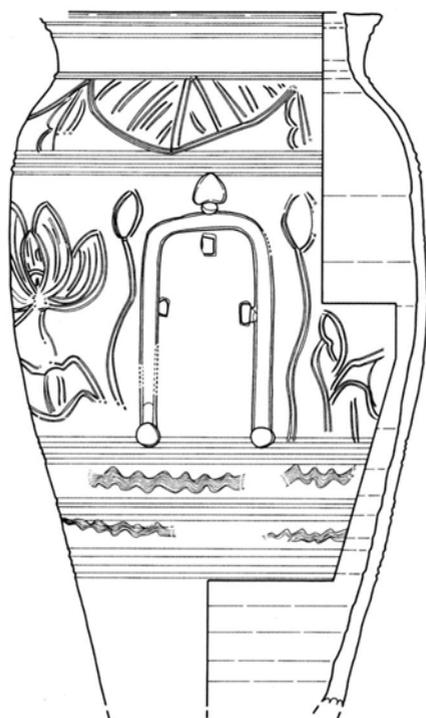
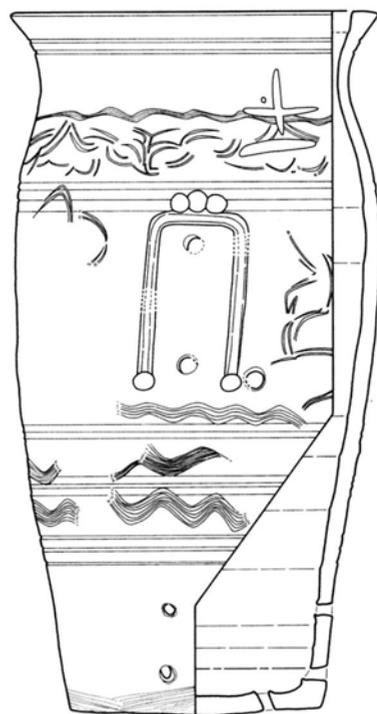
0 S=1/6 30cm

第54图 (PL.40) 27号墓藏骨器(7)



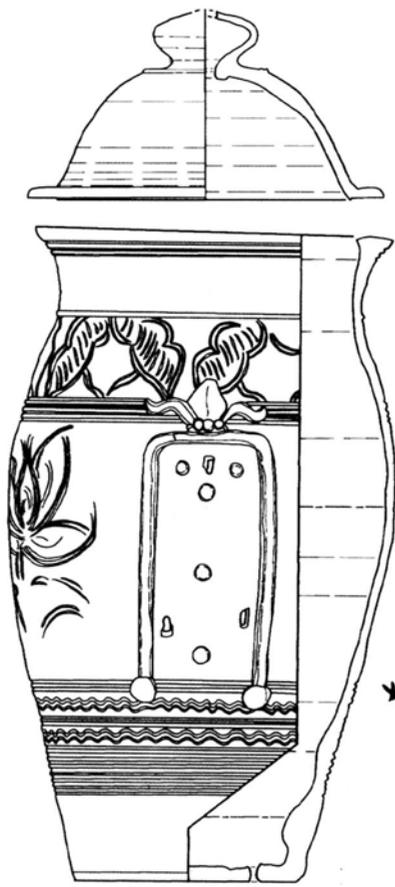
部

四〇六
順
日
月
十
日

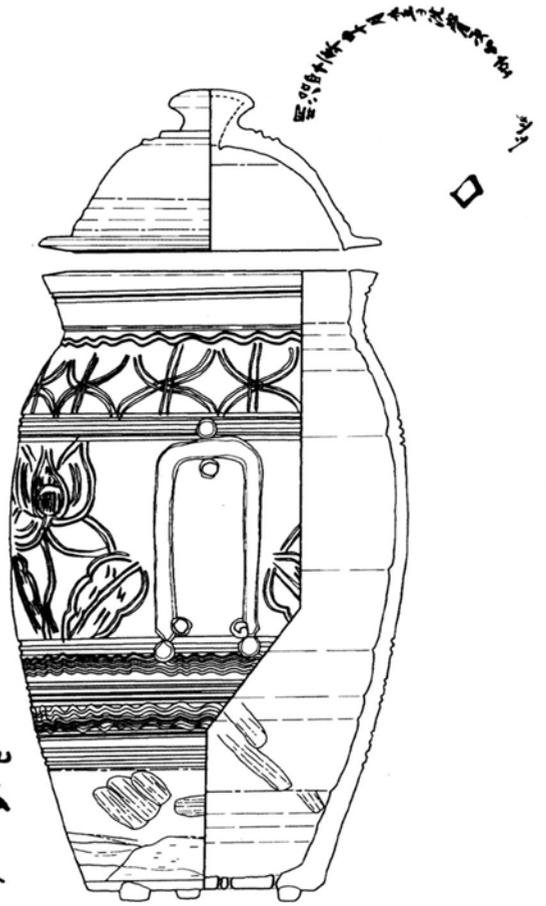


0 S=1/6 30cm

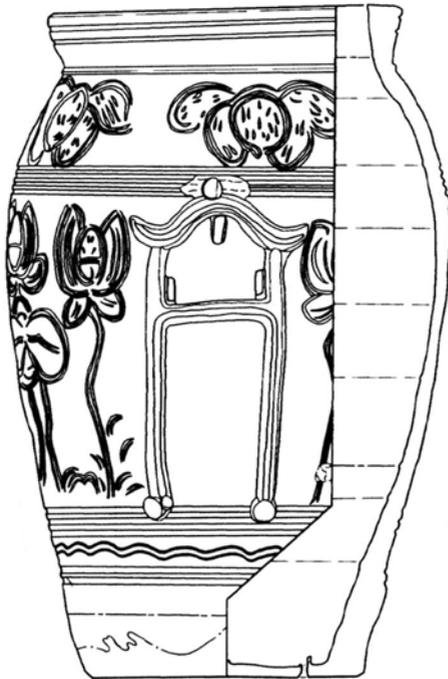
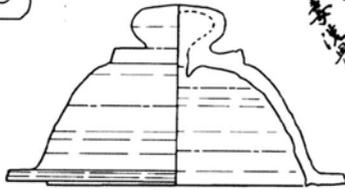
第55图 (PL.41) 27号墓藏骨器(8)



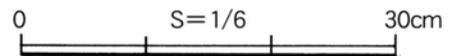
27袖-1



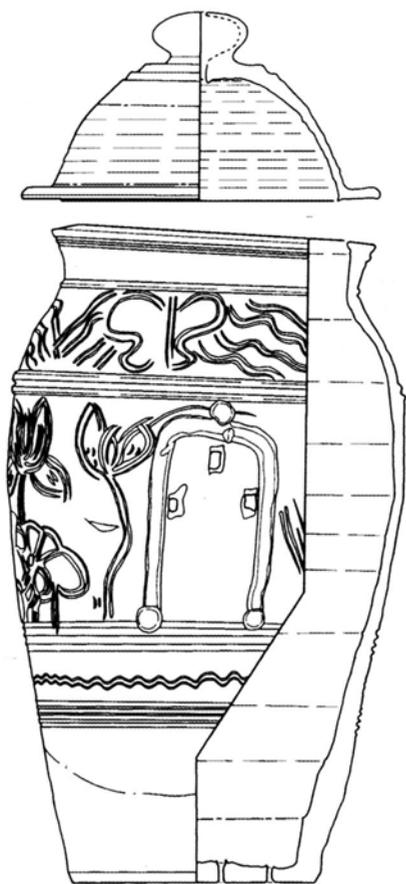
27袖-2



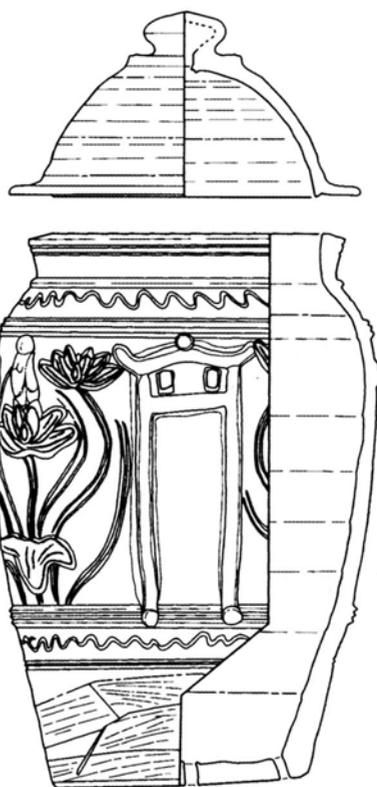
27袖-3



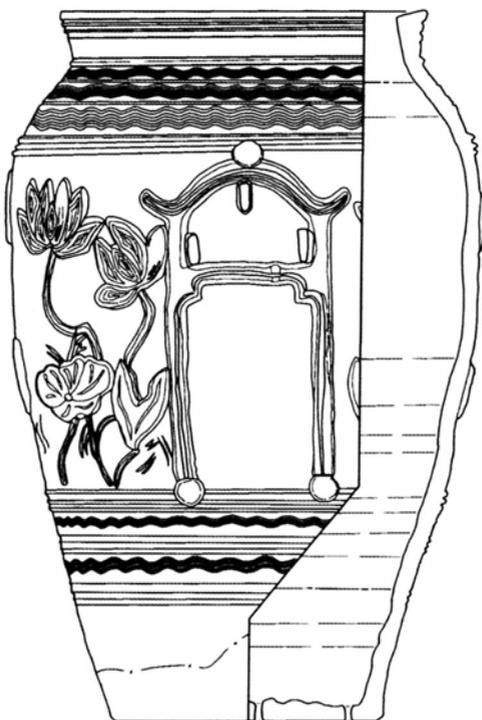
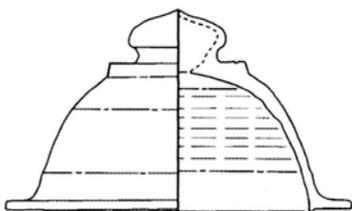
第56图 (PL.42) 27号墓 (袖墓) 藏骨器 (9)



27袖-4



27袖-5

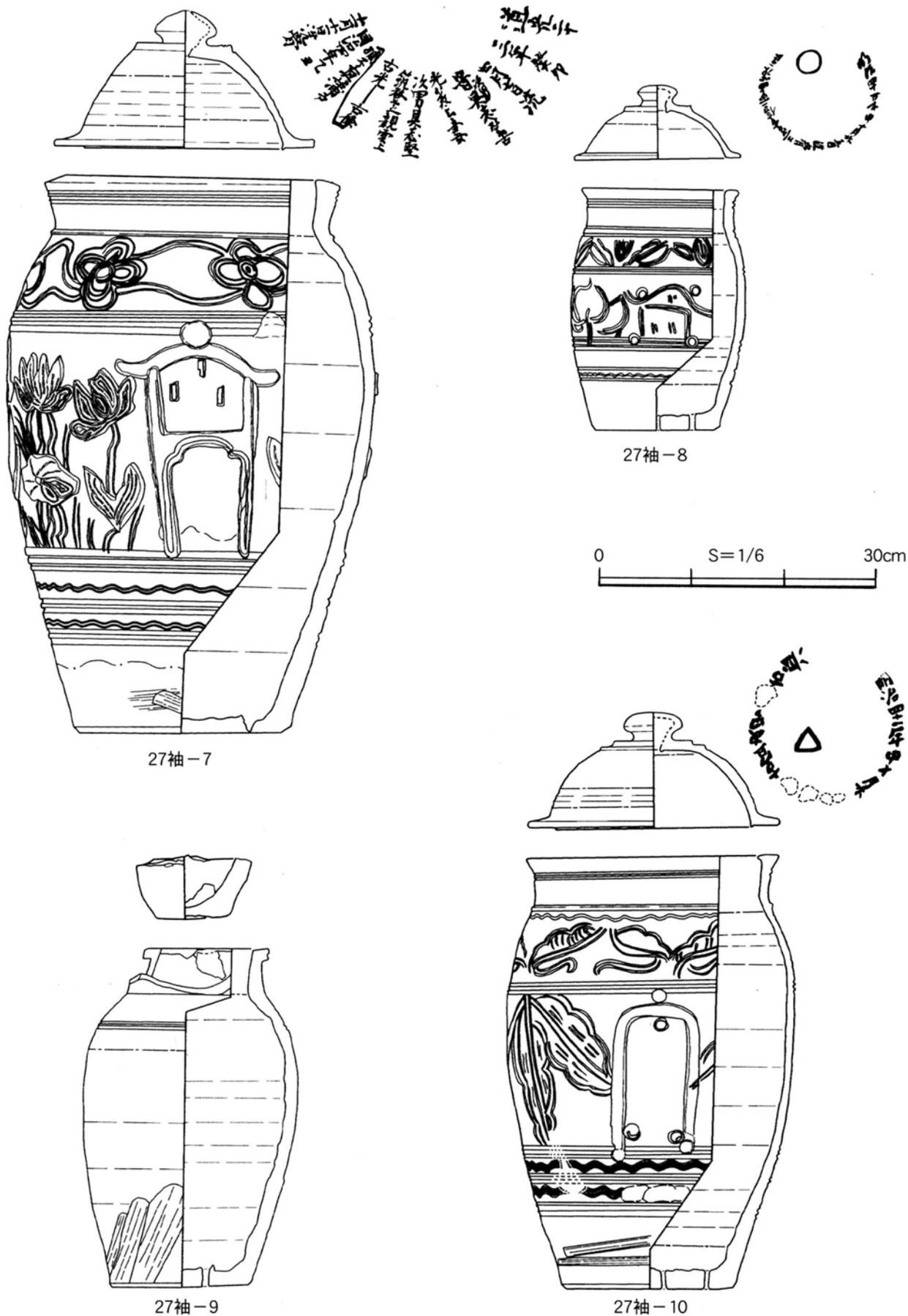


27袖-6

湖南长沙
27号墓
1955年
湖南省博物馆

0 S=1/6 30cm

第57图 (PL.43) 27号墓(袖墓)藏骨器(10)



第58图 (PL.44·45) 27号墓 (袖墓) 藏骨器 (11)

第32表 27号墓出土遺物観察一覧表(1)

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 /材質、 形状	釉薬及び化 粧土/重量	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
第59図 PL.46-1 H13-19, 20	碗	13.4 6.7 6.2	微粒子 淡灰白色	飴釉? 釉色は暗褐色 透明釉	沖縄産施釉陶。口縁～底部資料。残存率2/3。轆轤成形。外面：高台を除き総釉。極細の貫入。内面：見込を蛇の目釉剥ぎ。胴下部に圈線、見込に丸を施釉。	— — 3.561～ 3.611	A-イ-1
" 2 " 2 H13-23	碗	— — 6.5	微粒子 淡黄色	白化粧 透明釉	沖縄産施釉陶。胴下部～底部資料。外面：水挽き、削り出し高台。高台内に「」字状の篋削り。畳付露胎、白土付着。内面：見込を蛇の目釉剥ぎ。砂目付着。内外面とも細かい貫入。	— — 3.529	A-イ-2
" 3 " 3 12	碗	10.6 5.0 4.0	微粒子 灰赤色	褐釉? 釉色は黄褐色	沖縄産施釉陶。口縁～底部資料。残存率2/3。外面：水挽き後、胴下部を回転篋削り、上部を回転横ナデ。削り出し高台。胴下部～高台内まで露胎。内面：釉は同一の釉と思われ、内面～口縁下まで厚く、外面は口縁～胴下部までは薄い。焼成時の釉だれが部分的に残る。	—	A-イ-8
" 4 " 4 66	小碗	8.0 4.3 3.6	微粒子 白色	白化粧 透明釉 飴釉? 呉須	沖縄産施釉陶。外面水挽き、削り出し高台、胴部に呉須花文。釉は白化粧後、透明釉を施し畳付露胎。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。口唇部で部分的に飴釉。内外面とも粗い貫入。	-2.141 -1.406 3.491	A-ウ-5
" 5 " 5 H13-14(2)	小碗	8.2 3.9 3.8	細粒子 灰白色	白化粧	沖縄産施釉陶。外面、畳付を除き総釉。不明瞭な極細の貫入。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。見込と畳付に白土付着。	— — 3.609	A-ウ-1
" 6 " 6 H13-13(1)	小碗	7.9 4.0 3.5	微粒子 暗灰色	白化粧	沖縄産施釉陶。外面水挽き、削り出し高台、高台内に付着物あり。畳付白土付着。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。	— — 3.708	A-ウ-2
" 7 " 7 16	小碗	8.2 4.2 3.6	微粒子 白色	白化粧 透明釉	沖縄産施釉陶。轆轤成形。削り出し高台。畳付白土付着。胴下部に施釉時の指痕がみられる。不明瞭な貫入。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。	— — 3.653	A-ウ-3
" 8 " 8 H13-14(5)	茶碗	7.6 3.9 3.8	微粒子 黄灰色	白化粧	沖縄産施釉陶。轆轤成形。削り出し高台。高台内付着物あり。畳付白土付着。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。口唇～胴上部釉剥ぎ。黒色粒子点。内外面とも細かい貫入。	— — 3.609	A-エ-1
" 9 " 9 H13-17	茶碗	7.2 4.6 4.2	細粒子 淡黄白色	白化粧 透明釉	沖縄産施釉陶。轆轤成形。胴下部水挽き。削り出し高台、高台内に多量の付着物。畳付白土付着。内面見込を蛇の目釉剥ぎ。口縁内側を釉剥ぎ。貫入なし。	— — 3.673	A-エ-4
" 10 " 10 H13-74	茶碗	7.0 4.8 3.8	細粒子 灰色	透明釉 釉色は灰白色	沖縄産施釉陶。削り出し高台。畳付、口唇部露胎。見込を蛇の目釉剥ぎ、付着物あり。不明瞭な極細の貫入。	-0.076 -1.397 3.703	A-エ-2

第33表 27号墓出土遺物観察一覧表(2)

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 ／材質、 形状	釉薬及び化 粧土／重量	特徴	出土地点(m) X(縦) Y(横) Z(標高)	整理番号
" 11 " 11 H13-14(1)	茶碗	6.8 5.0 4.1	微粒子 灰色	白化粧 透明釉	沖繩産施釉陶。轆轤成形。外面は畳付を除き総釉。内面は口縁一部を釉剥ぎ。削り出し高台。胴部外面に付着物。貫入なし。	- - 3.609	A-エ-3
" 12 " 12 H13-14(4)	蓋	1.3 2.4 5.6 最大径7.4	微粒子 濁灰白色	透明釉	沖繩産施釉陶。外面施釉、極細の貫入。茶系色の微粒子点在。端上部を回転篋削り。内面無釉、回転横ナデ成形。	- - 3.609	A-シ-2
" 13 " 13 H13-12	蓋	1.5 2.4 5.0 最大径7.2	微粒子 灰白色	透明釉	沖繩産施釉陶。外面施釉、不明瞭な極細の貫入。黒色微粒子点在。呉須で小円(一滴垂らす?)を施釉。内面無釉、回転横ナデ成形。	- - 3.725	A-シ-3
第60図 14 PL.47-14 70	瓶	2.8 16.9 4.8	微粒子 灰黄色	灰釉? オリーブ黄 の発色	沖繩産施釉陶。頸～口縁部が傾く。釉は内面が頸部中途まで。外面は口縁から高台脇まで。高台脇に釉溜まり。全体的に細かい貫入。底部露胎。高台脇から畳付の一部で鉄の熔着痕あり。高台脇回転篋削り。	0.094 -1.454 3.730	A-ニ-15
" 15 " 15 23	瓶	3.2 15.5 6.2	微粒子 褐灰色	白化粧? 緑釉 オリーブ灰	頸部が細長く、口縁はラッパ状に外反する。胴部は球形で、幅広い凹線2条が巡る。底部は削り底で露胎。部分的に白化粧が残る。貫入なし。白化粧後、緑色の施釉か?	- - 3.529	A-ニ-12
" 16 " 16 65	瓶	2.3 13.8 5.1	微粒子 黄白色	白化粧 透明釉 呉須 飴釉	口縁部は直口し、腰部で張り出す。総釉掛け後、畳付を掻き取る。全体的に細かい貫入。内面は、頸部中途まで釉が施されている。	墓口東側表 採	A-ニ-14
" 17 " 17 14	瓶	2.0 14.6 4.6	微粒子 灰白色	褐釉	高台篋削り成形。釉は、内面が頸部途中から。外面は総釉掛け後、畳付は掻き取られる。焼成時の影響か、釉の発色は部分的で、半分以上が黒色系の発色を呈する。全体的に細かい貫入。底部に、付着物(目砂?)あり。熔着痕か?	- - 3.609	A-ニ-19
" 18 " 18 H13-14(11)	瓶	2.2 9.4 4.8	微粒子 淡灰黄色	白化粧	胴下部、畳付、高台内露胎。貫入なし。胴上部～肩部に回転篋削りによる凹線2条あり。	- - 3.609	A-ニ-1
" 19 " 19 H13-13(3)	瓶	1.9 9.0 3.7	微粒子 淡灰黄色	白化粧	高台脇回転篋削り。畳付、白土付着。総釉で焼成した際の熔着痕か?	- - 3.708	A-ニ-2
" 20 " 20 13	瓶	2.0 10 4.9	白色土	白化粧 透明釉	高台カンナ削り。釉は、内面が頸部中途まで、外面は高台際と高台内まで。畳付釉剥ぎ。細かい貫入。	- - 3.708	A-ニ-10
" 21 " 21 H13-14(8)	瓶	2.1 11.4 5.0	細粒子 灰黄色	白化粧 透明釉	総釉だが、胴部を境に釉色が異なる。胴下部に指痕、複数の幅狭の凹線。全体的に、混入物や付着物がみられ、粗成形。畳付に熔着痕。上半部のみ細かい貫入。	- - 3.609	A-ニ-3

第34表 27号墓出土遺物観察一覧表(3)

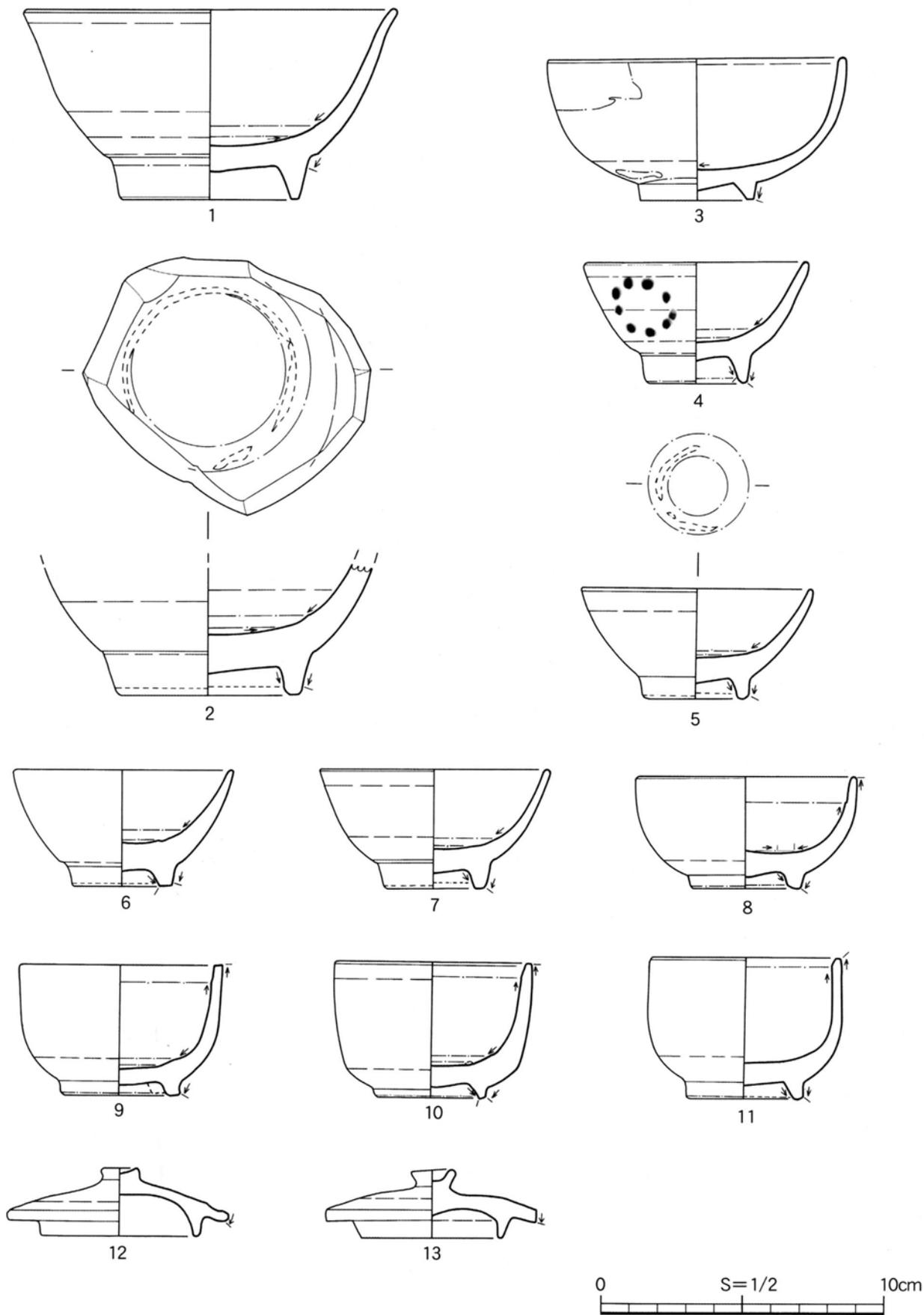
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 ／材質、 形状	釉葉及び化 粧土／重量	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
第61図 22 PL.48-22 82(2)	瓶	5.4 19.1 8.8	微粒子 灰褐色子 白砂粒子 を含む	灰釉? 釉色は暗灰 緑黄色	胴部回転横ナデ後、回転篋削り。脚部回転横ナデ、下部に凹線1条。一般的に「ピンシー」と証される器種。総釉だが、焼成条件のためか半分は露胎となり発色が異なる。内面は、口縁～頸部まで施釉。施釉部は細かい貫入。	-0.059 -1.487 3.699	A-ニ-16
" 23 " 23 74(1)	瓶	4.9 15.3 7.4	細粒子 灰橙色	外面:黒褐 釉 底部内面の 釉色は明赤 橙色	口縁部ナデ。頸～胴部水挽き、回転篋削り。脚部回転横ナデ。施釉範囲は外面～底面まで総釉。内面は頸部中途まで。	-0.076 -1.397 3.703	A-ニ-18
" 24 " 24 72、74(2)、 77	瓶	4.4 15.5 6.6	暗茶褐色 微粒子	黒褐釉?	頸部から胴部への移行は緩やかで、胴部は下膨れする。頸はやや細く、口縁部がラップ状に外反する。脚部は、高い上げ底。底部は削り出しによる。胴部と脚部の境に2条、脚下部に1条の沈線が廻る。内面は、水挽き。焼締めが強く、釉溜まり部分はざらつく。	(74) -0.076 -1.397 3.703 (77) -0.113 -1.380 3.690 (82) -0.059 -1.487 3.699	A-ニ-13
" 25 " 25 82(3)	瓶	- - 7.4	微粒子 赤褐色	無釉	胴下部、篋削り成形。胴上～頸部水挽き後、回転横ナデ。	-0.059 -1.487 3.699	B-テ-1
" 26 " 26 8	瓶	3.0 13.1 6.8	細粒子 黄白色	黒釉 黒褐色の釉	底部を削り出し、畳付を斜めに成形。胴部に縦位の線彫り。釉は頸部内面から畳付際までと低部に施釉。貫入なし。胴部に瘤状付着物。	- - 4.070	A-ニ-17
" 27 " 27 68	瓶	4.5 16.2 4.6	微粒子 黄白色	無釉?	底部はベタ底で糸切り痕や付着物あり。外面は胴下部回転篋削り。胴上～頸部、水挽き後、丁寧に回転横ナデ。	0.190 -1.411 3.773	B-テ-2
" 28 " 28 H13-14(10)	瓶	6.8	微粒子 淡黄色	呉須または 瑠璃釉? 釉色は濃藍 色	頸～口縁部、底部一部欠損。高台水挽き、高台内に付着物。畳付露胎。貫入なし。	墓口東側表 採	A-ニ-4
第62図29 PL.49-29 H13-13(4)	花生け	8.8 18.3 7.8 胴部最大径 10.6	微粒子 黄橙色	褐釉?	頸部両耳欠損。高台～胴部、回転篋削り。頸部水挽き。肩部凹線1。内面は頸～胴下部、水挽き。底面、指痕あり。	- - 3.708	A-ニ-5
" 30 " 30 H13-14(12)	花生け	4.2 11.9 6.2 胴部最大径 8.6	橙色	紺色塗料	頸部左右に瘤状(耳を簡略化したものか?)貼付。ほぼ全面に紺色の塗料が施され、胴部に銀色の花文を描く。高台～口縁回転篋削り。	- - 3.609	W-ア-1
" 31 " 31 H13-14(13)	瓶	- - 6.4	赤橙	紺色塗料	口縁部欠損。頸部左右に瘤状貼付。ほぼ全面に紺色の塗料が施され、胴部に銀色の花文を描く。高台～頸部回転篋削り。No.30と対。	- - 3.609	W-ア-2

第35表 27号墓出土遺物観察一覧表

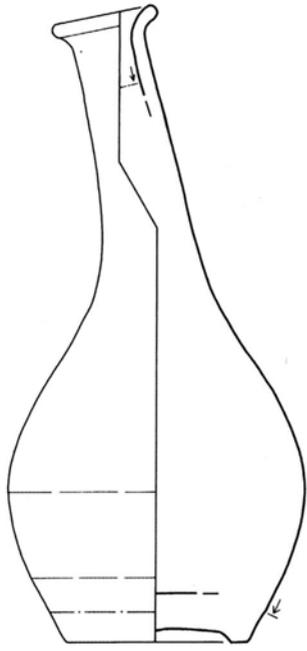
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 ／材質、 形状	釉薬及び化 粧土／重量	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
第62図 32 PL.49-32 H13-8	蓋	4.2 2.45 2.6	細粒子 灰色	白化粧後、 透明釉	水注蓋。つまみ径1.1cm、球形。 白化粧後、透明釉をつまみから 端部まで施釉。	- - 3.576	A-シ-7
" 33 " 12 H13-8	水注	4.0 6.3 4.0	粗粒子 灰色系	外面：白化 粧後、透明 釉 内面：黒釉	注口と弦受けを持つ。内面は黒 釉。外面は高台脇まで白化粧 後、胴下部まで透明釉を施し、 口唇～頸部内側を釉剥ぎ。底部 は削りだして畳付は内傾する。 胴部水挽き。	- - 4.070	A-セ-3
" 34 " 34 H13-14(7)	水注	3.3 6.7 4.1	微粒子 にぶい黄 褐色	外面：白化 粧後、透明 釉 内面：黒釉	外面：胴下部～肩部、水挽き。 胴下部～高台内無釉。細かい貫 入。 内面：口縁～頸部無釉、白土付 着。	- - 3.609	A-セ-1
" 35 " 35 H13-14(6)	水注	3.8 5.7 4.2	微粒子 灰色	外面：白化 粧後、透明 釉 内面：白化 粧？	注口、胴部一部欠損。胴部水挽 き。畳付に熔着痕。	- - 3.609	A-セ-2
" 36 " 36 H13-20	蓋	4.2 2.4 2.4 つまみ径1.3	細粒子 灰色	透明釉	水注蓋。つまみ1.3cm、球形。脚 高1.0 cm。釉はつまみ～端部ま で。貫入なし。	- - 3.561	A-シ-5
" 37 " 37 H13-14(3)	蓋	2.4 2.7 - 最大径 4.3	灰白色	白化粧後、 透明釉	水注蓋。端部一部欠損。つまみ 1.3cm、球形。釉はつまみ～端部 まで。細かい貫入。	- - 3.609	A-シ-1
" 38 " 38 H13-13(2)	蓋	4.8 2.8 3.5	灰白色	透明釉	つまみ1.3cm、球形。脚高1.2 cm。つまみ横下小円孔1。端部 の一部で歪み、垂れる。釉はつ まみ～端部まで。極細な貫入。	- - 3.708	A-シ-4
" 39 " 39 H13-33	酒注	3.5 9.2 7.4	微粒子 灰色	黒褐釉？	外面総釉後、畳付釉剥ぎ。高台 内砂目付。頸部内側に付着物。 全体的に極細な貫入。胴下部～ 肩部まで回転横ナデ。	- - 3.709	A-ス-1
" 40 " 40 3、7、9	香炉	13.5 7.3 7.5	橙色	紺色塗料	外面：口縁～肩部回転横ナデ。 肩～胴下部紺回転横ナデ、回転 篋削り。高台回転篋削り。高台 内露胎。畳付～口縁部まで紺色 塗料を施す。 内面：水挽き、肩～底面まで無 釉。	3, 7 墓庭表採 8, 9 EL=3.805 ～4.070	W-イ-1
第63図 41 PL.50-41 82(1)	蓋	8.9 2.5 - つまみ径3.3	微粒子 淡灰色	褐釉？ 釉色は灰黄 褐色	皿を伏せた器形。端部～つまみ 下、水挽き。内面蓋端部とつま み上部は無釉。No.42とセット。	-0.059 -1.487 3.699	A-シ-6
" 42 " 42 79	鍋	9.6 7.2 5.0	微粒子 淡灰色	外面：褐 釉？ 内面：黒 釉？	口縁左右に横耳1対。底面に貼 付三脚。高台脇回転横ナデ。胴 下～肩部水挽き。肩部凹線1 条。内面ナデ、底面水挽き。	-0.169 -1.419 3.669	A-ヌ-1
" 43 " 43 24	円盤状 製品	最大径 5.5 最小径 5.4 厚さ 1.0	微粒子 茶褐色	無釉／40g	日常品を円形に打割した製品。 遊具？	- - 3.501	B-チ-1
" 44 " 44 H13-30	鉢	26 - -	微粒子 明赤褐色	-	口縁～胴部資料。頸下部から胴 部に欠損痕、耳付？外面、胴～ 頸部回転篋削り。口縁部回転横 ナデ。内面回転横ナデ。	- - 3.623～ 3.649	A-ツ-1

第36表 27号墓出土遺物観察一覧表

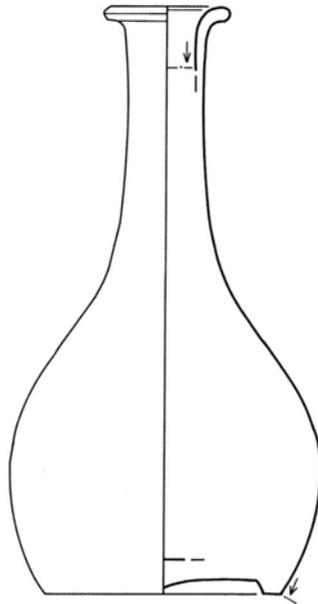
挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地、胎 土の色調 ／材質、 形状	釉薬及び化 粧土／重量	特徴	出土地点(m) X (縦) Y (横) Z (標高)	整理番号
" 45 " 45 H13-1	播鉢	30.4 13.0 13.0	細粒子 灰色、茶 褐色	-	胎土がサンドイッチ状。外面は 回転篋削り後、部分的にナデ。 口縁部回転横ナデ。内面は口縁 ～頸部回転横ナデ。胴～底部縦 位の幅狭の篋削りが巡る。	墓口東側表 採	B-エ-1
" 46 " 46 20	窯道具	6.4 - -	微粒子 赤灰褐色	無釉／351g	外面、胴部回転横ナデ。底部欠 損。胴部円筒状。付着物多数あ り。	- - 3.561	Y-ア-2
" 47 " 47 42	トチン	- 10.4 - 径10.8	微粒子 赤灰褐色	無釉／751g	外面、水挽き。胴部円筒状。上 部口縁～内面に白土や赤土が付 着。 底面糸切り痕あり。	- - 3.494	Y-ア-1
第64図 48 PL.51-48 61	煙管 (雁首)	長さ4.3 火皿径0.9 立上り1.3	銅製	8.44g	断面六角形。羅字一部残存。 No.51とセット?	-2.081 -1.452 3.507	M-ウ-4
" 49 " 49 36(2)	煙管 (雁首)	長さ3.5 火皿径1.2 立上り1.7	銅製	13.09g	円形火皿。羅字一部残存。	- - 3.807	M-ウ-8
" 50 " 50 36	煙管 (雁首)	長さ4.4	銅製	7.04g	火皿欠損。竹製羅字一部残存。	- - 3.807	M-ウ-6
" 51 " 51 86	煙管 (吸口)	長さ12.45 吸口径0.5	銅製	9.34g (羅字込み)	断面六角形。竹製羅字一部残存。 No.61セット?	- - -	M-ウ-5
" 52 " 52 H11-2	簪	長さ15.4	銅製	0.1g	首・竿部断面六角形。 匙形。女性用。	No. 27 石厨子内	M-イ-5
" 53 " 53 H13-14(9)	指輪	直径 2.1	銅製	10g	表裏面に鍍金。	- - 3.609	M-カ-1
" 54 " 54 H11-1	土鈴	高さ3.8 幅3.1	微粒子 にぶい 橙・橙	15.92g	篋削り後、ナデ成形。有孔の柄 に球状の身からなる。胴下部に 1条溝を施し、その両端に孔が ある。内部に8～9mmの土球?を 2個配する。	No. 27 石厨子内	B-ト-1
" 55 " 55	銭貨	外径2.4 孔径0.7 厚さ0.1	銅製	3.02g	寛永通宝	墓庭	-
" 56 " 56 38	硯	長さ13.2 幅6.6	ゴム製?	-	墨道(岡)の部分。	- - 3.551	Z-ア-1



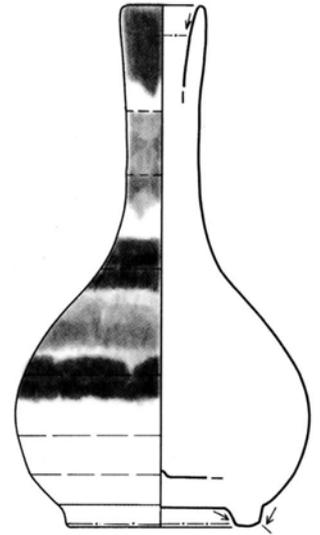
第59図 (PL.46) 27号墓出土遺物(1)



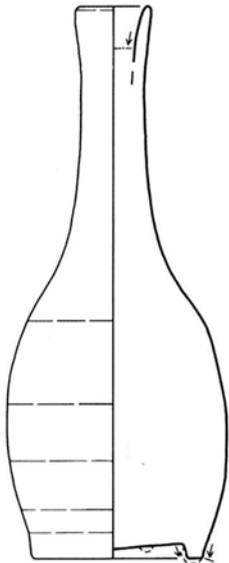
14



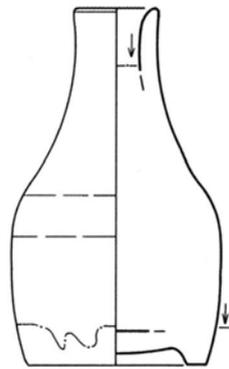
15



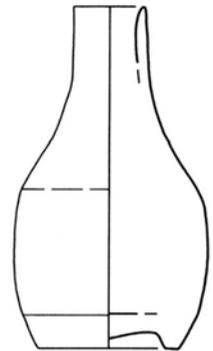
16



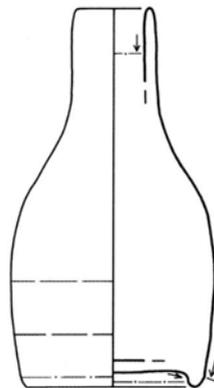
17



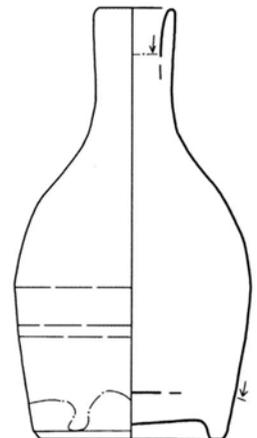
18



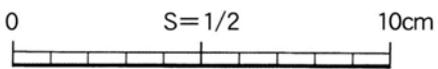
19



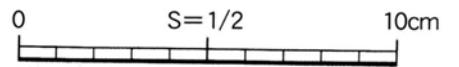
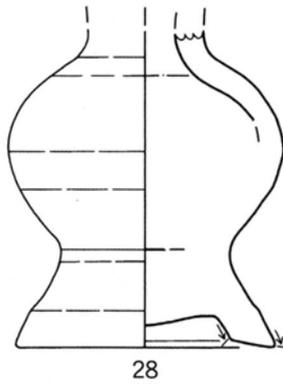
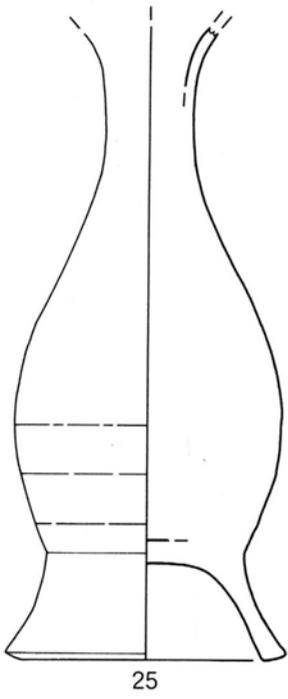
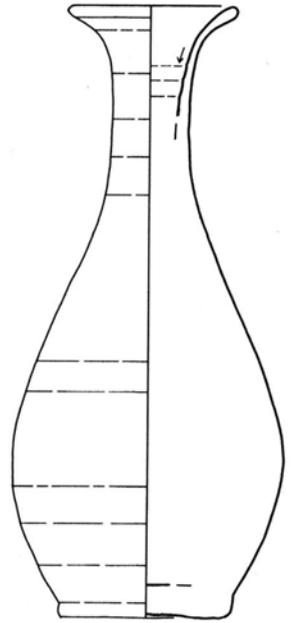
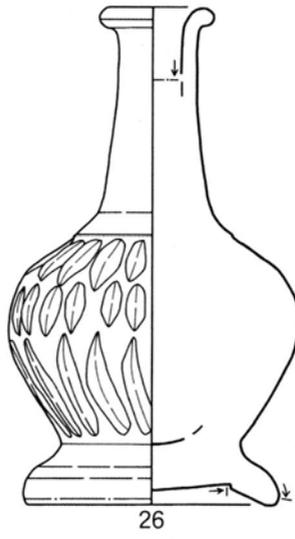
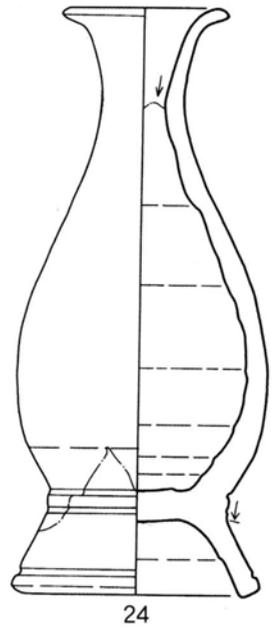
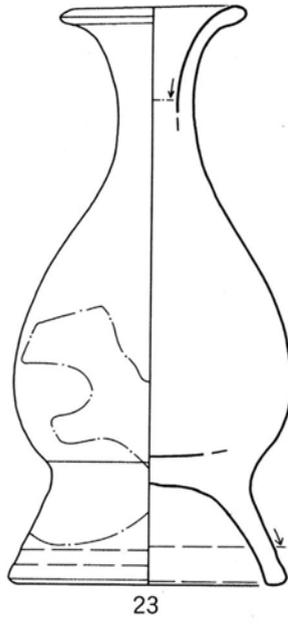
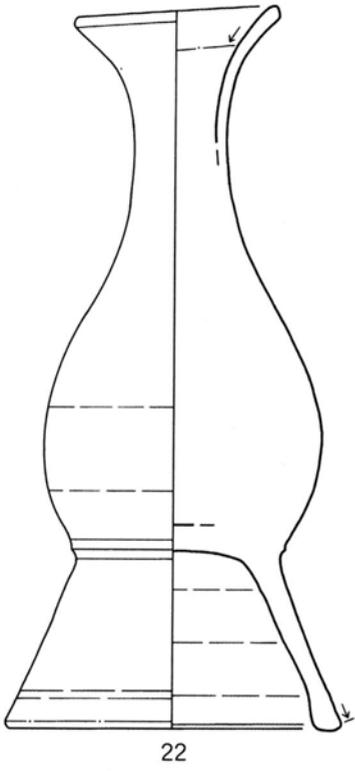
20



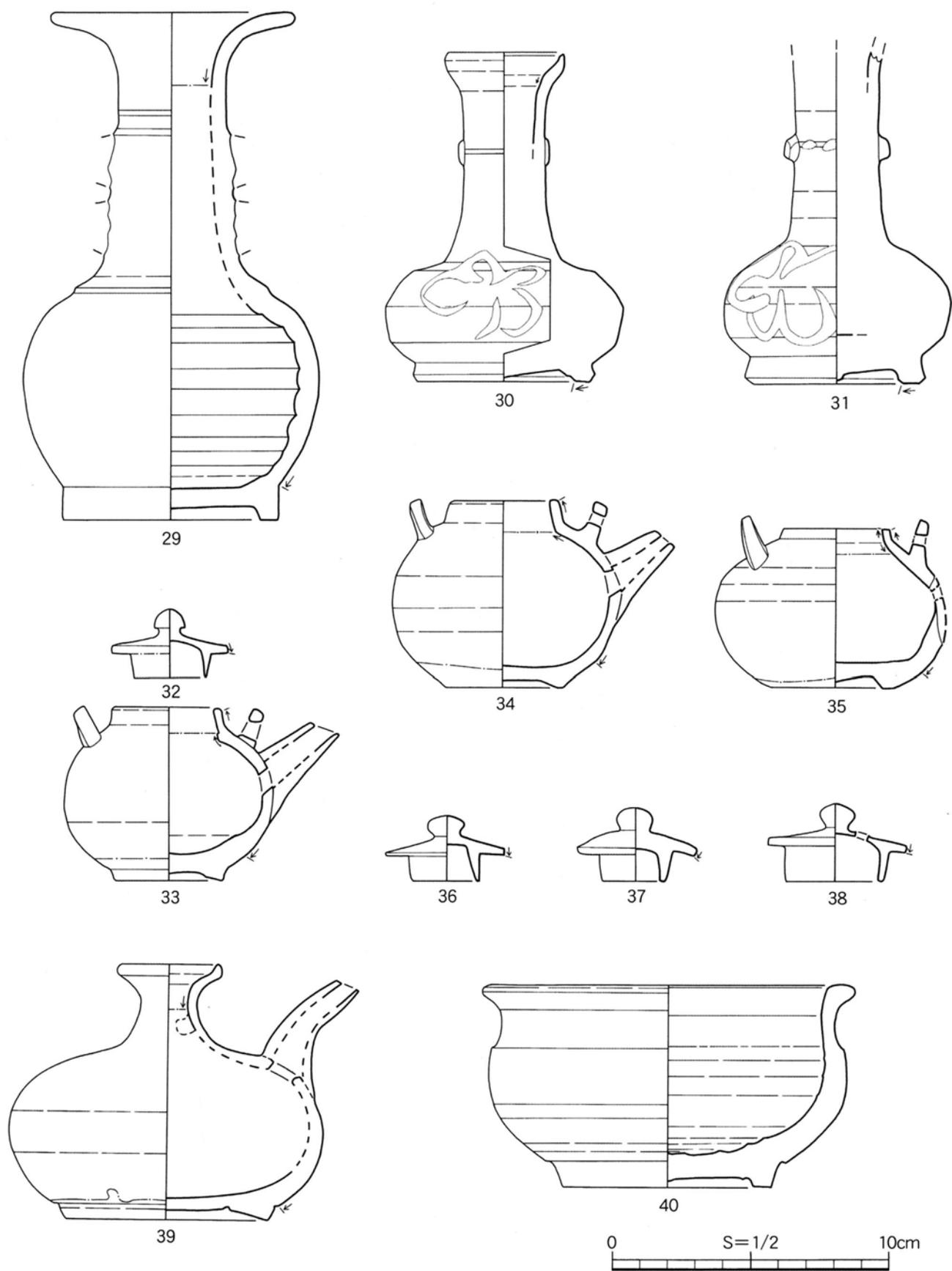
21



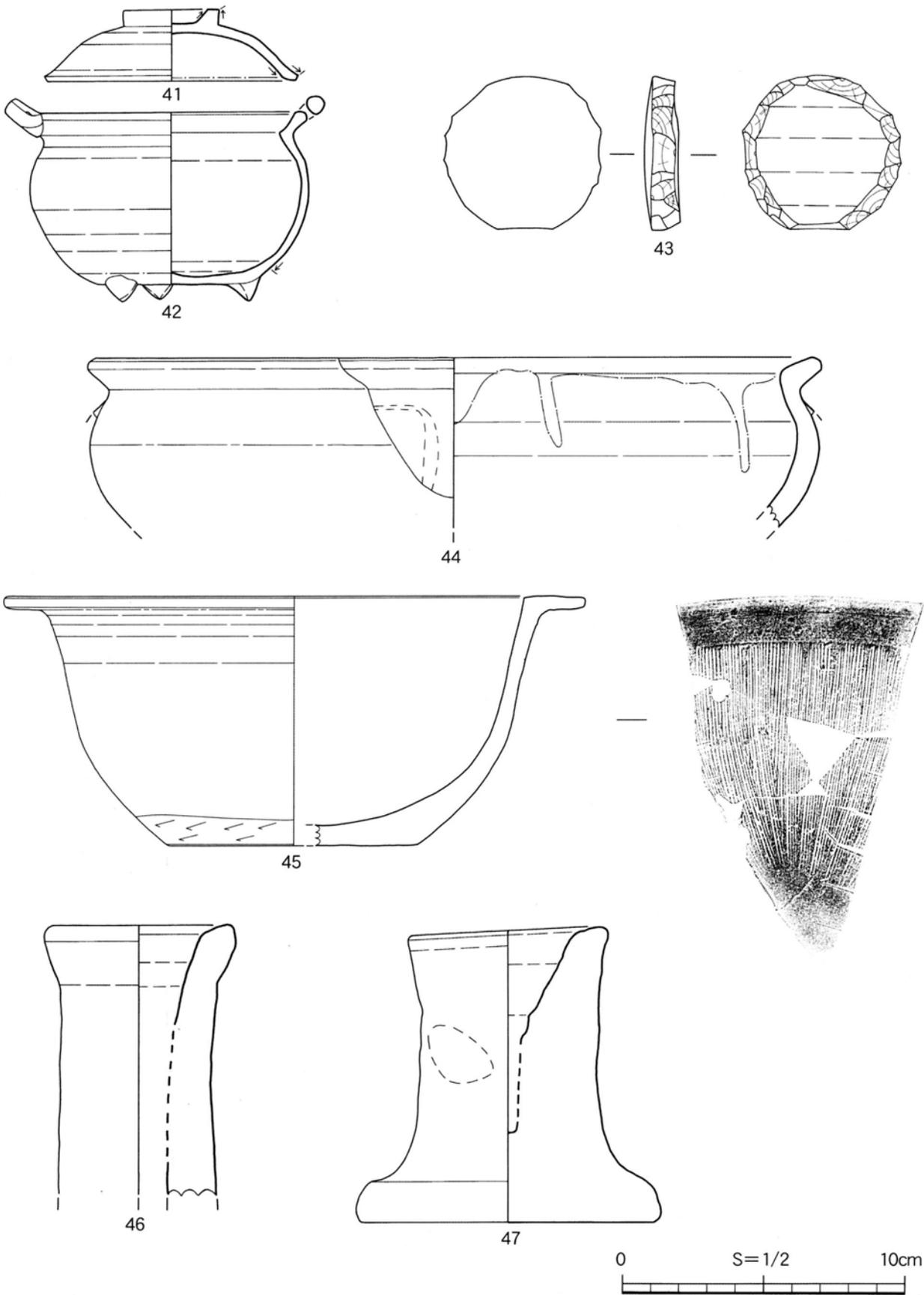
第60図 (PL.47) 27号墓出土遺物 (2)



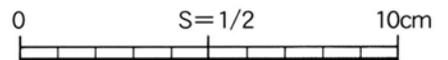
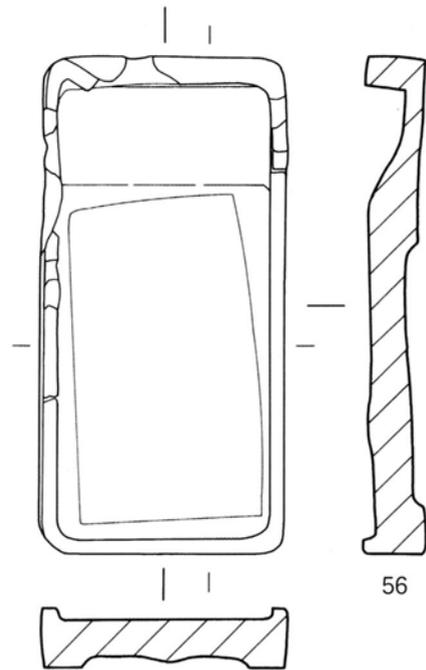
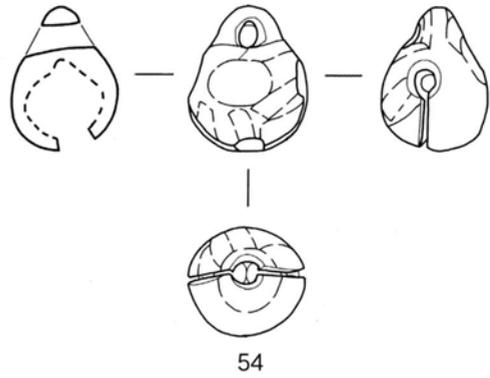
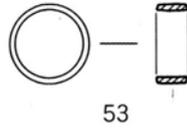
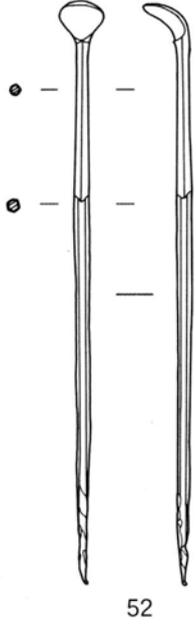
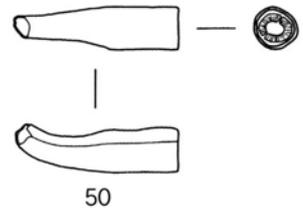
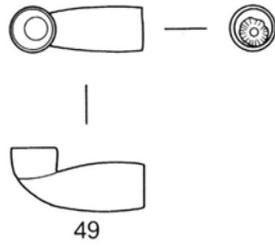
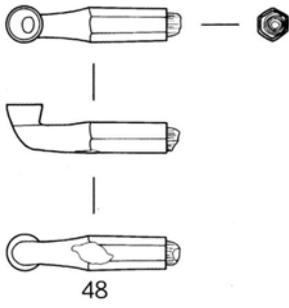
—第61图 (PL.48) 27号墓出土遗物 (3)



第62図 (PL.49) 27号墓出土遺物 (4)



蓋(41) 鍋(42) 円盤状製品(43) 鉢(44) 播鉢(45) 窯道具(46) トチン(47)
 第63図 (PL.50) 27号墓出土遺物(5)



煙管(48~51) かんざし(52)・指輪(53)・土鈴(54)・錢貨(55)・硯(56)
第64図 (PL.51) 27号墓出土遺物(6)

第4章 第3節2 内間西原近世墓群出土人骨について

第37表 21号墓出土人骨観察一覧表

(土肥直美、島袋利恵子、北條真子)

墓番号	発掘番号	保存状態	頭骨	下顎	寛骨	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨	腓骨	足の骨	鑑定結果のまとめ	備考
21号墓	1	焼けた骨				男性1、性別不明成人2	性別不明成人1						3体分(男性1、性別不明成人2)	骨は火を受けているが、変形や収縮がほとんど認められず、一旦骨になった後に焼かれたものと思われる。
	2	焼けた骨				男性1、性別不明成人1	性別不明成人2	男性1	性別不明成人2、小児2	男性1、性別不明成人1、幼児1	性別不明成人1	性別不明成人1	5体分(男性1、性別不明成人1、小児2、幼児1)	
	3	不良	性別不明成人3、幼児1	性別不明成人1	男性1、性別不明成人1	男性1、性別不明成人2	男性1、性別不明成人3、幼児1	性別不明成人4	男性1、性別不明成人1	性別不明成人3、幼児1	男性1、性別不明成人2	男性1、女性1	5体分(男性1、女性1、性別不明成人2、幼児1)	
	8	悪										性別不明成人1	少なくとも性別不明成人1体分が含まれている。	
	9	不良				女性1、性別不明成人2		性別不明成人1	男性1、性別不明成人1	性別不明成人2		小児1	4体分(男性1、女性1、性別不明成人1、小児1)	脛骨に刃物によってつけられた可能性のある傷跡が認められた。生前の傷ではないが、洗骨時のものかどうかは分からない。
	10	不良	男性1	性別不明老年1		性別不明成人3	性別不明成人2	性別不明成人1	女性1、性別不明成人1			男性1、性別不明成人1	3体分(男性1、女性1、性別不明成人1)	
	計												全体で少なくとも21体分が含まれる(成人男性5、成人女性3、性別不明成人8、小児3、幼児2)	

第38表 24号墓出土人骨観察一覧表

墓番号	発掘番号	保存状態	頭骨	下顎	寛骨	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨	腓骨	足の骨	鑑定結果のまとめ	備考
24号墓	1	焼けた骨			性別不明成人1	性別不明成人2	性別不明成人1					性別不明成人1	少なくとも性別不明成人2体分が含まれている。	骨片には亀裂が入り、著しく変形している。1号墓の焼骨とは異なり、火葬骨のようにみえる。
	3	悪				性別不明成人1			骨片あり				少なくとも性別不明成人1体分が含まれている。	大腿骨骨体部に布付着。
	8	悪					男性1		性別不明成人1			性別不明成人1	少なくとも男性1体分が含まれている。	
	9	悪			男性1		性別不明成人1、幼児1	性別不明成人1				性別不明成人2	3体分(男性1、性別不明成人1、幼児1)	
	10	悪							性別不明成人1				少なくとも性別不明成人1体分が含まれている。	
	11	悪							性別不明成人1			性別不明成人1	少なくとも性別不明成人1体分が含まれている。	
	12	悪											保存状態不良のため詳細不明	
	計												全体で少なくとも9体分が含まれる(成人男性2、性別不明成人6、幼児1)	

第39表 25号墓出土人骨観察一覧表

墓番号	発掘番号	保存状態	頭骨	下顎	寛骨	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨	腓骨	足の骨	鑑定結果のまとめ	備考
25号墓	1	悪							性別不明成人1				少なくとも性別不明成人1体分が含まれている。	
	2	不良	性別不明成人1	性別不明成人1	小児1	男性1、女性1	男性1	性別1、性別不明成人1	女性1	女性1、性別不明成人1	性別不明成人2	男性1	3体分(男性1、女性1、小児1)	
	計												全体で少なくとも4体分が含まれる(成人男性1、成人女性1、性別不明成人1、小児1)	

第40表 27号墓出土人骨観察一覧表

墓番号	発掘番号	保存状態	頭骨	下顎	寛骨	上腕骨	尺骨	桡骨	大腿骨	脛骨	腓骨	足の骨	鑑定結果のまとめ	備考
27号墓	9	不良	成人1、小児1、幼児1	幼児1	小児1、幼児1	若年1、小児1、幼児1	小児1、幼児1	小児1	男性2、女性1、若年1、小児1、幼児1	小児1、幼児1	小児1		6体分(男性2、女性1、若年1、小児1、幼児1)	
	10	不良	熟年女性1		熟年女性1(前耳状溝深い)	熟年女性1	熟年女性1	熟年女性1	熟年女性1	熟年女性1			2体分(熟年女性1、幼児1)	幼児骨は乳歯より
	15	悪	成人1、小児1、幼児1	熟年男性1、女性1		成人1	成人1	成人1	成人1	成人1			2体分(熟年男性1、女性1)	
	16	不良	熟年男性1	熟年男性1	熟年男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1(やや膨隆)	男性1		熟年男性1	獅子の焼物
	18	良	老年女性1	老年女性1	老年女性1(前耳状溝有り)	女性1	女性1	女性1	女性1	女性1	女性1	女性1	老年女性1	
	19	悪		男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1			男性1	頑丈な骨
	20	悪				男性1			男性1	男性1			男性1	オガクズ状
	22	悪			男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1		男性1	頑丈な骨だが、オガクズ状になっている
	23	悪	成人1			成人2、幼児1	成人2	成人1、幼児1	成人2	成人2			4体分(男性2、女性1、幼児1)	女性用ジーファー
	24	不良	女性1、乳児1	女性1		女性1、幼児1	乳児1	女性1、乳児1	女性1、乳児1	女性1、幼児1(膨隆)、乳児1	女性1		3体分(女性1、幼児1、乳児1)	
	26	不良	小児1	小児1	小児1	小児1	小児1	成人女性1、小児1	小児1	成人女性1、小児1			2体分(男性1、小児1)	
	27	不良				男性1、女性1、小児1、幼児1			女性1、男性1、小児1 or 幼児1	男性1、女性1、小児1、幼児1			4体分(男性1、女性1、小児1、幼児1)	土鈴。女性用ジーファー
	28	悪	老年女性1			成人	成人	成人	男性1、女性1				2体分(男性1、老年女性1)	
	29	不良	女性1			女性1	女性1	女性1	女性1				女性1	
	30	悪	成年女性1			女性1	女性1	女性1	女性1	女性1	女性1		成年女性1	歯の咬耗弱い
	計												全体で少なくとも32体分が含まれる(成人男性12、成人女性10、若年1、小児3、幼児5、乳児1)	
27-袖	1	不良	成年~熟年男性1		成年~熟年男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	男性1	成年~熟年男性1	
	2	良	女性1	女性1		女性1	女性1	女性1	女性1	女性1	女性1		女性1	
	3	不良			男性1	男性1、性別不明成人1			男性1、性別不明成人1	成人		成人	2体分(男性1、性別不明成人1)	
	4	不良	性別不明成人1						性別不明成人1、乳児1	性別不明成人1、乳児1			2体分(性別不明成人1、乳児1)	十字縫合。上顎左犬歯が歯槽中で不正に萌出
	5	悪											2体分(性別不明成人1、誕生前後1)(骨片のみ)	乳歯冠：形成途中→誕生前後
	6	悪											性別不明成人1	ごく少量の骨片と歯(あまり磨り減っていないことから成年か)
	7	不良			性別不明成人1	幼児1	性別不明成人1	性別不明成人1	幼児1		性別不明成人1	性別不明成人1	2体分(性別不明成人1、幼児1)	幼児：骨端が癒着したばかり。乳犬歯あり
	8	悪											乳児1(骨片のみ)	下顎第1臼歯の状態より1歳未満と思われる。カンヅク貝多数出土
	9	悪											乳児1(骨片のみ)	乳歯冠が形成途中→6ヶ月前後か
	10	良	男性1	男性1	男性1	男性1			男性1	男性1			男性1	腰椎にやや変形あり。下顎右側第3大臼歯が不整萌出
	計												全体で少なくとも14体分が含まれる(成人男性3、成人女性1、性別不明成人5、幼児1、乳児3、誕生前後1)	

第4章 第3節3 内間西原近世墓群に関する民俗学的所見

2002年7月31日
沖縄民俗学会々員
玉木順彦

はじめに

内間西原近世墓群に関する民俗学的な所見を簡潔に報告する。私に与えられた課題は墓所の異なった場所から出土した下記の遺物に関する民俗学的な分析である。

- (1) 墓室〔玄室〕から出土した獣骨。
- (2) 墓落成祭祀史料から想定される墓室出土遺物。
- (3) 墓庭から出土した古銭。

以下、順次みていくことにする。

(1) 墓室から出土した獣骨

墓室内から出土した獣骨は頭骨で分析を待たねばならないが、猪か豚という（琉球大学農学部の川島由次教授）。一般的に沖縄では墓が完成すると三世相・風水師などが日取りを行い、墓で墓主が拵えた供物や御馳走をひろげ、親戚や隣近所の人々を招待して、歌・三線・躍りと盛大な落成祝いが挙行される。供物はニワトリ1対・豚の頭1対・蟹1対・エビ1対などで、蟹は生きたまま供えられ、祝いが終ると「墓の守り神になりなさい」と言って解き放す。豚の頭の肉は料理に使い、頭蓋骨だけを墓敷内に埋めることが慣例であった。また、墓の完成前夜に墓室内に豚の頭蓋骨を埋め、酒を交わす墓大工だけの儀礼があった〔戦後、途絶えた〕。

このことから今回発見された墓室内出土の獣頭骨は①墓主による落成祝いの供物を埋めたもの、②墓大工（石大工）の儀礼で埋められたもの、が考えられる。墓室内のほぼ中央に墓口に頭を向けて埋納されていることから、墓大工の儀礼に使用された獣頭骨の蓋念性が高い。とすると、同墓に最接する地下（墓周辺）あるいは袖石垣内にも獣頭骨が埋納されているかも知れない。

上記のように墓大工の儀礼は戦後途絶え、戦前期に活躍した多くの石工技術者が沖縄戦や高齢で亡くなり、儀礼を継承しないまま現代に至っている。墓大工の儀礼を調査した記録は、現在のところ見当たらない。今後、墓大工の儀礼に関する記録の発掘が待たれる。

余談ではあるが家大工の（木大工）も独自の儀礼を持ち、ディンダティ（起工式）の夜に札の頭蓋骨を屋敷の中心に四肢骨を屋敷の四隅に埋めて、無事完成と子孫繁栄を願う儀礼が棟梁を中心に行われていた〔彼の宜見の儀礼だという〕。

(2) 墓落成祭祀史料から想定される墓室出土遺物

風水師が墓の落成時に墓室内でおこなう儀礼を記した19世紀半ばの古文書が残されている。この史料は久米島の某家所蔵で『墓法選擇記分金法』と表題が付されている。墓室内における儀礼が以下のとおりである。

墓之祭祀并骨移之時法式

- 一、新墓口を開キ兼テ内ニ入置候阿たん取出シ候事
- 一、右引次潮花を以墓内清メ候事
- 一、右引次内之正面ニ瓦立候事

但 瓦之前江塩式俵・炭辰俵・昆布式丸キ・朱紙を折差上候、
此備ひ物ハ引取不申事

- 一、右引次木札四ツ之内ハ八卦之式ツハ奥之すみ左右、朱書ハ
外ニ向て立、乾三八前々すみ朱書ハ内ニ向て立
- 一、右引次朱紙二相調置候説文一瓦之前二相備ひ候事
- 一、右引次土地江台を居シ御酒一對盃立、香炉居し百田紙
十五枚相備ひ御香五本上ケ、右之百田紙三枚奥之左之
すみ・三枚ハ右之すみ・三枚ハ土地真中江此番之通ニ
而焼上、其上ニ御酒御祭り仕候事
- 一、右引次土地四ツ之すみ井真中江五寸釘壺本完打込候事
- 一、右引次喜包五度ならし候事
- 一、右引次御拝相勤候事

右通相済候ハハ勤人墓内より出候事

但 以上ハ墓内之勤ニ而候ハハ、尤勤人数ハ他人之高位老人
之方より色衣を以相勤候事



墓内ノ勤ノ時ノ順

注目すべきことは墓室内に瓦1枚・木札4枚が納められることである。瓦は「墓中符」(〔表〕陽壙符・〔裏〕陰壙符)からなり、死者がなく子孫の長命富貴をもたらす符：県教委文化課『金石文』では「瓦護符」とある)。木札(祈祷札)は墓室の四隅に立てられた。風水師が直接指導した墓であれば、墓中符や木札が配置されたことは容易に想像がつく。ただし、木札は時間の経過とともに朽ちるので確認は困難だと思われる。墓中符は石製も多く確認されている。また、五寸釘を墓室内の四隅と真中に1本ずつ打ち込むとあり、今後墓所から出土する釘はその場所・寸法に留意する必要がある。

(3) 墓庭から出土した古銭

沖縄では、人が亡くなると日常使用した手拭い・櫛・煙管・鏡などの品物を副葬品として棺桶に入れる習俗が定着している。古銭は、被葬者があの世で生活するのに必要な品物を購入するため(いわゆるグソージン〈後生銭〉)に副葬品として棺桶に入れると説明される。ために、厨子甕〔蔵骨器〕中や墓室床、イケ(33年忌〈糸満市周辺地域では洗骨〉を終えた遺骨を合葬する施設)から見つかるのが一般的である。

さて、今回の発掘で見つかった古銭(1枚)は墓口近くの墓庭に意図的に埋められた可能性が高いという。報告者(玉木)は葬送儀礼や造墓儀礼(墓の建築儀礼)の中に、墓庭に古銭を埋める民俗事例を寡聞にして知らない。ただ、古銭の出土した場所が墓敷(墓室+墓庭)のほぼ中央に位置する可能性があるという。だとすると、工事の着工に先立って行われる地鎮祭に墓敷の中央・四隅を拝む儀礼との関連性が考えられる。また、上記〔(2)〕で見たように風水師が造墓及び造墓儀礼に大きく関わっており、風水師が実行する儀礼との関連性も想定される。

したがって、今後これまで報告された造墓に関する報告書や古墓発掘担当者からの情報収集、あるいは古銭を前提とした詳細な造墓儀礼に関する聴取調査などによる事例収集が必要となろう。

参考文献

- 山里純一 1997.2 『沖縄の魔除けとまじない』 第一書房 p102 沖縄のフーフダ(符札)
- 沖縄県教育委員会 昭和60年 『金石文-歴史資料調査報告書V-』

第4章 第3節4 内間西原近世墓群の地質及び石厨子の石質等について

2002年6月27日

真和志高等学校

神谷 厚昭

1. 地質

①墓群の見られる場所は全体的に琉球層群（琉球石灰岩）下部層からなる。琉球層群は上部から順に牧港石灰岩、読谷石灰岩、那覇石灰岩に区分されているが、古墓群域の石灰岩は那覇石灰岩に相当するものである。那覇石灰岩相当層は全体に碎屑性の石灰岩からなるのが特徴である。

②一般に那覇石灰岩の主体は碎屑性有孔虫石灰岩からなるが、当古墓群地域はそれよりも下部に相当すると思われる。岩質的には有孔虫が少なく、多くは石灰質及び非石灰質な泥～砂の固結したものである。（岩石名は碎屑性石灰岩または石灰岩砂岩）

③カンジャーヤーガマ遺跡の石灰岩は比較的固結が進んでいるが2番目に観察した墓の部分は固結度の低い部分である。つまり、下部が比較的固結が進み硬く、上部が未固結で軟岩からなる。このような琉球石灰岩層中に一般的に観察でき、両者の間に科学組成上の大きな違いは無いといわれている。

④カンジャーヤーガマ遺跡の岩盤下部の石灰岩が赤褐色になっているのが観察された。赤褐色化しているのは石灰岩の表面だけである。現地における観察では人工的な発色か、自然のものか決められなかった。ただし、表面だけが変色していることから石灰岩が陸上に現れてから二次的に変化していることは間違いない。

⑤持ち帰った標本を見ると、石灰岩の表面が赤褐色化し、さらにその外側が黒色化しているのが認められる。同じ標本を過酸化水素水に入れると激しく発砲し、マンガン成分が確認できる。標本の様子からすると色の変化は自然的なものと考えられる。以上の事実は現地から人工遺物が発見されないことと整合性がある。

⑥塩酸処理を施すと、わずかではあるが非石灰質残滓が残る。顕微鏡で観察した結果、多くは無色透明の石英・長石類、黒～黒褐色のマンガン、銀白色板状の自雲母類である。鉱物組成からマンガン以外は島尻層の砂岩（ニービ）に由来するものと推定される。

2. 21号墓出土の石厨子の石質

石厨子の石質は有孔虫碎屑性石灰岩である。基本的には古墓群をつくる岩石とほぼ同質のものである。ただし、石材が同所で入手したものかどうかはわからない。

第4章 まとめ

1. 内間遺跡

調査の結果、調査区内は沖縄戦当時の弾痕と思われる穴や民家の基礎工事等により大きく攪乱を受けており、攪乱を免れた範囲からは沖縄産陶器を主体とする僅かな遺物包含層の堆積が認められるという状況であった。

出土遺構については、土坑、溝などが検出されており、これら遺構内の出土遺物は近世後半から近代の年代が与えられる。よってこれらの遺構は当該期の内間集落に帰属するものと思われる。集落内における位置としては屋号「知念」家の旧屋敷裏手に当たり、屋敷施設の一部と推定されるが、屋敷内における機能や役割については不明である。

出土遺物は、各包含層で沖縄産陶器を主体とし、若干のグスク土器及びグスク期の輸入陶磁器を含むという組成である。調査区一帯は「上ノ山」丘陵南斜面の裾部に位置し、過去に地滑災害(1967年)が報告された地域であり、地形上、常に上方の土砂が流入する因子を有する。このことからグスク期の出土遺物の相当数が混入したものと想定される。

今調査地の上方では過去において1966(昭和41)年の試掘、1979(昭和54)年の下水道工事と2地点でのグスク期の遺物包含層の発見があるが、何れも内間児童センター(旧内間公民館)から同センター南側の市道33号線までの一帯から得られている。今回の調査は市道33号線以南の状況を確認するものであったが、結果として近世～近代期の内間集落が複合する遺跡縁辺部の様相を示すものと考えられた。今回の調査結果から内間遺跡の中核地域は市道33号線～内間児童センター一帯にあるものと推定される。

〈 参考文献 〉

- ・内間字誌編集委員会 『内間字誌』 内間自治会 昭和56年12月
- ・沖縄大百科事典刊行事務局 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1991年
- ・浦添市教育委員会 『浦添市史』 第4巻資料編3 浦添の民俗 1983年3月
- ・『角川地名大辞典』 編集委員会編 『角川地名大辞典 47沖縄県』 角川書店 昭和61年
- ・浦添市教育委員会 『浦添の文化財－遺跡分布調査報告－』 昭和55年3月
- ・岡山県立美術館 『日中国交正常化30周年記念 北京 故宮博物院 黄金の輝き展図録』 2002年4月
- ・島袋 洋ほか 『天界寺I－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年
- ・当真嗣一 上原静ほか 『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査－』 沖縄県教育庁文化課 昭和63年3月
- ・盛本 勲ほか 『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター2001年
- ・『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』 九州近世陶磁学会 2000年
- ・島 弘 玉城安明 内間靖ほか 『壺屋古窯群I』 那覇市教育委員会 1992年
- ・『沖縄のやきもの－南海からの香り－』 佐賀県立九州陶磁文化館 1998年
- ・安里進 上原政昌 家田淳一 「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」 名護市立博物館紀要『あじま』 3 1987年

2. 内間カンジャーヤーガマ遺跡

本遺跡は地域で鍛冶の伝承地と認識されている遺跡ですが、中国産陶磁器が埋納されていたことがわかり15世紀前半頃の祭祀関連遺跡が想定された。一方、遺跡名称の由来（地域の伝承）を考えると鍛冶を行っていた可能性は否定できない。例えば短期間に移動する鍛冶屋が存在した可能性も考えられる。しかし、発掘調査では鍛冶関連遺構は未確認で、採取された砂鉄も自然生成物という分析結果のためこれ以上の言及は不可能と判断された。以下で検出した遺構及び出土遺物について整理し、当遺跡がどのような環境であったか検討していくこととする。なお、第1・2層の遺構と遺物については、戦時中に持ち込まれた多量の雑器で占められるため割愛する。

出土した中国産陶磁器（青磁皿・盤）は洞穴の前庭部を平坦に造成する過程で埋められていた。平場を石粉で整地した後、その端部からは拳大程の丸石を緩やかに傾斜させて敷き詰めることから一連の造成であることが考えられた。石敷きを除去すると石灰岩岩盤の露頭が目立ち、岩盤の間には2枚の平板状の切石が検出された。石敷き直下から出土していることからこの敷石遺構も一連の造成に伴うものと判断された。

第3層以下の出土遺物は先述の埋納陶磁器以外では石製香炉のみであった。この香炉は三足付きで円筒形を呈しており、裏返し状態で石敷きから検出された。当地で使用していたものが平場造成に伴って再利用されたのであれば、一帯が拝所であった裏付けになるがその根拠を提示し得ないので可能性の範囲として止めておく。

ところで、県内の中国産陶磁器の埋納事例は今帰仁城跡正殿（註1）や斎場御嶽三庫理（註2）等で確認されており、「地鎮」や「鎮め」等の行為で解釈されている。先述のとおり本遺跡は祭祀関連遺跡を想定しておりその性格は当初「御嶽」が考えられたが近世文書等で確認できる内間村の御嶽は別地点に所在しているためその可能性は低いと思われた。

次に、発掘調査で検出された石敷き遺構と安謝川に接する遺跡の立地状況、本遺跡上方に所在する按司御墓（註3）から、当地が墓関連施設であった可能性を提示する。本遺跡が岩陰囲い込み墓と仮定すれば青磁の埋納は墓庭造成に伴うものか死者の副葬品の可能性が考えられる。石敷き遺構は墓道、つまり船で墓参していたことが考えられる。また、別の見方をすれば一次葬で洞穴が使用され、二次葬で按司御墓に葬る機能分けがあったことも考えられた。いずれも可能性の域をでないが現段階では墓と関連する施設が想定される。なお、14、15世紀で洞穴を墓にしている事例はヒヤジョー毛遺跡崖下の囲込岩陰墓（註4）があり、内間カンジャーヤーガマ遺跡も類似した状況が考えられた。

ところで本遺跡では沖縄戦時に洞穴を北西方向に約16m掘削して壕を構築しており、洞口を塞ぐ石列も確認されている。内間字誌によると同地区一帯が沖縄戦時に住民の避難壕に利用されていた記述があるが、このことを裏付けるように洞内からは油壺や甕、碗等の雑器が多量に出土している。これらの遺物は住民が避難時に持ち込んだものと考えられた。

註1：今帰仁村教育委員会1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』

註2：知念村教育委員会1999『斎場御嶽整備事業報告書』

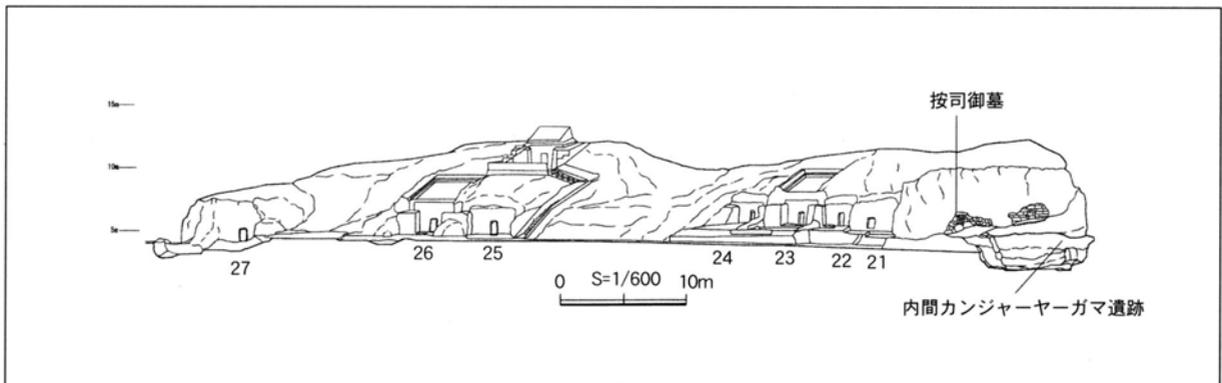
註3：内間で最も古い墓と言われる。造営年代・所有者は不明。外観は宜野湾市の小祿墓や本市の伊祖の高御墓と類似する。

註4：那覇市教育委員会1994『ヒヤジョー毛遺跡 - 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅰ -』

3. 内間西原近世墓群

立地

調査した墓は7基であった。墓の立地は琉球石灰岩の崖下や斜面を利用しており、県内の石灰岩地域で比較的良好にみられる墓群を形成している。立地的に分けると21～24号、25・26号、27号とグループ分けされ、それぞれの間を5m程置いて横並びで分布している。近世墓の立地は同一丘陵上に横並びで分布する傾向があることから、24・25号間と26・27号間に埋没した墓が無いか試掘溝を設定した。結果は両所とも赤土が厚く堆積しており石灰岩の岩盤が未検出であった。このことは横穴式の墓室構造を持つ近世墓が基盤の堅い場所を選んで造営していることを示していると考えられた。今調査で唯一、横穴式の墓室構造を持たない26号は岩盤と切石積みを併用して墓を構築していた。これは石灰岩岩盤の露頭の少ない場所に墓を造営したことに起因している。



第65図 内間西原近世墓群の横断面見通し図

遺構

1. 墓室形態

「棚」の造り方に注目してみると21・25・27号の出窓状棚や棚上に柱状意匠を有する墓室形態は、市内の近世墓でほとんどみられない。同様の事例は那覇市の安謝西原古墓群（註1）やナーチャー毛古墓群（註2）が知られており、内間と安謝の墓で類似性が認められた。このことは第2章で述べたように両村がかつて一つの村であったことを裏付けているように思われる。

ところで、墓室の棚形態を「出窓状」と「階段状」に大別したとき、出窓状棚の構築方法が古い手法と考えられた。出窓状棚は那覇市の膨大な古墓調査成果（註2）から17世紀以前を想定しており、階段状棚は1738年頃に造営された宜野湾御殿墓（註3）や1793年造営の宜野湾佐喜真墓（註4）等の事例から18世紀以降の構築方法と考えられる。また、近世以前に造営された横穴式墓の墓室形態をみると出窓状の小室を構築していたり（註5）、棚を構築しない形態（註5）が確認できる。このことは当初に造営される墓では概して被葬者が少ないことと、それを受けて蔵骨器の安置スペースをあまり考慮していないことなどに起因しているものと考えられる。つまり、棚を造らない形態→出窓状棚→凹形棚→階段状棚へ変遷していくことが想定される。棚携帯の変遷は被葬者の増加に伴って限られた墓室空間を有効利用しなければならない状況から派生したものと推察される。

2. 墓室や墓庭で検出された遺構

21号の墓庭出土銭貨は、墓庭造成を確認するサブトレンチ内で出土したため掘り方は不明だが、出土地点が墓域の中心部に位置することから埋納されたものと考えている。本事例については玉木氏の考察（第4章3節5）を参照されたい。

25号の墓庭右袖石垣は、石積みの技法が二種類みられるためその変わり目にサブトレンチを入れて確認したところ、当初の造墓の石積みは墓庭造成層まで根石が達しているのに対し、延長部の石積みは後年の二次堆積土の直上に構築されていることが判り、かなりの時間差があることが窺えた。また、26号の所有者から25、26号が同一門中の墓であること、26号の造営が昭和10年頃で、25号（古い墓）に対して26号を新墓（ミーバカ）と称していたことがわかった。聞き取り調査から先述した25号の右袖石垣の延長部は新墓の造営時に併せて改築されたものと考えられた。

27号墓室に埋納された獣骨は、同墓を造営した墓大工の建築儀礼と考えられるもので市内では伊祖の入め御拝領墓（註6）で初めてみつきり前田・経塚近世墓群（註7）や仲間稲マタ原近世墓群（註8）で確認されている。いずれも墓室の厨子構成がボージャー厨子を主体とすることで共通しているが、厨子を伴わないことから時代的にさらに古いと考えられる那覇市首里のナカダカリヤマの古墓群（註9）でも「猪？」の頭骨が墓室で出土している。今のところ発掘調査ではグスク時代末期～18世紀頃に造営された墓で確認されているが、事例が少ないのは一部の墓大工の伝統的な風習だったのかあるいは全く別の理由があったのか、地域性や時代的なことも含めた検討が必要と思われる。

また、同墓の墓庭隅に一括廃棄された厨子甕等の遺物は、復元した蓋の銘書から夫婦合葬で不要となった厨子甕と副葬品が廃棄されたものと判断された。

註1：那覇市教育委員会 1998『埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.7 安謝西原古墓群』

註2：那覇市教育委員会2000『ナチュール毛古墓群 -那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅶ-』

註3：那覇市教育委員会『』

註4：宜野湾市教育委員会1989『土に埋もれた宜野湾』

註5：多和田真淳他 昭和53年7月『沖縄県教育委員会監修 沖縄文化財調査報告書 1956～1962』那覇出版社 大嶺薫の「上里墓調査報告」によると墓室には柵は造られず、正面奥壁を方形に掘り込み三つの納骨所が構築されている。

：財団法人文化財建造物保存技術協会 昭和52年9月『重要文化財 玉陵復元修理工事報告書』重要文化財玉陵復元修理委員会 東室内に柵は無く室（部屋）が構築され、東室全体の平面観が出窓状を呈している。西室の平面観は円形の柵を設ける。また、浦添ようどれの両玉陵（英祖・尚寧）の墓室でも柵は構築されていない。

註6：浦添市教育委員会1996『伊祖の入め御拝領墓 -マンション建設に伴う近世墓の発掘調査-』

註7：浦添市教育委員会では、平成11～15年度に浦添南第一地区土地区画整理事業地内で約200基の近世墓調査を実施しているが、獣骨の埋納が確認された墓は3基であった。

註8：浦添市教育委員会は、市公園施設整備丁事中に不時発見された近世墓1基の発掘調査を平成14年1月22～29日の期間で実施した。墓室には正面左右に1段の出窓状柵が構築されており、ボージャー厨子7基を含む計11基の蔵骨器が確認された。

註9：沖縄県立埋蔵文化財センター 2003年3月8日 現地説明会資料『ナカダカリヤマの古墓群』
発掘担当者によると古墓群の年代観はグスク時代末期から近世初期頃と考えられている。

遺物

遺物は、蔵骨器や香炉、花生け、瓶子など墓に関わるものが主体となるが油壺や皿などの日常品も数多く検出された。後者の事例では避難壕に改変された墓室から出土したのもあり日常品め大部分が沖繩戦時に持ち込まれた避難民の生活用具であったことが考えられた。

特異な遺物としては27号の墓庭から窯道具の「トチン」が出土している。祭具または葬具のいずれかの目的で使用されたものと考えられるが具体的なことは明らかにしえなかった。なお、墓庭から窯道具が出土した事例は那覇市の銘刈古墓群（註1）がある。

1. 蔵骨器・副葬品

蔵骨器は、専用器と転用器があり、また、器形や材質の違いなどにより様々なバリエーションがみられる。特に情報量の多い21・24・27号を墓別にみていくこととする。

21号は、無頸甕形厨子甕（ポージャー厨子4基）や石製家形厨子、タイ産黒褐釉四耳壺と無釉鉢の転用蔵骨器が安置されており、いずれも銘書は確認できないが、器形や文様等の特徴から、17～18世紀中葉（註2）におさまるものと推察された。

転用蔵骨器のうちタイ産黒褐釉四耳壺に注目してみると、本器は接合するとほぼ完全形を呈する資料であるが胴中央部の打割により上・下部に二分され、底部を穿孔するなどの特徴もみられることから甕形厨子甕を意識したものと推察された。つまり胴上部を蓋、下部を身、打割痕を窓に見立てて転用したものと考えられた。また、発掘調査後にわかったことだが壺屋製無釉蓋が本器の口縁にほぼ嵌ることからセット関係になるものと判断されるが、興味深いのはこの無釉蓋が墓庭二次堆積土から出土したことである。本器が当墓以外の墓から移動している可能性が考えられた。なお、21号墓の東側隣に所在する按司御墓は内間で最も古い墓といわれており、按司御墓内で土器壺（註3）が確認されたことを踏まえると本来、タイ産黒褐釉四耳壺は按司御墓に安置されていた可能性が高いと推察された。

24号は、有頸甕形厨子甕を主体とする厨子構成で器形や文様等の特徴と銘書の洗骨年代から19世紀中葉～20世紀初頭のものとして判断される。蔵骨器によって大凡の墓の使用年代を窺うことができるが、同墓の所有者については聞き取り調査等でも手がかりを得ることはできなかった。特筆される遺物として蔵骨器No.3内人骨に付着した布目痕が挙げられるが、詳細は後述の被葬者（人骨）で紹介する。

27号は最も蔵骨器が多い墓で、18世紀中葉の石製家形厨子から現代の火葬用骨壺まで含めると総数38基の蔵骨器が確認されている。厨子甕には手の込んだものから著しく歪むものまで様々あり「祀る側」の財力も然り、「祀られる者」もその時々によって差異があったことを推察できる。

また、副葬品で特筆される遺物として、蔵骨器No.27内の土鈴とNo.16内の荒焼獅子が挙げられる。両蔵骨器の年代観が異なるため検討しなければならないこともあるが、遺物の意味合いから考えれば「魔除け」的なものが想像される。特に焼物の獅子が厨子甕（または墓）から見つかったのは県内では初めての事例と思われるので、詳細を119頁で報告する。

2. 墓庭出土遺物

今調査の墓庭出土遺物を概観すると、花生けや香炉、煙管、管、瓶、小杯、酒注、碗等が出土して

いる。これらの遺物は県内の近世墓で比較的良好にみられる組成を呈している。

墓庭出土遺物をそれぞれの使用形態から考えると、煙管や管、瓶、小杯、酒注等は死者に副葬される遺物として、花生けや香炉などは墓庭祭祀に関連する遺物として大別できる。前者を「葬具」、後者を「祭具」と仮称し、以下で墓庭出土遺物を検討することとする。

「葬具」は、一次葬時に死者に副葬されて墓室内に納められ、二次葬時に棺箱と一緒に墓庭へ移動されることから洗骨の直前まで死者に関与する遺物として捉えられる。厨子甕を調査すると煙管などの副葬品が見つかることがあるが、県内の調査事例から言えばむしろ厨子甕内から副葬品が見つかる事例が極端に少ないことが挙げられる。このことに対して明確な理由は提示しえないが当時の葬制・墓制で、一次葬では副葬品を必要とするが、二次葬では必要としない観念が働いていたのではないかと思われる。

ところで、二次葬（＝改葬）の場所については、墓口側の墓庭左右隅で洗骨を行うという近代宜野湾の民俗事例（註4）がある。今調査では21号墓庭隅の一括出土遺物（No.184～189）や27号の墓庭で一括廃棄された厨子甕と副葬品の出土が確認されている。そのうちの21号では瓶や小杯、煙管等の遺物と共に数本の釘が検出されおり同場所で洗骨が行われたものと判断された。近代宜野湾の民俗事例と発掘調査結果の一致が確認されたことにより、葬具の一括出土地点が生骨場所を示している可能性を見出すことができた。

「祭具」は、主に清明祭等で使用される遺物と想定される。しかし、使用場所が墓口付近に限定されるため、破損や紛失するまで何年も使用され続けていたことが考えられた。

近世墓発掘調査の墓庭出土遺物を祭具と葬具で量的に比較すると圧倒的に葬具が多く出土していることが挙げられるが、このことは祭具は再利用可能な遺物で、葬具は再利用しない遺物である機能面の違いを反映していることが推察された。

因みに、琉球における清明祭（註5）の受容は1728年に久米三十六姓が最初で、次いで1768年に王家で採用されている。首里・那覇の士族階級に普及したのは18世紀末頃と考えられ庶民に浸透していくのは18世紀末以降と想定される。

註1：那覇市教育委員会 1998 『銘刈古墓群（I）-那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書V-』

註2：浦添市教育委員会 2003 『浦添市文化財調査研究報告書 -中城村字津覇・呉屋家の墓被葬者復元 浦添城跡出土のタイ陶磁器-』 向井互氏によると本黒褐袖四耳壺はメナムノイ窯産で16世紀中葉～17世紀頃とされるが相伴する厨子甕を根拠に大凡の使用年代として筆者が提示した。

註3：按司御墓と内間カンジャーヤーガマ遺跡は戦時中に構築された壕で繋がっており、墓内で土器壺1基とボージャー厨子2基を確認している。

註4：平敷令治 1995.10 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房 p113 洗骨 -近代宜野湾の習俗-

註5：平敷令治 1995.10 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房 p93 清明祭の受容 -伊是名の事例-

3. 27号墓蔵骨器No.16出土の獅子（焼物）について

当獅子は、具志堅家本墓室内の陶製家形厨子甕（蔵骨器No.16）内に人骨と共に正置した状態で納められていた。この厨子甕には銘書があり光緒年間（干支の「酉年」から1885年か1897年のいずれかが推察される）の洗骨が記されている。

獅子の各部位の主な法量は、両前足から頭頂部までの器高が27.1cm、両前足～後足部までの長さが32.5cm、胴部最大径が8.7cm、後足部の幅が10.6cm。重量は3715gを量る。色調は暗赤灰色を呈する。

本品は両前足が直立して座った状態で安定しているが両後足が焼成時に破損しており、他にも胴部や左前足（肘と肩）、尾で部分的な破損や焼膨れが認められる。特に胴部の亀裂が著しく幅が最大1.4cm、長さは約9cmある。



▲ 正面

▼ 左側面



獅子の各部位についての概要を述べる。顔部は、口が開き、舌や歯、牙（犬歯3本、1本は欠損している）まで、精巧に造られている。

両目は正視し、渦巻き状の張付文で眉を表現する。両耳とも垂れるが左耳先端は欠損する。欠損部は割と多く、口から鼻にかけて右側面でも一部欠損する。同部位は明らかに外面と色調が異なっており、素地の雰囲気から焼成後の破損と考えられた。顔～肩部上方は、渦巻き状の張付で頭髪を表現するなど精巧に造られている。

足部の外踝にも渦巻状の張付が施される。右肩部には3、4cm程の石灰質状の付着物が認められる。

当獅子は正面からみると、顔が正視するのに対し、肩より下部は全体的にやや左側に傾いている。背面（背中）は、人間に例えると背筋の部分を中心線に、「ハ」の字状に線彫りを施して毛を表現している。尾も張付により造形されるが、僅かに欠損しており、尾の下部に4mm前後の孔（一穴）が確認できる。

以上、概要を述べてきたが、獅子は焼膨れや亀裂箇所、破損部が認められるが、全体的に細部まで精巧に表現されて造られていることがわかる。

また、これまで県内の近世墓調査で蔵骨器内から獅子が出土した事例は皆無であるため、それ故に獅子を蔵骨器に納める意図や製作年代など不明な点が多い。次に、本陶製獅子について各氏の所見を紹介する。

①内間 靖（壺屋焼物博物館）氏の所見

可能性として、獅子を蔵骨器に納めるのは獅子の性格から「魔除け」的なものが考えられる。

獅子の造りは「渦巻き」の技法などは沖縄的である。製作年代は不明だが、大正以降に大量生産化

していく過程でパターン化しつつあり例えば後背部が寸胴化し、耳が直立していくなどの特徴があるが当獅子は後背部がスリムで耳が垂れていることから大正以前のものであることは間違いのないものと思われる。また、焼物の獅子が壺屋で作られるようになったのは瓦葺きが一般に許されるようになる明治22（1889）年以降と考えられている。

製作技法から壺屋で焼成される「荒焼」と考えられるが、陶土は壺屋で用されている土とは異なる。「荒焼」は1120℃位で焼成されるが当獅子の土の発色や焼き締め具合などからそれ以上の温度で焼成されたものと考えられる。陶土の耐火度を越えているため焼膨れや亀裂が見られることから、1200℃の高温で焼成（焼き締められる）される「上焼」と一緒に焼かれた可能性が指摘される。

また、この陶土は喜名焼に使用される陶土（読谷村や沖縄市以北の国頭マージの土）と非常に似ていることが挙げられる。

獅子の焼成過程を推察すると焼成前の状態は、顔部と同じで体も正面を向いていたと思われる。焼成が始まり、窯の中の温度が次第に高温化していきついには焼物の耐火度を超えまず後足が分離してしまう。次に胴部左側に亀裂が入り左足上方に焼膨れが生じ、その結果、体を支えていた前足に重心がかかりその重み倒れたことにより両前足上方に石灰質の付着物が一緒に焼成された。

このことは、焼物であれば殆どの物が火を受けていない箇所（例えば、据えた状態で焼成すると、設地面は火を受けないため他の部分とは明らかに色調が異なる）が認められるが、当獅子の場合横転したことにより通常は火を受けない足の裏側まで全体と同じ色調を呈することとなった。



②仲宗根 求（読谷村立歴史民俗資料館）氏の所見

喜名焼（17後半？～18世紀前半？）では、今のところ獅子の焼物は確認されていない。焼成後の土自体の発色は喜名焼の遺物と非常に似ている。獅子の顔部の破損部と外面の発色が非常に似ている喜名焼の腕破片を比較してみると、まず獅子の方は陶土が緻密な微粒子で混入物は皆無である。喜名焼の方は1～2mmの混入物や白っぽい^{すき}切状の混入物が認められる。これらの違いから時期・年代的なことを見いだすのは困難であるが、破断面観察からいえることは仮に陶土が同じであれば、この場合獅子に使用している陶土は非常に精製された微粒子状の良質の陶土と判断される。喜名焼の「荒焼」の焼成温度は、宮城篤正氏によれば、1260℃位という。

銘書

27号墓は新参権氏具志堅家の墓であるが、同墓に安置された厨子甕の銘書と那覇市歴史資料室が所蔵する家譜資料で一致するものが確認された。これにより発掘調査では知り得なかった本墓と袖墓での被葬者の選別や厨子甕の整理等の事象が明らかになった。以下で蔵骨器No.26、27、30の銘書を紹介して事実関係を整理するとともに、明らかにしえなかった事象についても提示する。

No.27

銘書：此墓地拾貳間四方 時之地頭平良親方お賜 賜之仍而村所之頭々百姓 召寄其挨拶仕 乾隆拾三年戊辰八月廿一日 先祖之骨安置之也 具志堅にや母

読み下し：この墓地12間四方は、時の地頭平良親方からこれ（墓地）を賜わり、村所の頭々・百姓らと呼ばせて、（ここに墓をつくることについて）挨拶しました。乾隆13（1748）年戊辰8月21日に、先祖の骨を安置しました。具志堅にや母

No.30

銘書：嘉慶拾貳年卯八月廿七日田多馬場下ノ墓此墓江移置候処銘書無之ニ付何かしと知不申候然共多田ノ墓ハ外人ハ入不申権氏計安置ニ付此墓江引越置ニ付以後何かしと知申候ハバ銘書入候事

読み下し：嘉慶12（1807）年卯8月27日に田多馬場下の墓からこの墓へ移したところ、（厨子甕に）銘書が無いので、（被葬者が）誰かわかりませんでした。しかし、多田の墓には他の人は入れず、権氏の者だけが安置されているので、この墓へ移しました。以後、誰とわかったら銘書を入れること。

No.26

銘書：道光二十一年辛丑 十一月二十三日 洗骨 権氏 具志堅筑登之親雲上 古喜 同年洗骨 同人妻
具志堅 親雲上次男 同年洗骨 樽金
具志堅筑登之女子 同年洗骨 真加戸

読み下し：道光21（1841）年辛丑、11月23日に権氏の具志堅筑登之親雲上である古喜を洗骨しました。同年に古喜の妻を洗骨しました。
具志堅親雲上の次男の樽金を同年に洗骨しました。
具志堅筑登之の娘真加戸を同年に洗骨しました。

まず、先に銘書から判読したことを整理すると、蔵骨器No.27の銘書から墓の竣工の経緯と造営年代が判明する。しかし、銘書に記される「此墓地」が発掘調査した27号かどうかの検討が必要となる。理由は、平良親方が西原間切平良村を管轄しているため、平良村内に墓地を与えたことが考えられるからである。一方、銘書からは読みとれないが平良親方が内間に所有している自身の土地を与えた可能

性も考えられる。例えば「拾弍間四方」という墓地の面積は21.84平米となるが、現在の地籍図で27号の墓地面積を計算すると21平米あり、ほぼ一致することが確認されている。従って、銘書の「此墓地平良親方お賜」と「拾弍間四方」の墨書部分から、次の可能性が考えられる。

- ① 権氏の墓が平良村から27号へ移転してきた
- ② 権氏の墓が当初から内間に造営された

次に、No.30の銘書から1807年8月27日の時点まで権氏の墓は多田馬場下に所在し、何らかの事情により墓移転を行ったことが読みとれる。また、銘書にある「此墓」とは、当蔵骨器が安置されている27号を示していると考えられることから、多田馬場下から27号への移動を記していると判断された。因みに「多田馬場」とは、現在の那覇市安謝小字多和田原に所在した多和田馬場のことで安謝川を挟んで内間の南東に位置しており、地図上でみると内間の目と鼻の先にあることが確認できる。多田馬場の墓の造営年代や規模等は不明だが、同銘書を整理すると次の事が考えられる。

- ③ 権氏の墓が内間（=27号）と多田馬場下に1748～1807年の時期に二つ存在する。
- ④ 27号は少なくとも1807年の8月27日までに造営された。

以上①～④の可能性や事象は現段階ではどれも選択可能でその選択によって若干、歴史事実が異なることが考えられる。その原因は「厨子甕が移動可能な遺物」であることに尽きる。墓の造営年や経緯等を正確に捉えるには、厨子甕の銘書以外に墓碑や墓誌等の遺構・遺物が必要であることを調査を通して改めて痛感させられた。

一方で、墓の造営年代を考古学的に捉える方法もある。墓の造営当初に墓庭に廃棄された遺物や墓庭を造成する際に紛れ込んだ遺物等の製作年代を援用することによって、理論的には可能だと考えられる。しかし、墓が少なくとも年1回以上の墓参等があり恒常的に使用される場所であり、且つ、葬送や祭祀等で使用した物が廃棄されていくなか、二次堆積土を層序的に検証しながら遺物を取り上げていくのは現実的には不可能と思われる。また、近世という時代幅の中で多種多様な壺屋製陶器の製作年代や編年等を解明するのは現段階ではまだ困難といえる。

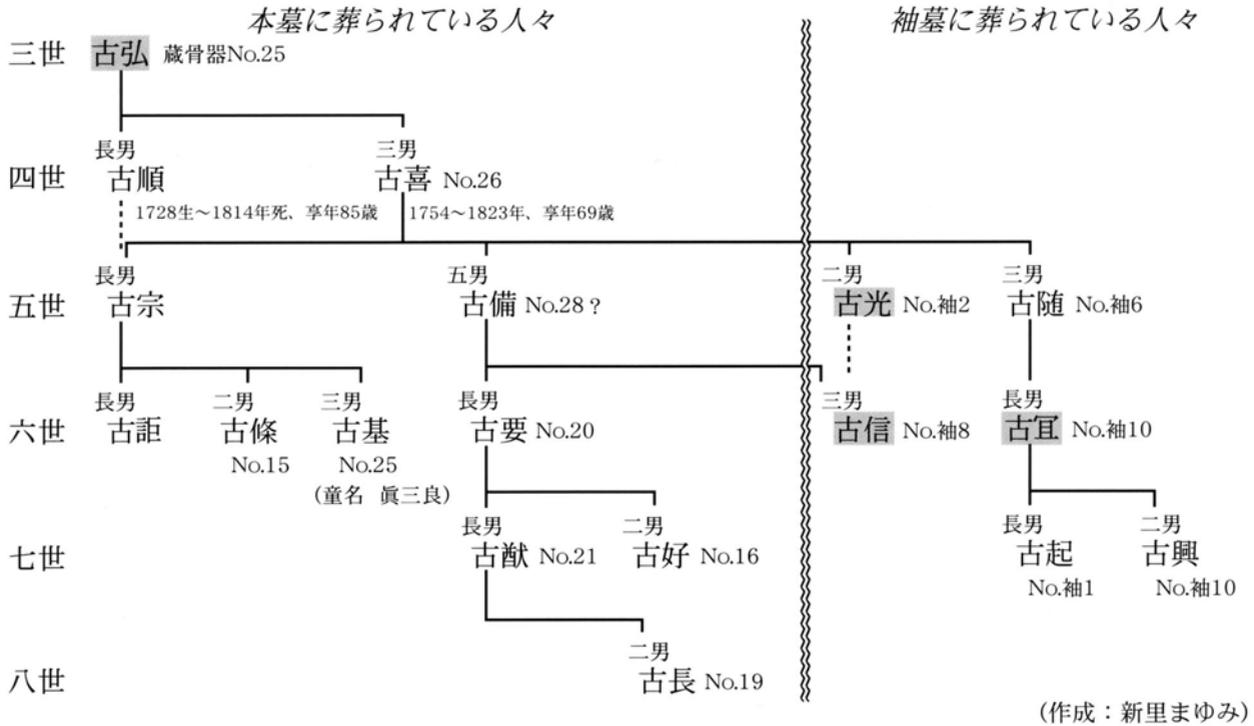
次に、銘書と家譜資料の一致から判明したことを紹介する。先述のとおり27号は一つの墓に二つの墓室を有する墓であるが、いずれも権氏の人々が葬られていた。両墓室の使用期間で重複する時期があることから被葬者の選別を行っていたことを推察していたが、このことは家譜により証明された。家譜から、本墓には三世古弘三男古喜（蔵骨器No.26）と古喜の五男系が、袖墓には古喜の二男・三男系統が葬られていることが判明した。また、先の1807年の墓移転が三世古弘の長男古順と三男古喜の指揮によって行われたことも推察された。その根拠として、以下で家譜と銘書から古喜を中心とした家族の復元を試み、両墓室の蔵骨器配置状況と併せて検証していくこととする。

なお、故具志堅古政氏が所有する位牌に記される人々は、家譜から本家筋系統と判断された。以下で元祖から八世までの名前も併せて紹介するが、27号の銘書の被葬者と一致する人物がないことから27号は分家筋系統の墓と想定された。

1. 位牌に記される人々

一世 二世 三世 四世 五世 六世 七世 八世
古理 —— 古通 —— 古弘 —— 古順 —— 古宗 —— 古詎 —— 古寧 —— 古悦

2. 家譜と銘書による27号墓被葬者の家族復元

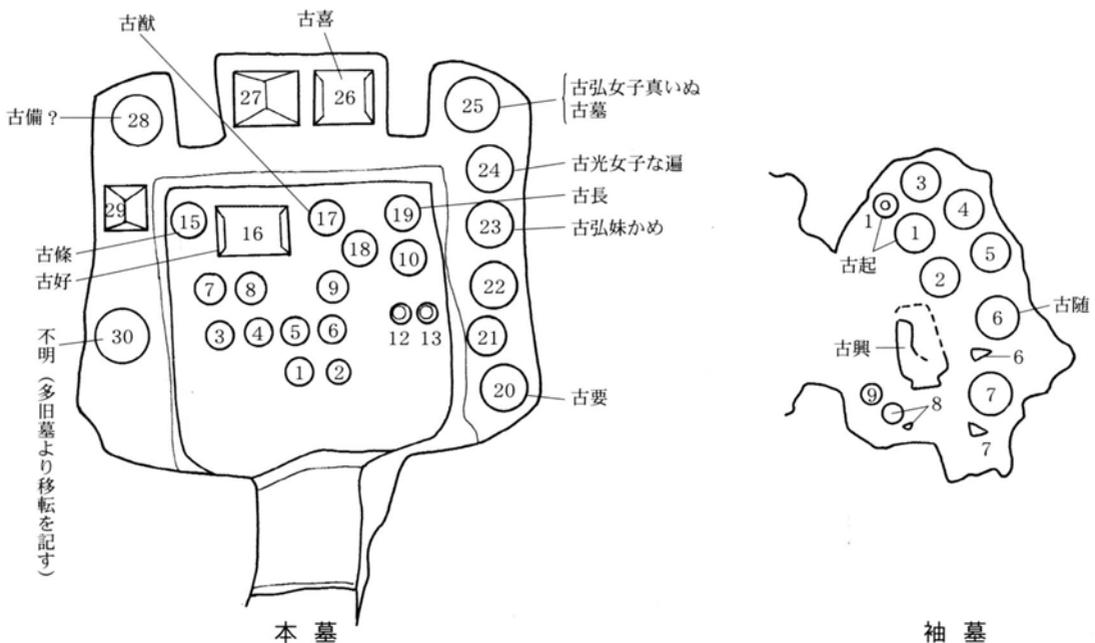


※「太字」は、銘書と家譜で一致する人

※「網掛け」は、銘書に名前が出てくる人 (ただし、実際に葬られているかどうかは不明)

※ 5世五男古備については、銘書の判読で「古借」と判読された被葬者と同一人物の可能性も考えられる。

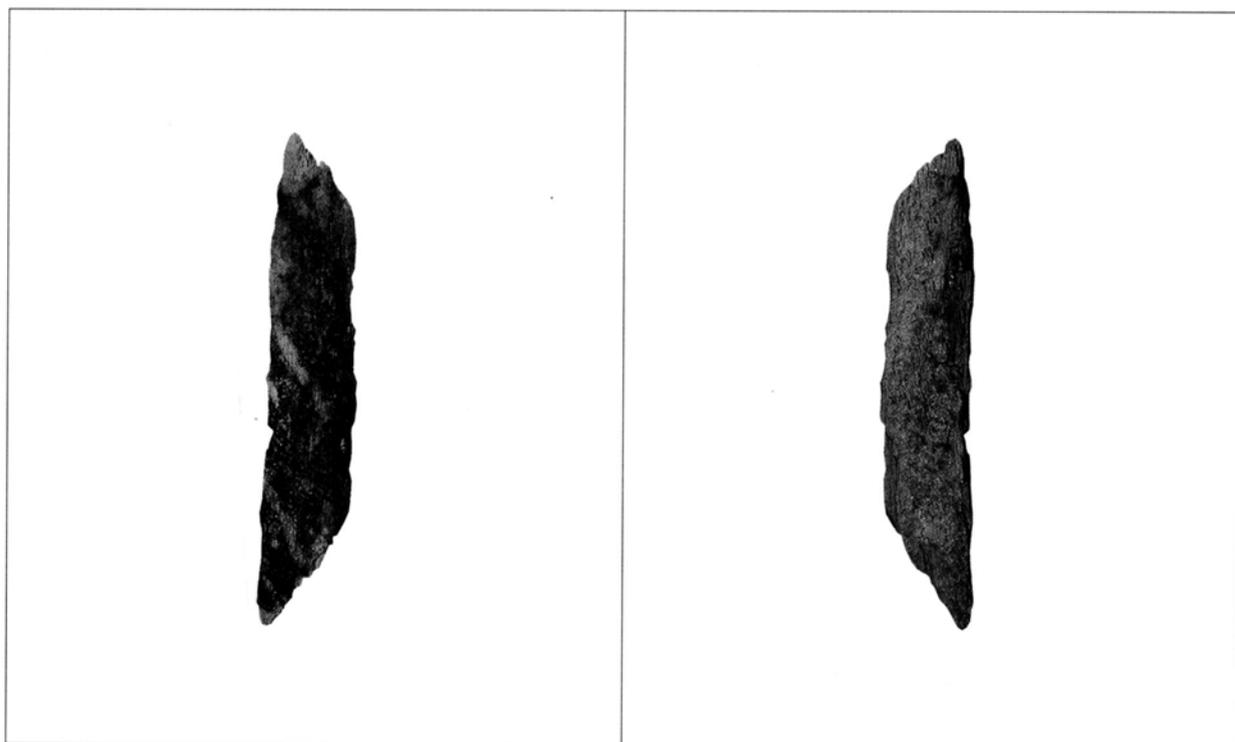
第66図 27号墓 藏骨器配置状況



以上のことから27号の本墓には古喜の五男系が、袖墓には古喜の二男系と三男系が葬られていることが判る。また、家譜から本家筋系統四世古順と古喜が兄弟であること、古順に世継ぎがないため古喜の長男古宗が養子に出されたことも判明した。さらに本墓と袖墓の蔵骨器安置状況と家譜の情報を整理した結果、本墓に古喜と共に五男系が葬られたのは古喜の嗣子が五男古備であることに起因していることが考えられた。これらのことを整理すると次の事が推察された。①古順は本家筋系統の直系であるため、本家の墓を有している。②古喜は古順の弟である。つまり分家筋となるため本家の墓へは入ることはできない。

次に①・②を踏まえた上で、古喜を中心とする27号墓が内間に存在する理由やその経緯について推察を交えながら述べていくこととする。先述のとおり本家筋系統の4世古順には世継ぎがいなかったため弟古喜の長男古宗を養子にしている。それにより古順は先祖代々の墓を子々孫々に引き継ぐことが可能となった。このことについて古順は弟の古喜に対して少なからず負い目があったことと思われる。一方、分家筋の古喜は本家の墓へは入れないため新たに墓を仕立てる必要があったと考えられた。そのうえ長男を養子に出したことで自身の世継ぎ問題も抱えていたことが推察される。このような状況から古喜が墓を仕立てる際には、古順が何らかの手助け（援助）を行ったことが考えられた。

このことは蔵骨器No.30に記されている1807年の墓移転と関与していると推察される。この1807年の時点で権氏具志堅家の生存者が誰かを家譜の生没年と照らし合わせた結果、既に三世の人々は他界していることが判った。門中の長老格が四世古順（73歳）と古喜（54歳）であることから、二人が子や甥にあたる五世の入々を指揮して墓の移転を行ったことが推察される。



大腿骨片の布目痕（24号墓 蔵骨器No.3）

被葬者（人骨）

21号のタイ産黒褐釉四耳壺（蔵骨器No.2）には、改葬後に焼かれたと考えられる「焼骨」が納骨されていた。タイ産黒褐釉陶四耳壺に焼骨が伴う事例としては奥間ノ口墓（註1）やヤッチのガマ（註2）、ナカンダカリヤマの古墓群（註3）で確認されており、17世紀以前の葬送儀礼の一端を垣間見ることのできる資料と考えられる。

24号墓の有頸甕形厨子甕（蔵骨器No.3）内の大腿骨片で布目痕が確認された（前頁に写真掲載）。大腿骨は表面が黒っぽく汚れたようにみえるがこれは有機物、つまり布が腐食して表面に付いたことによるものと考えられた。洗骨後に骨を布で包み厨子甕に納めたものと推察されるが、人骨の遺存状態がよくないこともあってその他の部位では確認できなかった。同様の事例は浦添ようどれの英祖陵3号石棺の人骨（註4）で確認されており、頭骨が裂でくるまれることから王族がかなり手厚く葬られていたことを示す資料と考えられている。内間西原近世墓群の事例は近世琉球期において初めて確認された事例とおもわれる。極めて希な事例であるのか今後の資料の増加を待って検討したい。

今回調査した人骨は全体的に遺存状態が悪くなかった。その原因は水が浸透しにくい石灰岩地域に墓室を構築して墓口を閉じるため、室内が高温多湿となり骨の酸化を早めるものと指摘されている。

右表では、銘書のある蔵骨器をとりあげ、銘書の被葬者数と人骨の個体数を表している。

銘書のある蔵骨器は28基中22基で被葬者数の一致が確認された。約80%の確率で一致する結果からは銘書に追記しない合葬や整理等が僅かながらあったことを窺うことができる。

例えば、蔵骨器No.23の事例を取りあげると、銘書では2人の納骨を記しているが、実際には少なくとも4人が納骨されており、銘書を追記することなく合葬されていたことがわかる。

第41表 銘書被葬者と人骨の個体数比較一覧表

	成人						未成人						合計		一致				
	男性		女性		性別不明		年齢不明		若年		小児		幼児			乳児			
	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨	銘書	出土人骨		銘書	出土人骨		
24-1						2										1	2		
24-8	1	1															1	1	1
24-9			1	1	可能性あり	→	1						1				1	2	
24-11	1			2	可能性あり	→	1										3	1	
25-1						1											0	1	
25-2		1		1							1						0	3	
27-9	1	1		1						1		1		1			1	5	
27-10				1									1	1			2	2	1
27-15	1	1		1													2	2	1
27-16	1	1															1	1	1
27-18				1	1												1	1	1
27-19	1	1															1	1	1
27-20	1	1															1	1	1
27-22	1	1															1	1	1
27-23	1	1		1										1			2	3	
27-24				1									1			1	2	2	
27-26	1	1	1				2				1						4	4	1
27-27		1		1							1		1				1	4	1
27-28	1	1	1	1													2	2	1
27-29			1	1													1	1	1
27-30				1													0	1	1
27-袖1	1	1															1	1	1
27-袖2			1	1													1	1	1
27-袖3	1	1	2		可能性あり	→	1										2	2	1
27-袖6	1					1											1	1	1
27-袖7			1		可能性あり	→	1	1			可能性あり	→	1				2	2	1
27-袖8							1				可能性あり	→	1				1	1	1
27-袖10	1	1															1	1	1
	15	16	12	12	0	8	2	2	0	1	0	4	1	7	0	2	37	54	20

註1：宜野湾市教育委員会1996『奥間ノ口墓 一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書』

註2：沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』

註3：沖縄県立埋蔵文化財センター 2003年3月8日 現地説明会資料『ナカンダカリヤマの古墓群』

註4：浦添市教育委員会 2003年6月17日『浦添ようどれ石厨子と遺骨の分析結果について』

内間西原近世墓群について

同墓群の調査は、平成9年度の墓移転調査を加えると、今回で4度目を数える。30基に及ぶ墓調査により、サチバルマーチューー帯に所在する墓がいつ頃から使用されたのか、過去の調査成果を踏まえて整理を試みる。

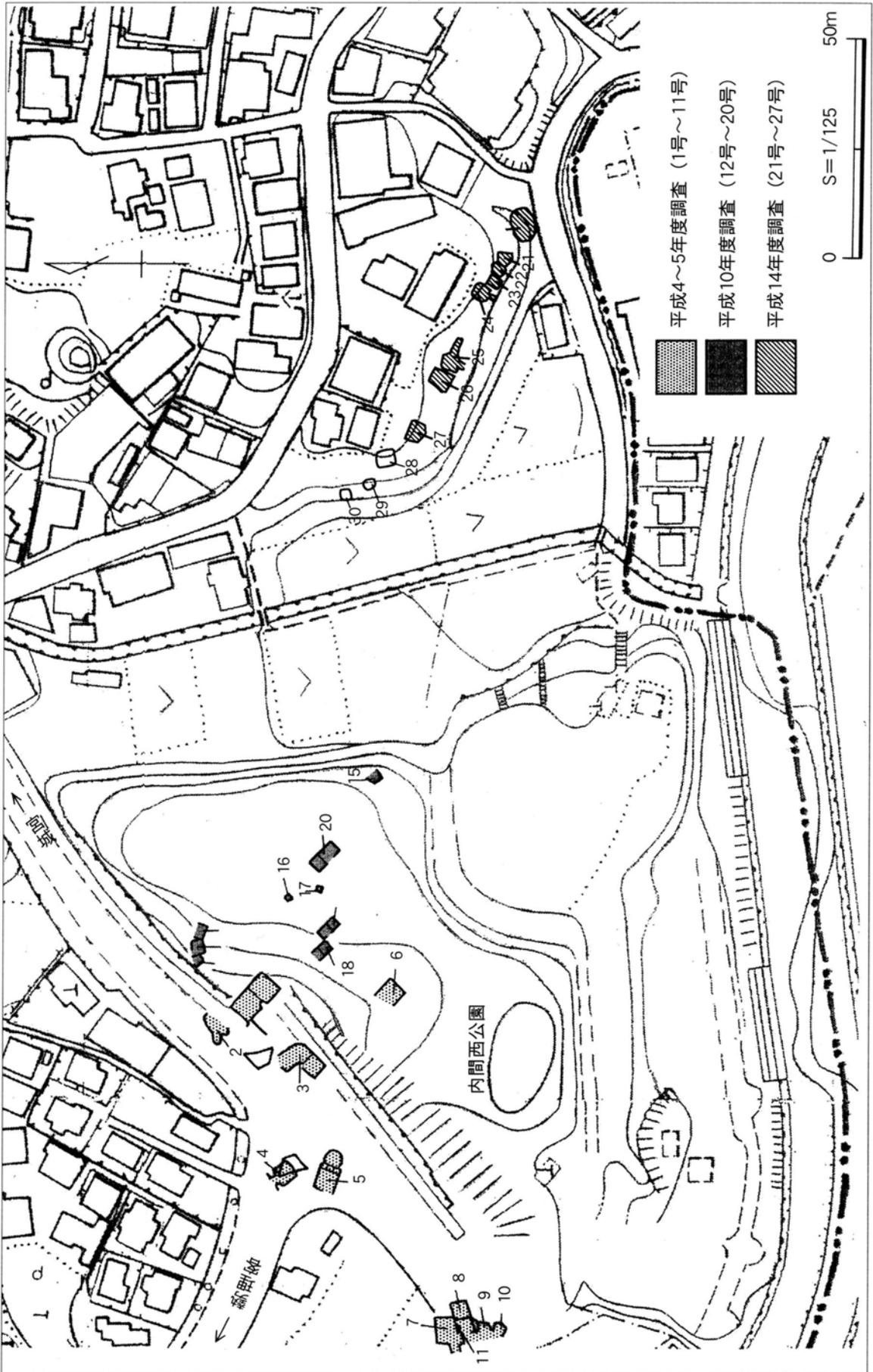
内間西原近世墓群では、いずれの墓も墓碑が未確認のため明確な造営年代は不明といわざるを得ないが、墓室に安置されている蔵骨器や墓庭・墓道に廃棄された蔵骨器の製作年代を参考にして大凡の墓の使用年代をもとめることができる。しかし、この場合は墓に移転歴のないことを前提に整理しなければならない。第42表は、これまでの内間西原近世墓群の発掘調査の集成である。

下表と墓の第67図に示す各墓の位置図から、内間西原近世墓群の墓は最も東側に位置する按司御墓を起点に墓域が西側へ広がっていく可能性が見いだせる。

また、墓室の棚形状に注目してみると棚の無い状態や出窓状、「回」形の棚を有する墓の方にボージャー厨子等の古い型式の蔵骨器が伴う傾向が、階段状の棚を有する墓にマンガン釉甕形厨子甕等の新しい蔵骨器が伴う傾向を窺うことができる。

第42表 内間西原近世墓群発掘調査集成

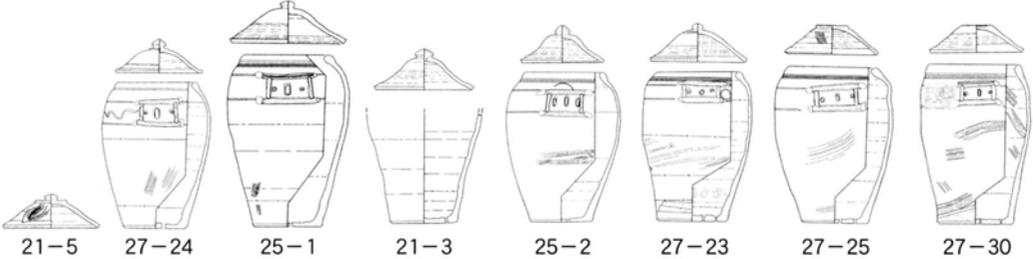
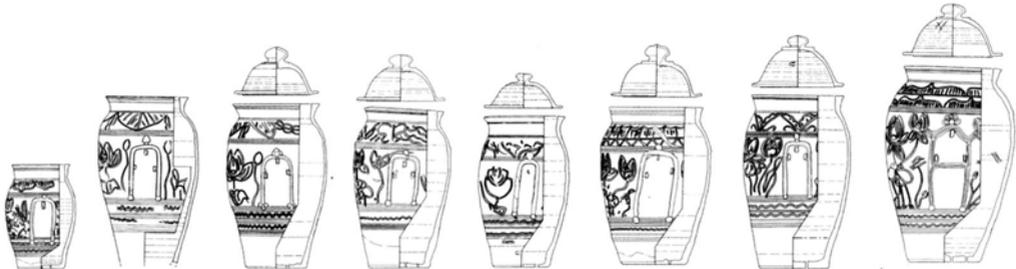
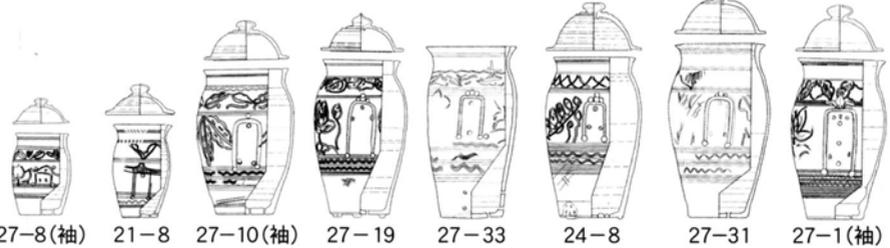
墓番号	造営年代	外観形態	墓室形状	棚の形状	棚数			蔵骨器 石 = 石製家形厨子 ボ = ボージャー厨子 マ = マンガン釉甕形厨子 御 = 御殿形厨子
					左	正面	右	
按司御墓	17以前	掘込墓	—	無				土器壺1、ボ2
21号	17末	掘込墓	方形	出窓状	1			壺1、石1、ボ5、鉢1
25号	17末	掘込墓	方形	出窓状	1	1		ボ2
2号-2	18初	掘込墓	方形	無				ボ1、マ2
28号	18初	亀甲墓	方形	段状		1		石2、ボ3、赤御1、マ3、マ御1、壺1
2号-3	18中	掘込墓	不定形	無				ボ1、土器壺片
14号	18中	掘込墓	不定形	無				ボ(身1、蓋3)
27号	18中	亀甲墓	方形	逆凹形状	同高位の棚を正面左右に1段、柱状意匠を施す			石1、ボ5、赤御1、マ10、マ御1、上御1、火葬用骨壺6
12号	18中	掘込墓	方形	無				ボ4、壺1、土器壺1
4号	18末	掘込墓	方形	逆凹形状	1	1		石1、ボ1、マ3
27号袖	19初	掘込墓	不定形	無				マ9、
2号-4	19初	掘込墓	楕円形	無				マ3
15号	19初	掘込墓	不定形	無				マ2、小壺1
24号	19初	掘込墓	方形	階段状	1	2	1	マ8、壺1
29号	19中	掘込墓	方形	—				マ1
30号	19中	掘込墓		—				マ1
2号-1	19中	掘込墓	楕円形	無				マ2
3号	19末	平葺墓	方形	階段状	1	3	1	マ4、上御1、火葬用骨壺2
6号-1	19末	掘込墓	楕円形	無				
6号-2	19末	掘込墓	不定形	無				
1号	20初	平葺墓	方形	階段状	1	2	1	上御1
8号	20初	平葺墓	方形	階段状	1	3	1	
13号	20初	掘込墓	方形	無				マ1、上御1、火葬用骨壺2
26号	20初	平葺墓	方形	階段状	1	3	1	
5号	—	亀甲墓	方形	階段状	1	3	1	
7号	—	平葺墓	方形	階段状	1	3	1	
9号	—	掘込墓	楕円形	逆凹形状	1	1	1	
10号	—	掘込墓	方形	—		1		
11号	—	掘込墓	方形	無				
22号	—	掘込墓	方形	—				
23号	—	平葺墓	方形	階段状	1	3	1	



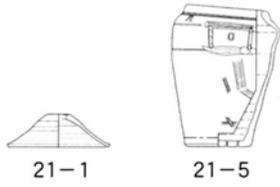
第67図 調査した各墓の位置

第43表

1. 蔵骨器（甕形厨子甕）編年表

陶製無頸甕形厨子甕 (ホージャー)	1700年代 ↳ 1800年代	 <p>21-5 27-24 25-1 21-3 25-2 27-23 27-25 27-30</p>
	1740年代 I期	 <p>21-7</p>
陶製有頸甕形厨子甕 (マンガ)	1770年代 II期 1800年代	
	III期	 <p>24-12 24-10 27-5(袖) 27-6(袖) 27-7(袖)</p>
	1850年代 IV期	 <p>22-1 27-34 27-10 27-4(袖) 27-18 27-20 24-3 27-22</p>
	1890年代 V期	 <p>27-8(袖) 21-8 27-10(袖) 27-19 27-33 24-8 27-31 27-1(袖)</p>
	1920年代	
	1930以降 VI期	 <p>23-1 24-1</p>

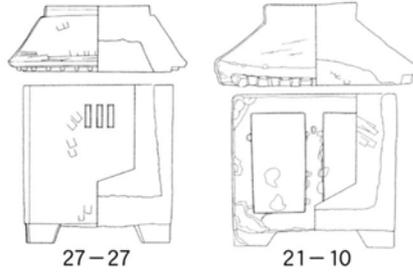
2. 家形転用蔵骨器一覽



21-1

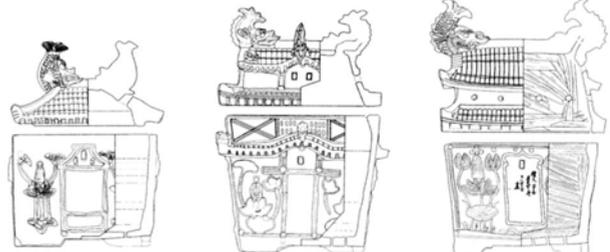
21-5

家形
厨子
甕



27-27

21-10

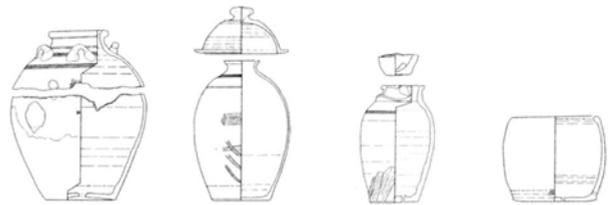


27-29

27-16

27-26

転用
厨子
甕

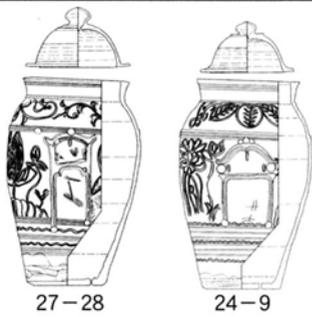


21-2

24-6

27-9(袖)

21-9



27-28

24-9



27-9

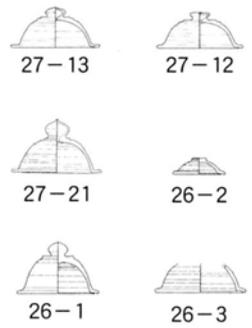
24-11

27-17

24-2

3. 蓋一覽

マンガン
厨子
甕(蓋)



27-13

27-12

27-21

26-2

26-1

26-3

第44表 内間西原近世墓群蔵骨器集計一覧表

		1号墓		2号墓		3号墓		4号墓		5号墓	
転用厨子甕 (身)	口										
	胴										
	底										
	完形	1	(壺)					1	(壺)		
	胴~底	1	(壺)								
個体数		2	2	0	0	0	0	1	1	0	0
無頸甕形厨子甕 (身) (ボージャ)	口					2					
	胴	6				5				9	
	底										
	完形	4								2	
個体数		4	6	0	0	0	5	0	0	2	9
有頸甕形厨子甕 (身) (マンガン)	口			1							1
	胴	1		1		3		9		1	
	底					3		4			
	完形			1				6			
	口~底										
	胴~底	1									
個体数		0	1	1	2	0	3	6	9	0	1
現代甕形厨子甕 (身)	口~胴										
	口~底							1			
	完形					1		1			
個体数		0	0	0	0	1	1	2	2	0	0
転用厨子甕 (蓋)	つまみ										
	肩										
	胴										
	つば										
	完形										
	胴~底	1	(壺)								
個体数		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
無頸甕形厨子甕 (蓋) (ボージャ)	つまみ										
	肩										
	胴										
	つば			2		1					
	完形	3								2	
	口~胴										
胴~つば	5										
個体数		3	5	0	2	0	1	0	0	2	2
有頸甕形厨子甕 (蓋) (マンガン)	つまみ										
	肩										
	胴										
	つば							1			
	完形							6			
	つまみ~胴			1							
	つまみ~つば							1			
	肩~つば										
	胴~つば										
個体数		0	0	0	1	0	0	6	6	0	0
現代甕形厨子甕 (蓋)	完形					1		1		0	
個体数		0	0	0	0	1	1	1	1	0	0
石製家形 (身)	1 (完形)										
個体数		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
石製家形 (蓋)	1 (完形)										
個体数		1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
上焼御殿形厨子甕 (身)						3 (胴部)					
個体数		0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
上焼御殿形厨子甕 (蓋)	1 (破片)			1 (破片)						1 (破片)	
個体数		0	1	0	1	0	0	0	0	0	1
荒焼御殿形厨子甕 (身)											
個体数		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
荒焼御殿形厨子甕 (蓋)											
個体数		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦質御殿形厨子甕 (身)											
個体数		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瓦質御殿形厨子甕 (蓋)											
個体数		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
器種不明 (身)	1 (底部)									1 (底部)	
個体数											
総個体数(身)		7	10	1	2	1	12	9	12	2	10
総個体数(蓋)		5	8	0	4	1	2	7	7	2	3
合計		12	18	1	6	2	14	16	19	4	13

第45表 内間西原近世墓群出土遺物一覧表

		1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	5号墓	6号墓	7号墓	不明
施釉陶器									
壺	口縁部				1 (油壺1)				
	底部				1 (油壺1)	1 (油壺1)			
	完形		1			3 (油壺3)			
鍋	口縁部				1				
	完形							1	
皿	口縁部			1		1			
	底部						2		
碗	口縁部	2 (小碗1)		3	1	3	4	4	1
	胴部			1	5	3		11	
	底部			3	1	1		3	
	完形			2	2	5	1 (小碗)	15 (小碗10)	
茶碗	完形					1		6	
	口縁部				1				
瓶	口縁～胴部	1							
	頸～底部								1
	肩～底部				3				
蓋	完形	2	3		2			15 (ペンキ塗布4)	
	完形	1			1	1		16 (水注6)	
猪口	完形	4	4	1					
香炉	完形				2 (ペンキ塗布1)			3 (ペンキ塗布2)	
皿	口縁部	1							
	完形				1				
鉢	底部						1		
	完形				1				
酒注	底部							2	
	完形				2 (カラカラ)			2	
水注	口縁部							1 (注ぎ口)	
	底部				1				
	完形							8	
煙管	吸口	1							
	雁首	1							
器種不明		15 (口1, 胴13, 底1, 蓋7)	5 (口1, 胴3, 底1)			1 (胴)	1 (口～胴)	2 (胴2)	
個体数		27	13	7	19	16	9	75	2

無釉陶器

甕	口縁部					2		2	2
	底部		1						
	完形	1							
蓋	撮み	1							
	口縁部	2	1			1			
壺	口～胴部	1							
	胴部	1		5	4				
	完形					2	2		
瓶	頸～底部				1				
	胴部				3				
	完形							4	
鉢	口～胴部							3	
	底部							3	
播鉢	口縁部					1		1	
	胴部			1	2		1	1	
	底部			1		1			
	完形							1	
德利	口～胴部				1				
	胴部					1			
	完形				1	1			
水鉢	完形					1	1		
瓦	胴部	2	1	3	3	15	9		2 (胴2)
火鉢	口～胴部					1 (瓦質)			
器種不明		15 (口1, 胴13, 底1, 蓋1)	5 (胴5)		3 (胴3)	5 (口1, 胴4)	1 (胴～底)	15 (口2, 胴13)	5 (胴5)
個体数		20	8	9	17	30	14	15	5

褐釉陶器

鍋	完形							1	
鍋蓋	完形							1	
個体数		0	0	0	0	0	0	2	0

染付

碗	口縁部				1	1	1		
皿	底部				1				
個体数		0	0	0	2	1	1	0	0

青磁

碗	口縁部	1							
器種不明							1 (胴)		
個体数		1	0	0	0	0	1	0	0

陶製品

土鈴								1 (完形)	
器種不明		1 (完形・蓋)							
個体数		1	0	0	0	0	1	1	0

		1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	5号墓	6号墓	7号墓	不明
陶磁器									
瓶	口縁部				1		1		
	完形				1				
茶碗	口縁部			1	1	2	5		
	胴部					1	1		
	完形	1		1		2	7		
皿	口縁部			1	1	1			1
	底部			1	1				
碗	完形	3	1	1		7	3		
	口縁部	3 (紙部碗)	3	2	10 (紙部碗3)	6 (紙部碗2)	4 (紙部碗4)		
	胴部		1		5 (紙部碗5)	1 (紙部碗)	3 (紙部碗3)		
	底部		1	1 (紙部碗)	6 (紙部碗3)		5 (紙部碗2, 碗3)		
	完形				1 (小碗)	1	1		
猪口	口縁部	1		1	1				
	底部					1			
	完形	1		1	2				
花生け	口縁部			1					
	頸部			1 (耳)					
	完形			1					
急須	口部					1			
	口～胴部					1 (注ぎ口まで)			
蓋	完形				1	2			
鉢	口縁部			1					
香炉	完形			1					
杯	完形	1						1	
器種不明		7 (口1, 胴4, 完形2)		1 (胴)	1 (胴)	8 (胴7, 底1)	7 (胴6, 口～胴1)		1 (胴)
個体数		17	4	13	20	32	31	1	2

陶質土器

火炉	口縁部				1				
	完形					1			
	胴～底部					1			
蓋	撮み	1 (鍋のフタ?)							
器種不明		5 (完形蓋1, 胴4)	1 (口)	3 (胴)	4 (胴3, 底1)	4 (胴4)	1 (胴)		
個体数		6	1	3	5	6	1	0	0

鉄製品

釘		3			1		1		
刀子		1			2				
器種不明		1	2 (胴2)			14 (胴14)	14		
個体数		5	2	0	3	14	15	0	0

青銅製品

煙管	破口	1			2			1	
	雁首	1	1		2			3	
簪		3 (完形)			1	2			
銭貨		1 (寛永通宝)				3	1 (1セント)	1	1
器種不明			1 (完形)						
個体数		3	1	0	5	5	1	5	1

金属製品

指輪								1	
器種不明					9 (口9)				
個体数		0	0	0	9	0	0	1	0

貝製品

シャコ貝		1 (完形)					1 (完形)	2 (完形)	
個体数		1	0	0	0	0	1	2	0

石製品

硯								1 (完形)	
個体数								1	

円盤状製品

器種不明								1 (完形)	
個体数		0	0	0	0	0	0	1	0

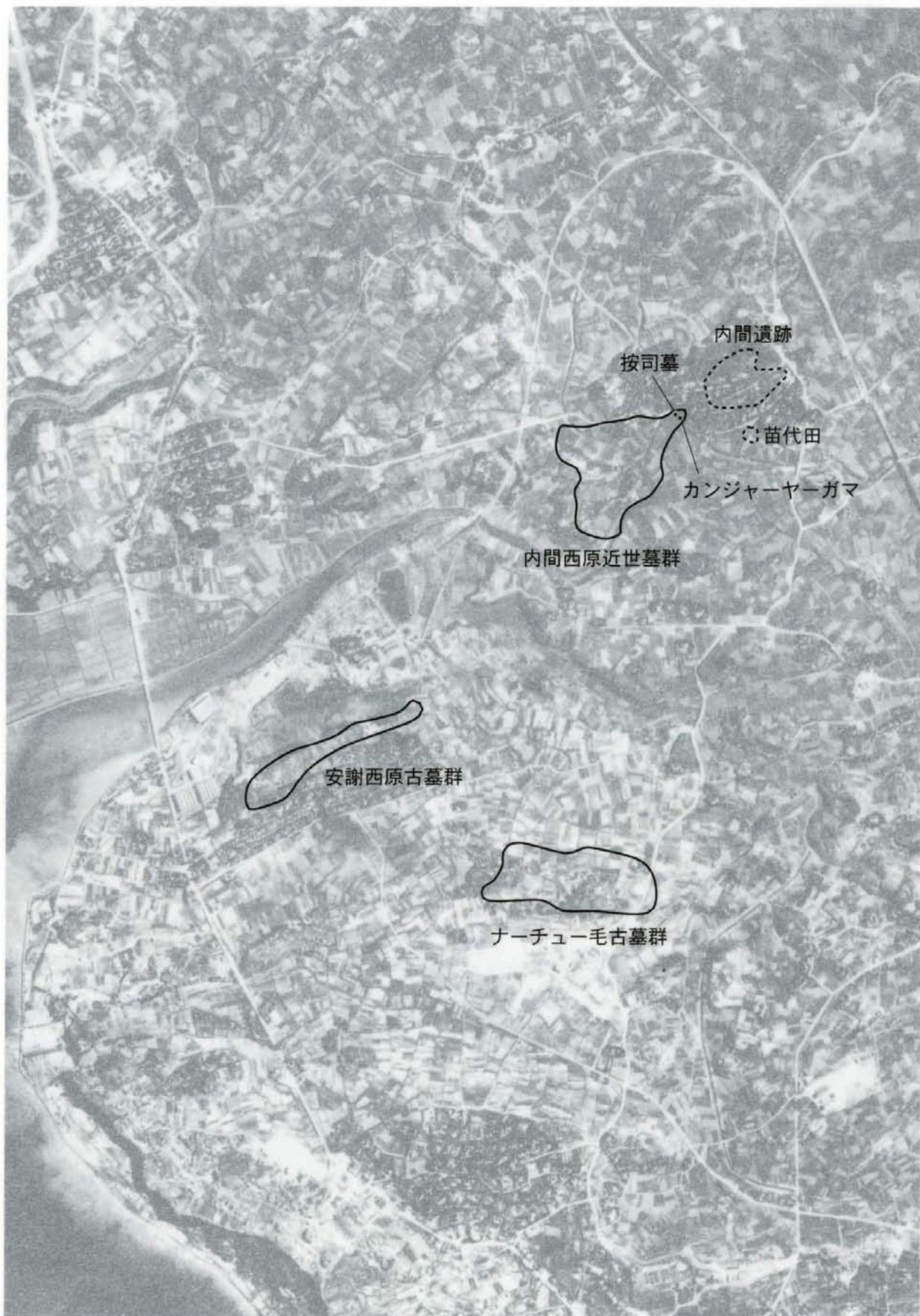
窯道具

窯道具								2 (完形2)	
個体数		0	0	0	0	0	0	2	0

その他

器種不明		3 (ガラス瓶2)		1	1		4		
個体数		3	0	1	1	0	4	0	0

写真・図版



遺跡一帯の空中写真
PL.1 昭和20年（1945年）



遺跡一帯の空中写真
PL.1 昭和20年（1945年）

内 間 遺 跡



調査地遠景 (中央手前：排土置場 奥：調査地) 東より



調査地全景 北西より



調査地全景 北東より



層序 南より



遺構 土坑1 東より



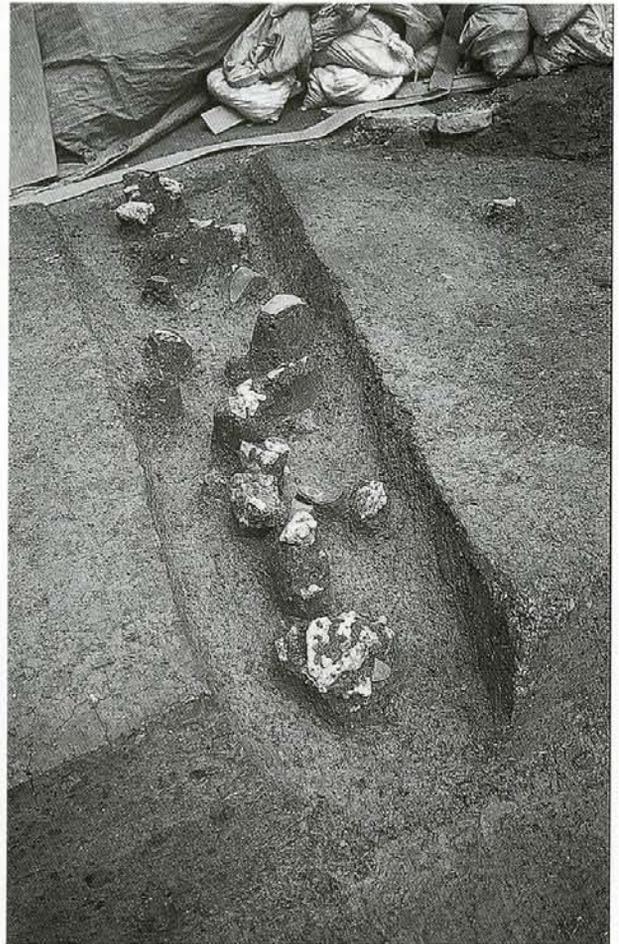
遺構 土坑2 南西より

PL.2 調査地遠景～遺構

内 間 遺 跡



遺構 土坑3 南より



遺構 溝1 南より



遺構 砲弾穴 南西より

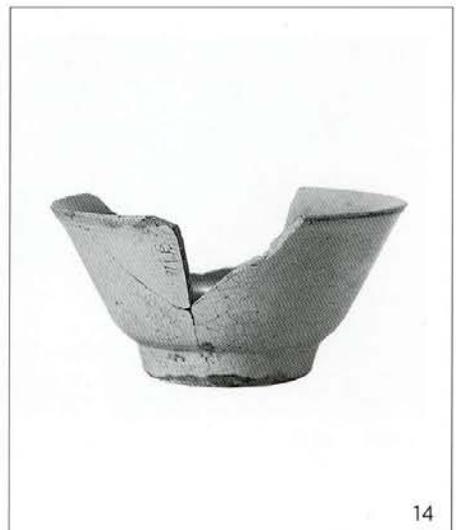
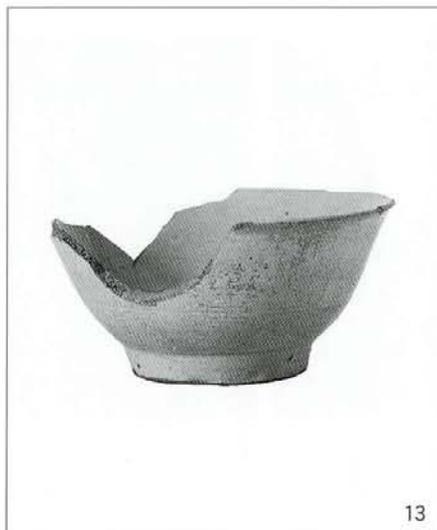
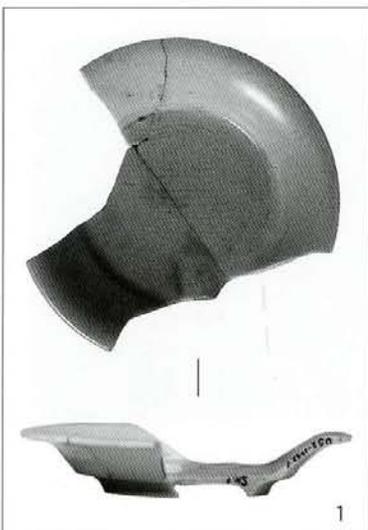
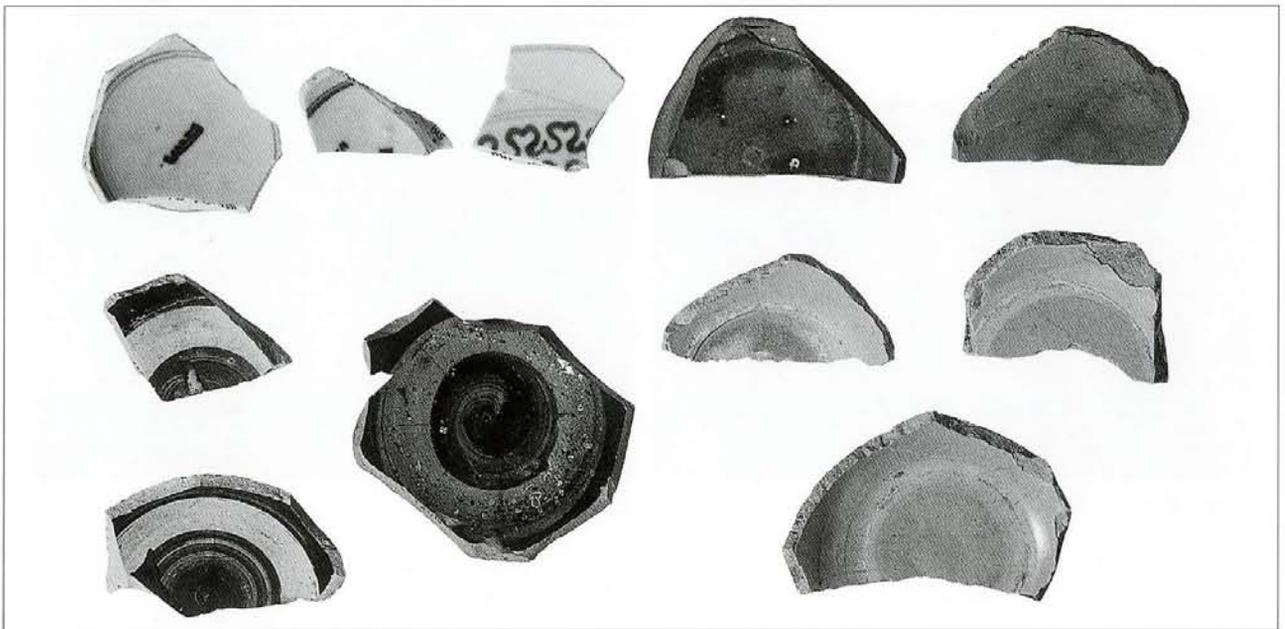
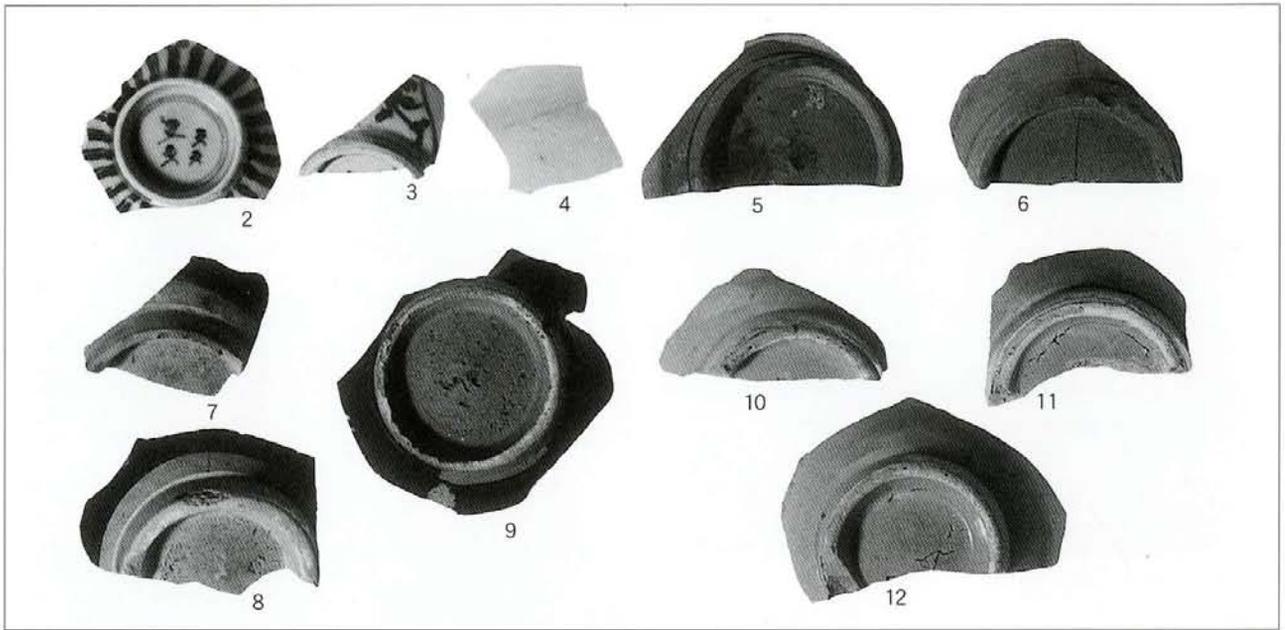


遺物出土状況 ハ-30 区内 南より



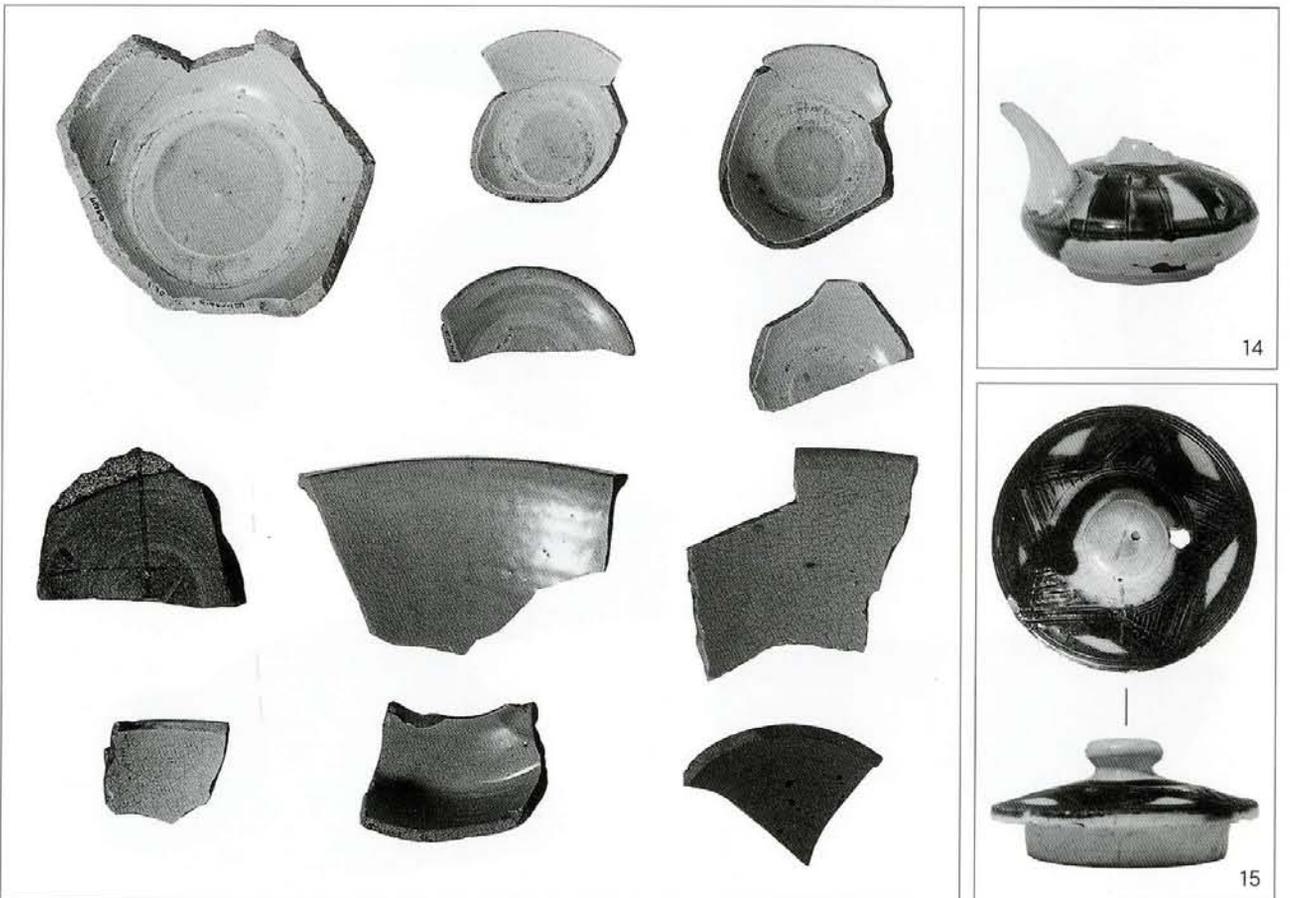
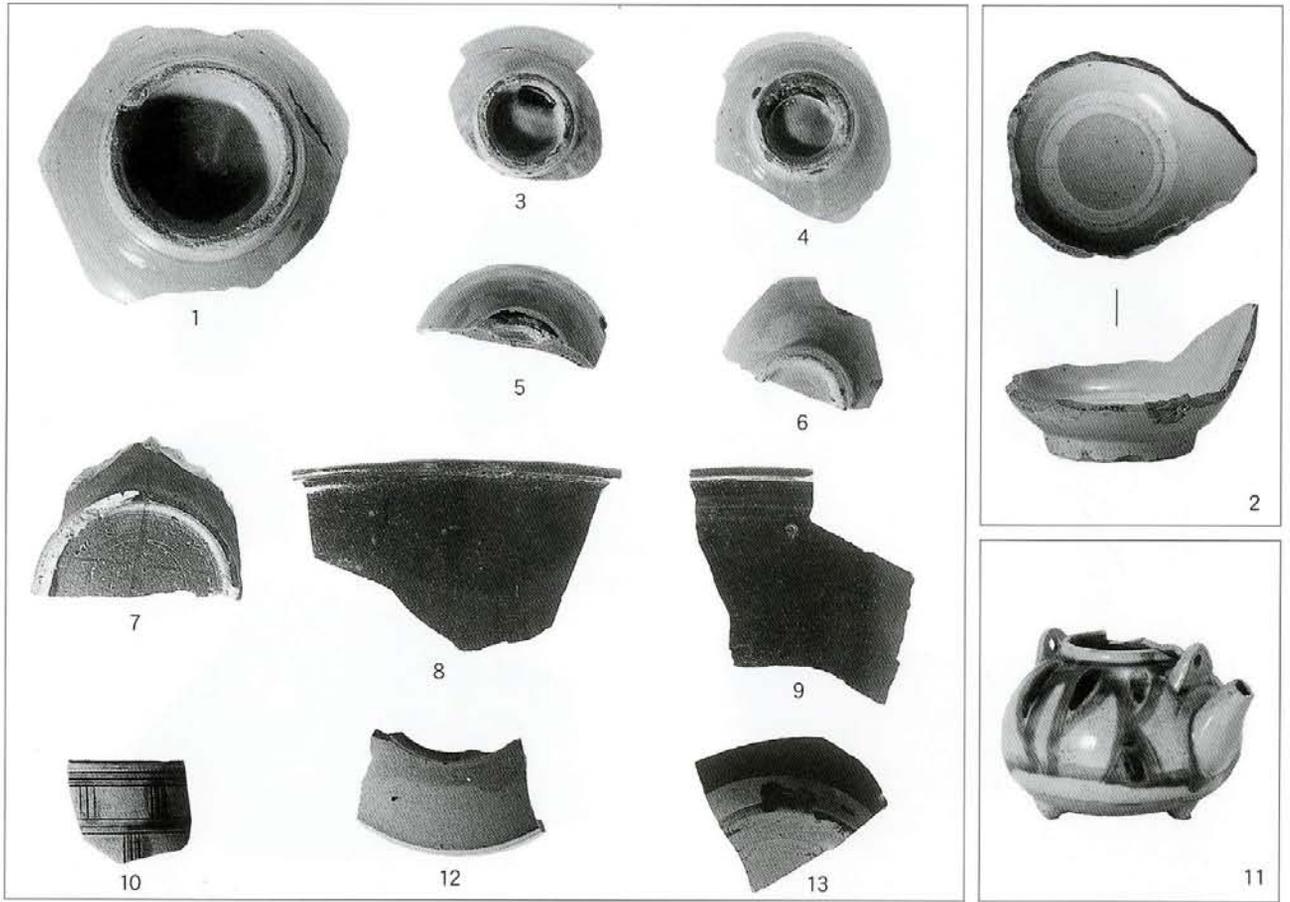
遺物出土状況 ハ-33 区内

PL.3 調査地遠景～遺構



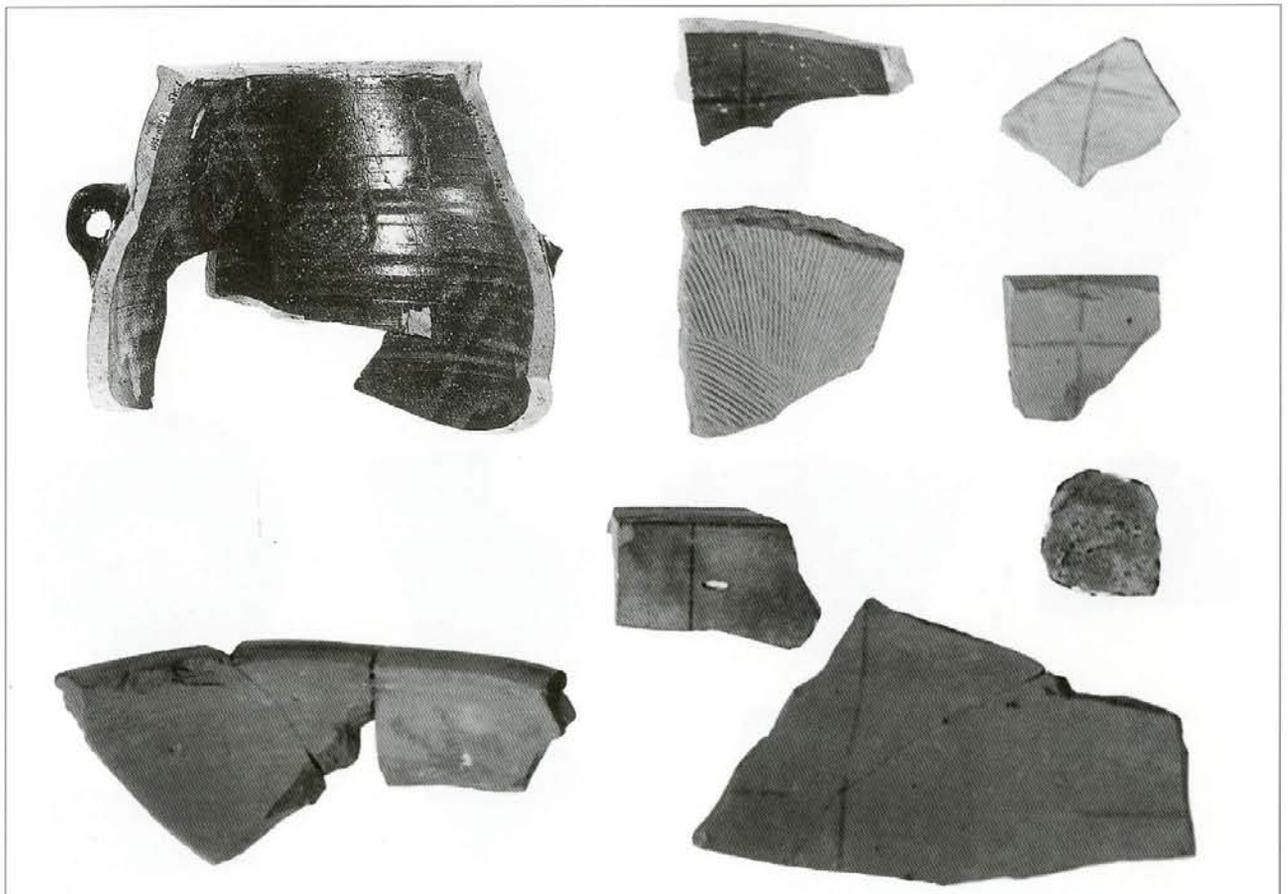
PL.4 (第10図) 土坑1 出土遺物(1)

(内間遺跡)



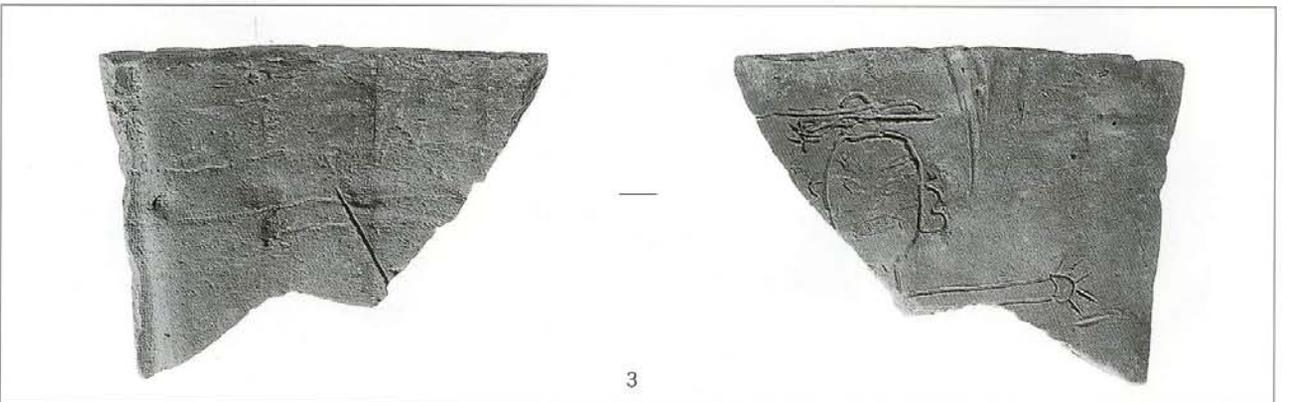
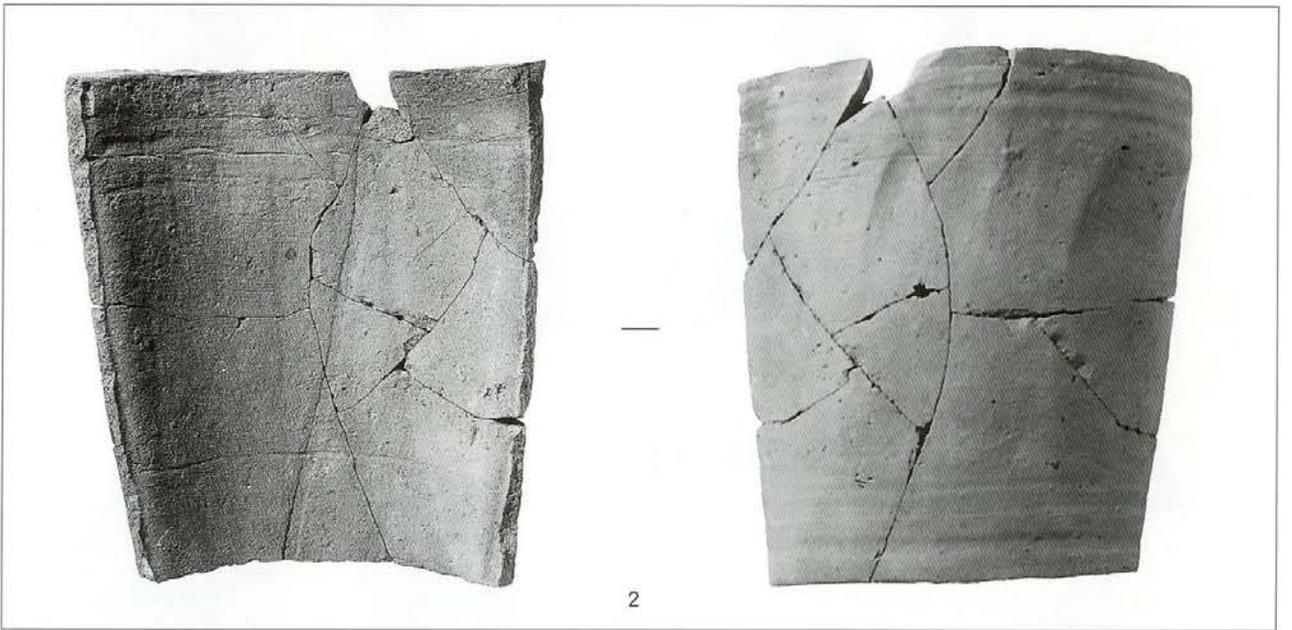
PL.5 (第11図) 土坑1 出土遺物(2)

(内間遺跡)



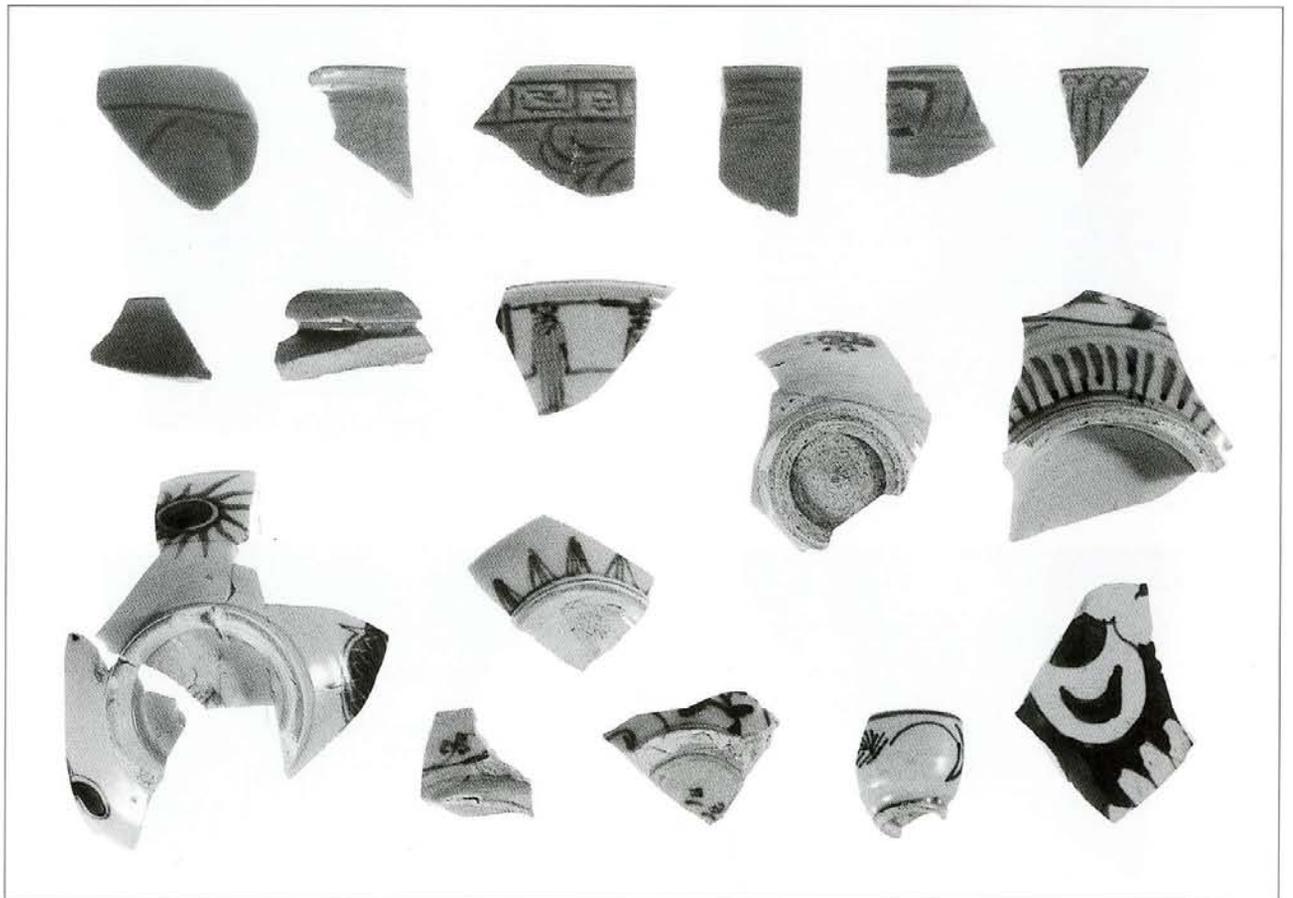
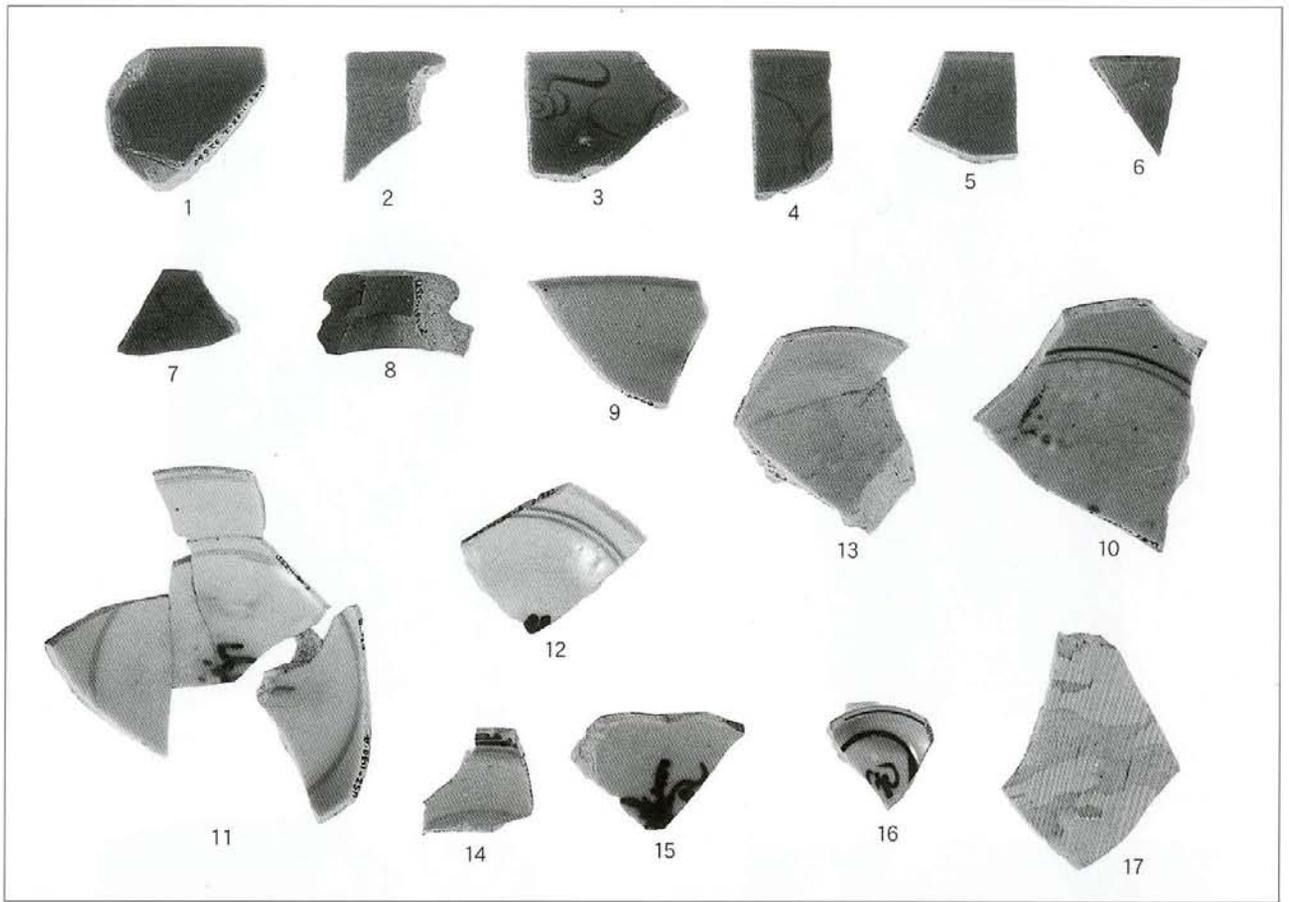
PL.6 (第12図) 土坑1 出土遺物 (3)

(内間遺跡)



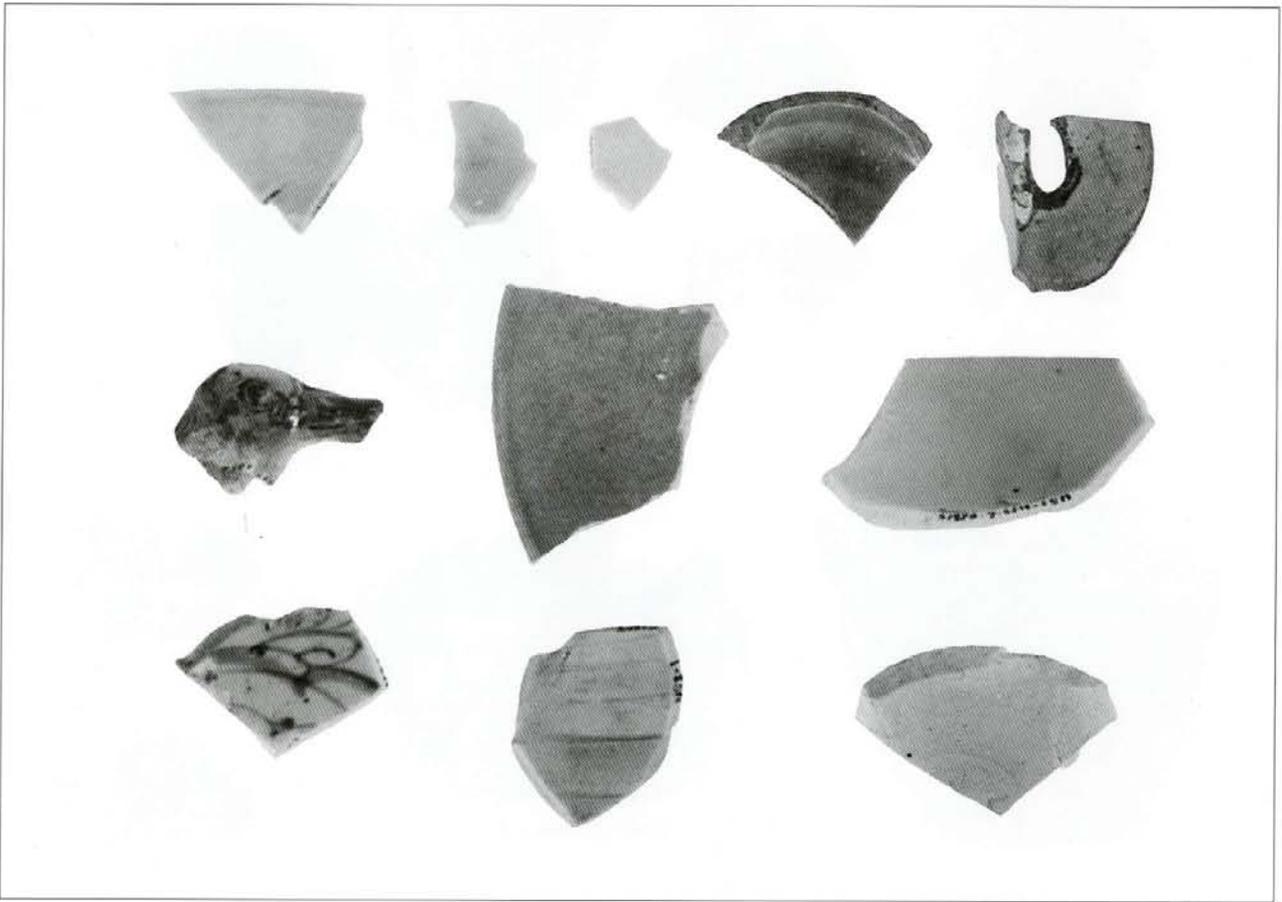
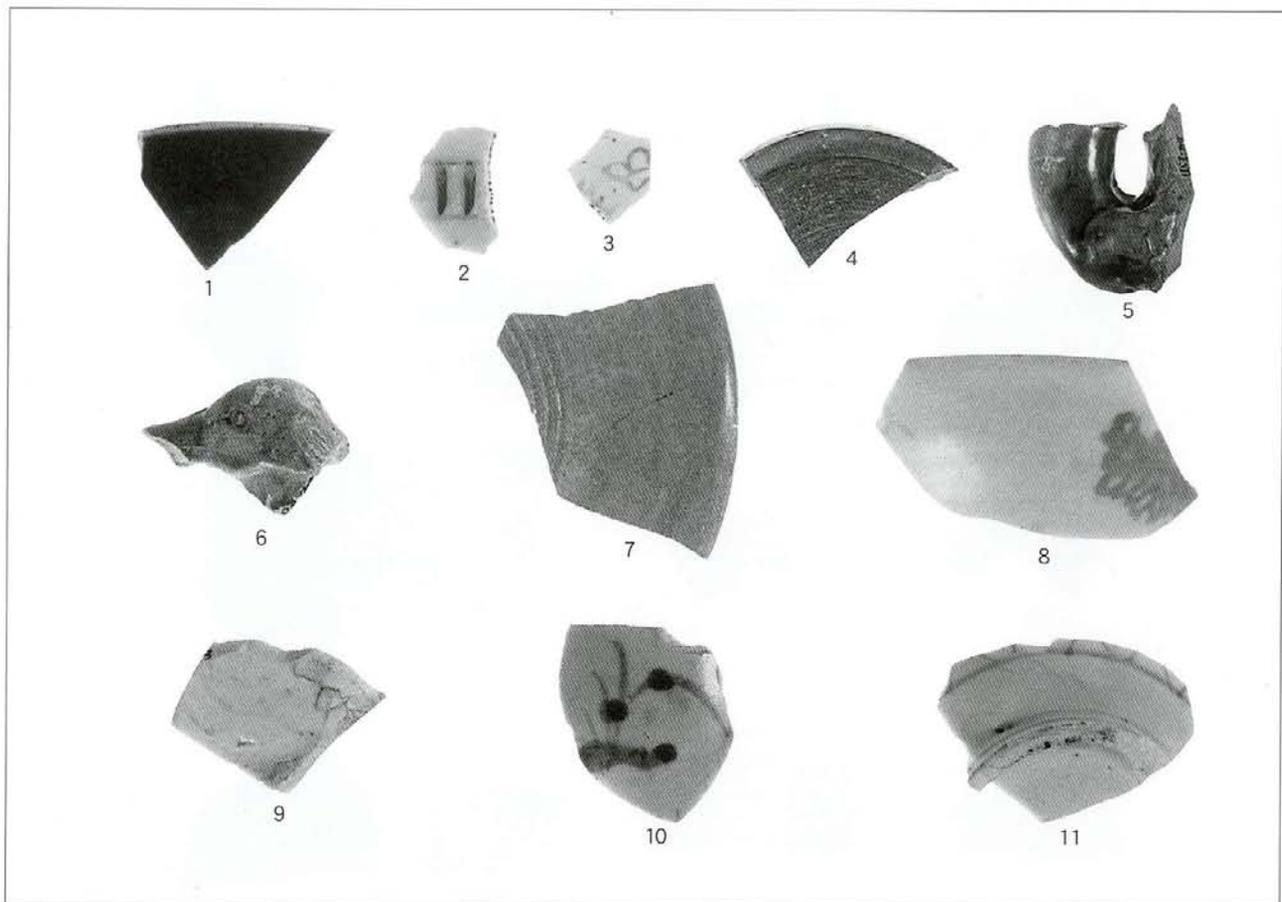
PL.7 (第13図) 土坑1 出土遺物(4)

(内間遺跡)



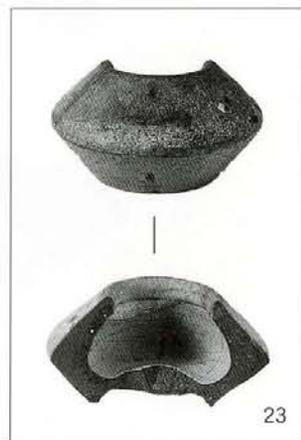
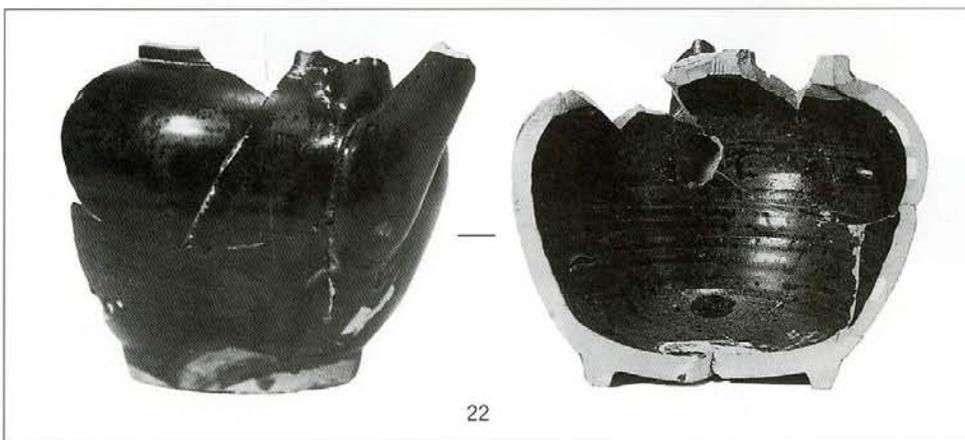
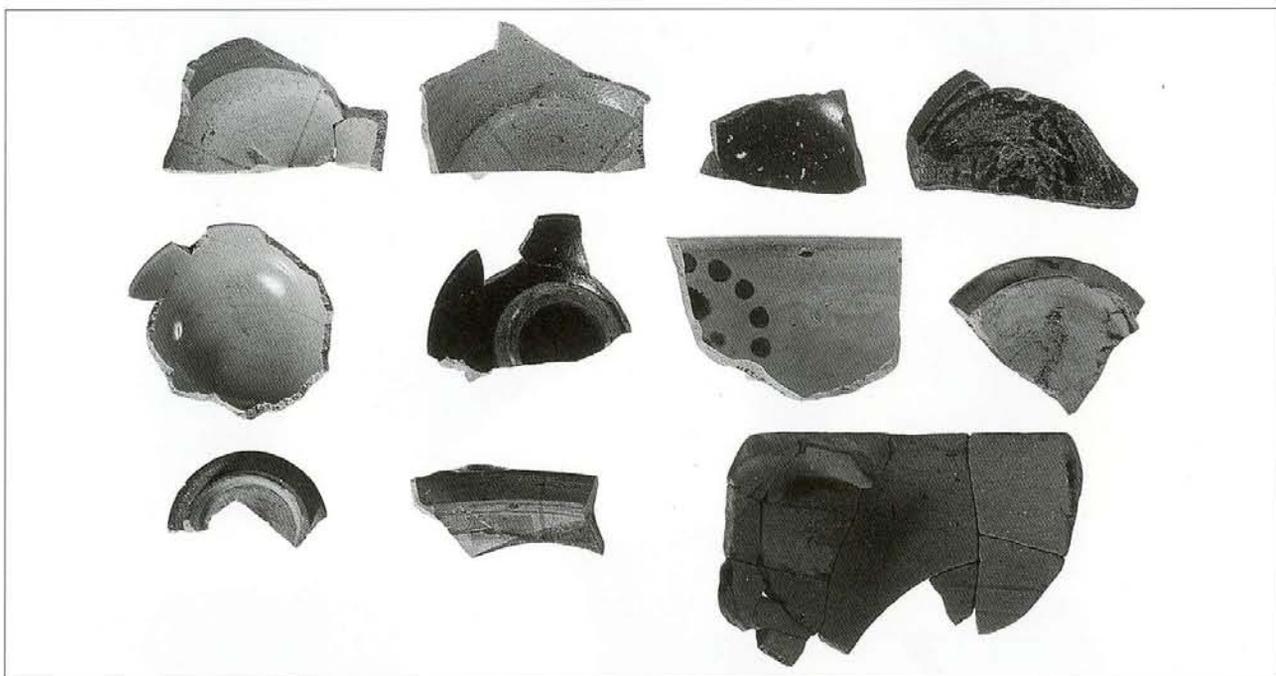
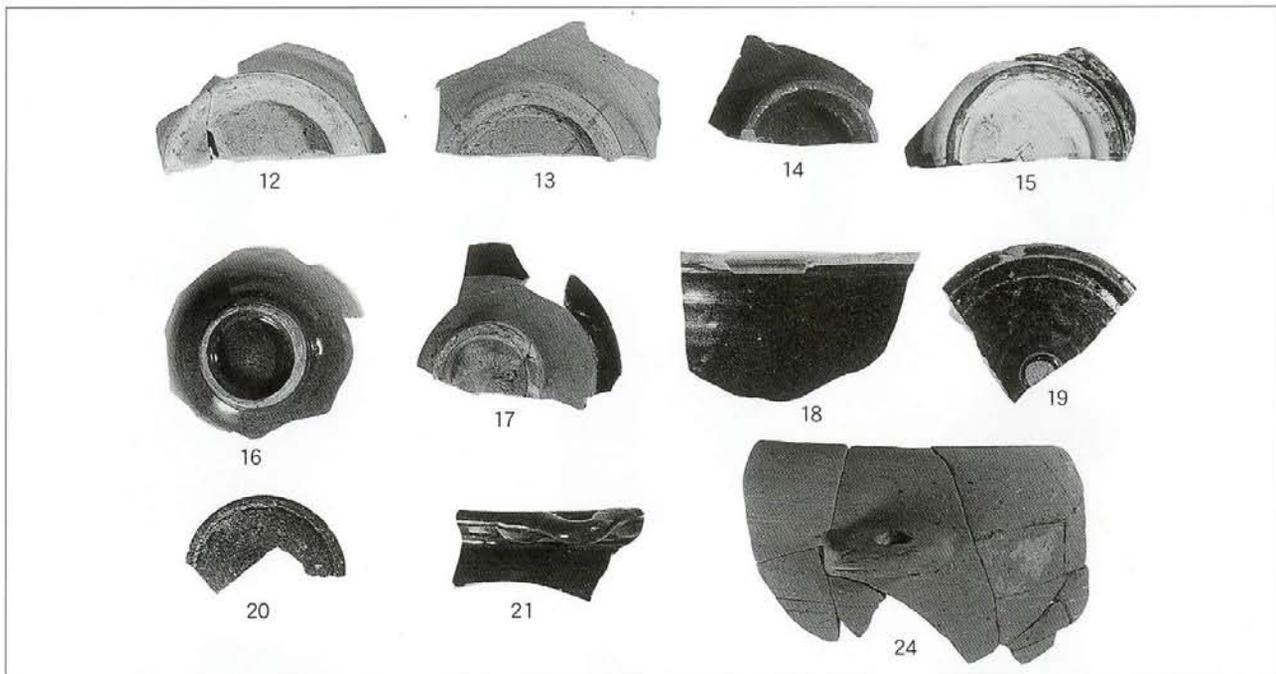
PL.8 (第14図) 包含層 出土遺物(1)

(内間遺跡)



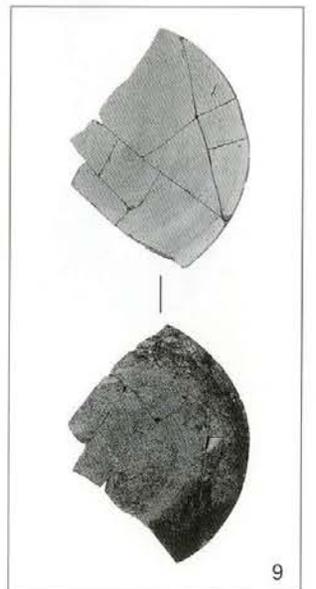
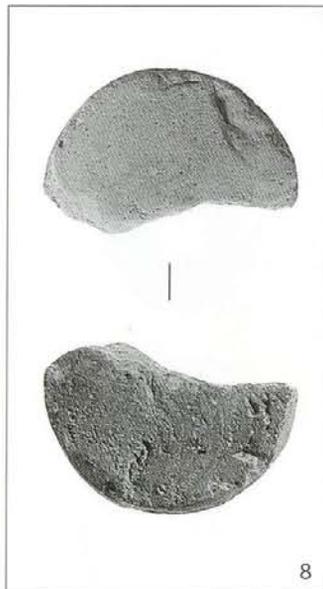
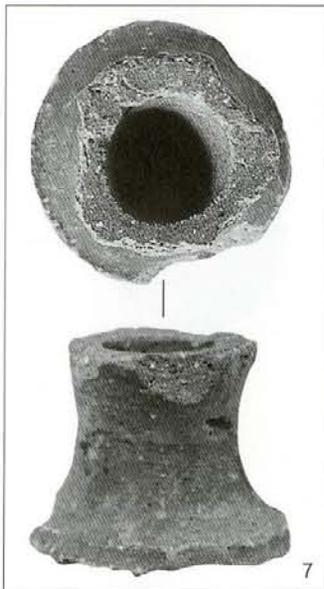
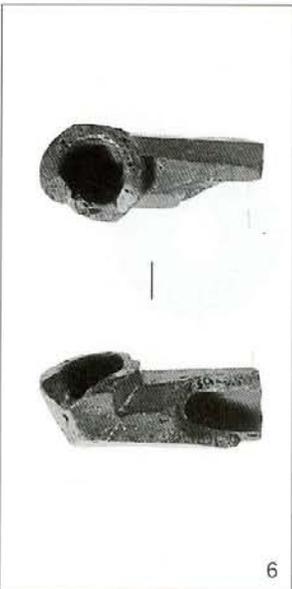
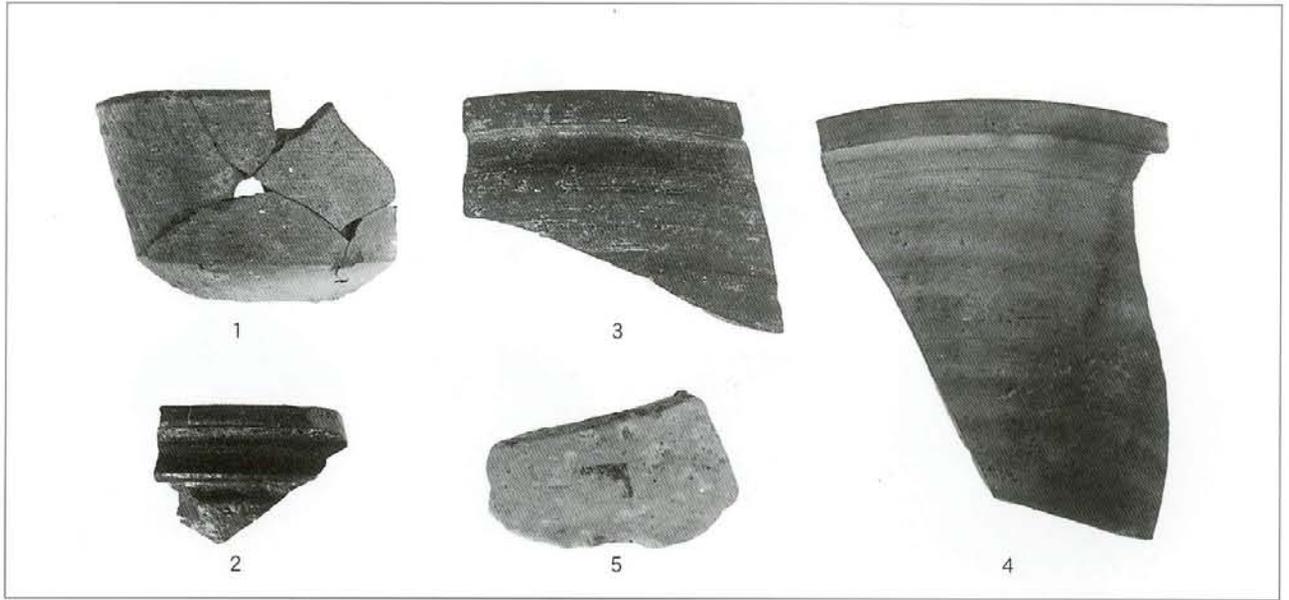
PL.9 (第15図) 包含層 出土遺物 (2)

(内間遺跡)



PL.10 (第15図) 包含層 出土遺物 (3)

(内間遺跡)



PL.11 (第16図) 包含層 出土遺物(4)

(内間遺跡)

内間カンジャーヤーガマ遺跡



調査前



石敷き検出中



除草後



同上



東側壁面層序



戦中に構築された石列



H10 試掘構 西側壁面層序

カンジャーヤーガマ



青磁皿 出土状況



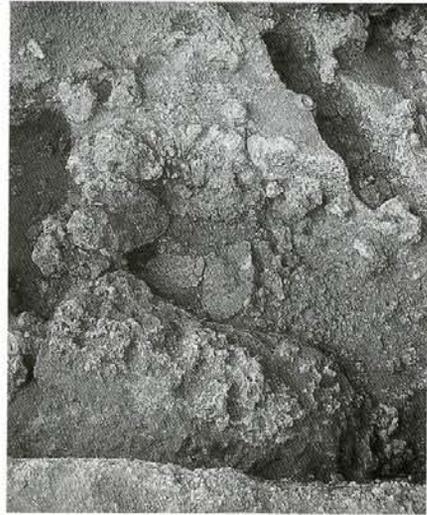
石敷き下部検出状況



青磁皿の下 盤の出始め



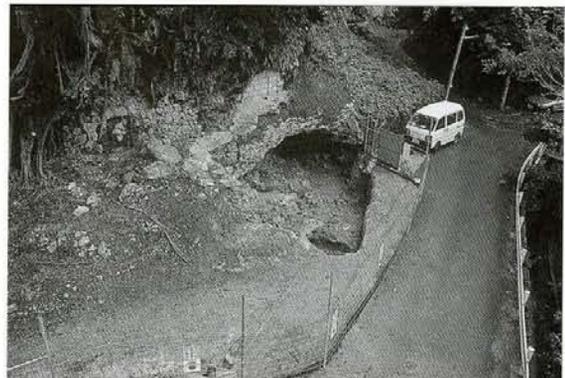
青磁埋納状況を確認するための断割



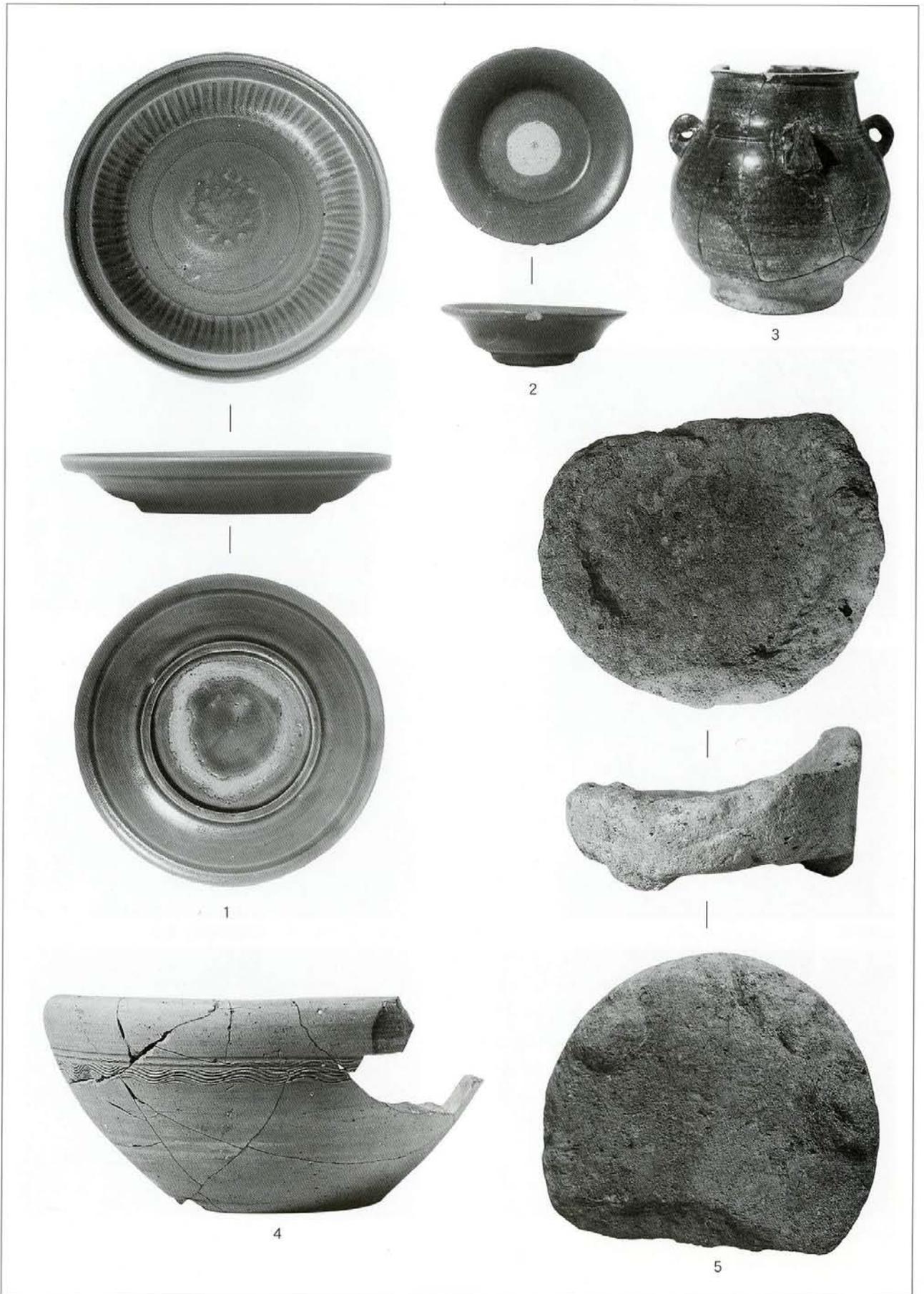
岩盤と敷石の出土状況



同上 断割状況



調査終了後遠影

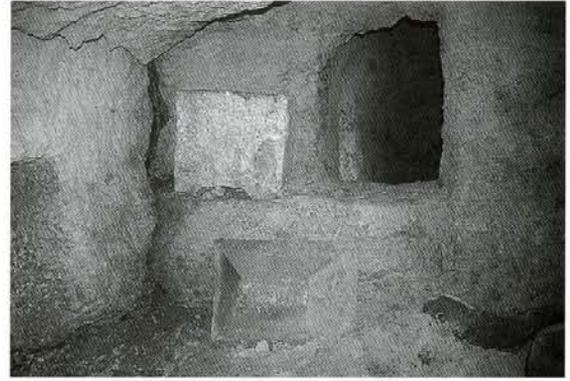


PL.15 (第23~25図) カンジャーヤーガマ遺跡出土遺物

内間西原近世墓群



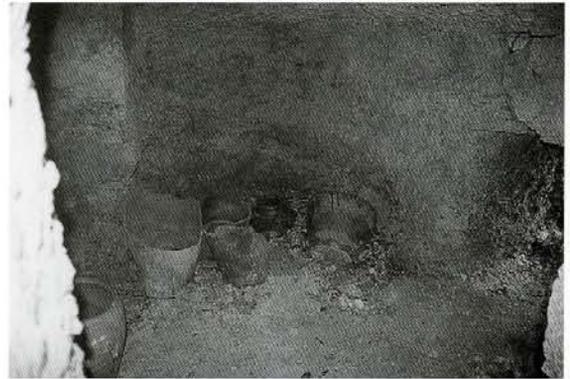
伐採後



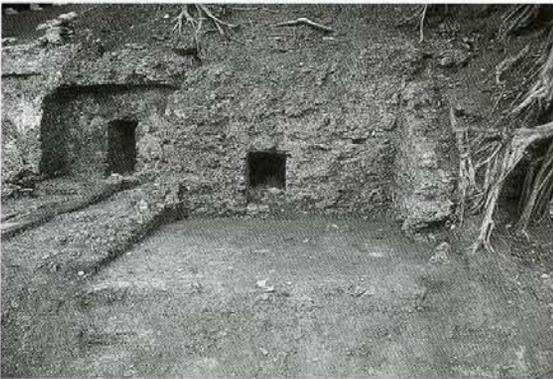
室内左側



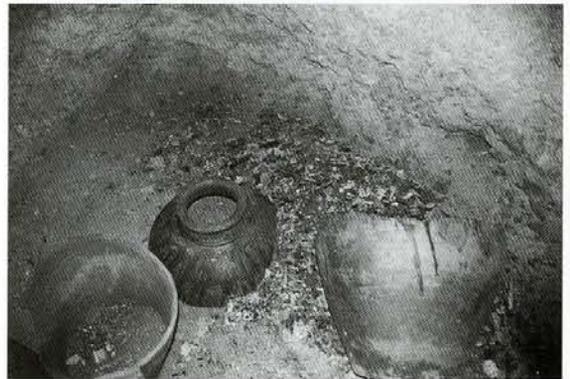
墓庭二次堆積土



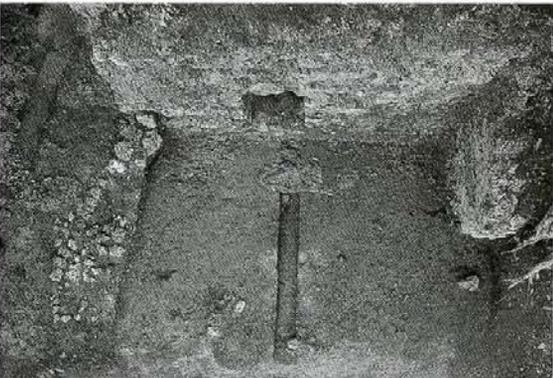
室内右側



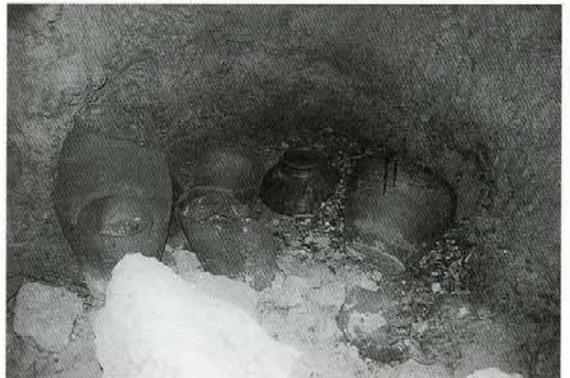
墓庭床面



室内蔵骨器状況 (タイ産褐釉陶器・焼骨)

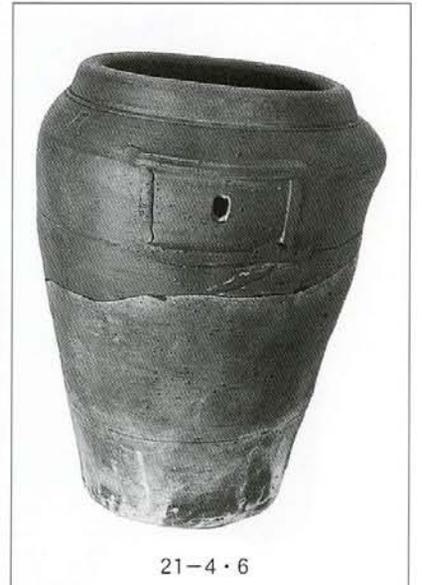
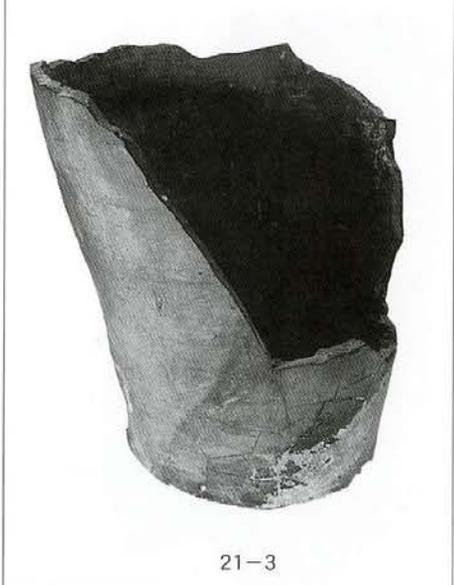
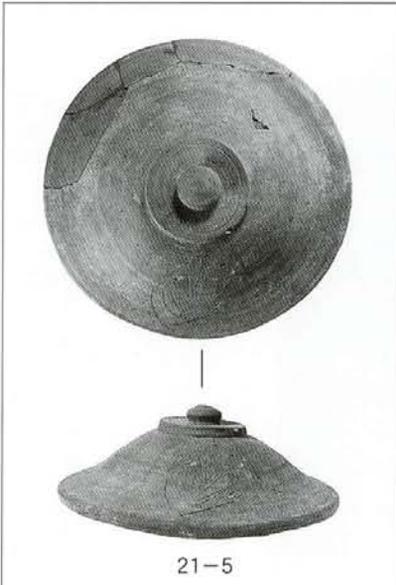
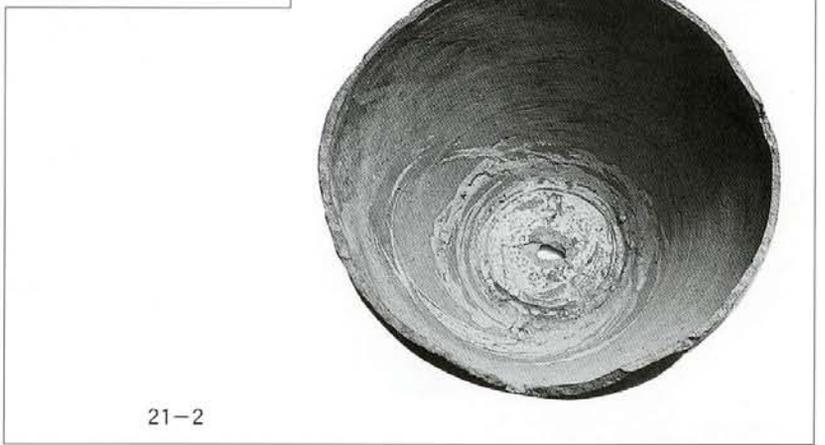
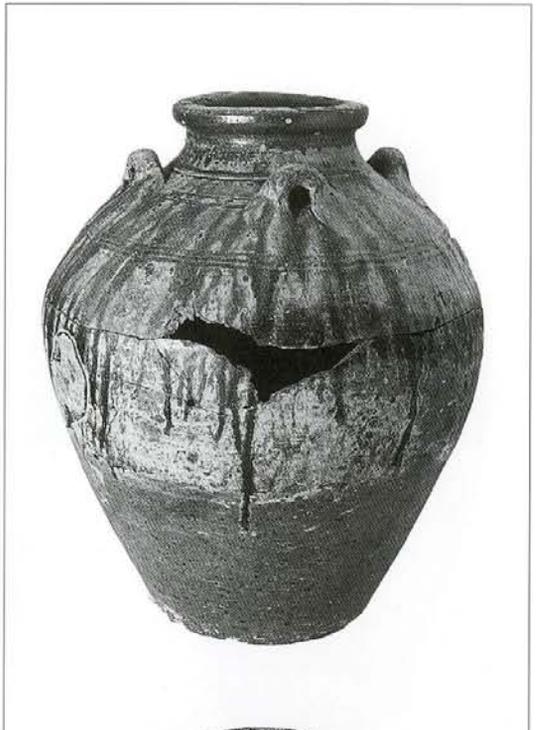


墓庭俯瞰

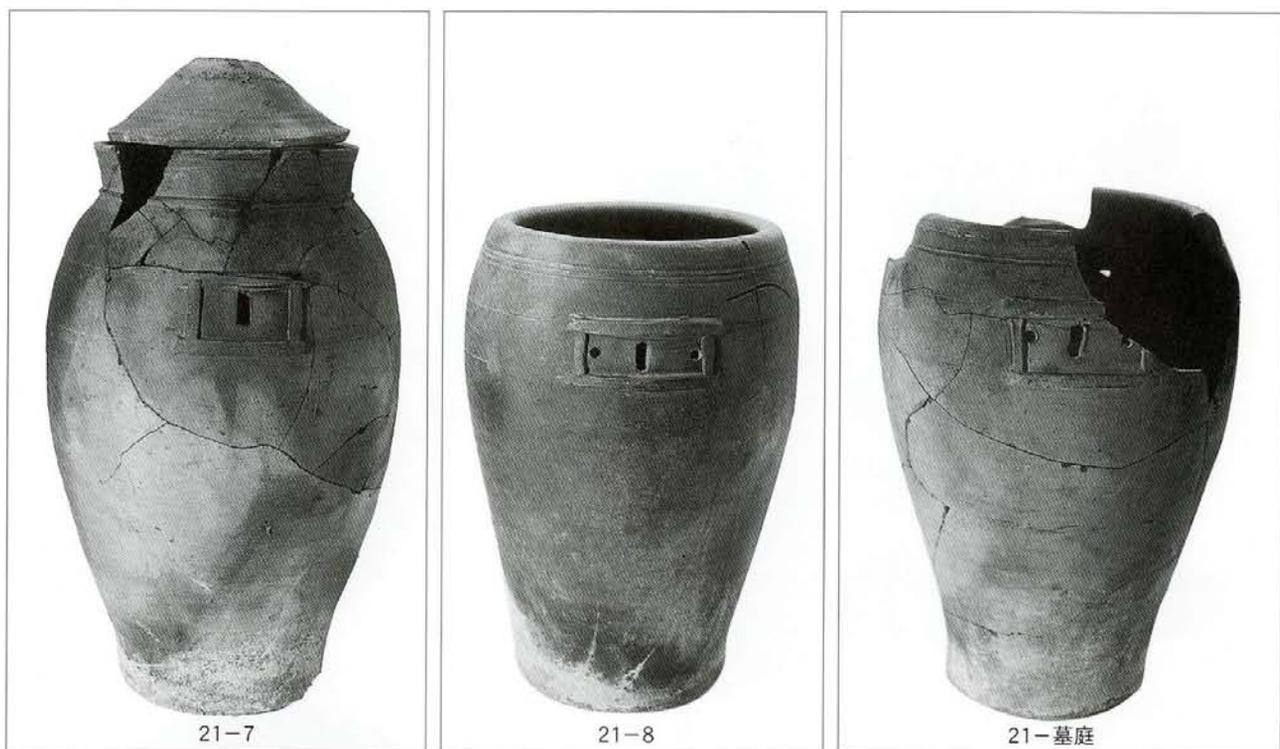


同上

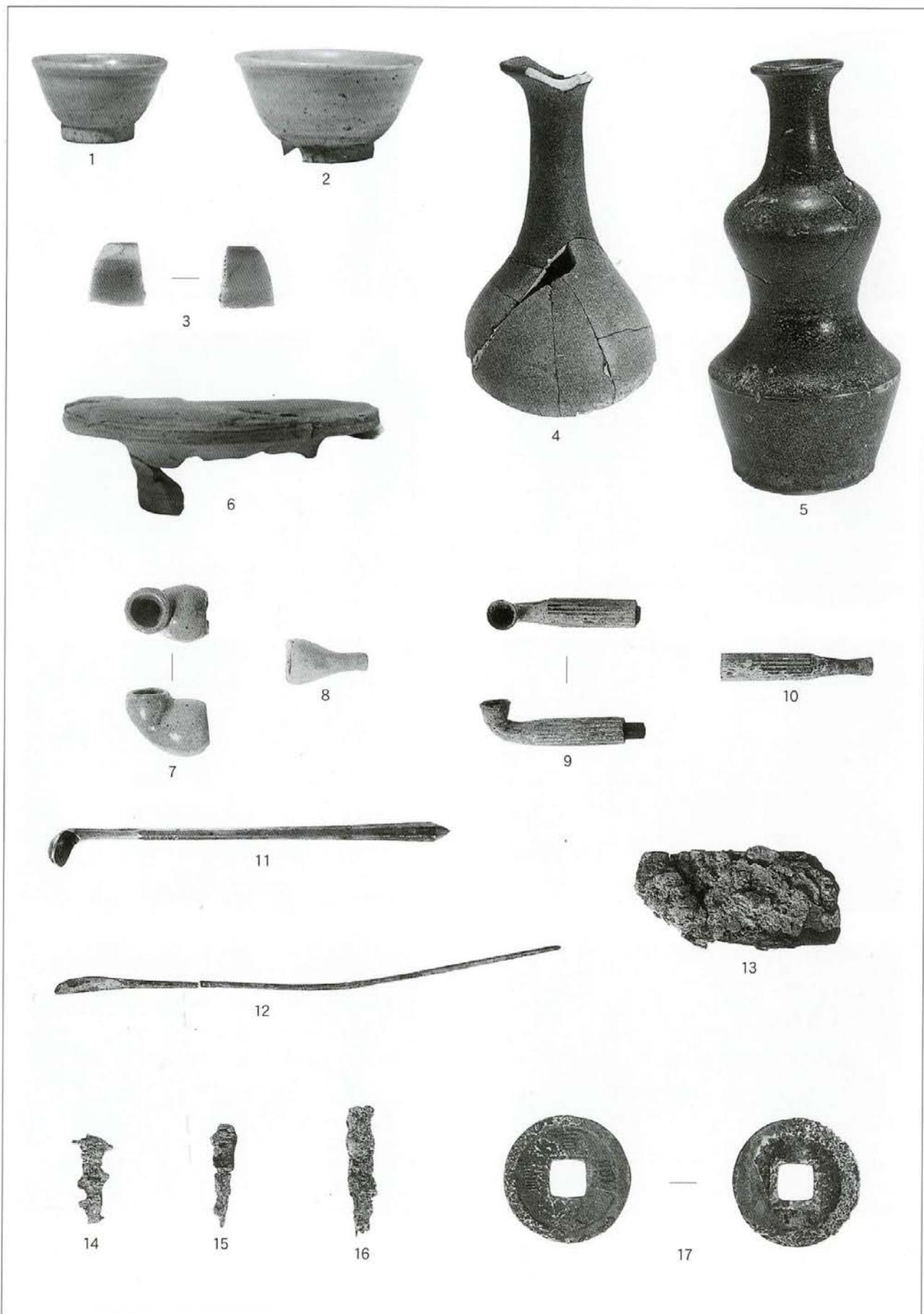
PL.16 (第26図) 21号墓 調査経過・遺構



PL.17 (第27图) 21号墓藏骨器



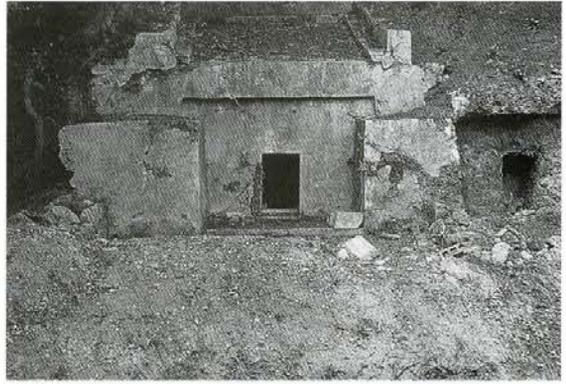
PL.18 (第27・28図) 21号墓藏骨器



PL.19 (第29図) 21号墓出土遺物

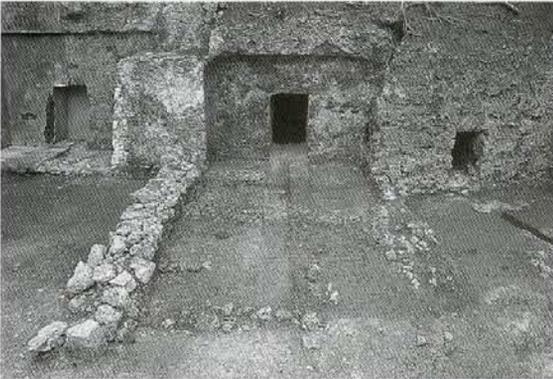
22号墓

23号墓



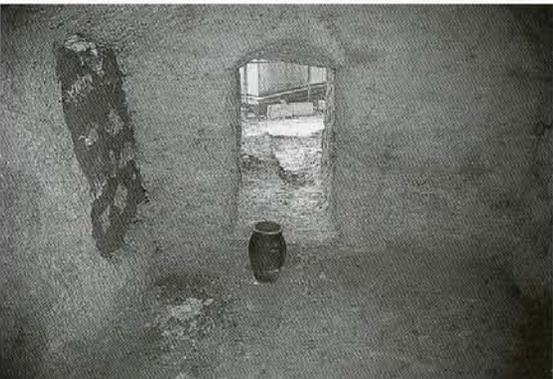
伐採後

伐採後



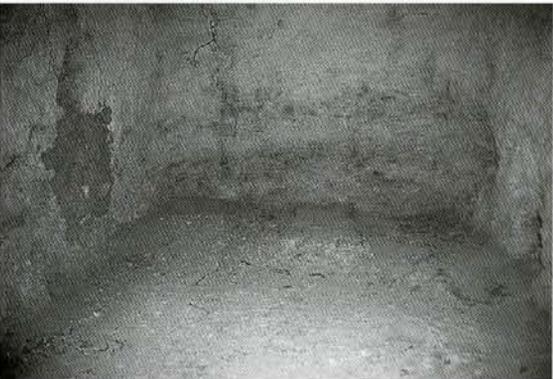
墓庭

墓庭検出状況



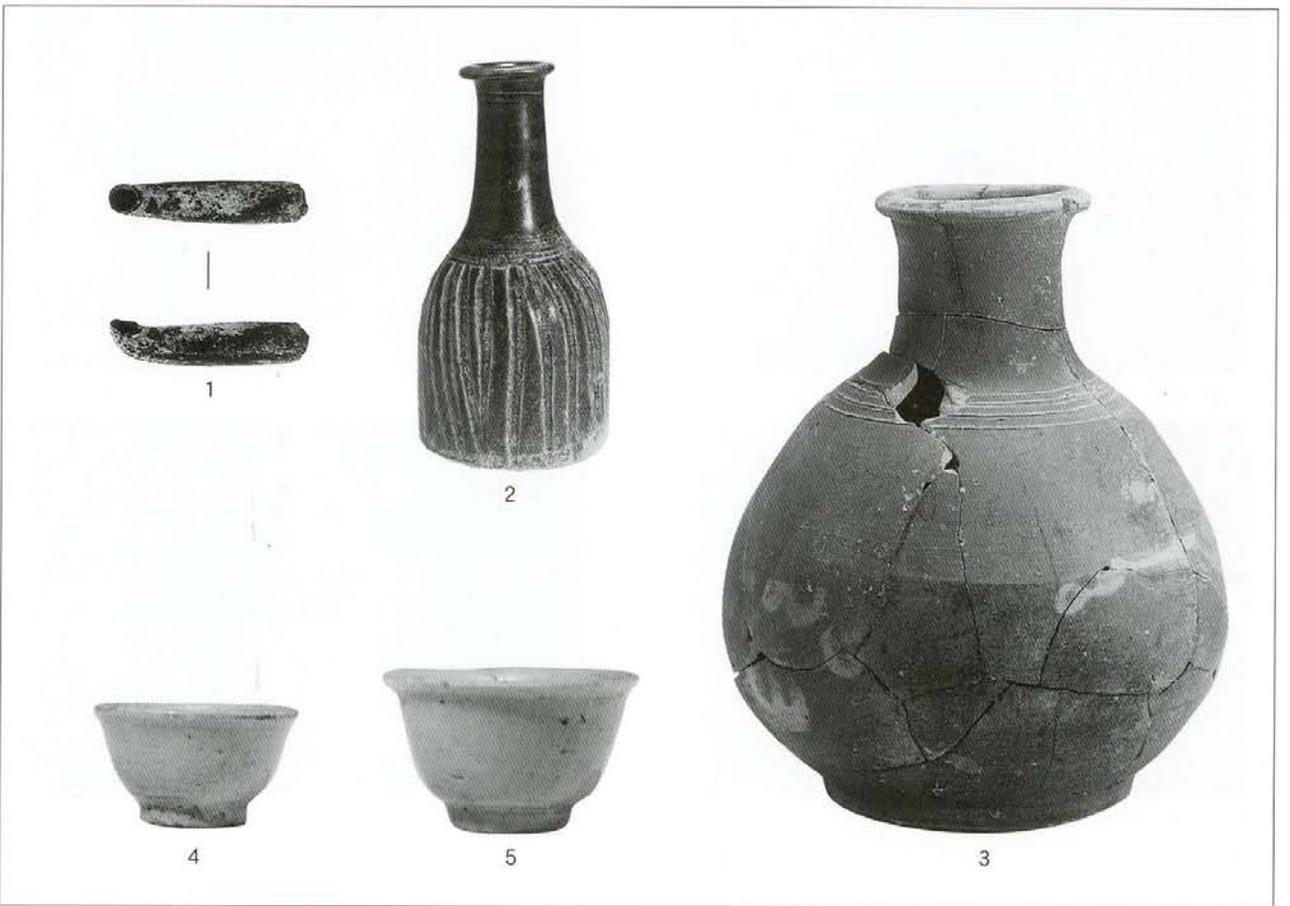
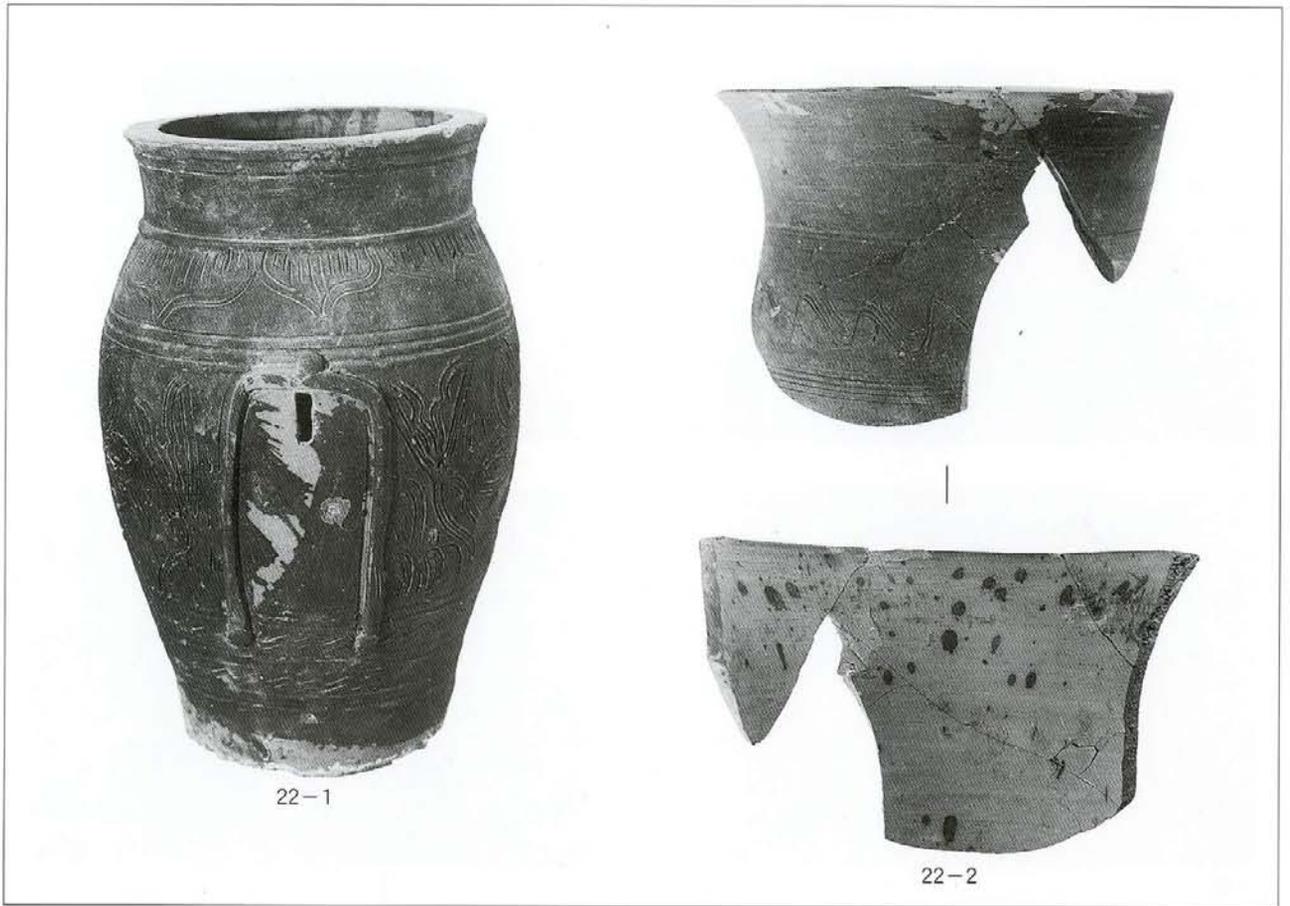
室内①

俯瞰



室内②

室内

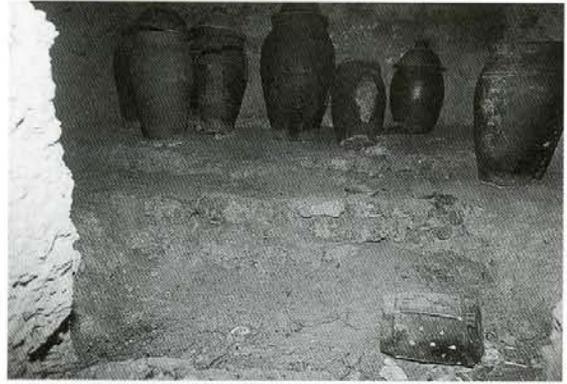


PL.21 (第32图) 22号墓藏骨器
 (第33图) 22号墓出土遗物

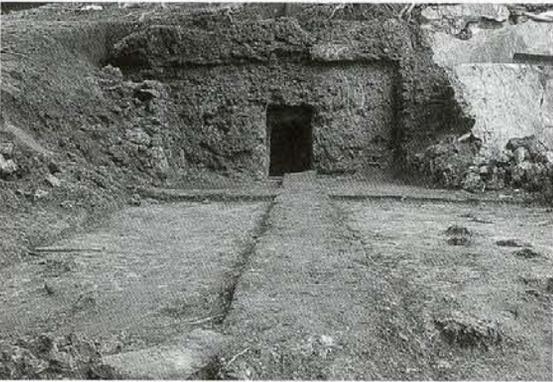
24号墓



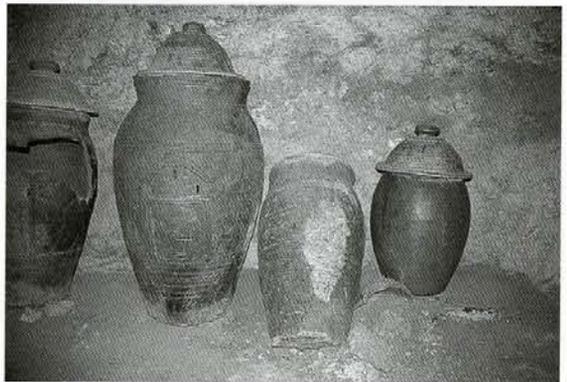
伐採後



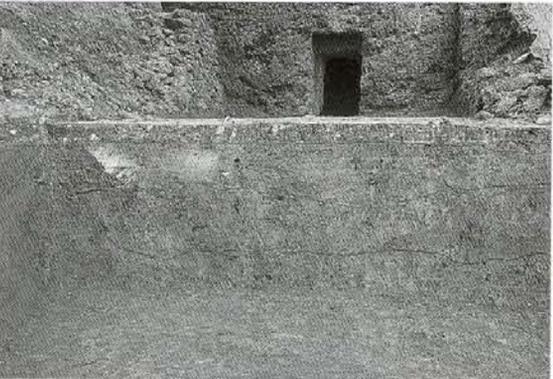
墓室内



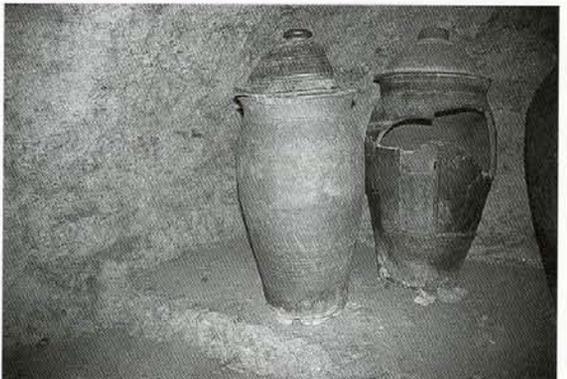
墓庭発掘中



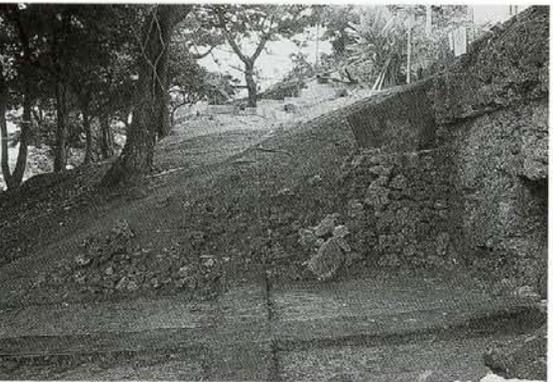
蔵骨器①



墓庭断割



同上②



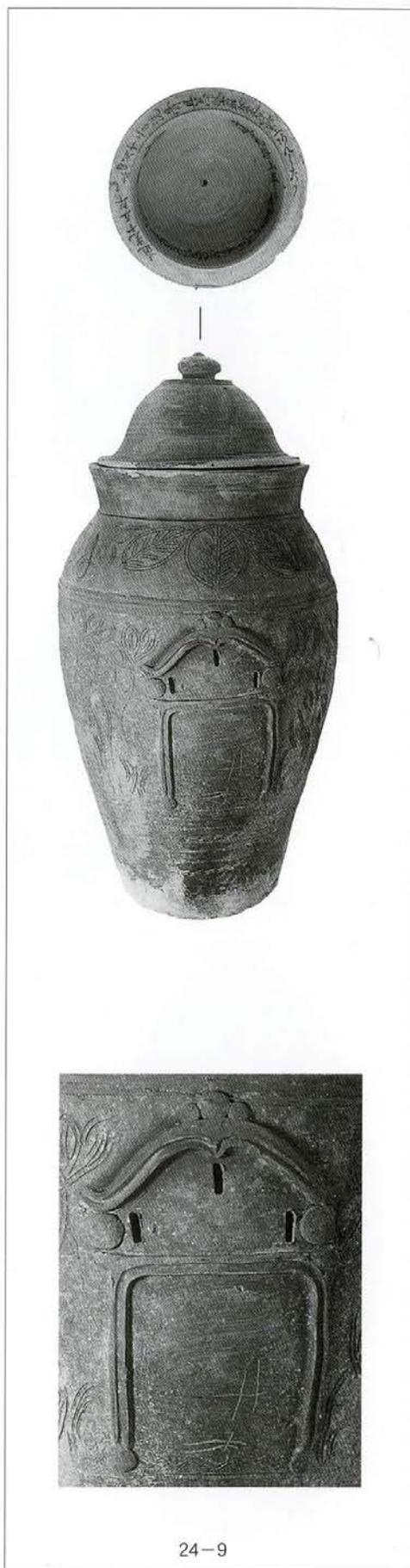
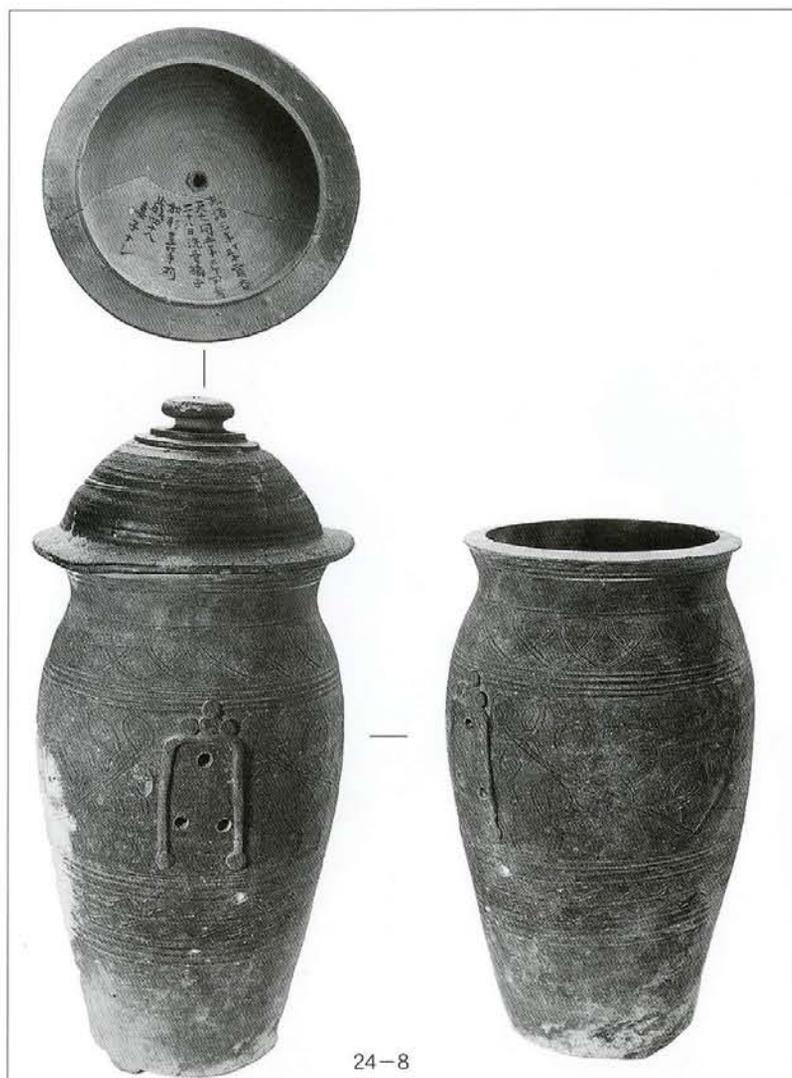
墓庭左袖石垣



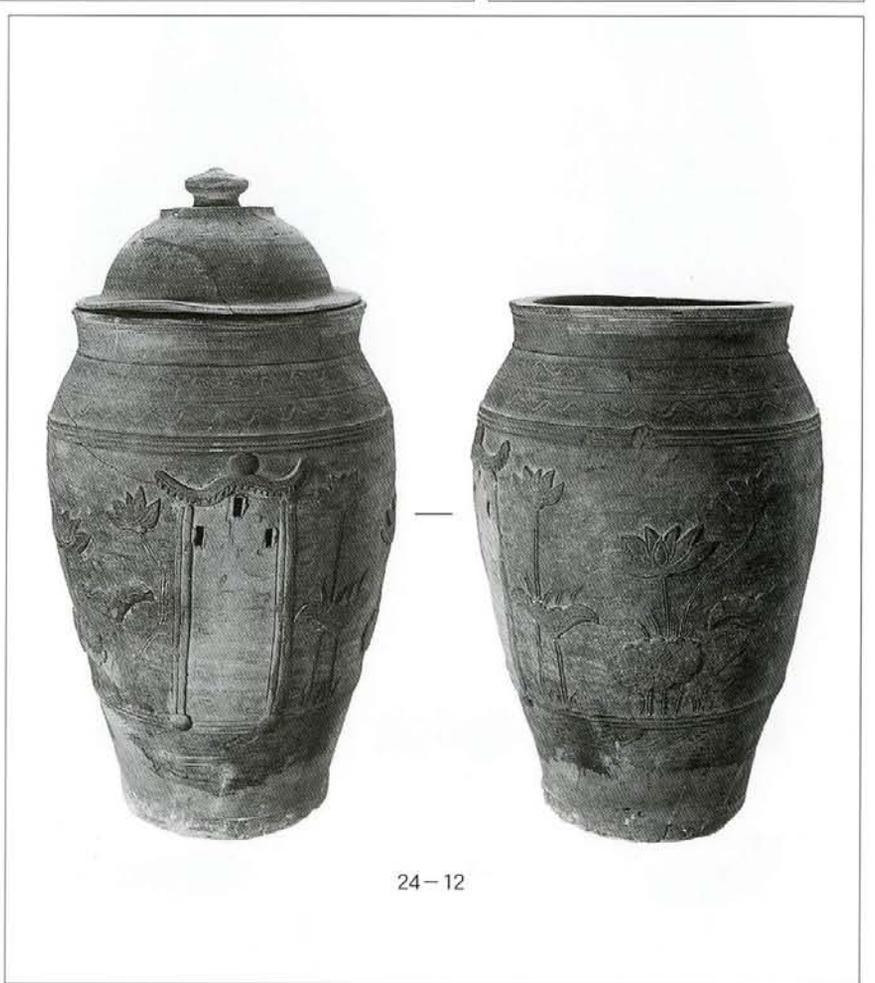
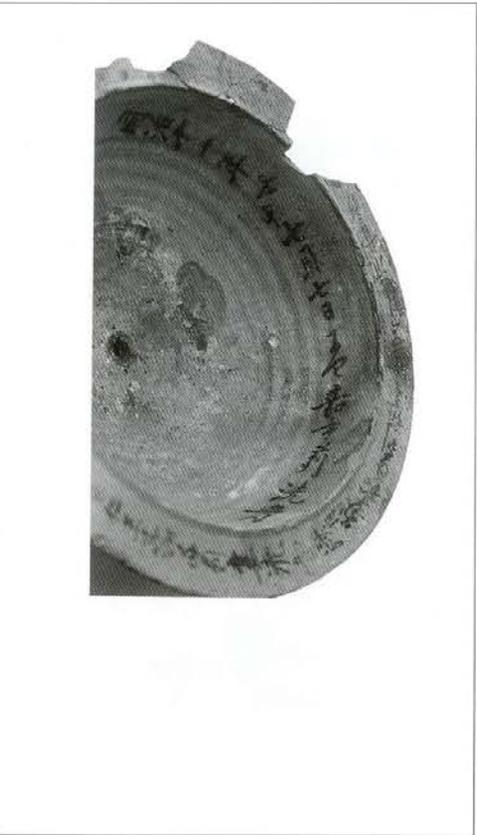
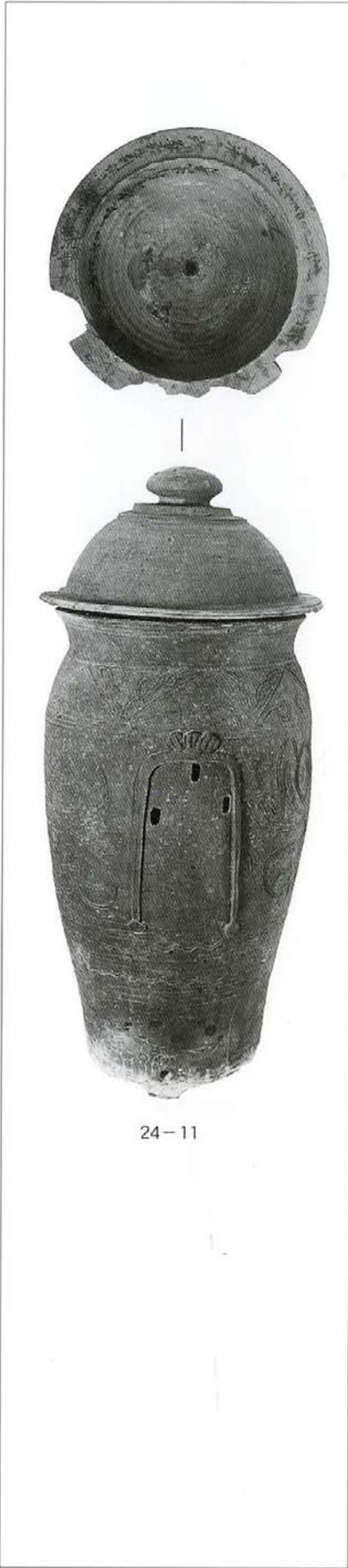
墓室内(厨子搬出後)



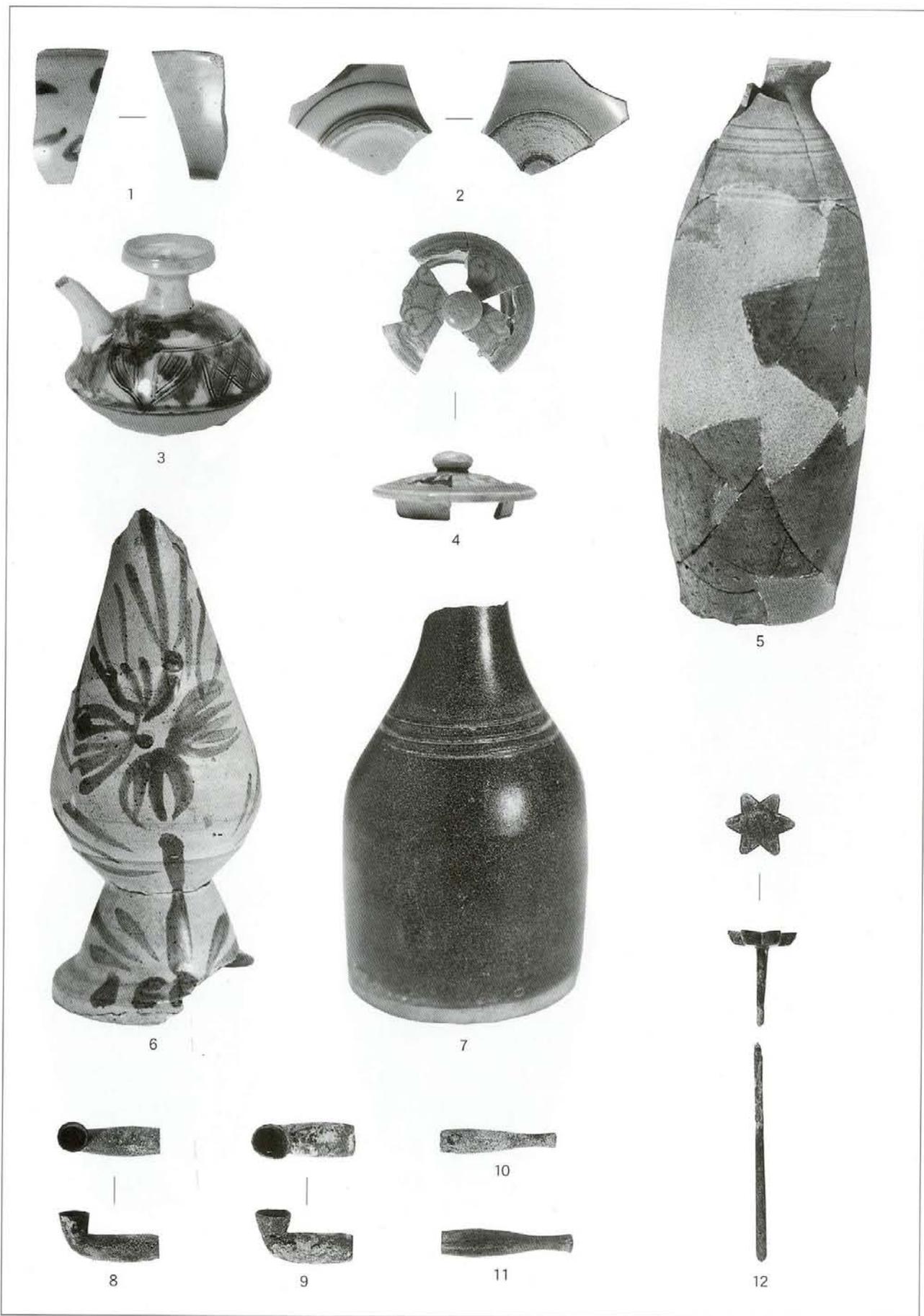
PL.23 (第38图) 24号墓藏骨器



PL.24 (第38·39图) 24号墓藏骨器

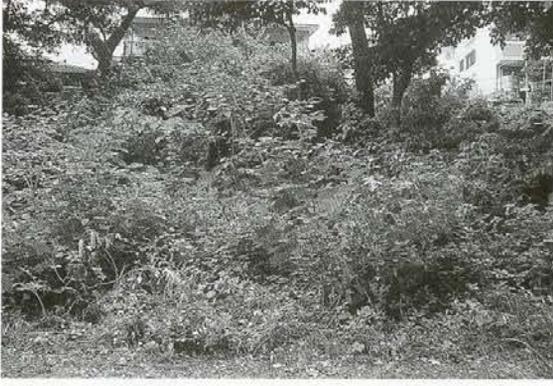


PL.25 (第39図) 24号墓藏骨器



PL.26 (第40・41図) 24号墓出土遺物

25号墓



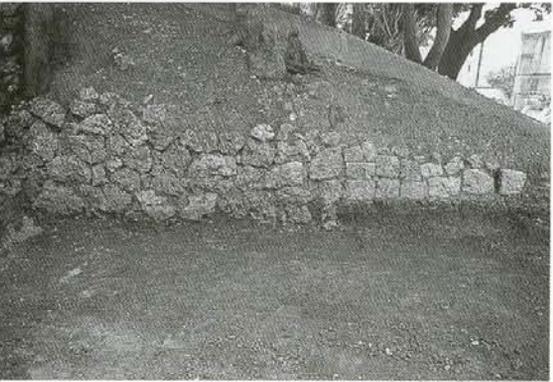
調査前



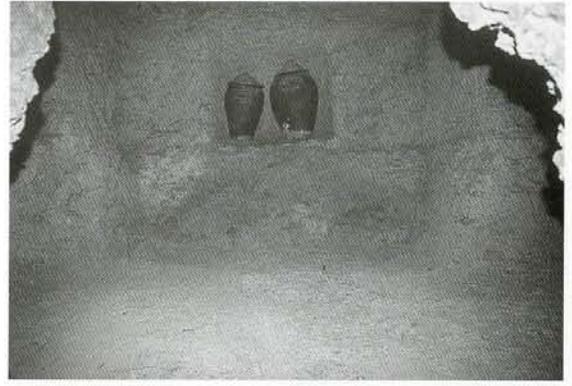
伐採後



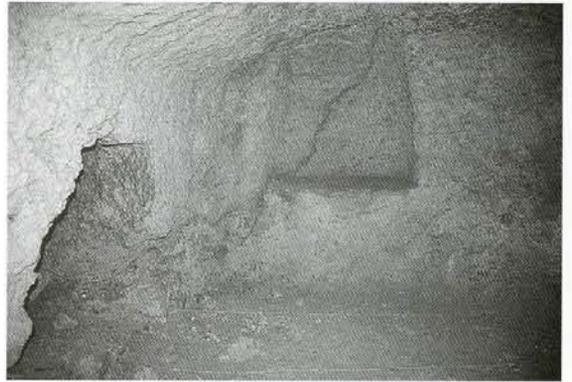
発掘途中



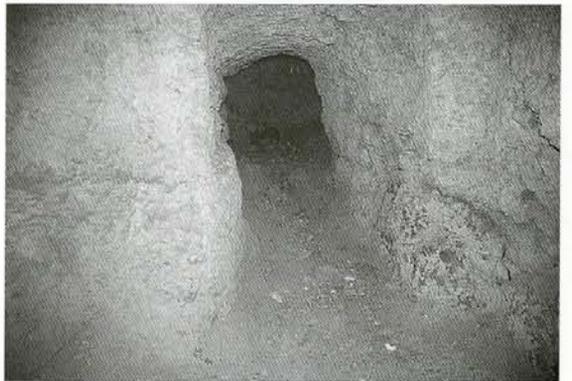
墓庭右袖石垣



墓室内（正面棚）



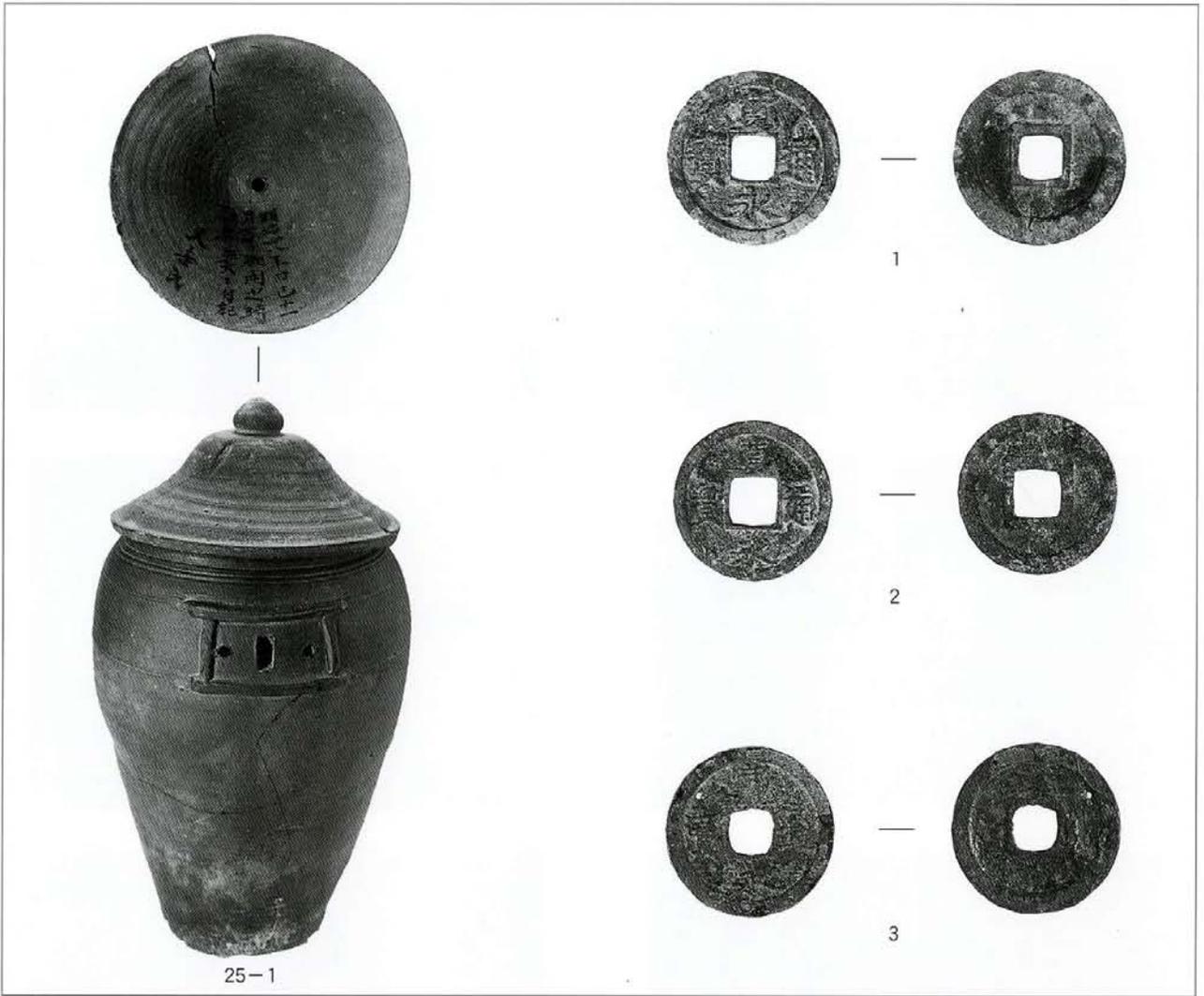
同上（左棚）



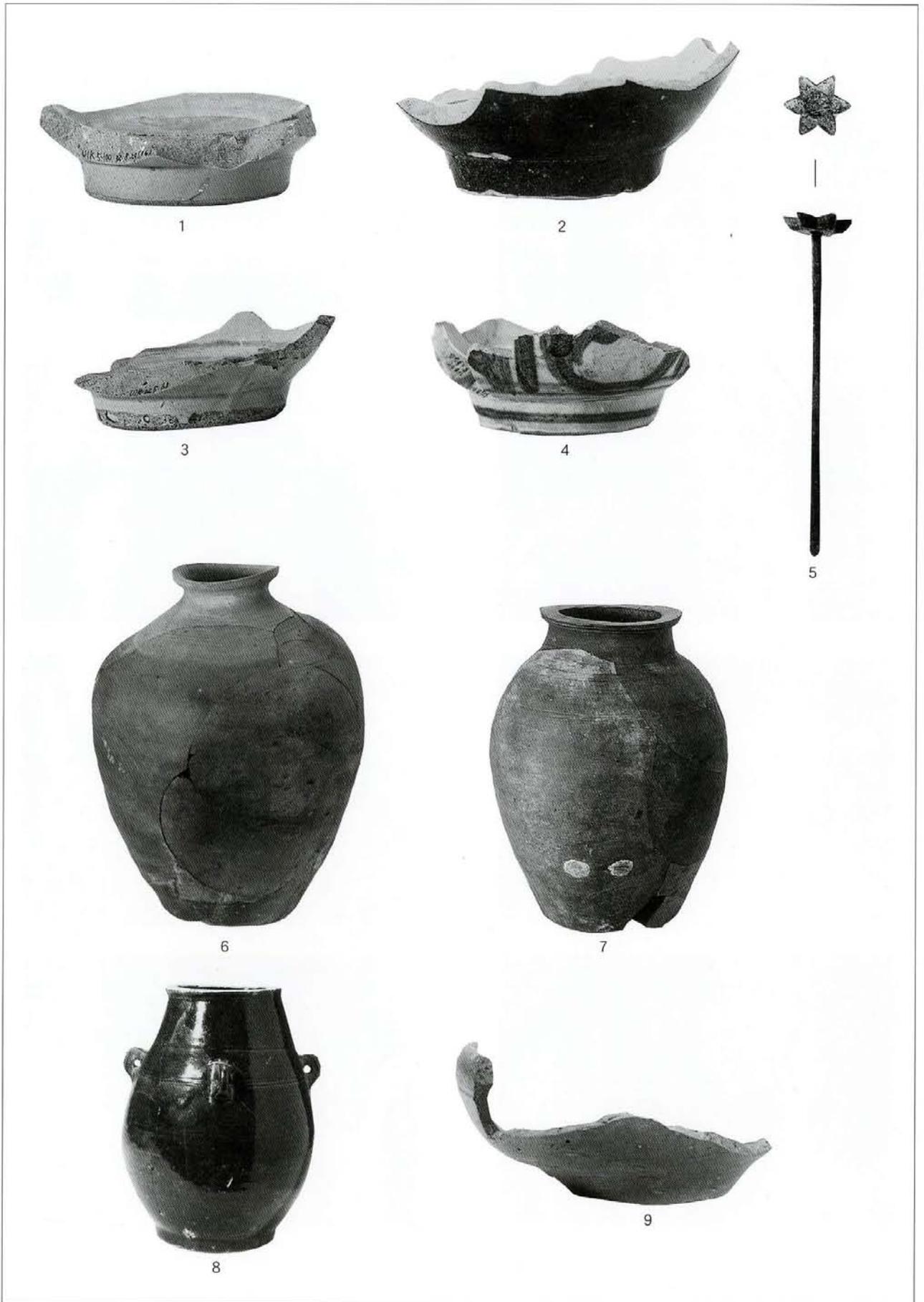
同上 壕を構築（右側）



壕内 遺物出土状況



PL.28 (第43図) 25号墓藏骨器・出土遺物

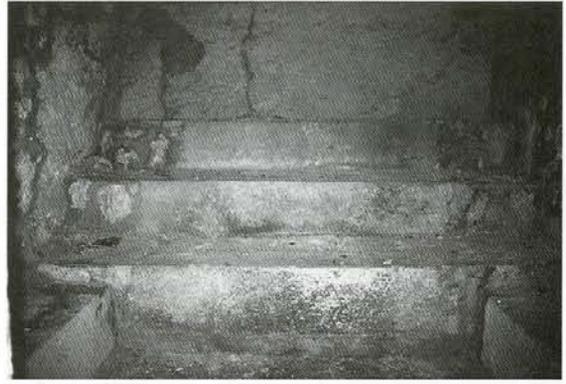


PL.29 (第44图) 25号墓出土遺物

26号墓



調査前



室内（正面棚）



伐採後



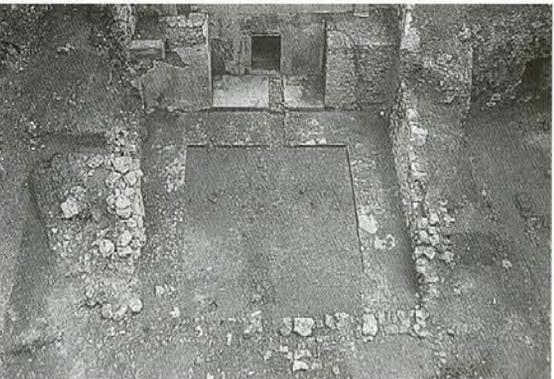
室内天井



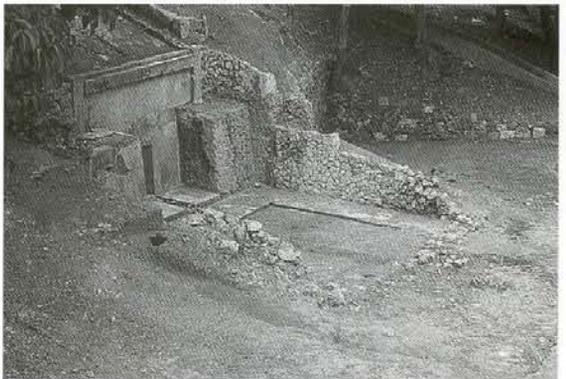
発掘途中



室内墓口側を撮影

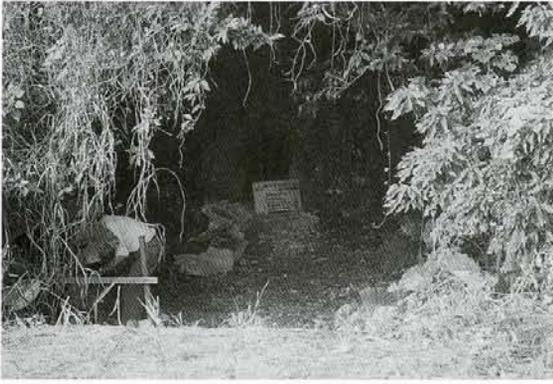


完掘後

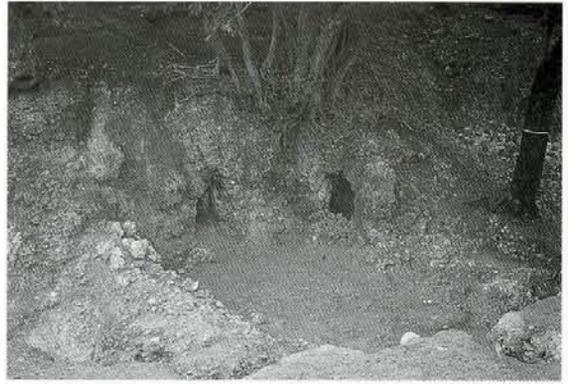


墓庭囲い石

27号墓



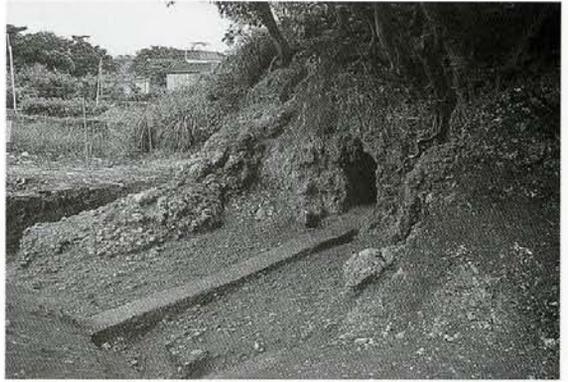
調査前



完掘後（両墓）斜前より



完掘状況



発掘途中



調査前（袖墓）



厨子・副葬品一括廃棄

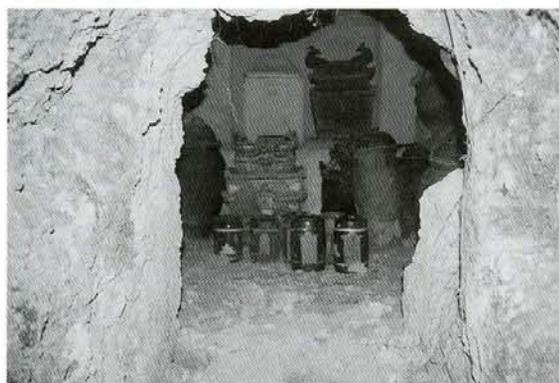


完掘後（袖墓）



墓庭出土遺物

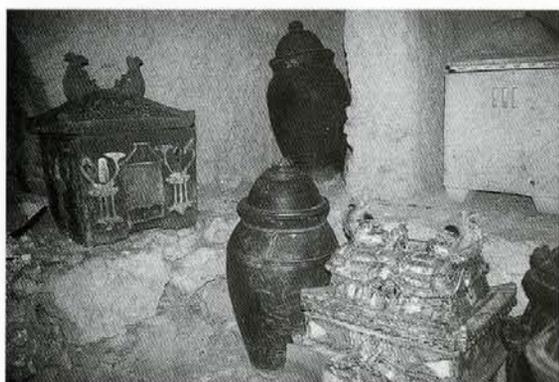
27号墓



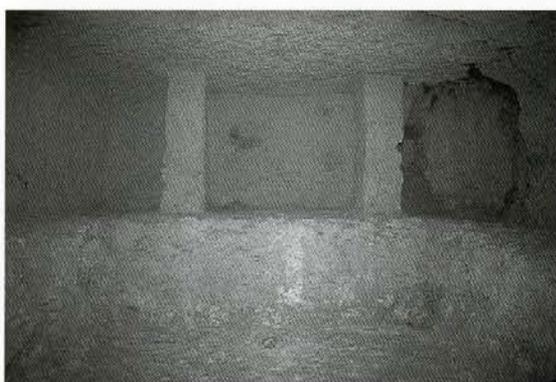
墓口より室内正面



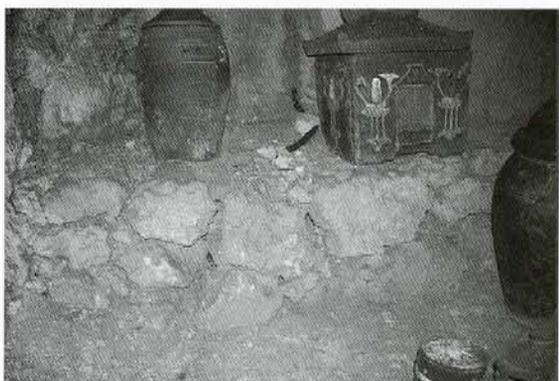
No.16内 焼物獅子



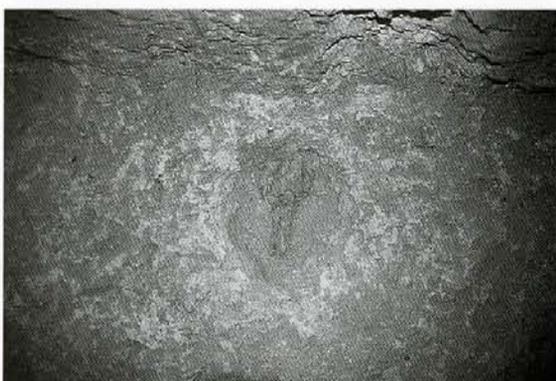
室内左側



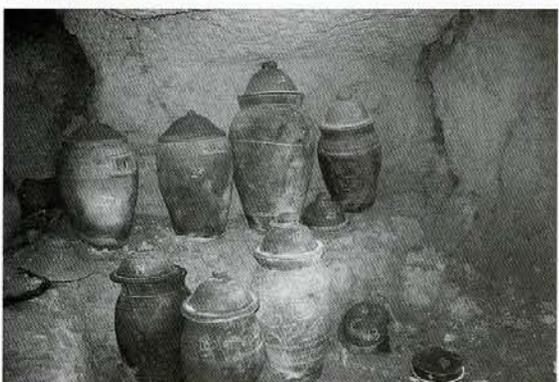
室内正面棚



室内左袖棚



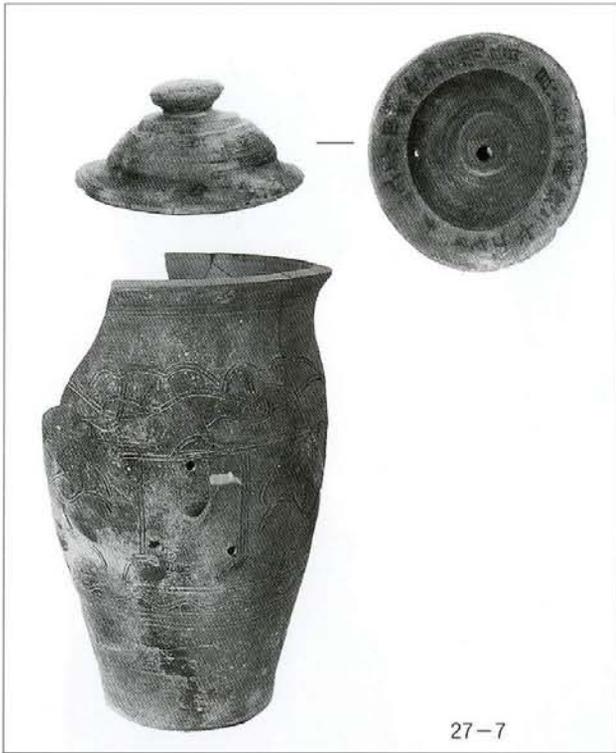
獣骨検出



室内右側



同上



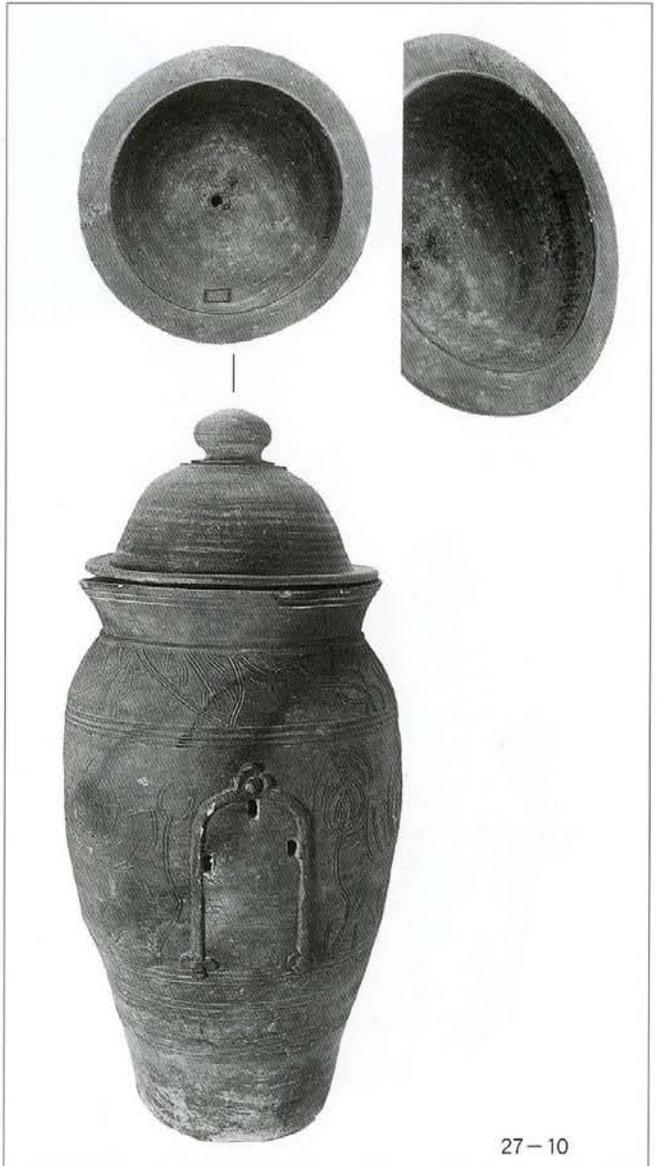
27-7



27-8



27-9

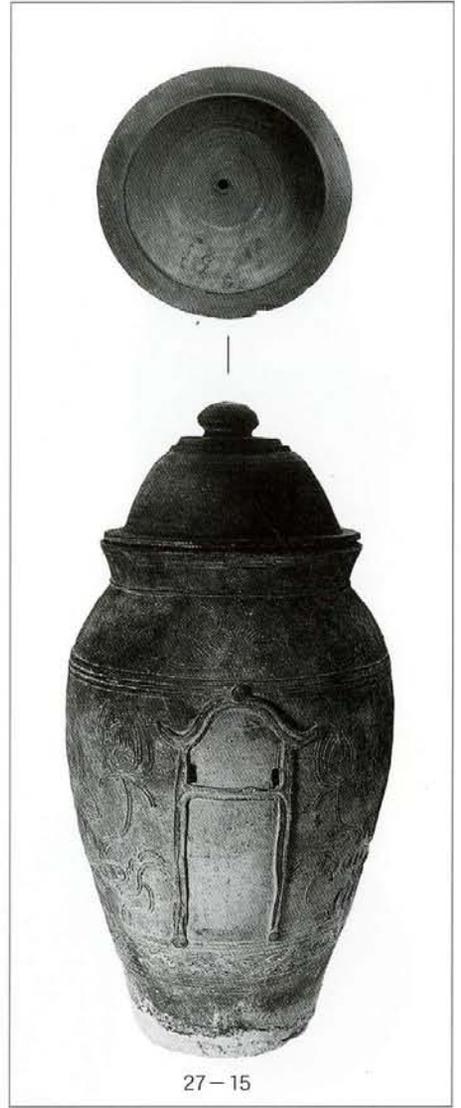


27-10

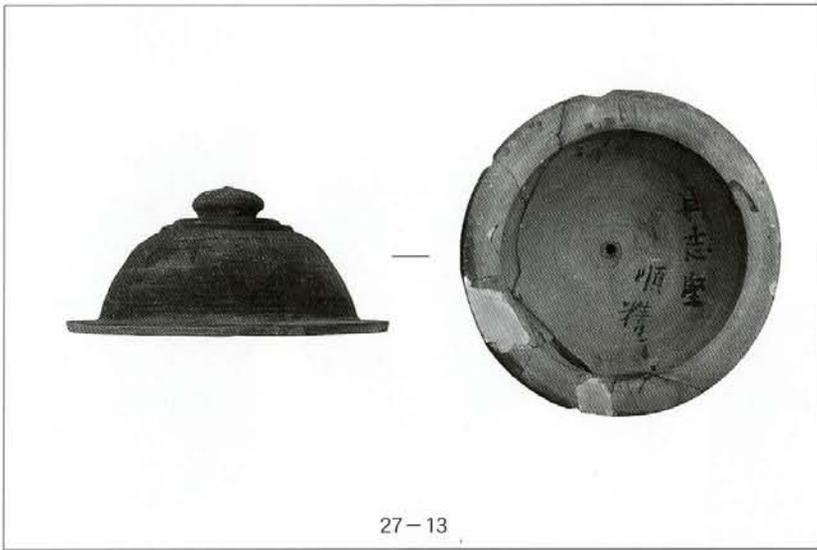
PL.33 (第48图) 27号墓藏骨器



27-12



27-15



27-13



27-16

PL.34 (第47図) 27号墓藏骨器



27-17



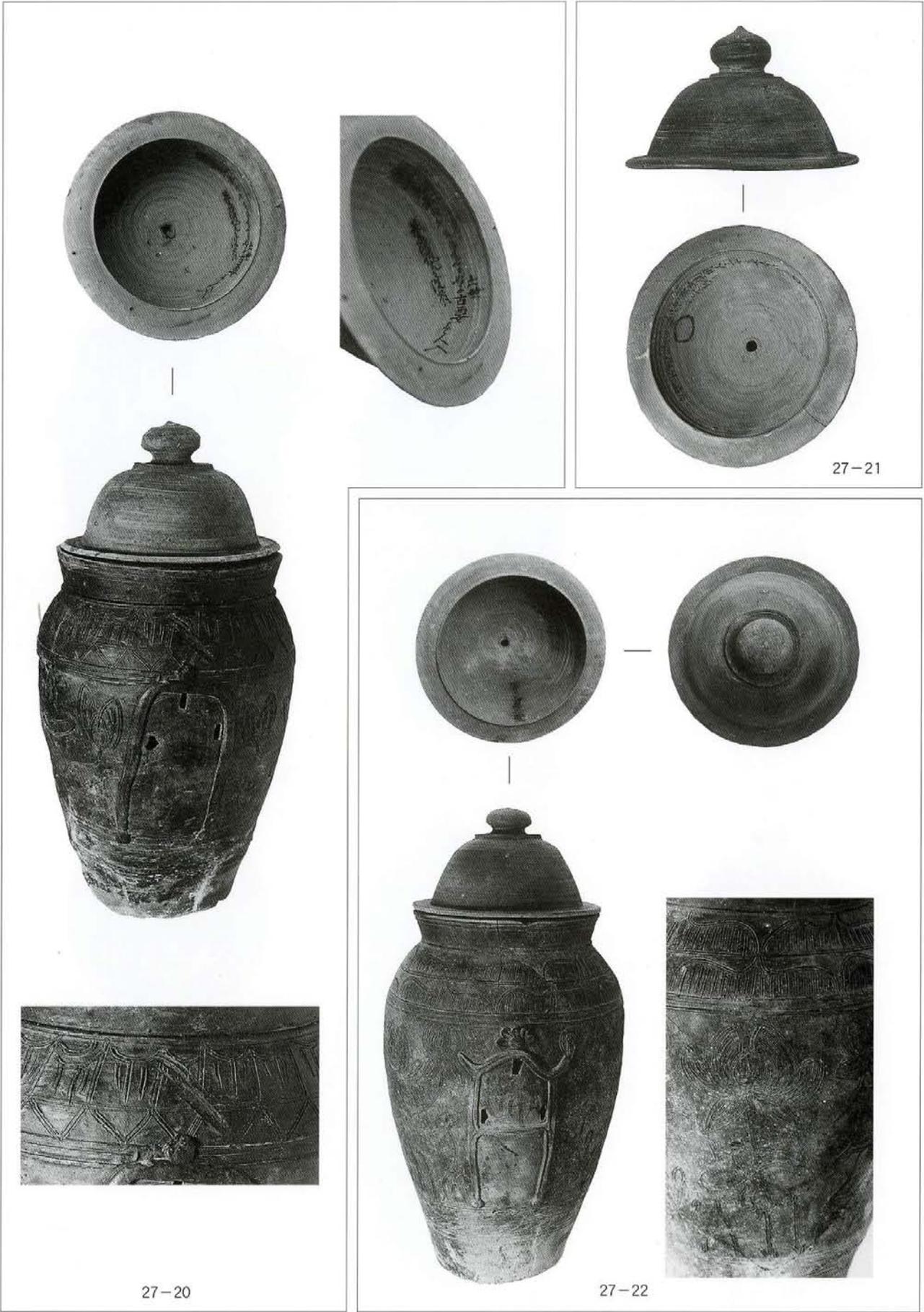
27-18



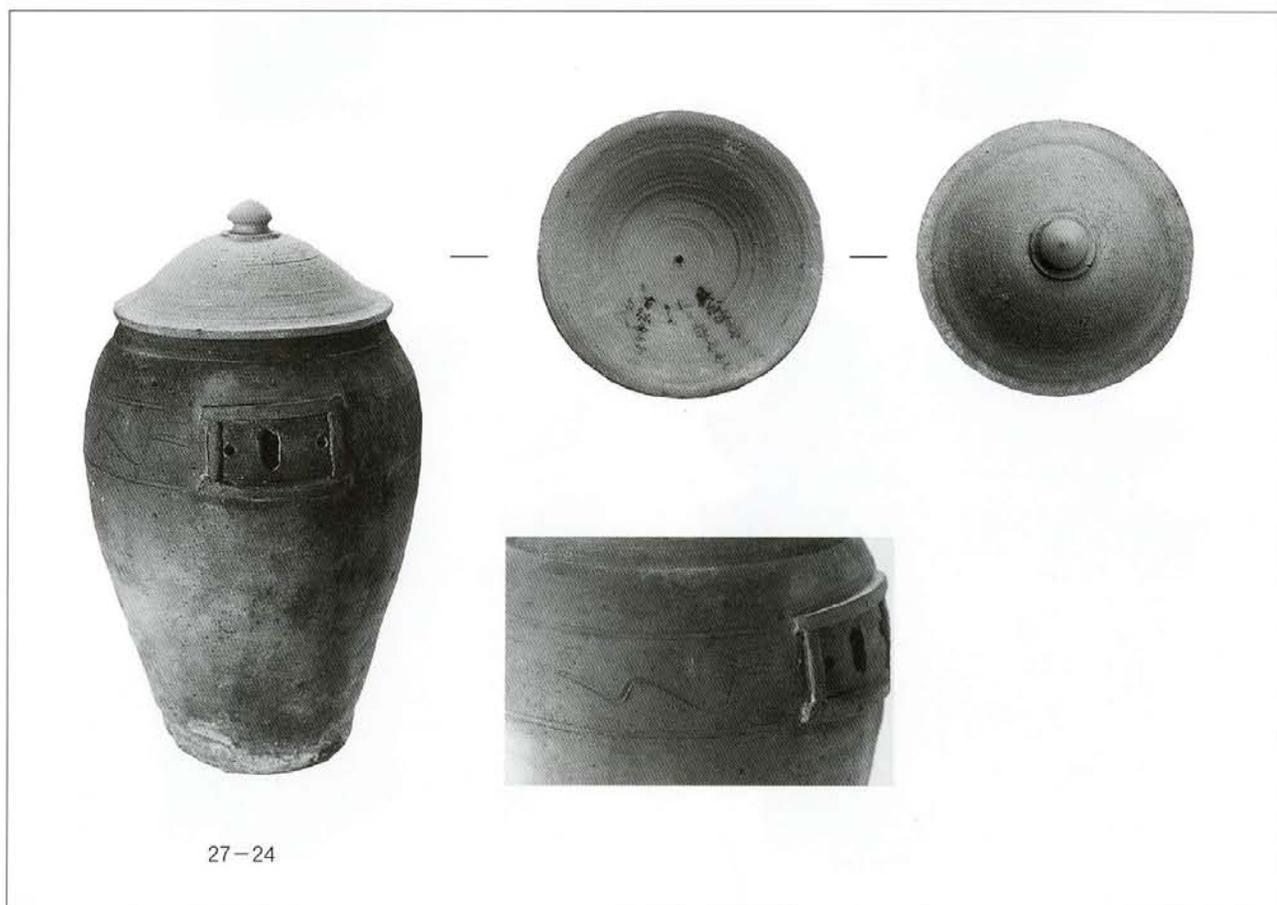
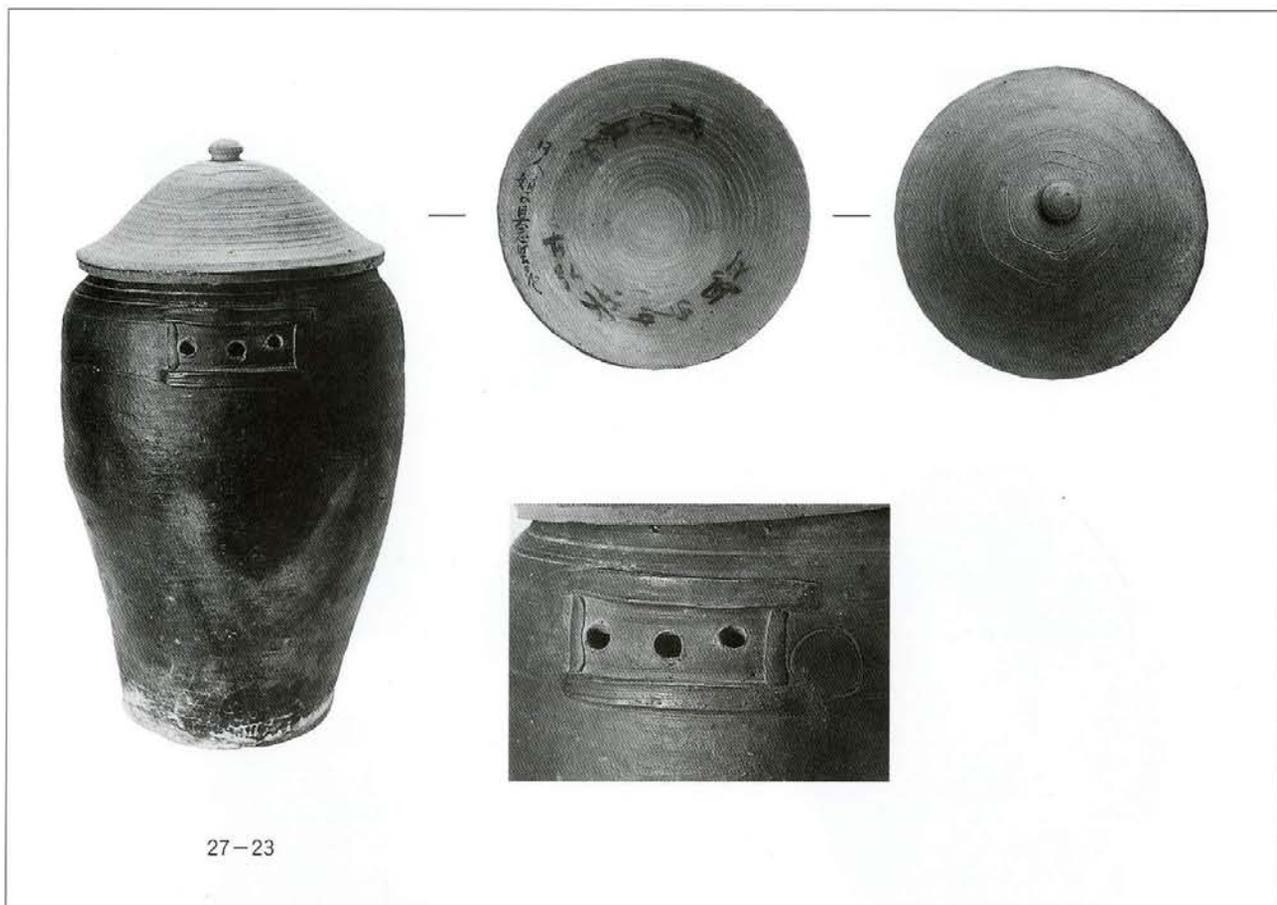
27-19



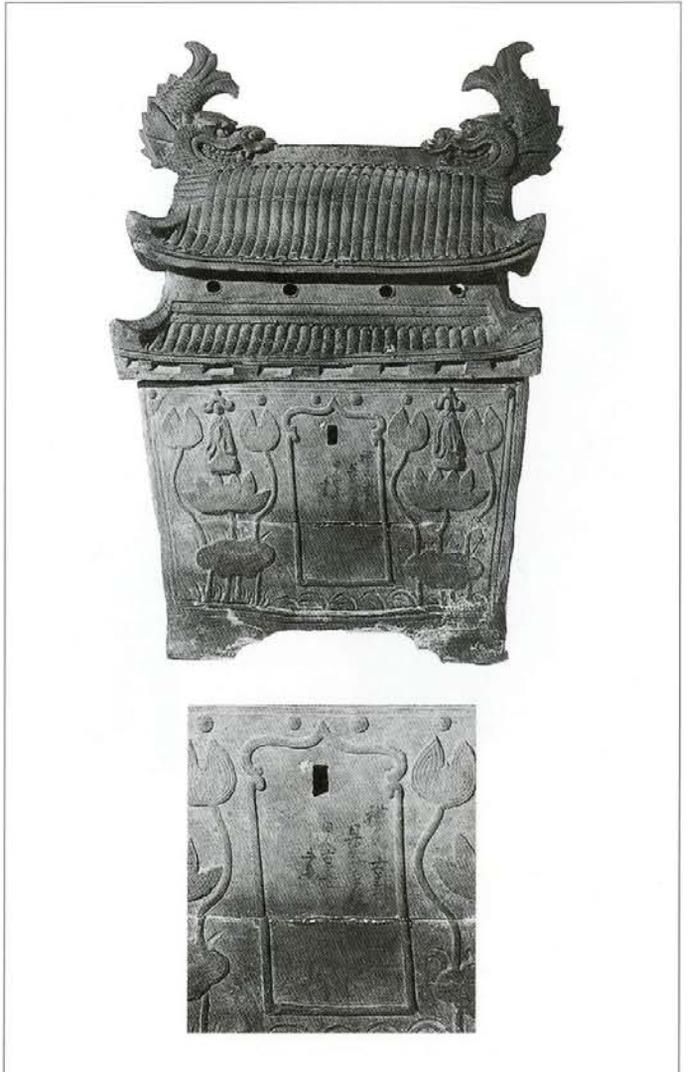
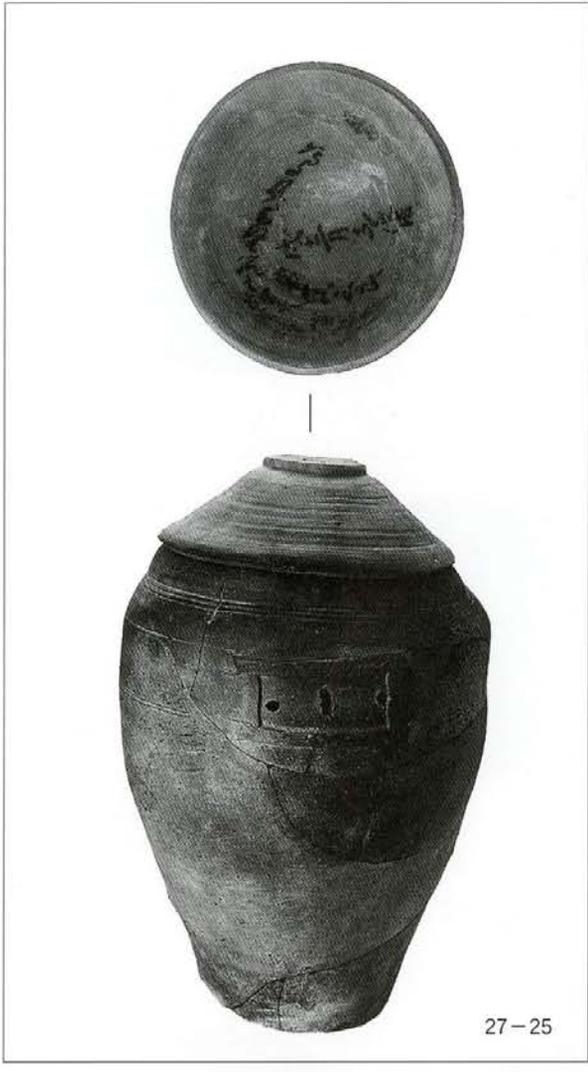
PL.35 (第50图) 27号墓藏骨器



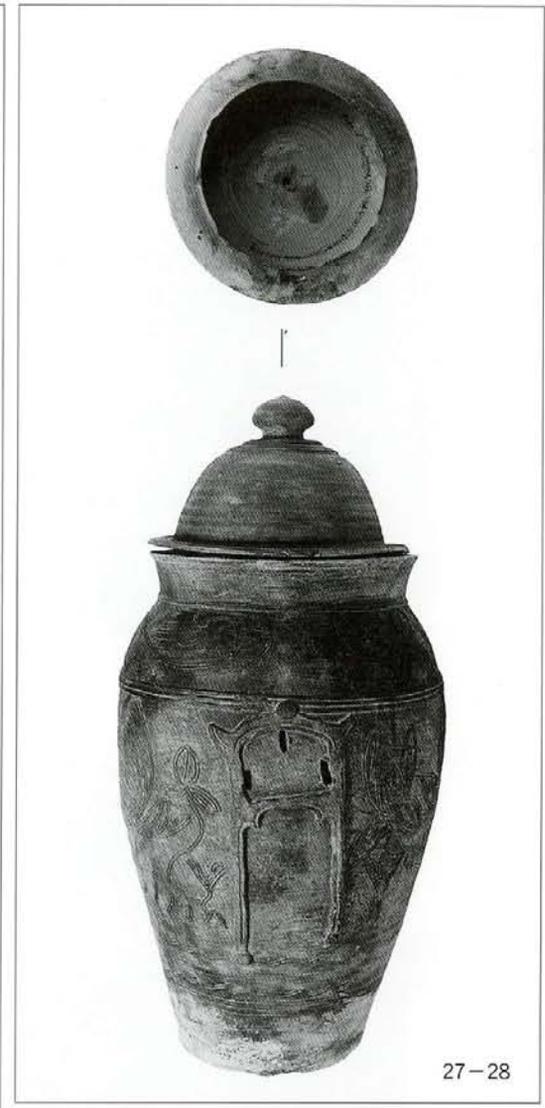
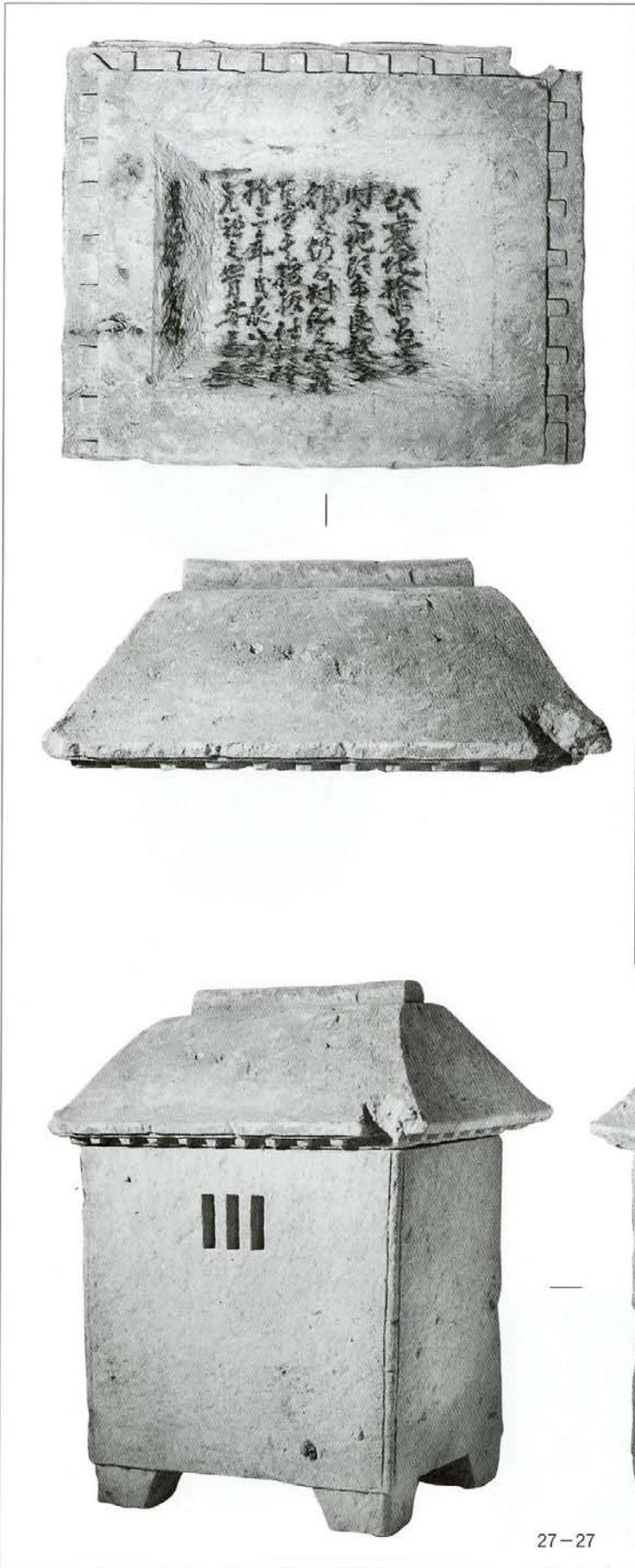
PL.36 (第51图) 27号墓藏骨器



PL.37 (第51・52图) 27号墓藏骨器

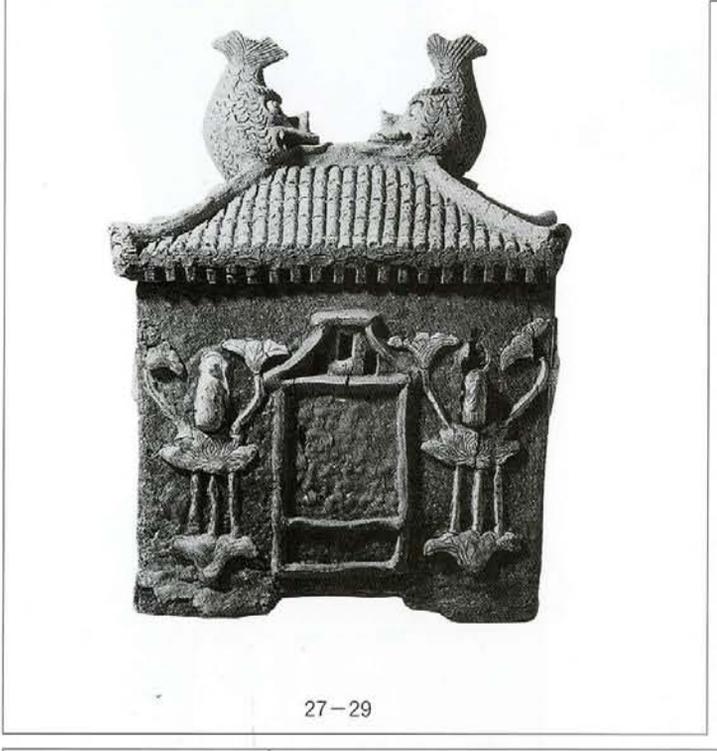


PL.38 (第52图) 27号墓藏骨器

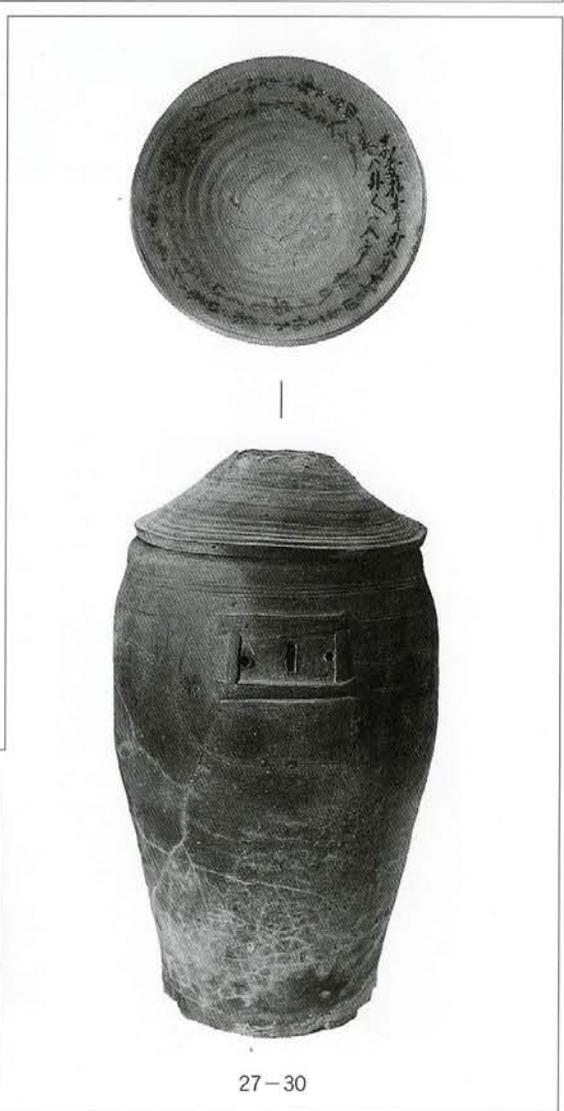


27-28

PL.39 (第53图) 27号墓藏骨器



27-29



27-30



PL.40 (第54图) 27号墓藏骨器



27-31



27-33

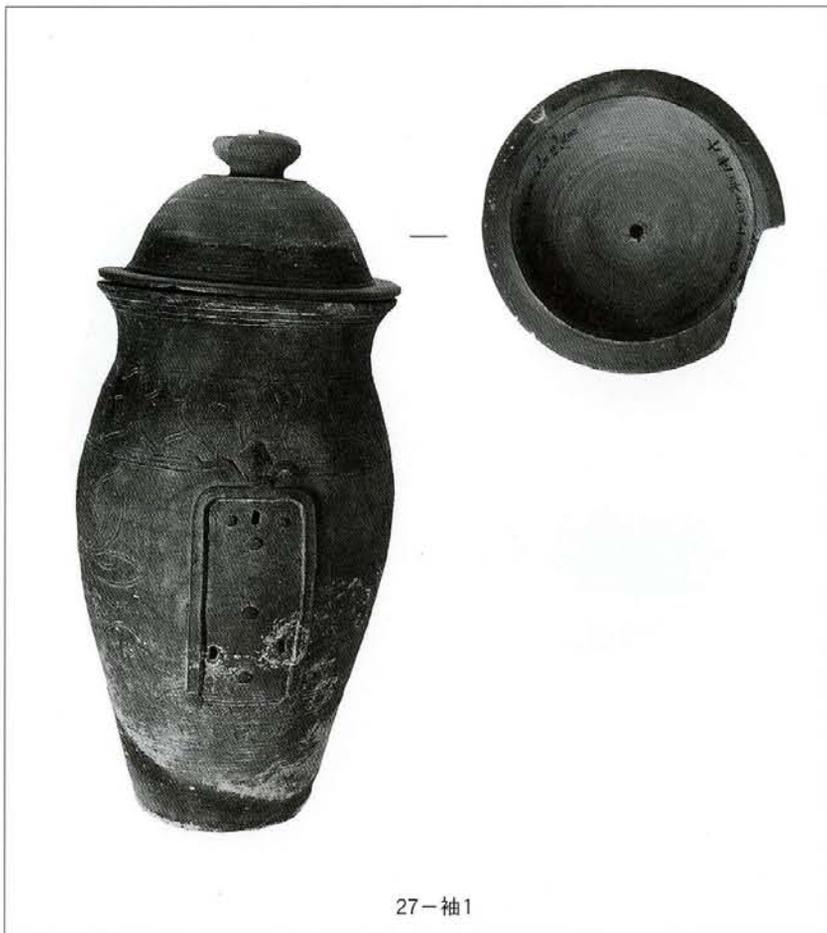


27-32



27-34

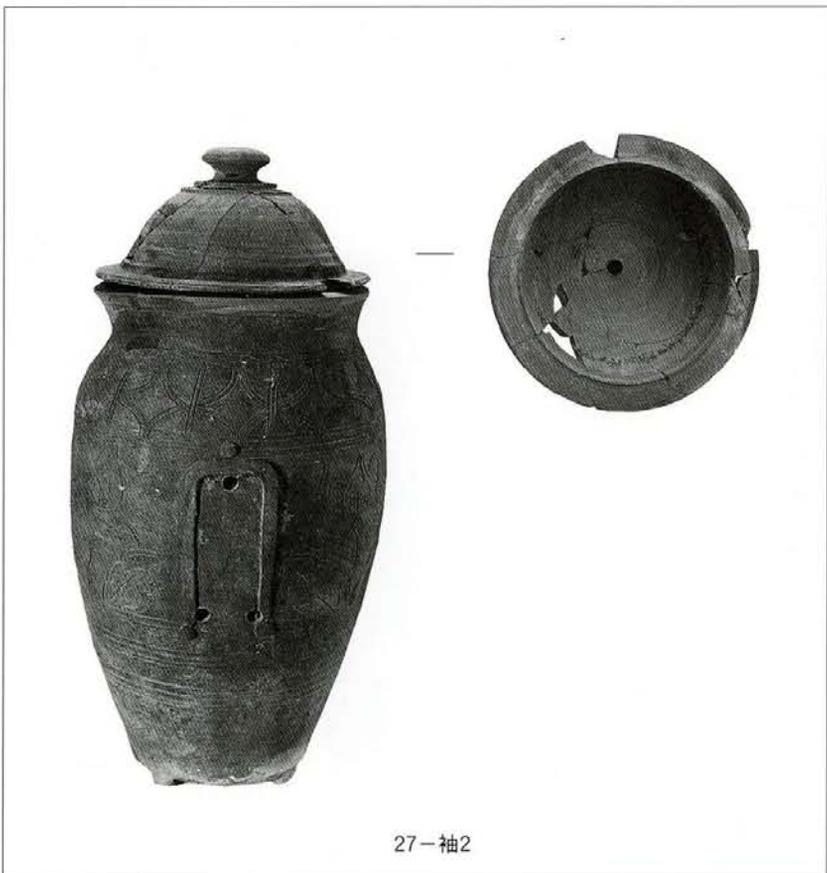
PL.41 (第55图) 27号墓藏骨器



27-袖1

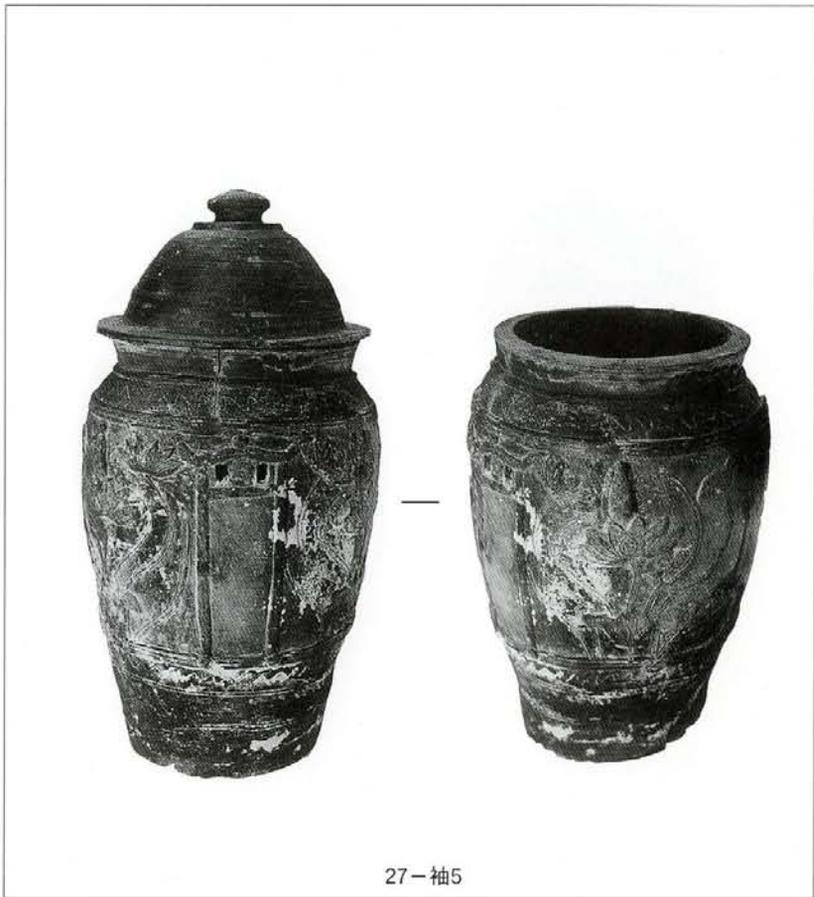
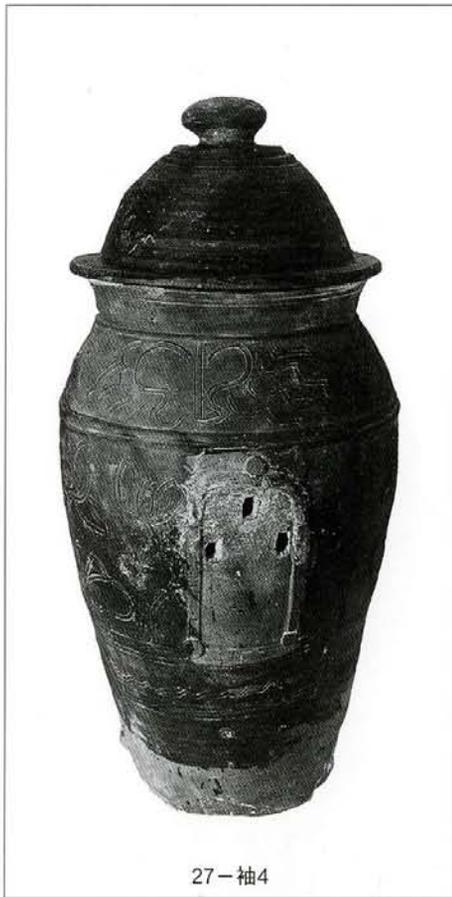


27-袖3

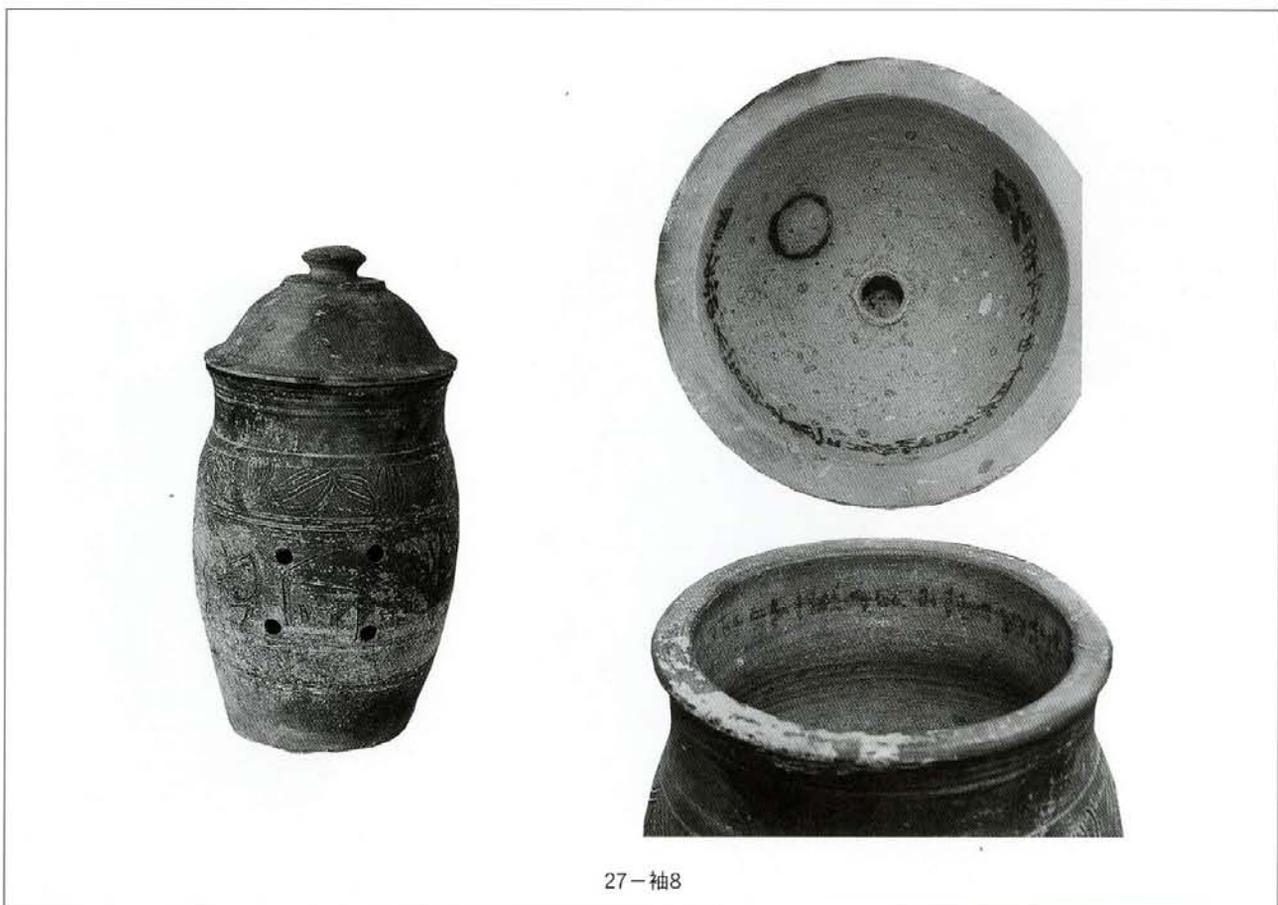
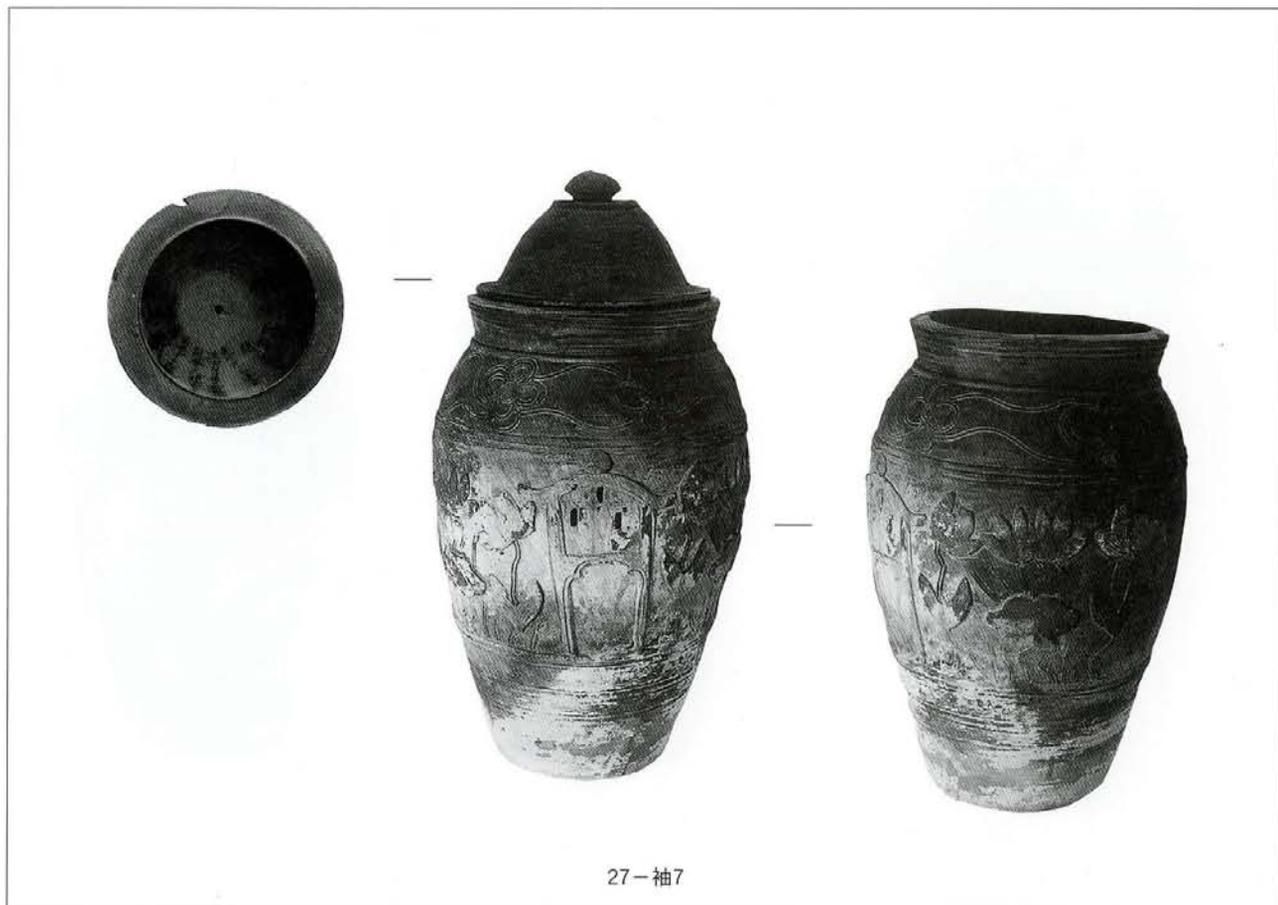


27-袖2

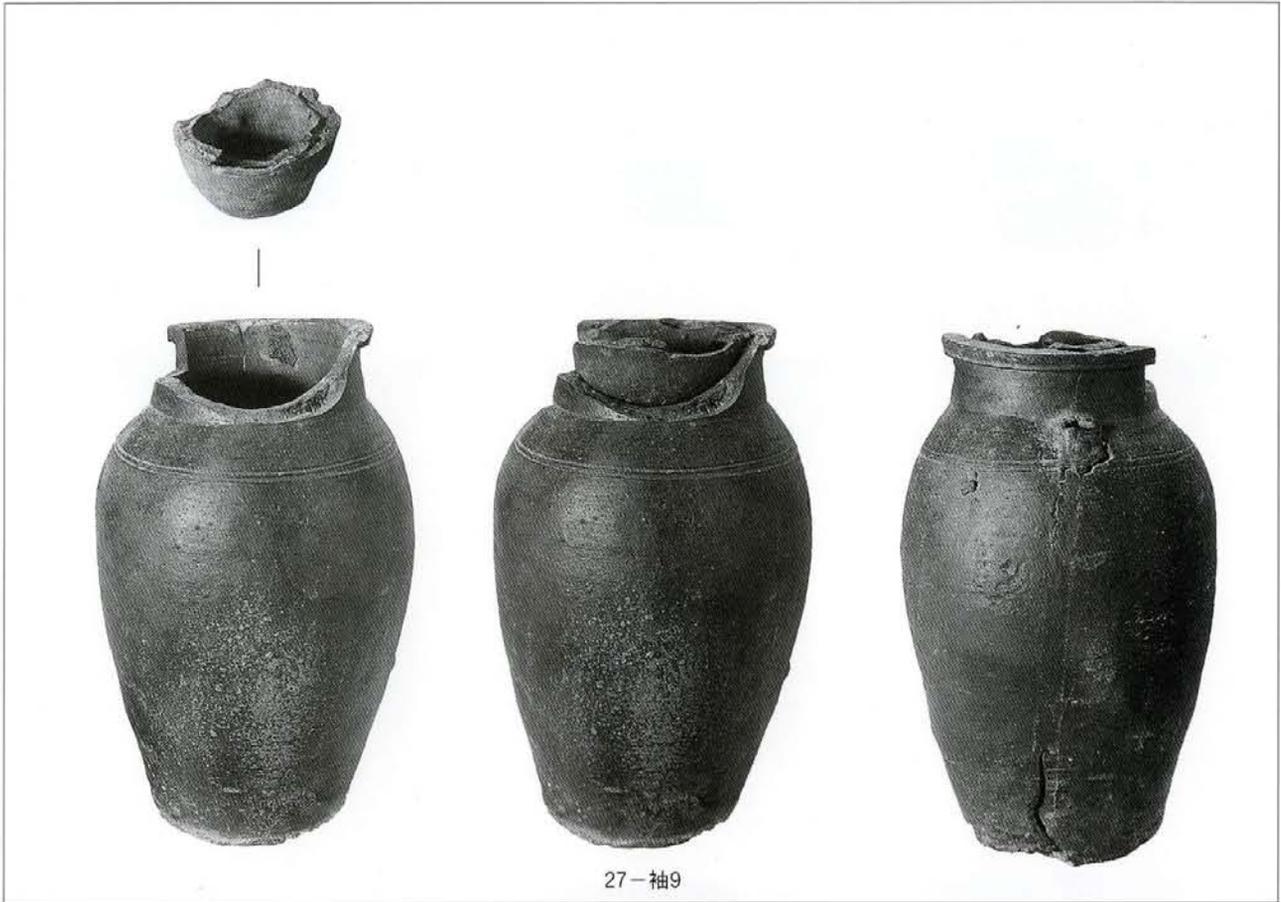
PL.42 (第56图) 27号墓(袖墓)藏骨器



PL.43 (第57图) 27塚墓(袖墓)藏骨器



PL.44 (第58图) 27号墓(袖墓)藏骨器

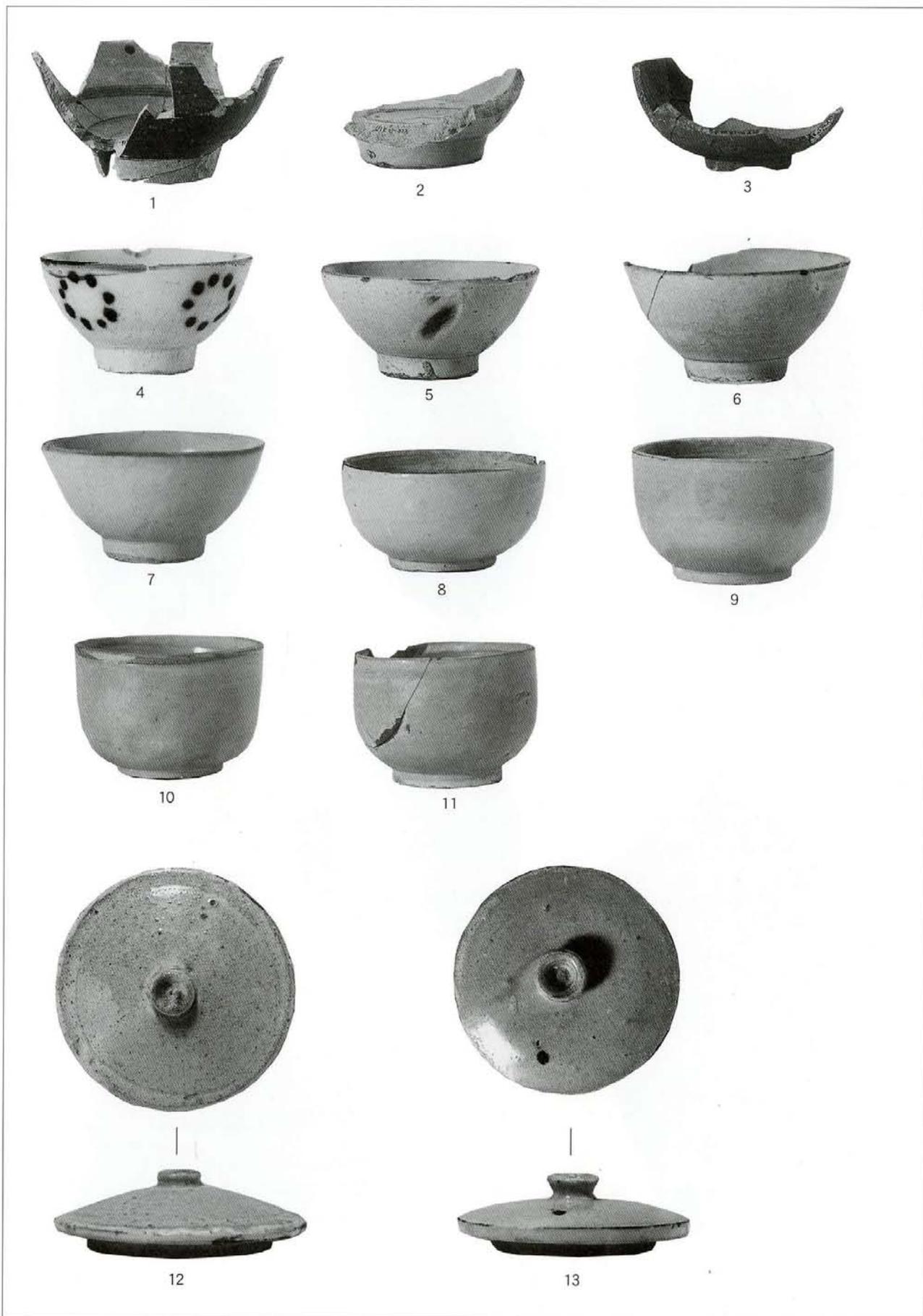


27-袖9

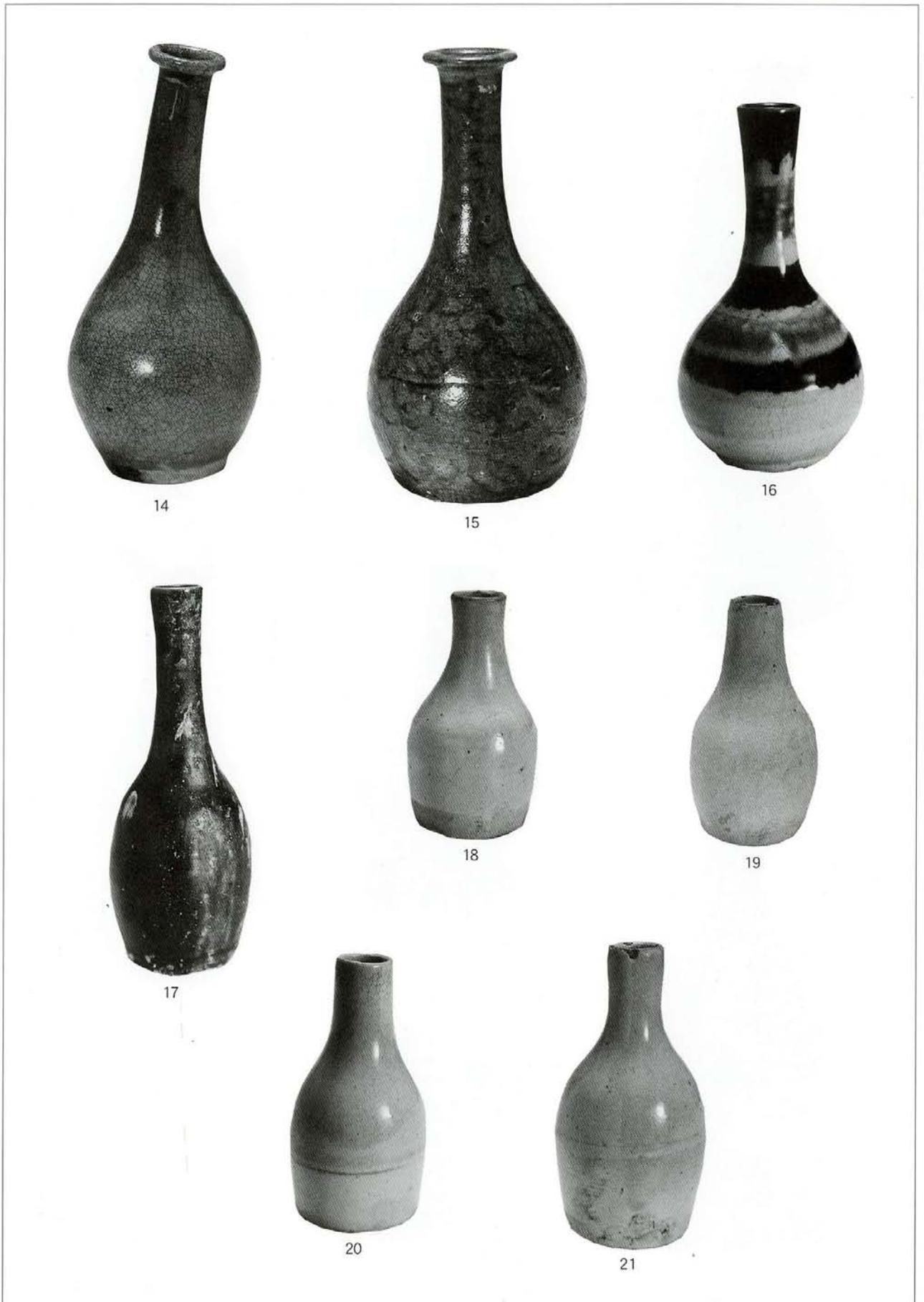


27-袖10

PL.45 (第58图) 27号墓(袖墓)藏骨器



PL.46 (第59图) 27号墓 出土遗物



PL.47 (第60図) 27号墓 出土遺物



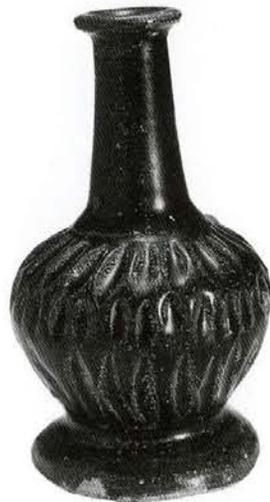
22



23



24



26



27

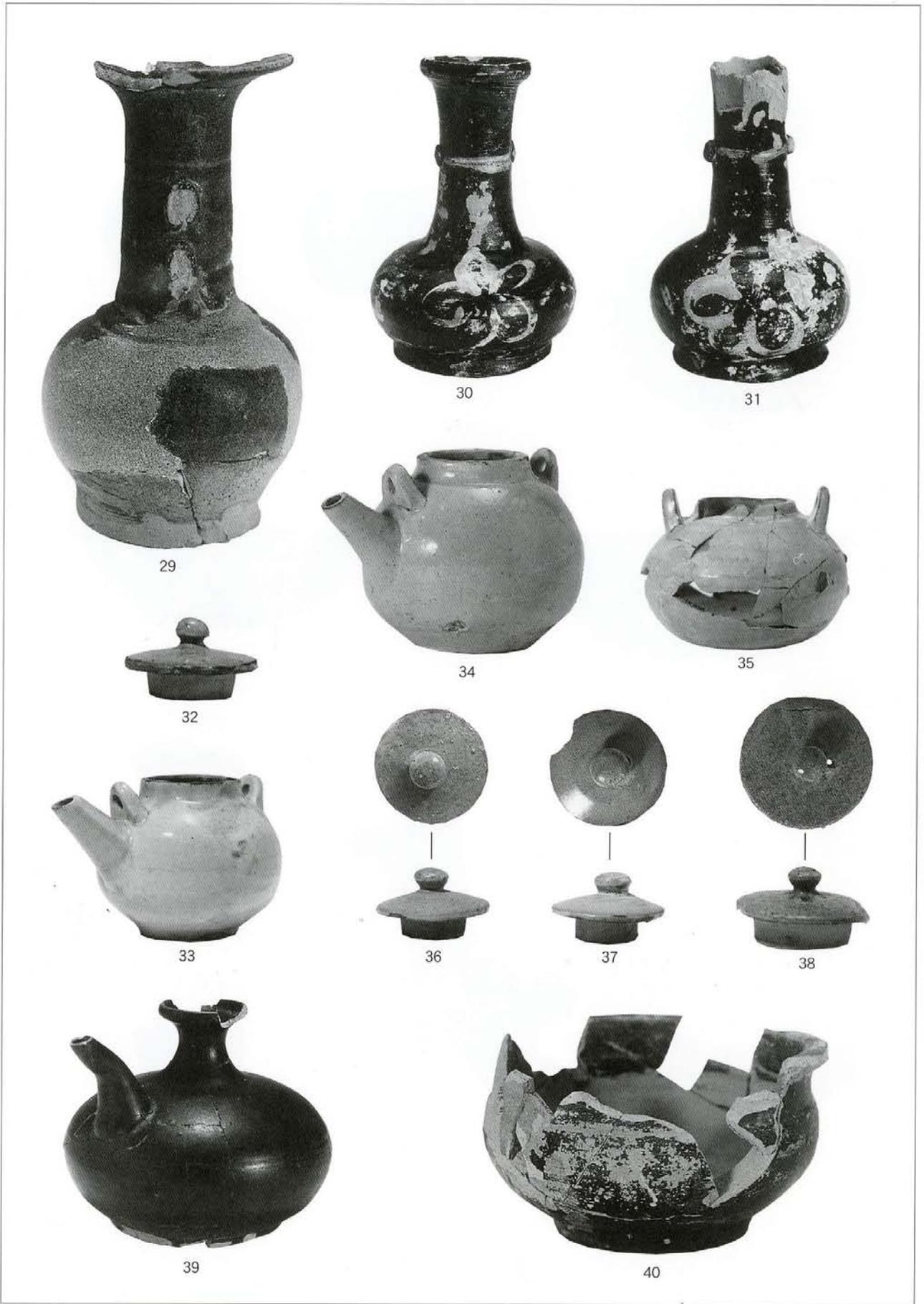


25

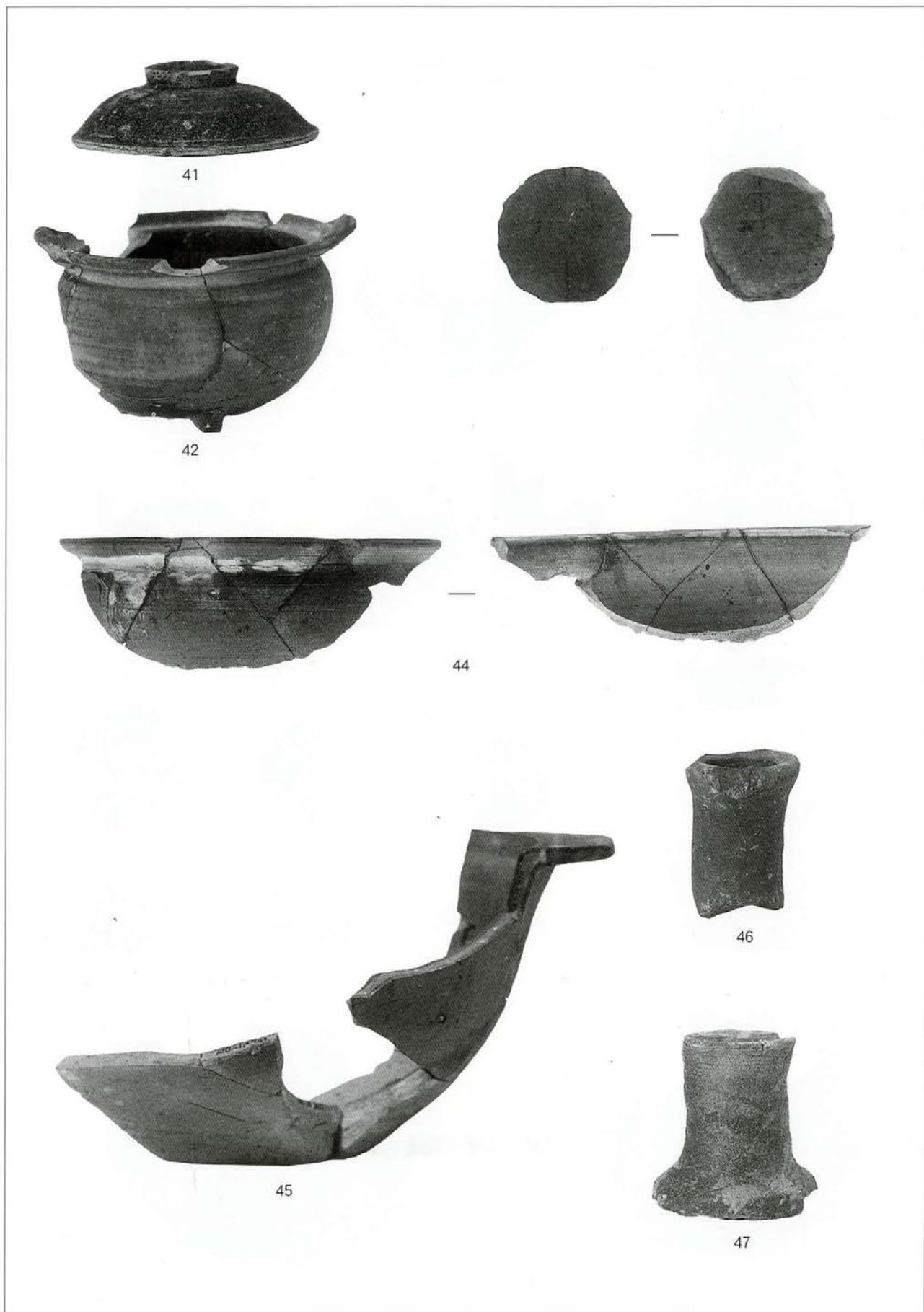


28

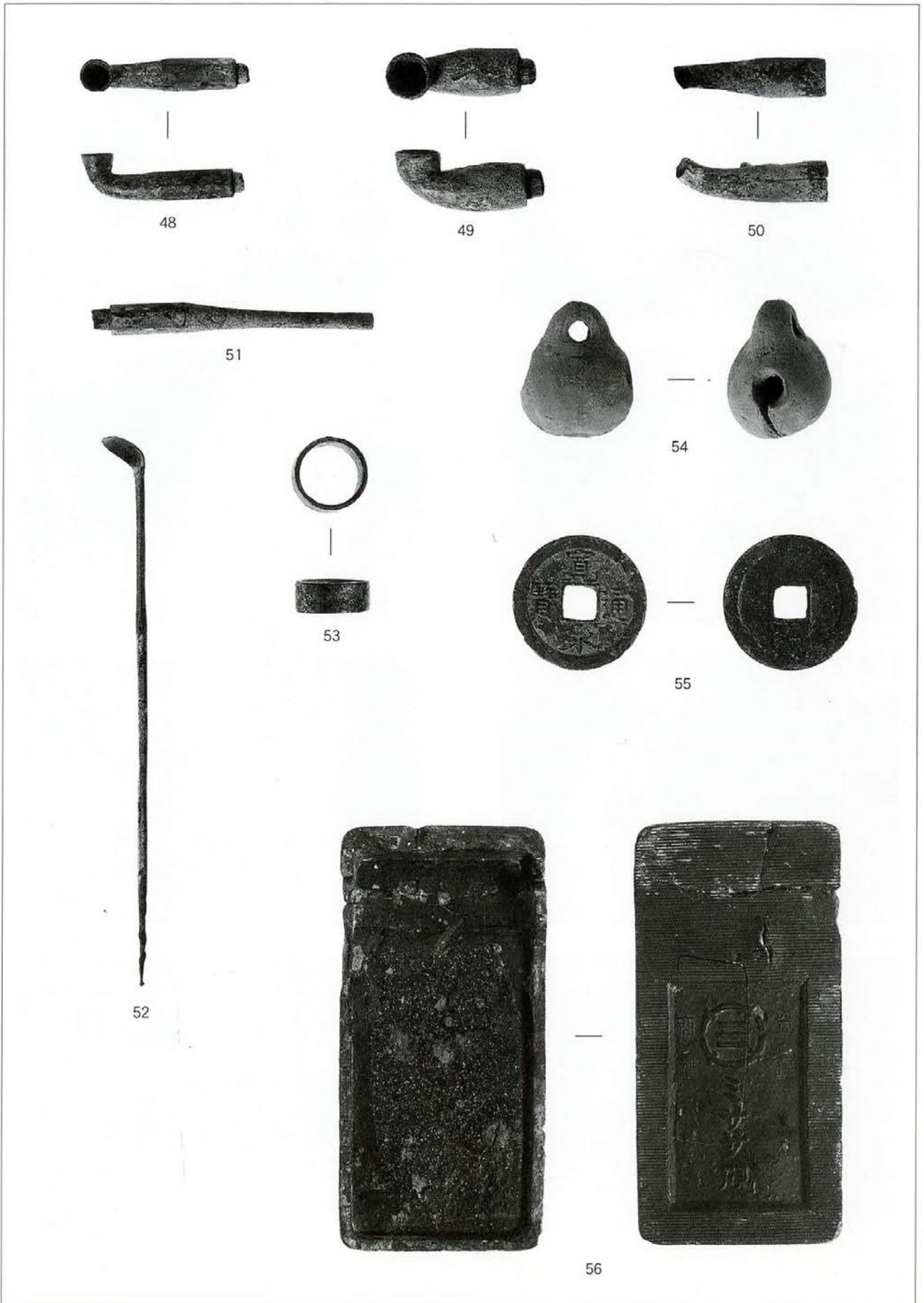
PL.48 (第61图) 27号墓 出土遗物



PL.49 (第62図) 27号墓 出土遺物



PL.50 (第63图) 27号墓 出土遺物

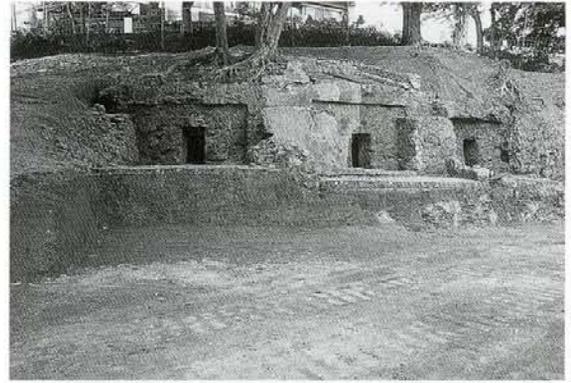


PL.51 (第64図) 27号墓 出土遺物

21~24号墓



伐採後



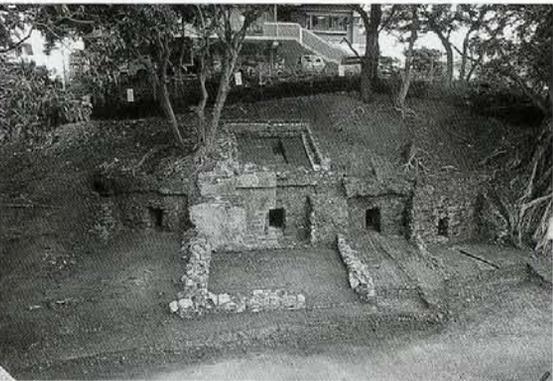
墓庭断割 両側から



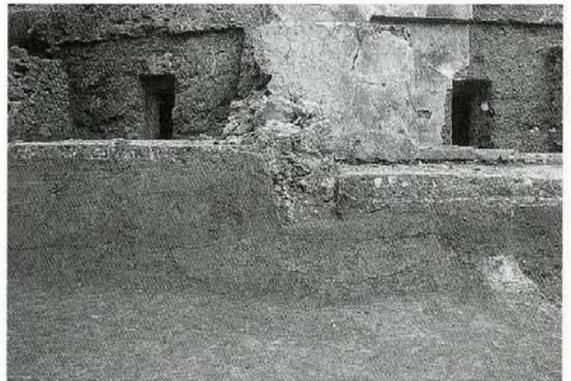
発掘途中



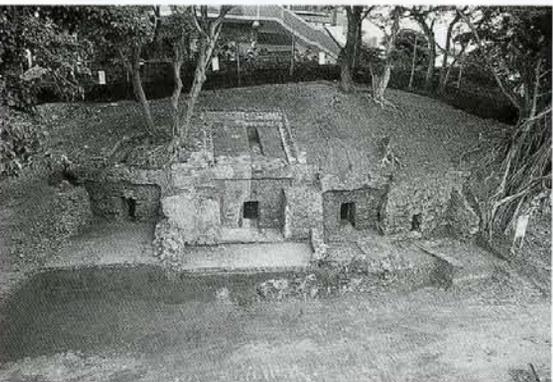
同上 東側から



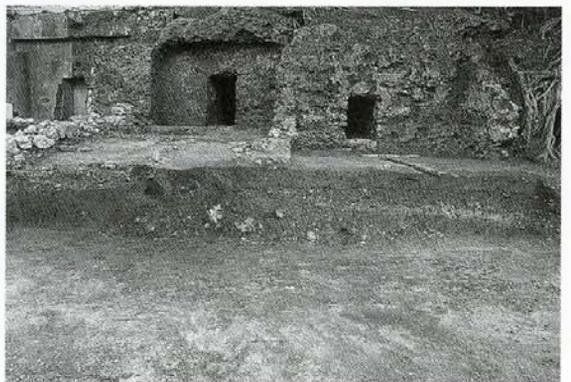
墓道断割



24・23号墓 墓庭断割



墓庭断割



21~23号墓 墓庭断割

PL.52 21~24号墓 断割

報 告 書 妙 録

ふりがな	うちまいせき・うちまかんじゃーやーがまいせき・うちまいりばるきんせいぼぐん							
書名	内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群Ⅲ							
副書名	浦添市都市計画勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査							
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書							
編著者名	松川 章・渡久地政嗣・安和吉則・比嘉尚輝・玉木順彦・神谷厚昭・土肥直美・島袋利恵子・北條真子							
編集機関	浦添市教育委員会							
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号							
発行年月日	2004年(平成15年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちまいせき 内間遺跡	おきなわけん 沖縄県 うらそえし うちま 浦添市内間	47208		26° 14' 14"	12° 42' 15"	2000.4.25) 2000.6.19	300	都市計画 街路改良 事業
内間カンジャー ヤーガマ遺跡				26° 14' 20"	12° 42' 00"	2001.7.3) 2001.12.1		
うちまいりばるきんせいぼぐん 内間西原近世墓群				26° 14' 20"	12° 42' 00"	2002.4.7) 2002.8.31		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内間遺跡	集落跡	近世	土坑3基 溝跡1基 砲弾穴1基		白磁・青磁・ 青花・沖縄産 陶器・窯道具			
内間カンジャーヤー ガマ遺跡	祭祀	グスク時代 末～近世初 頭	陶磁器埋納 石敷き		青磁腰折皿 青磁鍔縁盤 石製香炉			
内間西原近世墓群	古墓	近世～近代	掘込墓4基 平葺墓2基 亀甲墓1基		沖縄産陶器 蔵骨器・銭貨 煙管・簪・窯 道具			

内 間 遺 跡
内間カンジャーヤーガマ遺跡
内 間 西 原 近 世 墓 群 Ⅲ

－ 浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査 －

発 行 日 2004年（平成16年）3月31日

編集・発行 浦添市教育委員会

〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号

TEL 098-876-1234 (内線6216・6217)

FAX 098-878-1487

印刷・製本 株式会社 尚生堂